

岩手県立博物館調査研究報告書 第3冊
Reserch Report on Iwate Prefectural Musenm. Vol. III

岩手県野田村

根井貝塚発掘調査報告書

Excavational Report of
NEI Shell-mound
NODA Vill. IWATE Pref.

1987

岩手県立博物館
Iwate Prefectnral Museum.

岩手県野田村

根井貝塚発掘調査報告書

1987

岩手県立博物館

刊行にあたって

岩手県には現在約60カ所の貝塚の存在が知られています。これらの大半は入江が複雑に入りくむ宮古市以南の地域に分布しており、海岸段丘の発達した北部三陸海岸地域では数も少なく、その内容についても調査例が乏しく、ほとんど不明のままでした。

根井貝塚は昭和6年に故小田島禄郎氏によって一部が調査されましたが、その詳細については明らかにされていません。岩手県立博物館は調査研究活動の一環として4次にわたり根井貝塚の調査を実施し、北部三陸海岸の貝塚の様相の一端を明らかにすることができました。その内容は本文のとおりですが、これによって従来知られていた南部三陸海岸の縄文時代後・晩期の貝塚との良好な比較資料を提供できるものと確信しております。この報告の刊行を機に、三陸海岸の貝塚研究がさらに一層飛躍することを望む次第です。

最後に、本調査および報告書の刊行にあたり御協力、御指導を賜りました関係各位に厚くお礼申し上げます。

昭和62年3月

岩手県立博物館

館長 金子 彰 吉

例 言

1. 本書は、岩手県九戸郡野田村大字玉川1-3-1に所在する根井貝塚に係る発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、岩手県立博物館が主体となり、館の調査研究活動の一環として実施した。
測量調査 昭和57年9月4日～9月7日
第一次調査 昭和58年9月2日～9月9日
第二次調査 昭和59年9月3日～9月10日
第三次調査 昭和60年10月22日～10月28日
調査員 熊谷常正、小田野哲憲、高橋信雄
3. 本発掘調査と発掘調査によって得られた資料の分析は、岩手県立博物館・熊谷、小田野、高橋、赤沼英男が主に担当した。なお、魚骨獣骨・貝類に関しては早稲田大学・金子浩昌、国立歴史民俗博物館・西本豊弘、東北歴史資料館・岡村道雄、宮城県教育委員会・菅原弘樹、佐藤地質工学研究所・佐藤二郎、陸前高田市立博物館・佐藤正彦の各氏から協力を得た。石器、石製品の材質同定は岩手県立博物館の川上雄司、大石雅之が行った。
4. 花粉分析は(株)小成商店に委託し、岡田緑氏が分析した。
5. 本書の編集は、熊谷、小田野、高橋の協議のもと、熊谷が総括した。また、執筆区分については文章中に表記した。
6. 根井貝塚の出土遺物・写真・実測図等は、岩手県立博物館が保管し、一部資料については展示している。
7. 本書第3図に使用した地形図は、建設省国土地理院発行の5万分の1図幅(『陸中野田』)を、第4図は岩手県土地分類基本調査(『陸中野田1/50000』)を参考にしたものである。
8. 発掘調査及び本報告の刊行にあたり、次の機関、個人等から協力・指導を賜った。
[機関] 野田村教育委員会、東北歴史資料館、陸前高田市立博物館
[個人] 相原康二、岩佐浩子、岩山憲政、岩山裕次郎、鶴沼照人、及川洵、岡田康博、桐生正一、久保和士、桑原滋郎、小井川和夫、斎藤邦夫、酒井宗孝、佐々木勝、佐藤正彦、澤口たまみ、鈴木隆英、高橋憲太郎、高田和徳、高橋文恵、武田将男、田村栄一郎、成田滋彦、西野緑、丹羽百合子、野口夏実、松丸裕之、三宅徹也、面代民義、渡辺誠

(50音順、敬称略)

目次

刊行にあたって

例言

I. 調査に至る経過	8
II. 岩手県北部沿岸地域における貝塚	
研究の歩み	8
III. 立地及び周辺の遺跡	10
1. 遺跡周辺の地形・地質	10
2. 周辺の遺跡	13
IV. 調査区・グリッド設定	14
V. 層序及び遺構分布	15
VI. 発見された遺構と遺物	16
1. 1号住居址	16
2. 2号住居址	24
3. 土壌	30
4. 焼土投げ捨て遺構	32
VII. 出土遺物	
1. 土器（遺構外）	38
2. 石器	42
3. 骨・角・牙器と貝製品	65
4. 土製品	79
5. 石製品	81
6. 自然遺物	82
7. 花粉分析	88
VIII. 考察	94
IX. まとめ	98
英文要旨	100

挿 図 目 次

第1図. 岩手県北部沿岸地域の貝塚分布	9
第2図. 位置図	10
第3図. 地形図(1/50,000)	10
第4図. 地形分類図	11
第5図. 根井地区遺跡分布図	12
第6図. グリッド配置図	14
第7図. 遺構配置図	15
第8図. 1号住居址平面図	16
第9図. 1号住居址埋土断面図	17
第10図. 1号住居址南側床面遺物出土状況	17
第11図. 1号住居址出土土器(1)	18
第12図. 1号住居址出土土器(2)	19
第13図. 1号住居址出土土器(3)	20
第14図. 1号住居址出土土器(4)	21
第15図. 1号住居址出土土器(5)	22
第16図. 2号住居址平面・埋土断面図	24
第17図. 2号住居址出土土器(1)	25
第18図. 2号住居址出土土器(2)	26
第19図. 2号住居址出土土器(3)	27
第20図. 2号住居址出土土器(4)	28
第21図. 土壌平面図	30
第22図. 土壌出土土器	31
第23図. 焼土投げ捨て遺構平面図	32
第24図. 焼土投げ捨て遺構出土土器(1)	33
第25図. 焼土投げ捨て遺構出土土器(2)	34
第26図. 焼土投げ捨て遺構出土土器(3)	35
第27図. 焼土投げ捨て遺構出土土器(4)	36
第28図. 遺構外出土土器(1)	38
第29図. 遺構外出土土器(1)	39
第30図. 根井貝塚出土土器	
〔野田村教育委員会蔵〕	40
第31図. 出土石器(1)	43
第32図. 出土石器(2)	44
第33図. 出土石器(3)	45
第34図. 出土石器(4)	47
第35図. 出土石器(5)	48
第36図. 出土石器(6)	49
第37図. 出土石器(7)	50
第38図. 出土石器(8)	52

第39図. 出土石器(9)	53
第40図. 出土石器(10)	54
第40図. 出土石器(11)	55
第42図. 出土石器(12)	56
第43図. 出土石器(13)	57
第44図. 出土石器(14)	58
第45図. 出土石器(15)	59
第46図. 出土石器(16)	60
第47図. 出土石器(17)	62
第48図. 出土石器(18)	63
第49図. 出土石器(19)	64
第50図. 出土骨・角・牙器(1)	66
第51図. 出土骨・角・牙器(2)	68
第52図. 出土骨・角・牙器(3)	69
第53図. 出土骨・角・牙器(4)	71
第54図. 出土骨・角・牙器(5)	72
第55図. 出土骨・角・牙器(6)	73
第56図. 加工痕を残す素材(鹿角)	74
第57図. 加工痕を残す素材(鹿中手・中足骨類)	75
第58図. 出土骨・角・牙器(7)	77
第59図. 出土骨・角・牙製品	78
第60図. 出土土製品	80
第61図. 出土石製品	81

写真図版目次

写真図版1. 遺跡遠景〔a〕・近景〔b〕	103
写真図版2. 1号住居址平面〔a〕・断面 〔b〕	104
写真図版3. 1号住居址埋土断面〔a〕・ 炉跡〔b〕・床面遺物出土状況 〔c～e〕	105
写真図版4. 2号住居址〔a～d〕・土壇 〔e〕・焼土投げ捨て遺構〔f〕	106
写真図版5. 骨・角・牙器出土状況〔a～h〕	107
写真図版6. 遺物出土状況〔a～h〕	108
写真図版7. 1号住居址出土土器(1)	109
写真図版8. 1号住居址出土土器(2)	110
写真図版9. 1号住居址出土土器(3)	111
写真図版10. 2号住居址出土土器(1)	112
写真図版11. 2号住居址出土土器(2)	113
写真図版12. 土壇出土土器	114
写真図版13. 焼土投げ捨て遺構出土土器(1)	115
写真図版14. 焼土投げ捨て遺構出土土器(2)	116
写真図版15. 遺構外出土土器(1)	117
写真図版16. 遺構外出土土器(2)・根井貝 塚出土土器【野田教育委員会 蔵】〔a～i〕	118
写真図版17. 出土石器(1)	119
写真図版18. 出土石器(2)	120
写真図版19. 出土石器(3)	121
写真図版20. 出土石器(4)	122
写真図版21. 出土骨・角・牙器(1)	123
写真図版22. 出土骨・角・牙器(2)	124
写真図版23. 出土骨・角・牙器(3)・加工 痕を残す素材	125
写真図版24. 出土骨・角・牙器(4)	126
写真図版25. 根井貝塚出土骨角器【小田島 禄郎コレクション】	127
写真図版26. 出土土製品・石製品	128
写真図版27. 出土動物遺存体	129
写真図版28. 花粉・孢子化石	130

I. 調査に至る経過

岩手県立博物館の考古部門では、いくつかの調査研究テーマを設定し、展示活動等にその成果を生かしてきた。昭和53～56年度には、分類展示「北上山地の洞穴遺跡」に関連して、東磐井郡東山町所在の熊穴洞穴の発掘を実施し、縄文時代最終末期の葬制の資料集積・検討を行った（「岩手県博調査研究報告書」第一冊〔1984〕）。

これに続く事業として、分類展示「三陸の貝塚」の充実を図るため、県内所在の貝塚遺跡の発掘調査を計画した。当該調査事業については、既に昭和49年度から4回にわたり沿岸部の周知の貝塚を踏査する一方、研究史の見直しも進めていたものである。

その結果、これまで調査例の希薄な県北部の貝塚を発掘することにより、県南部特に気仙地方の諸貝塚との比較を行い、併せて近年再検討を要するようになってきた縄文後期末～晩期初頭の土器編年研究に資するため、比較的保存の良い九戸郡野田村玉川所在の根井貝塚を選択した。発掘調査に先立ち、昭和57年9月4日～7日の4日間にわたり地形測量と試掘を行い、調査目的に叶う遺跡であることを確認した。

翌58年5月には、大正～昭和初期にかけ本県の考古学・史跡保存指定に多大な足跡を残された故小田島禄郎氏（1881～1953）の収集資料〔以下“小田島コレクション”と呼ぶ〕が当館に寄託された。この中には氏が昭和初期に発掘した本貝塚出土資料が多数含まれていた。これらの資料から本貝塚が従来考えていたより、良好な遺跡であることが推定された。幸い地主の岩山憲政氏は、約半世紀前の小田島氏の発掘の様子を記憶しておられた。よって、当館の発掘区も小田島氏の発掘区に近接する部分に主力を置くこととし、下記により三次にわたる発掘調査を実施した。

第一次調査

昭和58（1983）年9月2日～9日

第二次調査

昭和59（1984）年9月3日～9日

第三次調査

昭和60（1985）年10月22日～28日

II. 岩手県北部沿岸地域における貝塚研究の歩み

総延長670kmを越すといわれる岩手県の海岸線は、宮古市付近を境に、北部は雄大な隆起海岸に、南部は変化に富んだリアス式海岸によって縁どられている。県内には約60カ所の貝塚があるが、内陸部南端の淡水性貝塚を除くと、その大半は南部のリアス式海岸部に分布する。とりわけ気仙地方と呼ばれる大船渡湾・広田半島の諸貝塚は、明治期以降、多くの人々によって調査され、縄文時代研究に多大な貢献を成したことで知られている。

これに対し、北部沿岸地域の貝塚は、研究の歩みは古く遡るものの、体系的調査は近年に至るまで成されていないのが実情であった。

この地域の貝塚の考古学的記載としては、中嶋吉兵衛（1880～1925）の業績が嚆矢となろう。中嶋に関しては既に紹介しているが（註1）、明治末年に宮古市銚ヶ崎館山貝塚を中心として収集を進めていた。また「下閉伊郡誌」（1922）には、宮古周辺の数貝塚に加え、田野畑村羅賀貝塚、岩泉町茂師貝塚を記載している。

次いで、大正13（1924）年当時岩手県史蹟名勝天然記念物調査会委員であった小田島禄郎が、内務省考査員柴田常恵と共にこの地を訪れている。彼らは中嶋の案内により、館山・磯鶏蝦夷森・崎山等の小発掘を試みた。小田島は、昭和2（1927）年にも9日間を費し、宮古から県北端の種市まで踏査している。そして中嶋の記載した貝塚を再調査し、特に茂師貝塚では、上下二枚の貝層から骨針等を得た。また新たに種市町八木貝塚、黒マッカ貝塚等を発見している。

この折、野田村周辺では悪天候のため根井貝塚の調査を見送っているが、一連の踏査の成果は「日本石器時代人民遺物発見地名表〔第V版〕」（1928）に報告されている。小田島が根井貝塚を発掘したのは、昭和6（1931）年6月と翌年11月のことであった。

小田島コレクション中の根井貝塚資料には、“根井A上層”“根井A下層”等と墨書された骨角器があり、彼がある程度地点と層位を区分して発掘を進めたことがわかる。残念ながら、小田島がこの

貝塚をどう評価したのか知る記録は同コレクション中の原稿・覚書等には見当たらない。なお、小田島のこの発掘の際、甕棺墓を検出したという記録があるが(註2)、同コレクション中に該当するような資料は含まれていない。

戦後は、草間俊一・吉田義昭両氏によって「岩手県を主とする考古学提要」(1953)が刊行され、宮古以北種市までの貝塚が10カ所記載された。さらに吉田氏の「岩手県貝塚文化瑣記一」(奥羽史談23(1957))には15カ所が掲載されている。

昭和39(1964)年には「岩手県遺跡地名表」が

県教委によって編集された。同書掲載の遺跡数はそれ以前に比べかなり増加したが(例えば田野畑村の場合24カ所が73カ所に増加した)、新貝塚として記載されたのは久慈市二子貝塚のみであった。

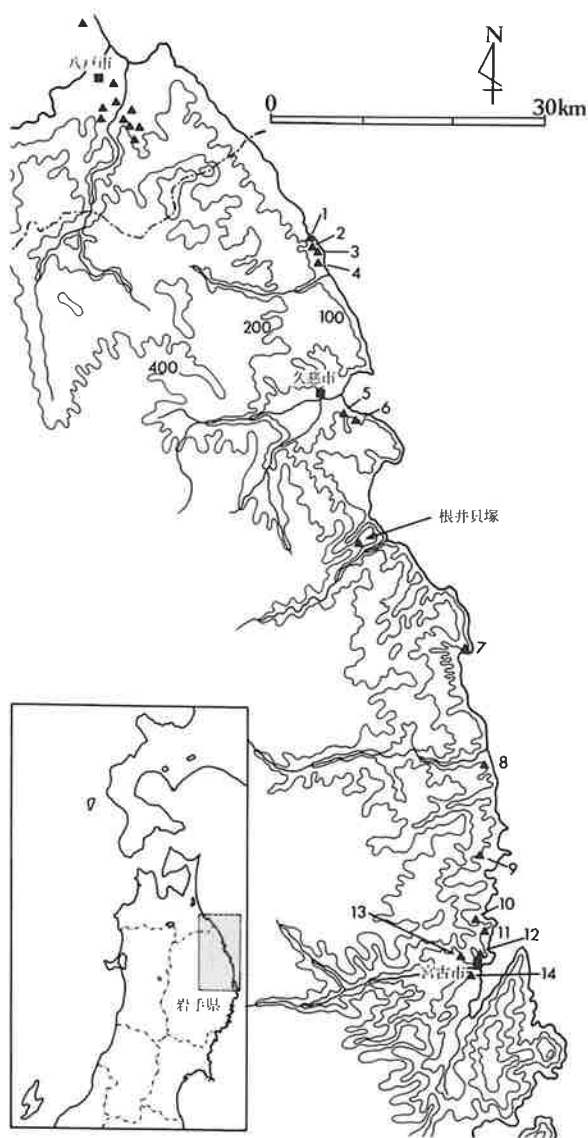
その後、宮古市内での人骨の出土等を除き、貝塚調査等は皆無という状態が続いた。近年の市町村史等でも「宮古市史〔漁業・交易〕」(1981)を除けば、貝塚への言及は概論程度に留まっている。

このような中で、及川洵氏による「田野畑村史1」(1985)の羅賀弁天貝塚の記載は貴重であろう。同貝塚は県道工事中に発見され、現在は消滅したという縄文後期前葉の遺跡である。骨角器・獣骨を欠くが、イガイ・ムラサキインコ・チヂミボラ・レイシ等10種の貝が出土している。岩礁性貝類を基本とする点で、根井貝塚に類似する。

さて、本地域の貝塚は気仙地方の諸貝塚に比べ貝層が貧弱であることが特徴的である。そのため貝層の消失する可能性が高く、「貝塚」として把握され難いのではなかろうか。しかし、根井を始め、茂師・崎山・館山等を見る限り骨角器等には遜色ないことも事実である。その点で、今後の調査如何では、新たな知見を与えてくれる可能性を秘めた地域といえるかもしれない。(熊谷常正)

註1. 宮古市教委「宮古市遺跡分布調査報告書1」(1983)、岩手県博「岩手の貝塚—昭和61年度企画展図録」(1986)所載の『岩手県貝塚研究史概観』、『岩手の貝塚展の開催から—中嶋吉兵衛とその周辺—』岩手県立埋文センター所報「わらびてNo.31」(1986)等参照

註2. 岩手県史第一巻P167による。



第1図 岩手県北部沿岸地域の貝塚分布

No.	貝塚名	市町村名	No.	貝塚名	市町村名
1	ホックリ	種市町	8	茂師	岩泉町
2	八木	種市町	9	田老寺山(?)	田老町
3	小子内	種市町	10	崎山	宮古市
4	黒マツカ	種市町	11	大付	宮古市
5	二子	久慈市	12	館山	宮古市
6	大尻	久慈市	13	小沢	宮古市
7	羅賀弁天	田野畑村	14	磯鶏蝦夷森	宮古市

Ⅲ．立地及び周辺の遺跡

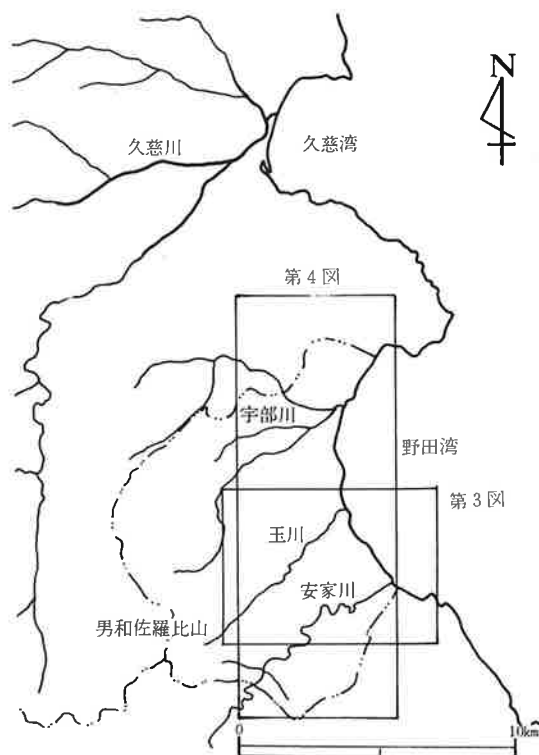
1. 地形・地質

根井貝塚は、九戸郡野田村大字玉川1の3の1にある。遺跡は、標高約225m、海岸から直線距離で約2.5kmの海岸段丘上に立地する。

野田村及びその周辺の地形は、第4図に示した通り、北半が宇部川周辺の沖積地、小規模な河岸段丘と丘陵地からなり、南半は北西～南東に走向をもつ丘陵（水無丘陵）とその西部に位置する山地と丘陵地内に点在する海岸段丘で構成されている。

山地は、遺跡の西方に位置する男和佐羅比山（813m）など起伏量200m前後の中起伏山地であり、東の縁辺は北西～南東方向に走向をもつ。主な水系の方向は、南西～北東であり、それと直交する水系もみられる。

丘陵地は、標高の異なる2つのグループに分けられるが、いずれも本来海岸段丘として形成されたものであり、開析された結果丘陵化したものである。

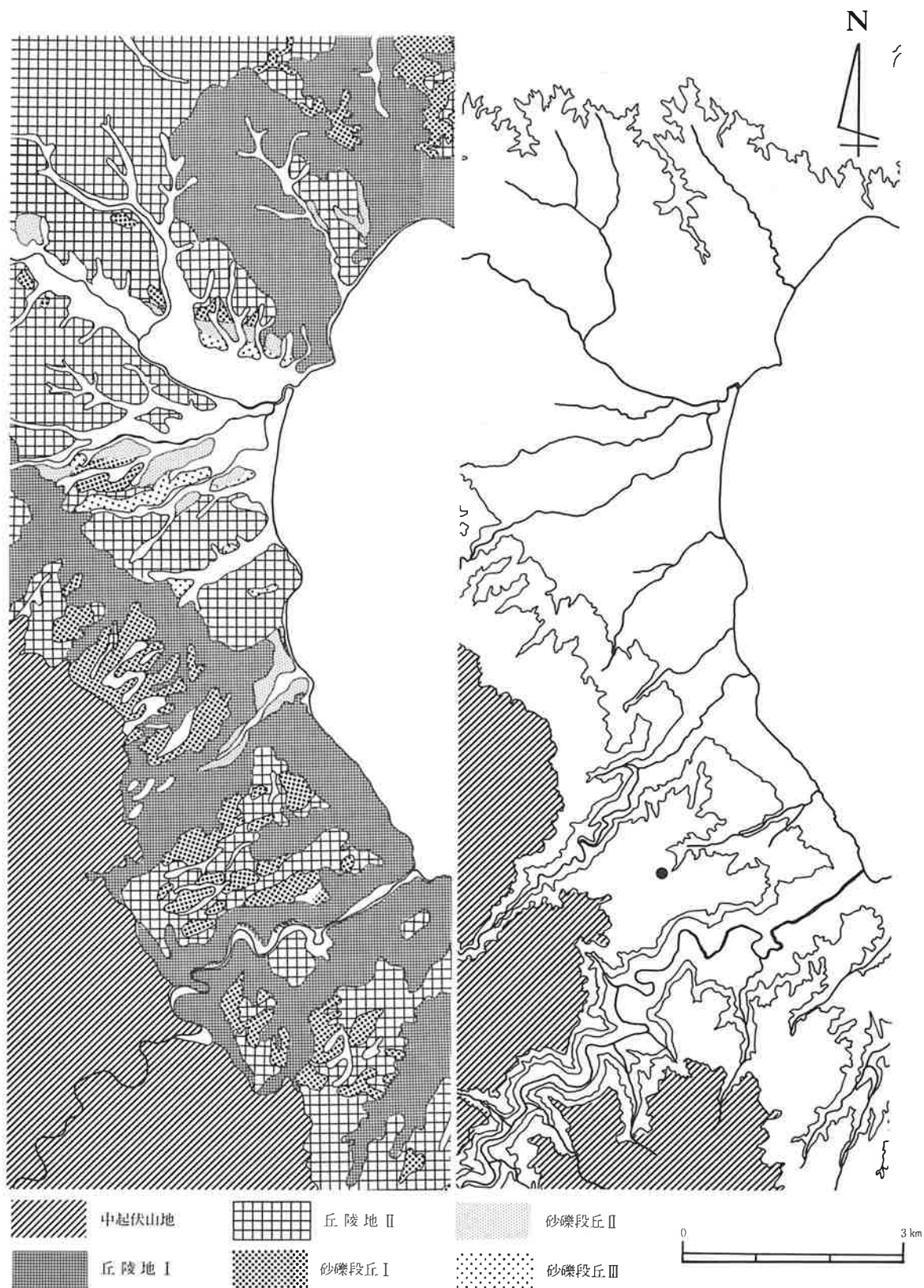


第2図 位置図

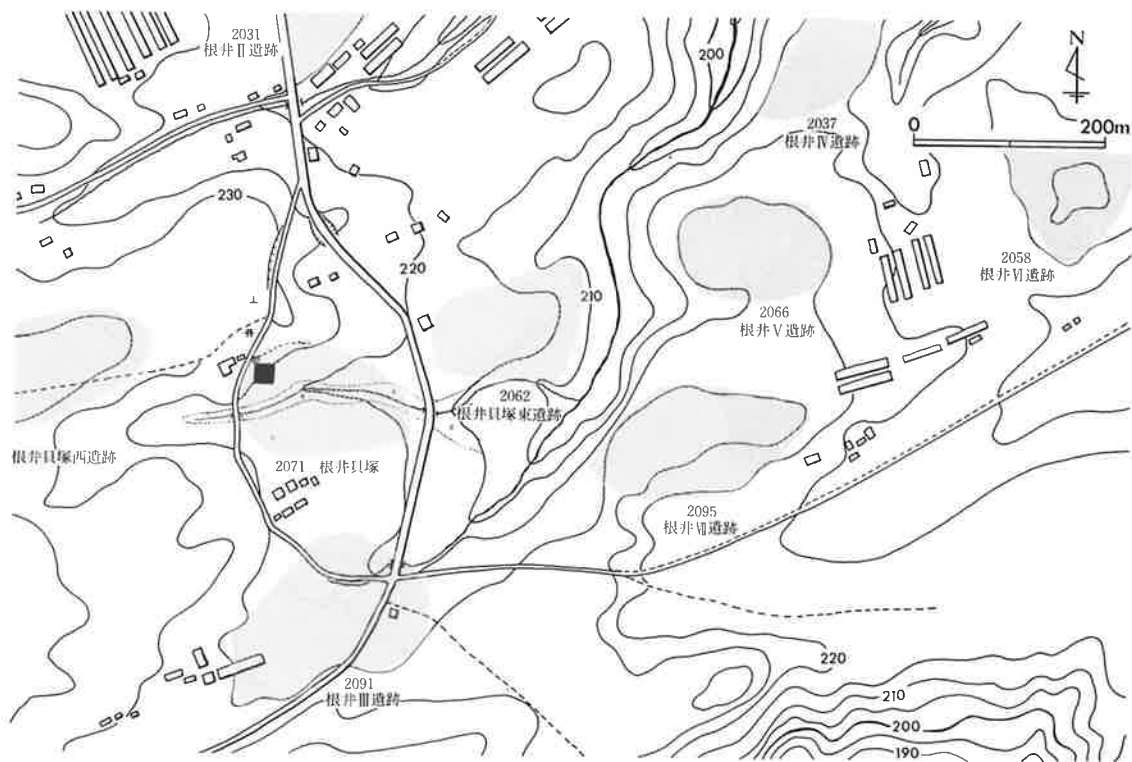


第3図 地形図(1/50,000)

(●印根井貝塚)



第4図 地形分類図 (●印根井貝塚)



第5図 根井地区遺跡分布図 (■＝調査地点)

南半の丘陵は、標高150～250m前後で、北西～南東に走向をもつ。この丘陵地の尾根状部分には、海岸段丘の原面が点在して残り、平坦面を形成している。

この海岸段丘の原面は、根井貝塚を含め、根井・和野平に集中してみられるほか、堀内周辺と三崎の一部に認められる。地形区分上この段丘は、九戸段丘に相当するものであろう。根井・和野平地区におけるこれらの段丘の大半には、縄文時代後・晩期を中心とする遺跡が多く存在する。

一方、北部の宇部川及びその支流周辺にも丘陵地が広がっているが、標高は150m以下と低い。この丘陵は、南半の水無丘陵とは急斜面で限られており、開析によって低くなったというより、原形が形成された時点で低かったと考えられている。ただし、丘陵全体の開析が進み、平坦面は少ない。

河岸段丘は、全体に発達せず局部的にしか認められない。宇部川の支流である明内川・泉沢川両岸に、洪積世末～沖積世に形成された河岸段丘が小規模にみられる。

この段丘は、シャープな形をもち、堆積物も厚

いとは云えず、また、河川の流域規模の割には浸蝕が強いことなどから、海退の過程で形成された浸蝕段丘であろうとする説もある。地形区分では種市段丘に相当すると考えられる。

海岸は、玉川より南と宇部川の北部では丘陵が海岸まで伸びているため、海蝕崖が多く、規模の大きな浜は発達していない。砂浜は、十府ヶ浦の前浜と各河川の河口部に極めて小規模に認められるだけである。従って、海岸の大部分は磯浜か、あるいは海蝕崖として直接海に臨んでいる。

低地は、宇部川の河口部に僅かな広がりが見られる程度である。宇部川の低地は、現在の海岸線から1～2km上流まで極めて平坦である。これは、河川の浸蝕能力が弱く、段丘化せず堆積作用が進んだためとされている。

以上、第4図に示した範囲の地形について概略を記してきた。これらの地形は、地質構造の強い影響を受けて形成されたとされる。

本地域の基盤岩は、中生界の岩泉層群及び田野畑花崗岩体であり、これらを不整合に覆って、白亜系の久慈層群、さらに平行不整合で、古第三系

野田層群が重なる。

北西～南東に走向をもつ、150m以上の丘陵に接し、走向を同じくして南より順に久慈層群の下位から玉川層・国丹層・沢山層の分布がみられ、さらに同じ走向の野田層群があり、久喜断層と接している。

根井貝塚の載る海岸段丘及びその周辺の山地、丘陵の地層は、北上山地北部型古生層と呼ばれる硬質の砂岩・チャートを主体とする岩泉層群及び田野畑花崗岩体を主とするが、段丘、丘陵には部分的に砂礫層がみられる。

砂礫層は、花崗岩・チャート・粘板岩・砂岩からなる礫と粗砂ないし中砂で構成される。特に、円磨された鶏卵大の礫が多いとされ、遺跡から出土した石器の素材と深く係ると考えられる。

また、砂礫層の上には、厚さ1m前後の火山灰をのせており、表層は、火山灰に係る淡色黒ボク土壌を有する。

2. 周辺の遺跡

野田村内の遺跡は、「昭和61年度版、岩手県埋蔵文化財包蔵地一覧」によると41遺跡登録されている。

遺跡を時期別にみると、旧石器時代の遺物は今のところ発見されていないが、そのほかは規模や密度の差こそあれ、各時代の遺物がみられる。一方、遺跡の立地からすると、標高150m以下の比較的低い丘陵や河岸段丘上に在る遺跡群と南西部に位置する標高200m前後の海岸段丘上に載る遺跡群とに分けられる。

低い丘陵及び河岸段丘上には、野田竪穴群（中平遺跡）や上新山遺跡に代表されるように、古墳時代末から奈良・平安時代の集落が数多く存在する。野田竪穴群は、住居址と推定されるもの185基を数えるとされているし、宇部川北岸の河岸段丘上にも100基を超える住居群があると推定されている。また、出土遺物では、上新山遺跡から蕨手刀3振が出土しているし、他の遺跡から鉄製品・鉄滓・羽口なども多く発見されている。北部沿岸地域における古代史を解明するうえで、この丘陵地及び低位段丘上の遺跡は重要な位置を占めると考えられる。

また、この地域には、縄文時代の遺物も散見さ

れる。代表的な遺跡としては、北部のやや高い丘陵地に在る広内遺跡がある。ここは、円筒下層d式土器を主体とする縄文時代前期の遺跡である。さらに、標高30～50mの丘陵上には、野田城と推定される古館・新館のほか、玉川の海岸に面した玉川館など多くの館跡もみられる。

一方、南西部に分布をもつ標高200m前後の海岸段丘上にも多くの遺跡が在る。特に海岸段丘の原面をよく残す根井・和野平地区に集中している。根井地区では、根井貝塚・根井Ⅰ～Ⅸ遺跡など16遺跡、和野平地区では、和野平Ⅰ～Ⅷ遺跡など13遺跡が確認されている。いずれも縄文時代の遺跡である。

根井地区の場合、丘陵地の斜面や沢にみられる新しい開析面を除く大半が遺跡であるともいえる。しかも、近年発見された縄文時代前期の遺跡を除くとすべて縄文時代後・晩期の遺跡である。縄文時代後・晩期に集中する傾向は、和野平地区でも同様である。従って、これらの遺跡群を単独に捉えるよりも、根井遺跡群・和野平遺跡群として捉え、それぞれの性格を明らかにしていく必要がある。

貝塚は、根井貝塚のほか、隣接する根井貝塚西遺跡・根井貝塚東遺跡においても存在する可能性が指摘されているが、根井貝塚で調査したような部分的なものであろう。

しかしながら、今回の調査は極く限られた範囲の発掘調査であつたし、他の遺跡の性格もほとんど知られていない。牧草地などへの開墾が急に進む今日、根井貝塚を中心とする根井遺跡群の全体的な把握が早急に望まれる。（高橋信雄）

引用参考文献

「北上山系開発地域土地分類基本調査—陸中野田—」

1975 岩手県

中川久夫 『本邦太平洋沿岸地方における海水準静的変化と第四紀編年—北上山地東縁八戸～久慈付近』 東北大学理学部地質学古生物学教室研究報告

「昭和61年度版 岩手県埋蔵文化財包蔵地一覧」
岩手県教委

草間俊一 「野田村中平遺跡」1967 野田村教委

Ⅳ．調査区・グリッド設定

根井貝塚は、中央に東流する沢を狭み、東西約180m、南北110mほどの範囲をもつと推定されている。

地主である岩山憲政氏によって、昭和初期の小田島祿郎の調査区が沢の北側であることが判明したことから、遺物の散布が集中するのほぼ同一地点であることから、遺跡の北半を中心に調査することとした。

初年度の昭和57年には、遺跡周辺の地形図を作成した。地形は北北西より南南東方向に緩い傾斜を示しており、小田島の調査区を中心にして傾斜に沿って、5m間隔で1×1mの試掘溝を3つ、更にその西8mに2つ計5つの試掘溝を設定し、調査を行った。

その結果、西側では縄文時代晩期の遺物を中心に出土すること、東側の中央部には、薄い貝層が分布し、自然遺物が出土すること等を明らかにすることができた。

第2年次の調査（昭和58年）においては、貝層

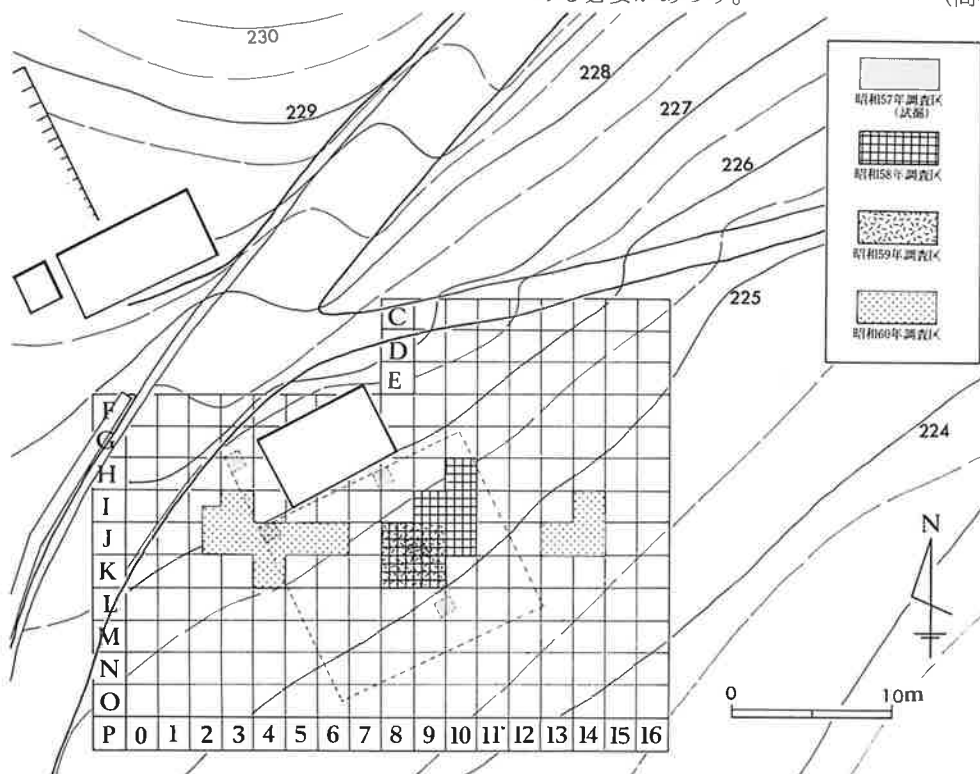
の分布がみられる個所を中心にして、新たに磁北に沿う2×2mを単位とするグリッドを設定し、北から南へアルファベット、西から東には算用数字を付した。この年の調査は、H10、I9・10、J8～10、K8・9の8グリッドを調査した。その結果、J・K区に竪穴住居址を確認し、竪穴住居址内にのみ貝層が分布することを確認めた。

第3年次（昭和59年）には、前年に確認した第1号住居址の精査を実施した。

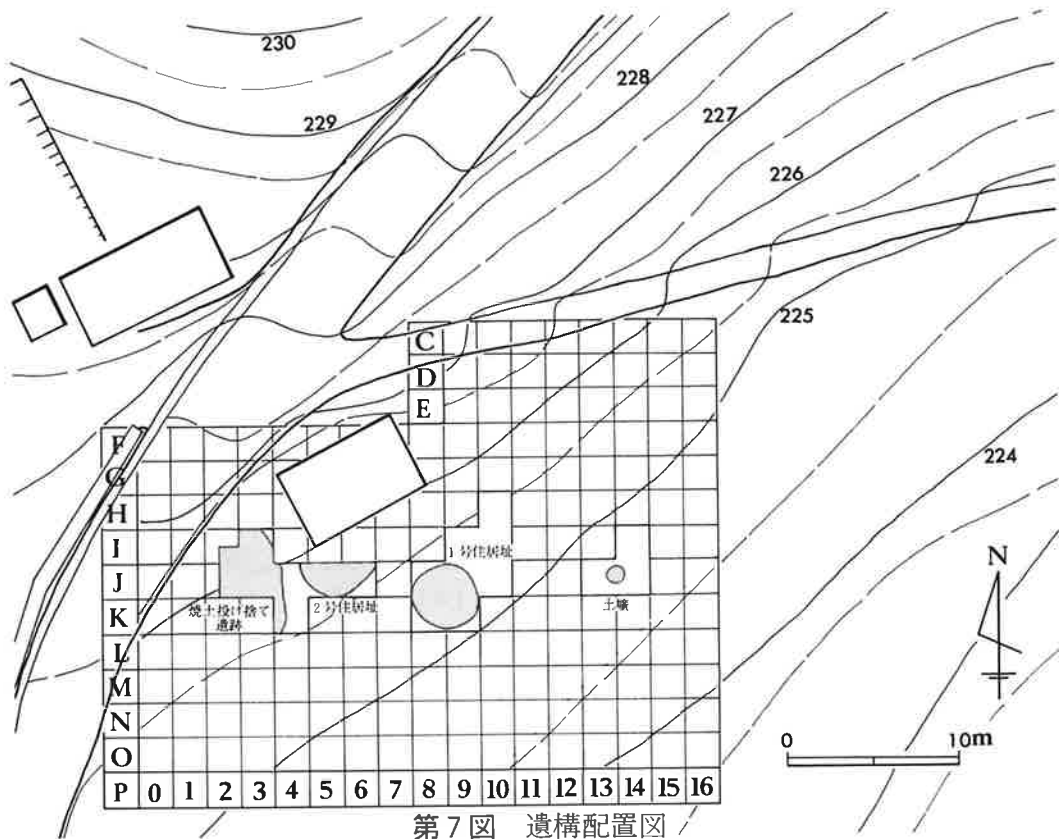
第4年次（昭和60年）の最終調査では、1号住居の東と西の地点で計10グリッドを調査した。西側では、縄文時代晩期の遺物包含層及び焼土遺構、更には、J5・6区において2号住居址を確認し精査した。ただし、2号住居は、北に隣接して作業小屋があることから、半分の調査だけで調査を終了せざるを得なかった。また、東側では、縄文時代晩期の土壌1基を確認し、調査を行った。

試掘を含め4次にわたって調査したが、調査規模が極めて小さく、遺跡の全体像を把握するまでにはいかなかったが、根井貝塚の特徴のいくつかを抽出することができた。今後更に詳細な調査を進める必要があろう。

（高橋信雄）



第6図 グリッド配置図



第7図 遺構配置図

V. 層序及び遺構

調査区は、すべて畑地で、標高が226.5m～224.5mの間で、北北西が高く、南南東に緩く傾斜している。

遺跡全体で層序は大きく3層に分けられる。ただし、遺構内の層位は遺構ごとに記述した。

I層は、いわゆる表土（耕作土）であり、暗褐色を呈し、柔かい。厚さは約20～30cmほどである。

II層は、黒褐色～暗褐色を呈し、土器・石器類・礫・焼土・炭化物を含む層である。極めて人為的色彩の強い土層である。耕作の深い部分では、この層を欠く個所もあるが、調査したほぼ全域に分布しており、標高の高いI3区がやや厚く、J14区では比較的薄くなっているが、全体として10～40cmの厚さを有する。

III層は、黄褐色～褐色を呈する火山灰層である。III層表面は、表土の傾斜よりも弱い、僅かに北北西～南南東に傾斜を示す。また、南側の沢に近い部分では、細い砂礫を含む個所もみられる。

遺構は、住居址2棟と、焼土投げ捨て遺構1基

及び土壌1基の計4遺構が確認され、調査を実施した。

1号住居は、J8・9区、K8・9区で、2号住居址はJ5・6区で検出された。この間の最短距離は、約2mでかなり接近している。いずれも標高225～226mの間であり、この標高に沿った部分には、更に住居址が検出される可能性は極めて高いと想定される。

焼土投げ捨て遺構は、2号址の東でI・Jの3・4区で検出されている。特にI3区・J3区からJ5区にかけては、3層までの深さが約80cmと深く、しかも、縄文時代後期の遺構の上に、晩期の遺物の流入がみられ、複雑な層を形成している。調査範囲が狭く、広がりをつめることが出来なかったが、明確な焼土が厚く堆積していることから焼土投げ捨て遺構とした。

土壌は、東側のJ13・14区に確認された。標高は224.7mほどでこれより下位は、3層が急に下り、縁辺部の遺構ともいえる。

周辺部には、類似遺構がまだ残っていると考えられる。
(高橋信雄)

VI. 発見された遺構と遺物

1. 1号住居址

Jの8・9区、Jの8・9区で検出した。極僅かな未調査部分もあるが、直径3.8mのほぼ円形を呈する住居址である。

壁は、第Ⅲ層を掘り込んで構築され、床面より僅かな傾斜を持ち立ち上るが、高位ではやや傾斜が緩く、下位の南東部では傾斜がきつい。

床面は、平坦で全体に固いが、炉の北と南に著しい（破線部分）。

柱穴と推定されるピットは5個確認している。南壁に2個並び、他は北を頂点とする二等辺三角形の角に位置する。柱穴の規模は、30～40cm、深さは南の2個が西より30cm・35cm、北は20cm・

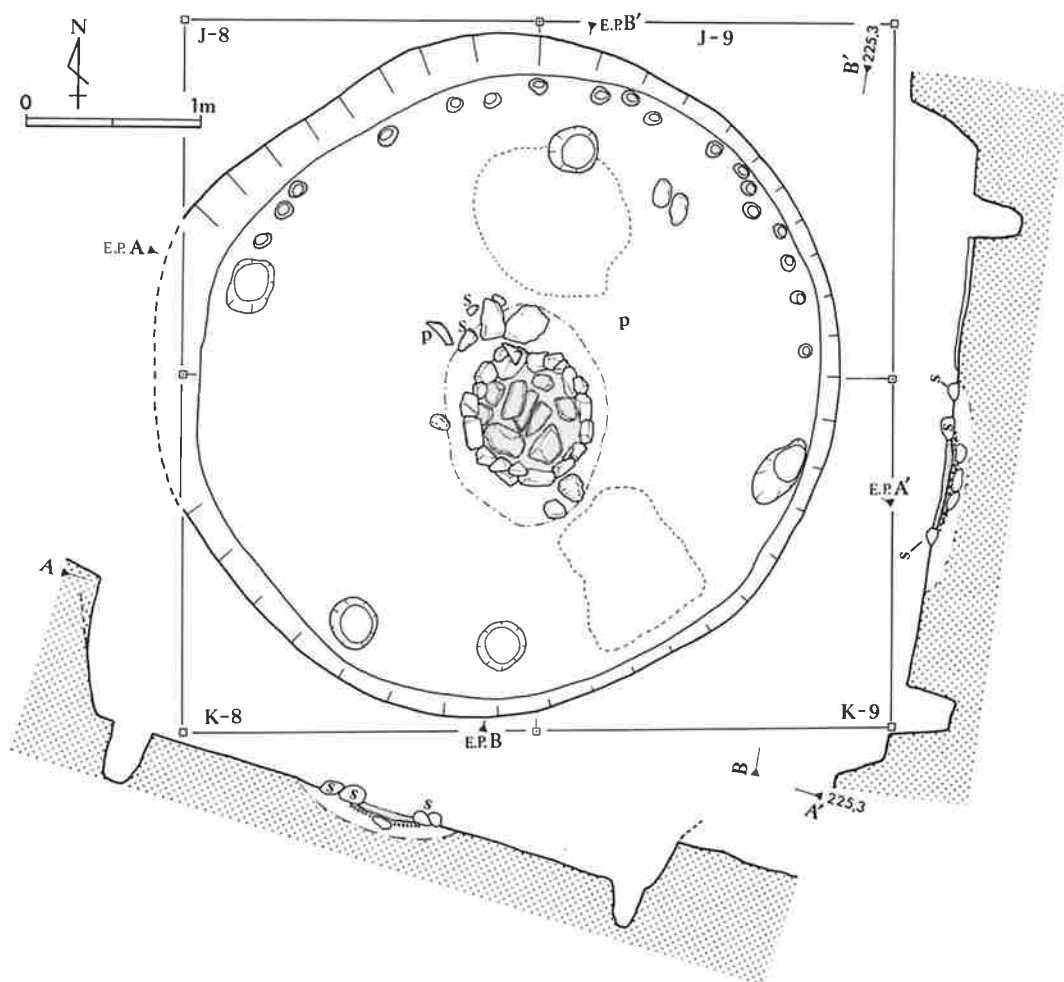
西は30cm、東は25cmを測る。また、壁際には北半にのみ、直径10cm前後で深さ15cm程の小ピットが18個検出されている。壁柱穴と考えられる。

炉は、中央部に直径約70cmの円形を呈する石囲炉が検出されている。まず、120×70cmの南北に長い楕円形状に掘り、その中央部に角礫（約20cm）を用いて周辺を囲い、縁を作っている。中には角礫を敷き、更にその上に細かな砂礫を敷きつめており、焼土はその上に堆積していた。

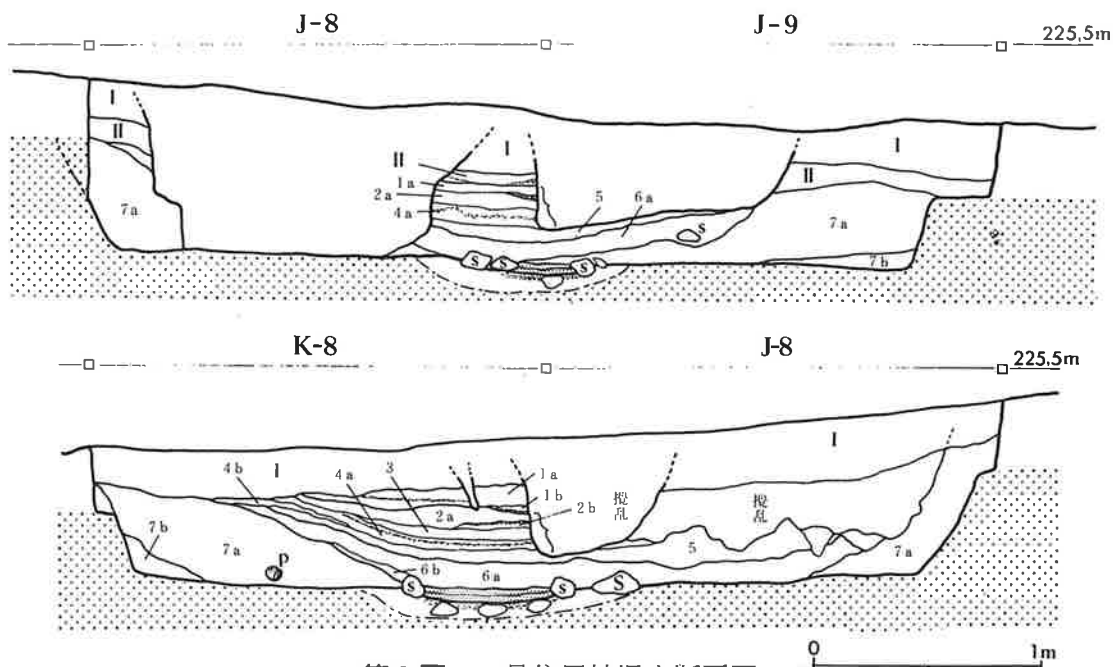
遺物は、南壁のピット周辺の床面上に集中して検出され、大半が完形品で発見されている。（第10図）。

住居の埋土は大きく7層に区分した。いくつかの層はさらに細分し、都合12枚の土層とした。

1a層（暗褐色土） 貝を含み、炭化物を多く含む。

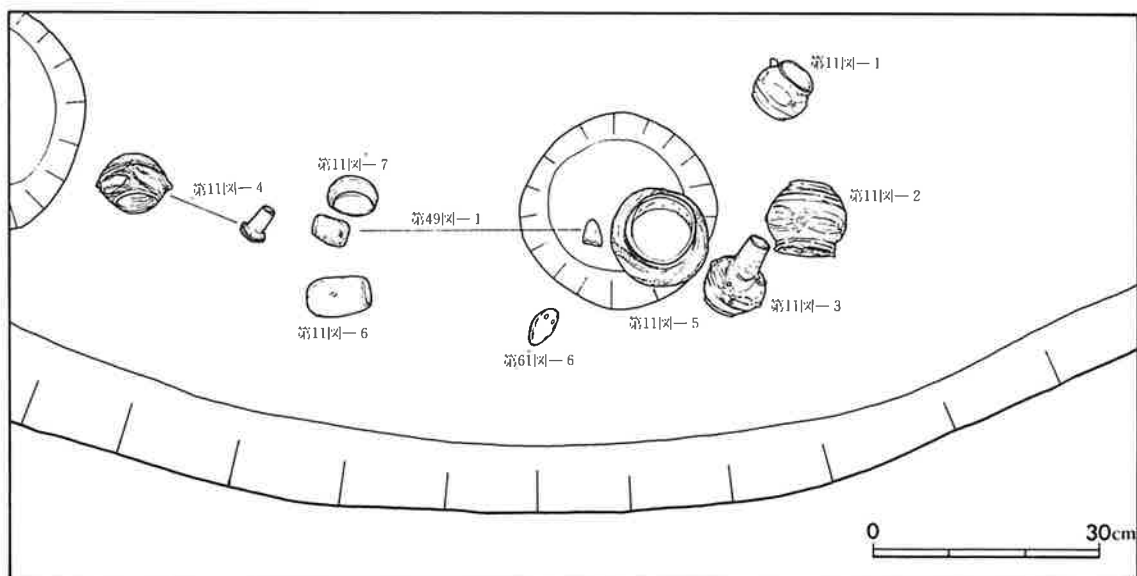


第8図 1号住居址平面図

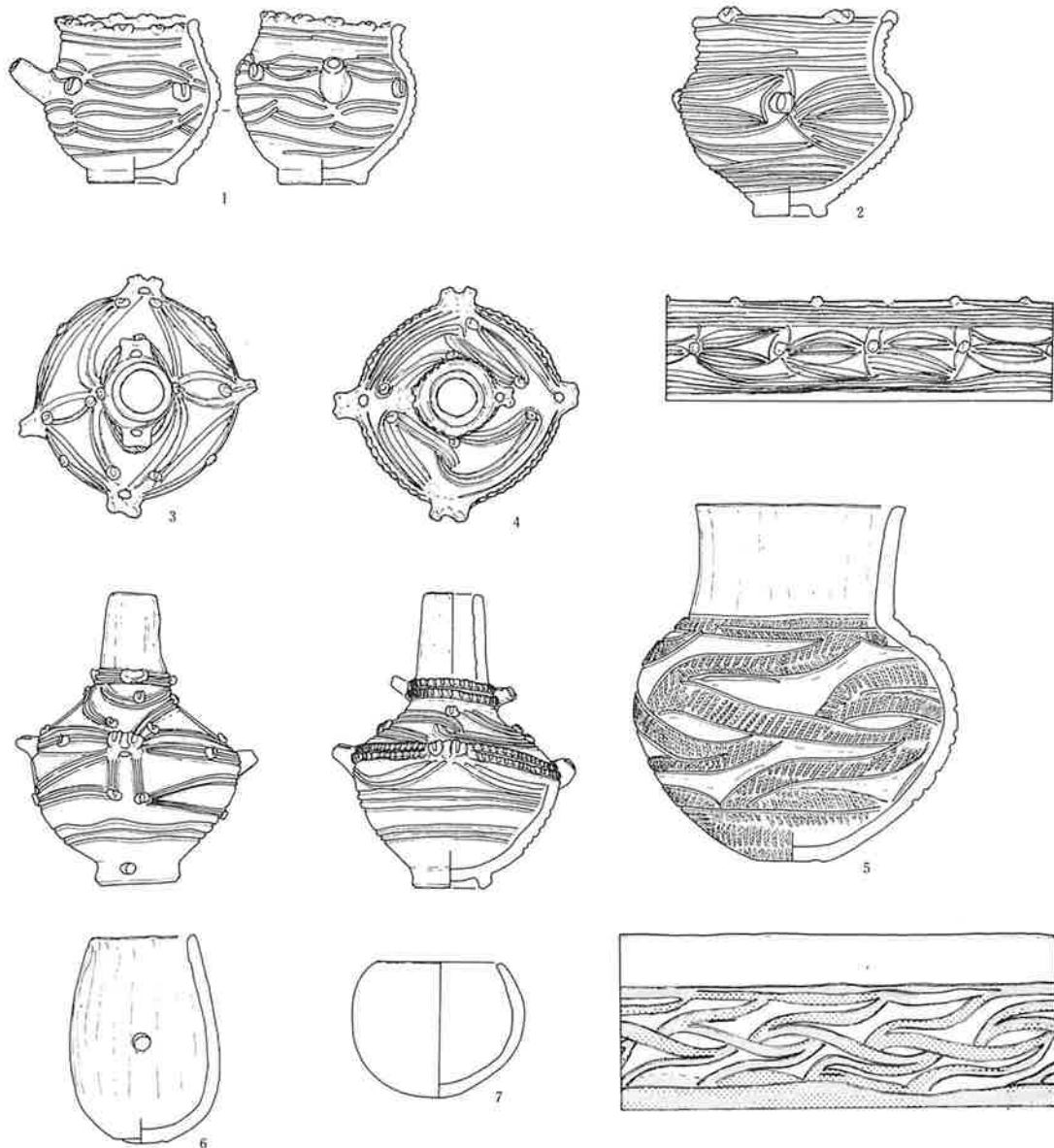


第9図 1号住居址埋土断面図

- | | | | |
|-----------|-----------------|---------------|-------------------|
| 1b層(暗褐色土) | 貝を含み、炭化物やや少ない。 | 6a層(暗茶褐色砂質粘土) | 炭化物を多く含み、 |
| 2a層(黒褐色土) | 貝は無く、炭化物少量含む。 | | 粘性が強く、自然遺物を僅かに含む。 |
| 2b層(黒褐色土) | きわめて薄く貝を含む。 | | |
| 3層(灰褐色土) | 灰を多く含む。 | 6b層(暗茶褐色砂質粘土) | 6a層に灰を含む。 |
| 4a層(暗褐色土) | 灰と僅かな焼土、炭化物を含む。 | 7a層(暗黄褐色砂質粘土) | 火山灰ブロックを含む。 |
| 4b層(暗褐色土) | 灰を多く含む。 | 7b層(暗黄褐色砂質粘土) | 火山灰ブロックと黒土を含む。 |
| 5層(黒色土) | 炭化物を多く含む。 | | |



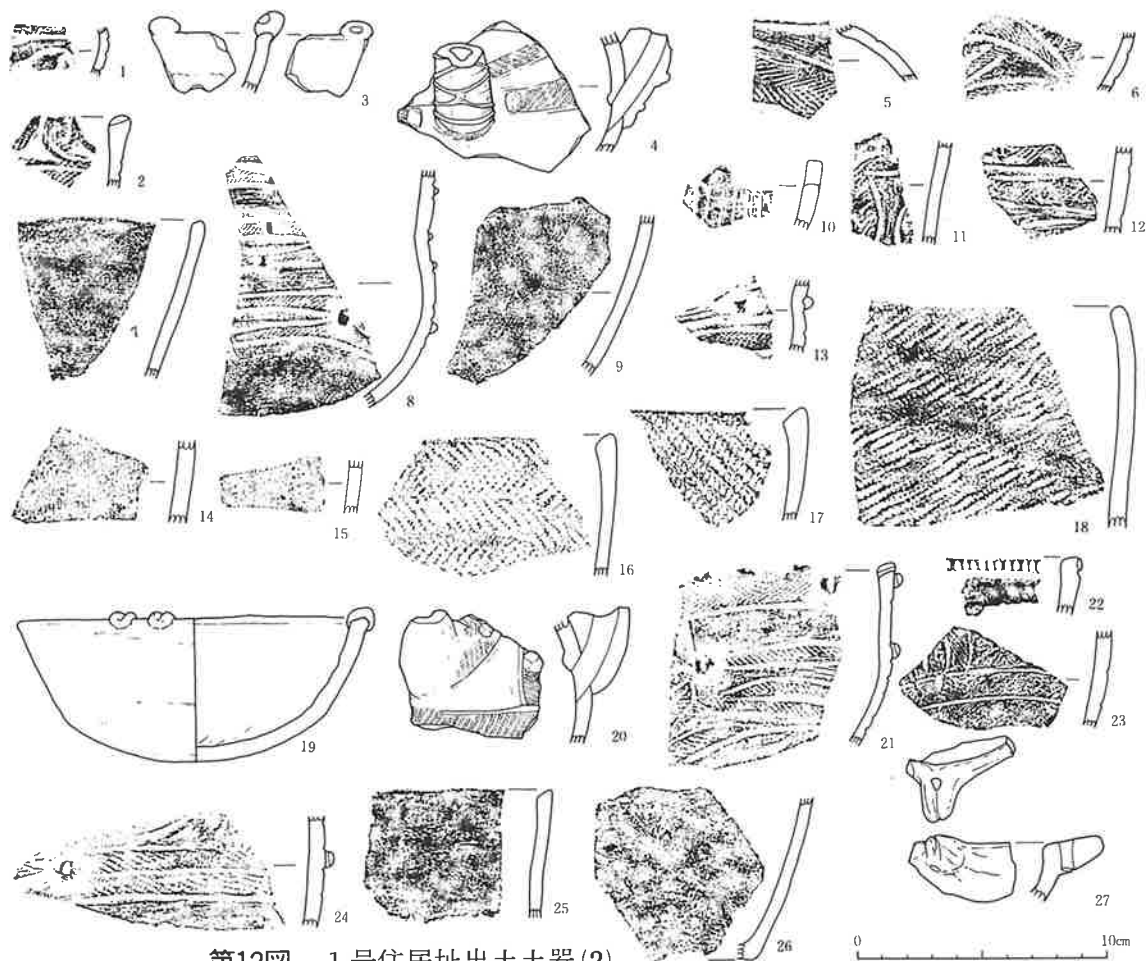
第10図 1号住居址南側床面遺物出土状況



第11図 1号住居址出土土器(1)

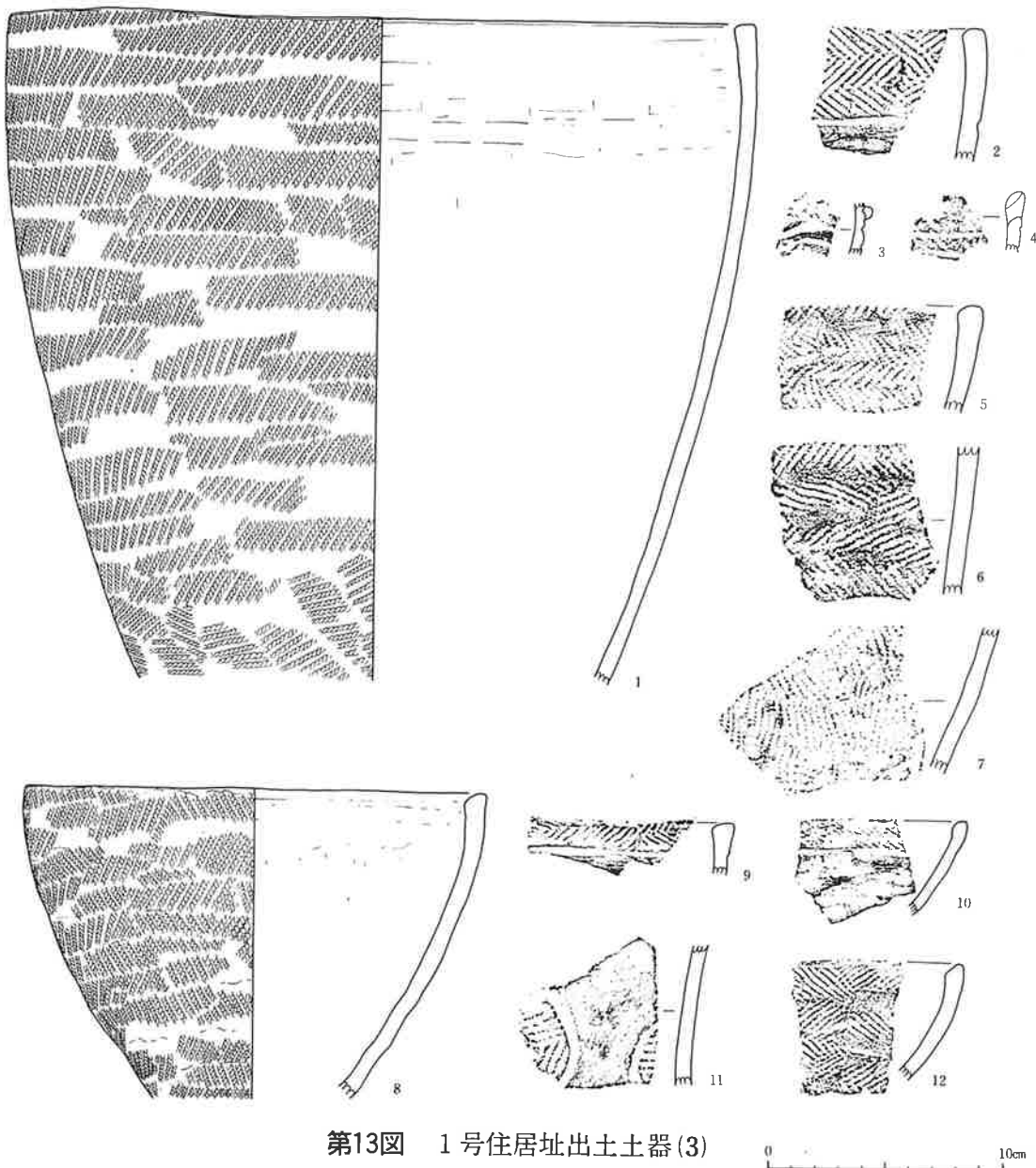
0 10cm

番号	グリッド・層位	器形・部位	文様の特徴他	内面調整他	写真図版番号
1	K 9	床面 注口 完形	口唇；刻目付貼瘤。胴部；二本単位沈線、六分割。	赤色粘土充填	7-1a・1b
2	K 9	床面 鉢 完形	口唇；刻目付貼瘤（5個）。胴部；貼瘤（4個）→沈線	赤色粘土充填	7-2
3	K 8	床面 壺 完形	吊下孔（一対）。浮彫状沈線→小貼瘤。一部タール状付着物。	赤色粘土付着	7-3
4	K 8	床面 壺 完形	頸部・胴部接合。吊下孔（一対）。浮彫状沈線→小貼瘤	赤色粘土付着	7-4
5	K 8	床面 壺 完形	充填状羽状縄文（LR・RL）→沈線→ミガキ。	赤色粘土充填	7-5
6	K 8	床面 筒状 完形	焼成前穿孔。ミガキ（縦位）	接合面残存	7-6
7	K 8	床面 鉢 完形	ミガキ（横位）	ナデ	7-7



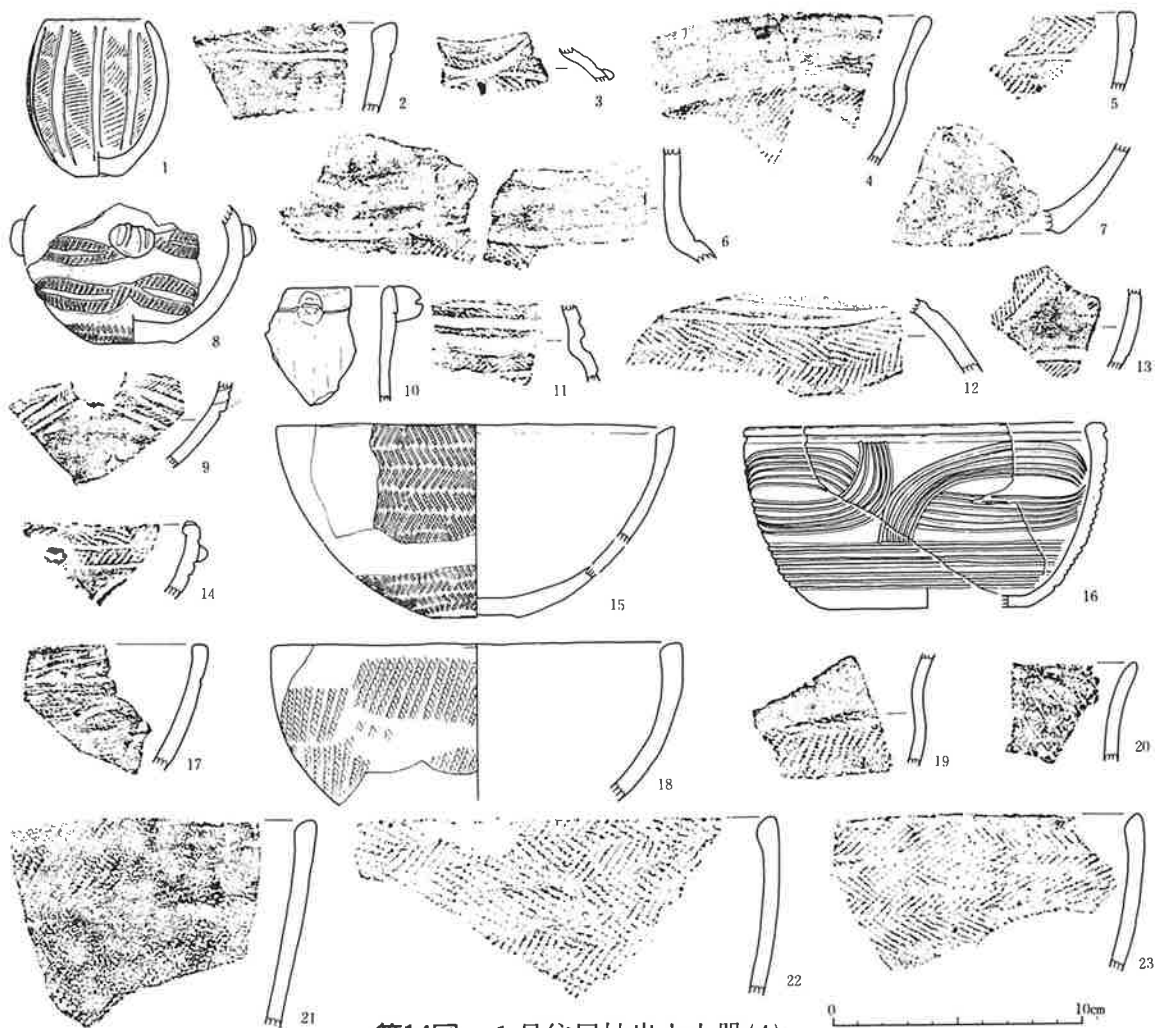
第12図 1号住居址出土土器(2)

番号	グリッド・層位	器形・部位	文 様 の 特 徴 他	内面調整他	写真図版番号
1	K 8	1	三叉文	ミガキ(ヨコ)	8-1
2	J 9	1 鉢 口縁	縄文(L R)→三叉状文。一部刺突。突起頂部刻目	ナデ	8-2
3	J 9	1 針(?) 口縁	円形貼付(内面刺突)。ナデ(横位)	ナデ	8-3
4	J 8	1 注口 胴	貼瘤→縄文(L R)→沈線。ヘラミガキ	ナデ	8-4
5	K 9	1 壺 肩	充填状羽状縄文(L R・R L)→沈線。ヘラミガキ	ミガキ(ヨコ)	8-5
6	J 8	1 鉢 胴	充填状縄文(R L)→沈線。ヘラミガキ	ナデ	8-6
7	K 8	1 鉢 口縁	ミガキ(縦位)	ナデ	8-7
8	J 8	2 鉢 胴	貼瘤→縄文(L R)→沈線。ヘラミガキ	ミガキ	8-8
9	K 8	2 浅鉢 胴	ミガキ(横位)	ナデ	8-9
10	K 8	2 深鉢 口縁	縦位沈線文	ナデ	8-10
11	K 8	2 鉢 胴	縄文(R L)→沈線による入組文。	赤色粘土付着	8-11
12	K 8	2 鉢 胴	縄文(L R)→沈線による平行帯状文。一部赤色粘土付着	赤色粘土付着	8-12
13	K 8	2 鉢 胴	羽状縄文(L R・R L)→貼瘤→沈線。赤色粘土付着	赤色粘土付着	8-13
14	K 9	1 灰 深鉢(?) 胴	櫛歯状沈線(縦位)。14と同一個体	ナデ	8-14
15	J 8	Section 深鉢(?) 胴	櫛歯状沈線(従位)。13と同一個体	ナデ	8-15
16	K 8	2 深鉢 口縁	羽状縄文(R L・L R)	ミガキ	8-16
17	J 8	2 上 深鉢 口縁	縄文(R L)	ミガキ	8-17
18	K 8	2 深鉢 口縁	縄文(L R)	ミガキ	8-18
19	J 8	2 下 浅鉢	口;貼瘤(二個一対)三単位? ケズリ、粗いミガキ	ミガキ(ヨコ)	8-19
20	J 8	2 下 注口 胴部	充填状縄文(R L)→沈線。ミガキ	ナデ(ヨコ)	8-20
21	K 8	2・2 鉢	口;貼瘤、羽状縄文(R L・L(?))、胴;縄文(R L)→沈線→貼瘤	ナデ(ヨコ・タテ)	8-21
22	J 8	2 下 鉢 口縁	沈線→刻目	ナデ(ヨコ)	8-22
23	K 8	2・2 鉢 胴	縄文(L R)→沈線	ナデ(ヨコ)	8-23
24	K 8	2・2 鉢 胴	貼瘤→充填状縄文(R L)→沈線。ミガキ	ナデ(ヨコ)	8-24
25	J 8	2 下 壺 頸部	ミガキ	ミガキ(ヨコ)	8-25
26	J 8	2 下 鉢 胴下半	一部ケズリ、粗いミガキ	ミガキ(タテ)	8-26
27	J 8	2 下 浅鉢	穿孔を持つ突起	ミガキ	



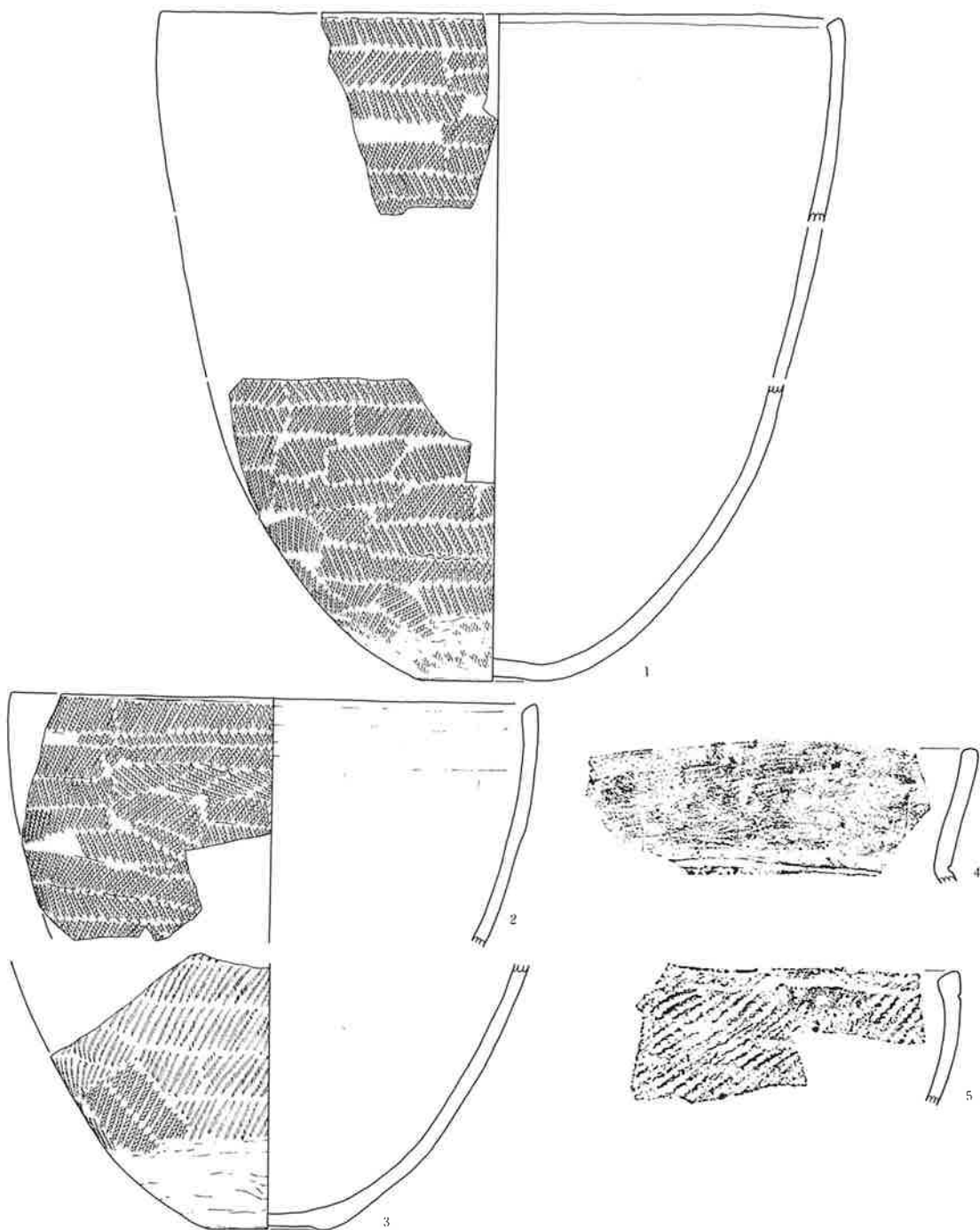
第13図 1号住居址出土土器(3)

番号	グリッド・層位	器形・部位	文 様 の 特 徴 他	内面調整他	写真図版番号
1	K 9	1 灰 深鉢	縄文 (LR)	ミガキ (ヨコ・タテ)	8-27
2	I 9	3 壺? 口頸	羽状縄文 (RL・LR) → 沈線	ミガキ (ヨコ・タテ)	8-28
3	K 8	3 鉢? 胴	貼瘤 → 充填状縄文 (LR) → 沈線。一部赤色粘土付着	一部赤色粘土付着	8-29
4	K 9	3 鉢 口縁	突起頂部指頭状刻目。縄文 (RL) → 平行沈線	ミガキ (ヨコ)	8-30
5	K 8	II 3 灰中 深鉢 口縁	羽状縄文 (LR・RL)	ミガキ (ヨコ)	8-31
6	K 8	II 3 灰中 深鉢 胴	羽状縄文 (LR・RL)	ミガキ (タテ)	
7	K 8	II 3 灰中 深鉢 胴	異方向縄文 (RL)	ミガキ (タテ)	8-33
8	K 8	II 3 灰中 深鉢	不整な羽状縄文 (LR、RL)	ミガキ (ヨコ・タテ)	8-32
9	K 8	4 鉢 口縁	異方向縄文 (LR) → 沈線。ミガキ	ミガキ (ヨコ)	8-34
10	K 8	4 鉢 口縁	縄文 (RL)。ミガキ (ヨコ)	ミガキ (ヨコ)	8-35
11	J 8	4 深鉢 胴	充填状縄文 (RL) → 沈線。ミガキ	ナデ	8-36
12	J 8	4 深鉢 口縁	羽状縄文 (RL・L)。煮こぼれ状のスス付着	ミガキ (ヨコ)	8-37



第14図 1号住居址出土土器(4)

番号	グリッド・層位	器形・部位	文 様 の 特 徴 他	内面調整他	写真図版番号
1	J 8・9	鉢	縄文 (一部充填状) (R) → 縦位沈線	ナデ (タテ)	9-1
2	K 8	壺 口縁	縄文 (RL) → 沈線	ミガキ (ヨコ)	9-2
3	K 8	壺 肩	縄文 (RL) → 貼瘤 → 沈線	ナデ (ヨコ)	9-3
4	J 8	鉢	口; ミガキ (ヨコ)、胴; 縄文 (LR)	ミガキ (ヨコ)	9-4
5	J 8	不明 口縁	羽状縄文 (LR・RL) → 平行沈線	ミガキ (ヨコ)	9-5
6	J 8	壺 頸	頸; ミガキ (ヨコ)、肩; 羽状(?) 縄文 (LR・RL) → 沈線	ミガキ (ヨコ)	9-6
7	J 8	胴下・底	ケズリ痕。粗いミガキ	ナデ	
8	J 8	壺(?) 胴・底	貼瘤 → 充填状縄文 (LR) → 沈線。入組文。ミガキ	ナデ	9-7
9	J 8	注口 胴	充填状縄文 (LR) → 沈線。ミガキ (ヨコ)	ミガキ (タテ)	9-9
10	J 8	壺 頸	貼瘤 → 沈線。ミガキ (タテ)	粗いミガキ	9-8
11	J 8	壺 頸・肩	充填状縄文 (LR) → 平行沈線。	ナデ	9-10
12	K 9	壺 肩	充填状羽状縄文 (RL・LR) → 沈線。弧状文か?	ナデ	9-11
13	K 9	鉢 胴	充填状縄文 (LR (0段多条)) → 沈線。一部タール付着。	ナデ	9-12
14	K 9	ベルト 浅鉢 口縁	口唇; 削り出しによる刻目状。羽状縄文 → 貼瘤 → 平行沈線。	ミガキ (ヨコ)	9-13
15	K 9	浅鉢	羽状縄文 (LR・RL)	ミガキ (ヨコ)	
16	K 8	浅鉢	6~7本単位の沈線による入組文。	ミガキ	9-14
17	J 8	ベルト 浅鉢 口縁	ケズリ、粗いミガキ (ヨコ)	ミガキ (ヨコ)	9-15
18	K 9	ベルト 浅鉢	粗い縄文 (LR)	ミガキ (ヨコ)	9-16
19	J 8	鉢 胴	縄文 (LR)。縄文原体側面圧痕	ナデ (ヨコ)	9-17
20	J 9	鉢 口縁	網目状燃系文	ミガキ (ヨコ)	9-18
21	J 8	深鉢 口縁	縄文 (LR)	ミガキ (ヨコ)	9-19
22	J 8	最下Na12 深鉢 口縁	羽状縄文 (LR・RL)	ミガキ (タテ)	9-20
23	J 8	深鉢 口縁	羽状縄文 (RL・L)。煮こぼれ状スス付着。	ミガキ (タテ・ヨコ)	9-21



第15図 1号住居址出土土器(5)

番号	グリッド・層位	器形・部位	文様の特徵他	内面調整他	写真図版番号
1	J 8 5・6	深鉢	羽状縄文 (LR・RL)。底部付近、施文後のミガキ。	ミガキ (タテ)	9-22
2	J 8 6	深鉢 胴上半	羽状縄文 (LR・RL)	ミガキ (タテ・ヨコ)	9-23
3	K 8 床直	深鉢 胴下半	縄文 (L)、一部縄文 (RL)	ミガキ (タテ)	
4	J 8 床面	壺 口縁	口：粗いミガキ。肩：縄文 (LR?) → 沈線。一部スス付着	ミガキ (ヨコ)	9-24
5	J 9 床直	深鉢 口縁	縄文 (LR) → 沈線		9-25

第11図の土器は、第10図に示したように本住居南側床面から、軽石製穿孔品（第49図1）・石製垂飾品（第61図6）と共に、一括出土したものである。この部分を覆う土層は7a層で、この層からは他の遺物は出土していない。貝や獣骨等もみられない。

これらの土器のうち1～5の内部に、半分ほど赤色粘土が充填されていた。6・7にはその粘土はなかったものの、充填されていた土（黒褐色土で、7a層とは異なる）を水洗いしたところ、100点を超えるヘビ目の椎骨が発見された。椎骨は2～3個連結している状態のものがあったが、大半は遊離している。頭骨は出土していない。従って、混入したものではなく、意図的に収納したものと考えた。

なお、この赤色粘土を、分析した結果、鉄分・チタン等を多量に含むものであることが知られた。おそらく赤色顔料の原材料と推定される。

1は小形の注口土器。注口部及び胴部の貼瘤間を二本単位の沈線で、木葉状に連結する。単位が六単位をとる点で、稀少な例である。

2は、口唇に5個の貼瘤が付くが、胴部は4個で4単位の数条の沈線による入組文が描かれる。胴下位にも沈線が数条廻るため、胴部文様の下位は規制され、乱れるものが多い。

3・4は、細い無文の頸部を持つ壺、両者ともに一對の吊り下げ状の穿孔が頸部と肩部の間の突起・胴部の突起、高台部分の三カ所にみられる。

4は頸部が20cmほど離れて出土しているが、その断面には赤色粘土が付着しており、打割後に埋納したと思われる。3の肩部にはタール状の付着物がある。

このような吊り下げ状の壺は、軽米町長倉遺跡（註1）、九戸村小倉遺跡、同村下平遺跡、普代村普代遺跡等から出土している（註2）。長倉遺跡には、注口土器の例もある。

5は、孤状の入組文が4単位に展開する。貼瘤は付けられない。RL・LR二種の原体により、この入組文に沿う充填羽状縄文が施される。しかし、下の展開図にスクリーン tone で示したように、かなり乱れる傾向にある。

6・7は無文で、6の胴部には焼成前の穿孔が

成される。この胴部穿孔土器も岩手県北部を中心として分布するが、住居址の確実な床面から出土した例としては、安代町上の山VII遺跡等があるだけで、少ない。

次に埋土出土の土器をみて行きたい。第12図1～7は、埋土1層の出土。1・2は大胴B式の破片。3は、口唇部に円形刺突を有する貼瘤が付く。円形の貼瘤は、散見するが、このような部位のしかも器内面からの刺突は稀である。

同図8～27、それに第13図1は、埋土2層からの出土資料、この層以下に晩期の資料はない。しかし、22のように、やや古く、後期中葉まで遡るとされる破片も出土しており、層として安定したものか疑問もある。10の沈線は類似例を見ない。2号住居出土資料（第17図14・17他）を考慮すると後期末葉に比定できよう。14・15も例をあまり見ない。東北南部には櫛歯状沈線を持つ例があり、それと関係する可能性がある。

埋土3・4層は粗製深鉢・浅鉢、それに精製土器は小片のみの出土に留った。第13図11は、やや太目の沈線で充填縄文を持つ資料。モチーフはわからない。

第14図1～7は埋土5層出土資料。1は縦位の帯状磨消縄文を持つ小形鉢。半欠品であるため確実ではないが、第30図7を考えると胴部穿孔土器の可能性がある。同様な例は、軽米町馬場野II遺跡第VII群中にみられる。

14～16・18は、浅鉢形土器。浅鉢は数は多いが、精粗両者存在する。16は数条の沈線により入組文を描く。口径に比べ底径が大きく、急に立ち上る。胎土・焼成共に良好である。19のように口縁と胴部を縄文原体側面圧痕で切る例は、後期前葉に多くみられるが、この時期の類例は寡聞である。20の原体は軸が縄文のようで僅かにその圧痕が観察できる。第15図4・5は平面図にPと記載した炉近くの出土。しかし層的には、第11図の資料より上層となる。4は、かなり大形の壺になろう。（高橋信雄・熊谷常正）

註1 軽米町歴史民俗資料館所蔵。故鈴木孝志氏らによる昭和39年発掘資料

註2 この他、出土地不明の資料が、県立岩泉高校田野畑分校に所蔵されている。

2. 2号住居址

J 5・6区及びJ 4区にかけて検出した。北側に作業小屋があるため、南側半分しか調査できなかった。径は約4.5m、ややびつながら円形を呈する。

壁は第III層を掘り込んで構築され、床面より直線的に立ち上る。西側J 4区での掘り込み面は判然としない。床は平坦で固くしまっている。柱穴は不明である。第16図平面図に図示されている床面のピットは、中央部を除く東西のふたつは、いずれも上層からの攪乱土壌である。中央部のピットは床面で50×32cm、深さは33cmを計る第1号住居址にならい、対応する位置での柱穴を検出しようとしたが、発見できなかった。なお、壁柱穴もみられない。

炉は中央部に石囲炉が検出されている。径1mほどにわたり床を掘り凹めて構築されている。炉内は焼土が厚く堆積し、それを取り巻くように炭化物の層がみられる。炭化物の層は焼土の下位にもみられた。石囲炉の石は西側の3個が残るだけで、他は除去されている。炉の東側で2個の抜き

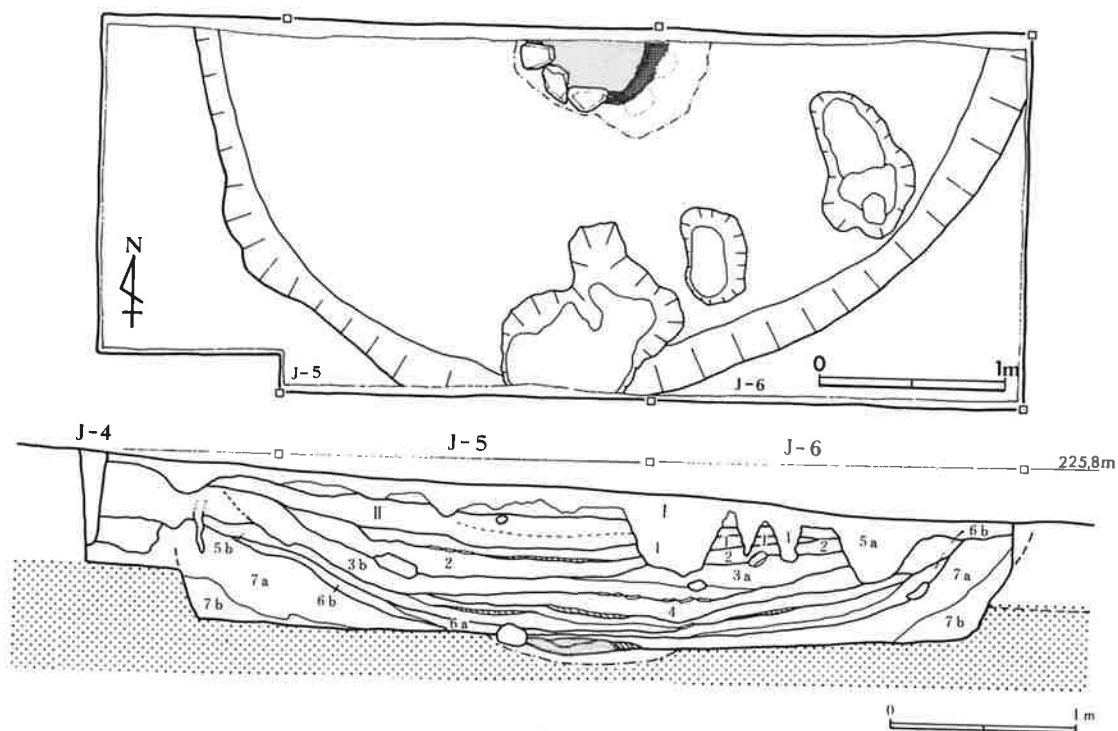
取り痕を確認できた。

住居の埋土は大きく7層に区分した。いくつかの層はさらに細分し、都合11枚の土層とした。

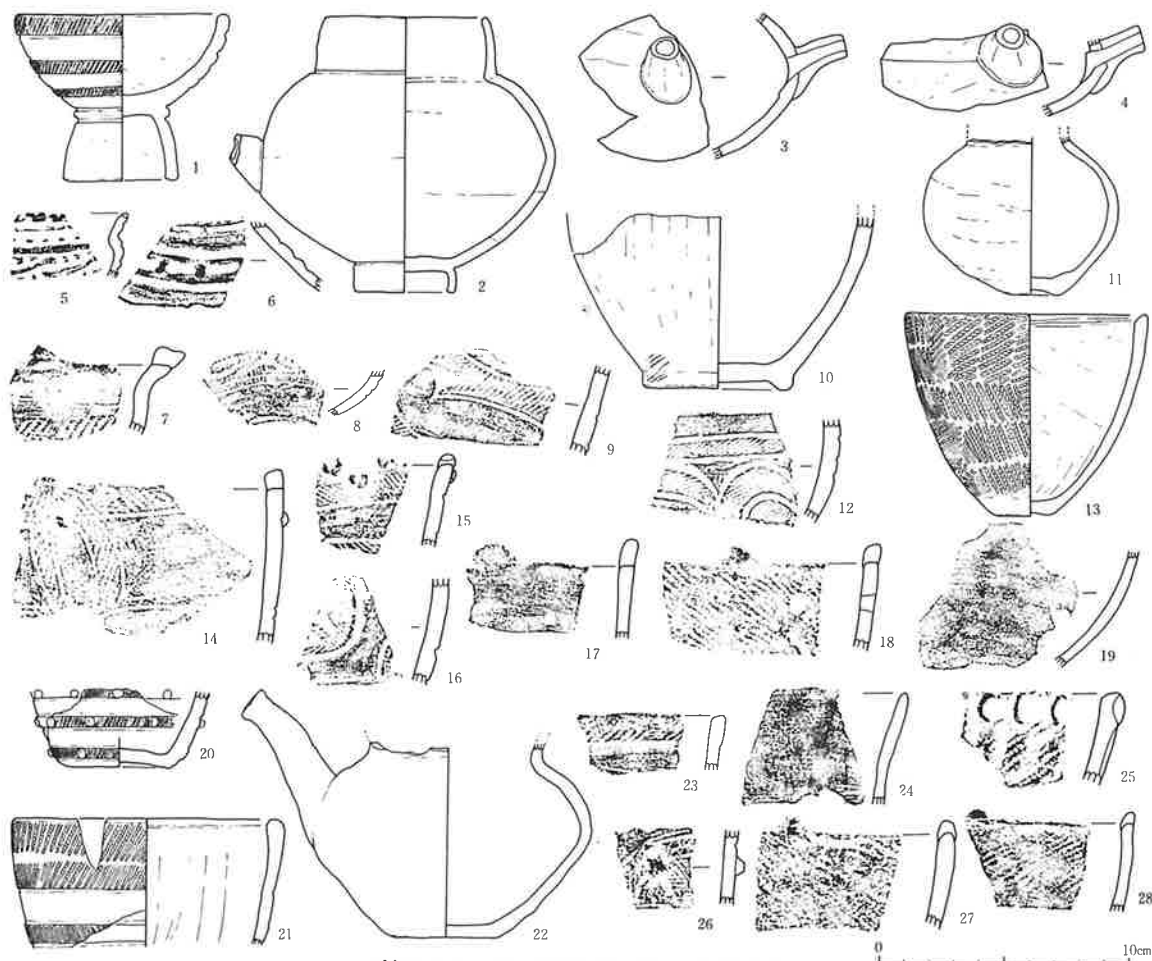
- 1 層(暗褐色土) 灰・焼土ブロックを含む。
- 2 層(暗黒褐色土) 木炭粒を多く含む。
- 3a 層(暗茶褐色土) 炭化物やや少ない。
- 3b 層(暗茶褐色土) 炭化物・焼土ブロックを含む。
- 4 層(暗茶褐色土) 大粒の炭化物を含む。
- 5a 層(暗灰色砂質土)
- 5b 層(灰色砂質土) 白っぽい砂層
- 6a 層(黒色土) 炭化物・焼土ブロックを含む。
- 6b 層(暗茶褐色砂質粘土)
- 7a 層(暗黄褐色砂質粘土) 炭化物を含む。
- 7b 層(暗黄褐色砂質粘土)

これらの土層のうち、7a・7b層は、無遺物層で壁際からの自然堆積土。一部薄く炉の部分まで達する。それより上位の土層は投げ捨てられたもので、上位の層は西側から、下位の層は東側から投棄される傾向にある。

遺物で特別な出土状態を持つものはない。床面

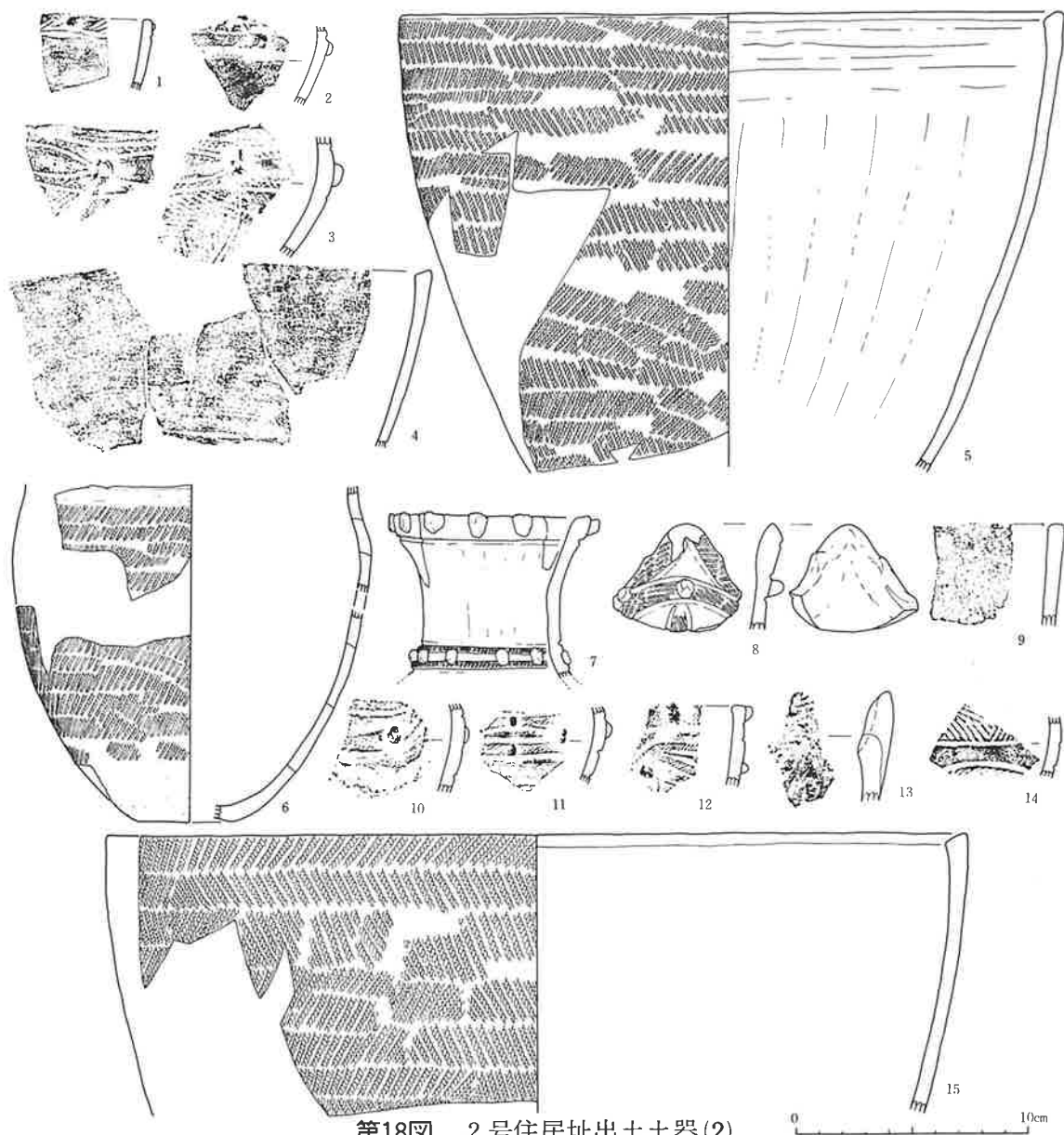


第16図 2号住居址平面・埋土断面図



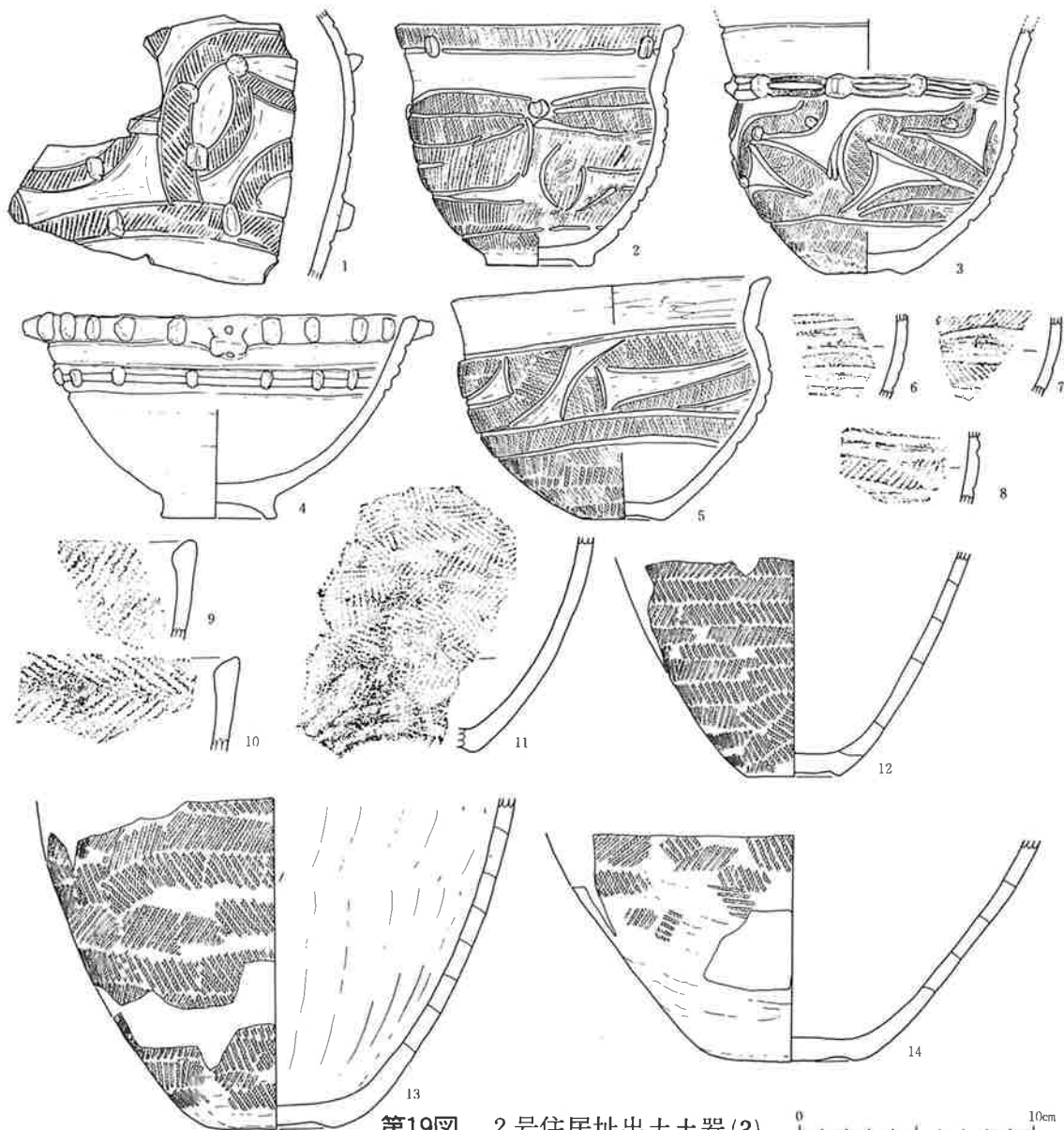
第17図 2号住居址出土土器(1)

番号	グリッド・層位	器形・部位	文 様 の 特 徴 他	内面調査他	写真図版番号
1	J 5	1 高台付鉢	充填状縄文 (L R) → 沈線。ミガキ	ミガキ (ヨコ)	10-1
2	J 6	1 注口	頸部下位に沈線。注口部にスリット。ミガキ	ナデ	10-2
3	J 6	1 注口 胴	ミガキ	ナデ (ヨコ)	10-3
4	J 5	1 注口 胴	ミガキ、胴屈曲部の稜線明確	ナデ (ヨコ)	10-4
5	J 5	1 鉢 口縁	口唇：刻目。羊歯状文。	ナデ (ヨコ)	10-5
6	J 6	1 注口(?) 胴	横位平行線による稜形状。ミガキ	ナデ (ヨコ)	10-6
7	J 5	1 鉢 口縁	縄文 (L R) → ナデ (ヨコ)	ナデ (ヨコ)	10-7
8	J 6	1 下 高台付鉢？ 胴	刻目→削取りによる三叉状入組文	ナデ	10-8
9	J 5	1 深鉢 胴	充填縄文 (L R) → 沈線、削取りによる三叉状入組文	ナデ	10-9
10	J 6	1 深鉢 胴下・底	ナデ (タテ)、一部縄文 (L)	ナデ	10-10
11	J 5	1 壺	ミガキ (ヨコ)	ナデ	10-12
12	J 6	1 鉢 胴	縄文 (L R) → 平行線による帯状文	ナデ	10-10
13	J 5	1 鉢	縄文 (R L)	ナデ	10-11
14	J 6	1 下 鉢 口縁	貼瘤→充填縄文 (R L) → 沈線	スス付着、ミガキ	10-13
15	J 6	1 下 鉢 口縁	充填状縄文 (R L) → 貼瘤、沈線。	ナデ	10-11
16	J 5	1 下 鉢 胴	充填状縄文 (L R) → 入組帯状文	粗いミガキ (ヨコ)	10-14
17	J 5	1 下 鉢 (?) 口縁	ナデ	ミガキ (ヨコ)	10-15
18	J 5	1 下 鉢 口縁	縄文 (L R)。焼成後の補修孔	ナデ	10-16
19	J 5	1 下 壺 (?) 胴	ミガキ	ナデ	10-17
20	J 6	2 鉢 胴下・底	貼瘤→充填状縄文 (L R) → 平行沈線による帯状文	ナデ	10-18
21	J 5	2 壺	充填状縄文 (一部羽状か) (L R・R L) → 沈線	ミガキ (タテ)	10-19
22	J 6	2 注口	ナデ	ナデ	10-19
23	J 6	2 下 壺 口縁	充填状縄文 (L R) → 擦り消しによる帯状表現	ナデ	10-20
24	J 6	2 壺	粗いミガキ (タテ)	ナデ	10-21
25	J 6	2 鉢 口縁	縄文 (L R)、横位の突き起し。胴部にも縦位の凹凸	ナデ (ヨコ)	10-22
26	J 6	2 鉢 胴	貼瘤→充填状縄文 (L) → 沈線	粗いミガキ (ヨコ)	10-23
27	J 6	2 深鉢 口縁	縄文 (L R)	ナデ (ヨコ)	10-24
28	J 6	2 深鉢 (?) 口縁	縄文 (R L)	ナデ	10-25



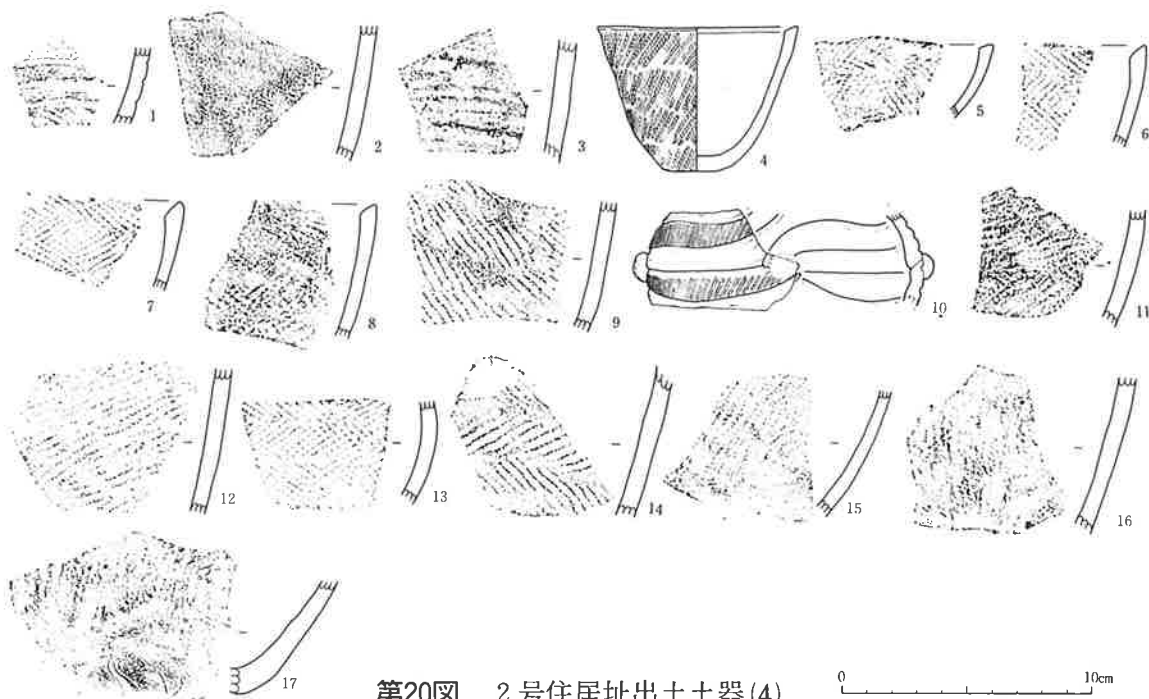
第18図 2号住居址出土土器(2)

番号	グリッド・層位	器形・部位	文様の特徴他	内面調整他	写真図版番号
1	J 5	鉢 口縁	貼瘤→横位沈線→斜位沈線	ナデ(ヨコ)	10-26
2	J 5	鉢(?) 胴	貼瘤→縄文(LR)→横位沈線	ナデ	
3	J 5	鉢(?) 胴	貼瘤→充填状羽状縄文(LR・RL)→沈線(弧状文風?)	ナデ、一部ミガキ	10-27・28
4	J 5	壺(?) 頸	ケズリ(ヨコ)→粗いミガキ(タテ)、一部スス付着	ケズリ、ナデ	10-29
5	J 5	2・3・6 深鉢	羽状縄文(LR・RL)、一部スス付着	ナデ(タテ・ヨコ)	11-1
6	J 5	3 深鉢	縄文(LR)、底部付近ケズリ、口縁部無文帯	ナデ	11-2
7	J 5	4 壺 頸	口：貼瘤→沈線、肩：貼瘤→縄文(LR)→沈線	ナデ	11-3
8	J 5	4 鉢 口縁	貼→充填状縄文(RL)→沈線。入組文	ミガキ	11-4
9	J 6	4 壺 頸	ミガキ(タテ)	ナデ	11-5
10	J 6	4 鉢 胴	充填状縄文(LR)→貼瘤→沈線。入組文	ミガキ	11-6
11	J 5	4 鉢(?) 胴	貼瘤→充填状縄文(L)→沈線。入組帯状文	ミガキ(タテ)	11-7
12	J 6	5 鉢 口縁	貼瘤→充填状縄文(LR)→沈線。入組文	ミガキ	11-8
13	J 6	5 鉢 口縁	充填状縄文(RL)→沈線。突起内面にスリット	ミガキ	11-9
14	J 6	5 鉢(?) 胴	充填状縄文(RL(0段多条))→沈線	ナデ	11-10
15	J 6	4・5 深鉢 口縁	羽状縄文(LR・RL)	ミガキ(ヨコ・タテ)	11-11



第19図 2号住居址出土土器(3)

番号	グリッド・層位	器形・部位	文 様 の 特 徴 他	内面調整他	写真図版番号
1	I 5	5・6 壺 胴	貼瘤→充填縄文(L)→沈線。入組帯状文。	ミガキ、一部赤色粘土付着	11-12
2	J 5	6 鉢	貼瘤→充填縄文(一部羽状)(RL・L)→沈線	ミガキ	11-13
3	J 6	6 鉢 口縁欠損	貼瘤→充填縄文(LR)→沈線。弧状入組文。	ミガキ	11-14
4	J 5	4・6 高台付浅鉢	貼瘤→沈線による削り出し。ミガキ(ヨコ)	ミガキ(タテ)	11-15
5	I 5	6 鉢	充填状縄文(RL・LR)→沈線。無文部ミガキ。入組帯状文。	ミガキ(ヨコ)	11-16
6	J 5	6 鉢? 胴	充填状縄文(L)→沈線。帯状文。	ミガキ(タテ)	11-17
7	J 6	6 鉢? 胴	充填状縄文(LR・RL)	ミガキ	11-18
8	J 5	6 鉢? 胴	充填状縄文(LR)→沈線。帯状文。	ナデ	11-19
9	J 5	6 深鉢 口縁	縄文(LR)	ミガキ(ヨコ)	11-20
10	I 5	6 深鉢 口縁	羽状縄文(RL・LR)。	ミガキ(ヨコ)	11-21
11	I 5	6 深鉢 胴下・底	羽状縄文(RL・LR)。底部付近施文後ケズリ	ミガキ(タテ)	11-22
12	I 5	6 深鉢 胴・底	羽状縄文(RL・LR)。器内外面スス付着。	ミガキ(タテ)	11-23
13	I 5	4・6 深鉢 胴下・底	羽状縄文(RL・LR)。底部付近施文後ケズリ。	ミガキ(タテ)	11-25
14	I 5	6 深鉢 胴下・底	羽状縄文(RL・LR)。底部付近施文後ケズリ→ミガキ。	ミガキ(タテ)	11-24



第20図 2号住居址出土土器(4)

番号	グリッド・層位	器形・部位	文様の特徴他	内面調整他	写真図版番号
1	J 5	7 鉢? 胴	充填状縄文 (LR・RL) → 沈線	ナデ (ヨコ)	
2	J 5	7 深鉢? 胴	ケズリ (タテ) → ナデ (タテ)	ミガキ (タテ)	
3	J 5	7 深鉢? 胴	ケズリ (ヨコ) → 沈線 (?)	ミガキ (ヨコ)	
4	J 5	7 小型鉢	縄文 (LR)	ナデ	11~26
5	J 6	7 浅鉢? □縁	羽状縄文 (L・R)	ミガキ (ヨコ)	
6	J 6	7 深鉢 □縁	羽状縄文 (RL・LR)。	ミガキ (ヨコ)	
7	J 6	7 深鉢 □縁	羽状縄文 (RL・LR)。ミガキ		
8	J 5	7 深鉢 □縁	羽状縄文 (RL・LR)。ミガキ		
9	J 5	7 深鉢 胴	縄文 (RL)	ミガキ (タテ)	
10	J 6	7・8 注口? 胴	貼瘤 (四単位か) → 充填縄文 (LR) → 沈線。無文部ミガキ	ナデ	
11	J 6	8 深鉢 胴	縄文 (LR)	ミガキ (タテ)	
12	J 6	8 深鉢 胴	縄文 (LR)	ナデ	
13	J 5	8 壺? 胴	羽状縄文 (RL・LR)。	ナデ	
14	J 6	8 深鉢 胴	羽状縄文 (LR・RL)。	ミガキ	
15	J 6	8 深鉢 胴下	縄文 (LR)。	ミガキ	
16	J 6	8 深鉢 胴	縄文 (LL)。17と同一個体。	ミガキ (タテ)	
17	J 5	8 深鉢 胴下	縄文 (LL)。16と同一個体。	ミガキ (タテ)	

出土の資料はないため、確実な時期決定資料とはならないが、埋土4～6層出土資料から、後期末葉（十腰内V式期）に比定しておきたい。

2号住居西側に位置する焼土投げ捨て遺構とは、土層の堆積関係では明確さを欠く。しかし、焼土投げ捨て遺構形成時（大洞BC～C₁式期）にはほぼ埋まりきっていたものと思われる。

埋土出土土器は、層位毎に取りあげた。しかし大形の粗製深鉢や、鉢形土器には、数層にわたって出土し、接合した例もある。

1層出土土器（第17図1～19）は、無文の注口土器（2～4）が出土しているが、注口部の傾きがあまりなく、大洞B式期に比定できよう。また同BC式の鉢（5）や注口土器の頸部（6）も出土している。その他、三叉状の切り込みを持つ弧状入組文土器（9）等もある。しかし、貼瘤や平行状、入組状モチーフからなる土器も出土していることから、この層は後期末葉から晩期前葉にかけて形成されたものと考えられる。17・18は、口縁に半円状の突起を持つが、これらは14の口縁と共通し、後期末葉に位置付けられよう。

2層（第17図20～28）以下の層からは、晩期に属する例は出土していない。22も注口部が長く、しかも急傾斜をとり、2～4とは異なる。25は、口縁に刺突列、その下位に縦位の凹凸を付ける。この凹凸は縄文施文前に指頭状のもので行われている。刺突列を持つものは、遺構外出土資料（第28図10・12～14）にあるが、それとは異なる。類例は、軽米町馬場野II遺跡（工藤他 1986）第VII群第17類土器等があげられる。

3層出土資料中に頸部に無文帯を持つ深鉢がある（第18図6）。この時期には稀な例であるが、頸部がくびれる深鉢は、軽米町大日向遺跡（田鎖・岩淵 1986）1I—3住居床面出土資料にみられる。

第19図1は大形の壺の胴部であろう。貼瘤は縄文施文以前に付けられる。他の例もそうであるが、貼瘤は縄文施文（多くは充填縄文である）以前に付けられることが多い。おそらく、下書き、文様割付終了後に施し、その後縄文→沈線→ミガキという手法が一般的であったと思われる。同図2は、RLと無節Lの2種の原体を用い、粗雑ながら羽

状縄文の表現をしている。無節の縄文は他にもいくつか見られるが、多いという程ではない。

同図4の高台付浅鉢は、口縁を四区画する突起を付け、その間に貼瘤を4～5個充填して行く。突起の対応する一対には、上下の穿孔があるが、底部方向に相対する穿孔等はなく、吊り下げとは考えにくい。同図5には貼瘤はないものの、基本的なモチーフは、同図2・3に類似する。すなわち、木葉状入組文が展開する胴部文様が、その文様帯を区画する沈線が上昇したため、下半を割愛せざるを得なくなり、幾何学状の無文部が目立つモチーフとなったのである。同図6～8は、細片で、全体のモチーフは把握できない。

第20図には、埋土下層の資料を掲げた。精製土器の良好な資料は少ない。10は、破片からの復原実測図である。胴部は貼瘤によって四区画される。器形から注口土器もしくは壺形土器と思われる。文様モチーフははっきりしないが、左下りの弧状入組文になろう。同図16・17は同一個体の破片。直前段反の撚りのため、乱れた縄文となる。

粗製土器は、かなり多い。ほとんどが二種の原体による羽状縄文が施される。しかし、あまり整然としたものはなく、胴部以下、特に胴下半部は乱れ、回転方向もまちまちであることが多い。結束の羽状縄文は見られない。

特徴的なのは、口縁断面と内面調整である。口縁は平縁で、特殊なものを除き（第17図17・18・27・28）、突起等は付かない。断面はほぼ直角に立ち上りながら、内面が肥厚し、内剥ぎ状の形態を示す。内剥ぎの口縁断面は精製土器にも多い。これは、ほとんどケズリとミガキによって成されるが、中には粘土紐を貼付けた例（第19図9）もある。

内面調整は、このケズリとミガキが入念に行われるのを特徴とする。特にミガキは顕著で、口縁部は横位に、胴～底部は縦位に行われるのが一般的である。むしろ精製土器より入念さにおいては勝る。また、内面が黒色を呈することが多い点も指摘できる。ミガキと相俟って、光沢を帯びるものも少なくない。意図的に“黒色処理”を施した可能性も充分考えられる。（熊谷常正）

3. 土 壌

〔遺構の確認〕 J-13、14グリットにかけて検出。西から東側にゆるく傾斜しているため、西側の壁は深く、東側は浅い。

〔平面形・規模〕 ほぼ円形に近く、検出面では東西130cm、南北123cmで、底形で115cm前後である。土壌の東側に大小10個の自然礫を検出した。遺構となるかどうか不明であるが、ほぼ一定のレベルで検出されている。土地所有者、岩山憲政氏によれば、このグリット付近は耕作中にたびたび人頭大～握拳大の礫にぶつかるので、その都度取り上げて除去した、という。これらの礫が仮に土壌に伴う配石であったとしても、破壊されている可能性が高い。

〔床面・壁〕 地山を掘り込んで、底面はほぼ平にしてあるが、特段階み堅めた痕跡や、小ピットなどは認められない。壁は全体的にほぼ垂直に立ち上っており、最も深いところで36cm、浅いところで15cmをはかる。西側の壁はややゆるくなっている。

〔埋土〕 土壌の検出されたグリットの層序は次のとおりである。

I 層；表土

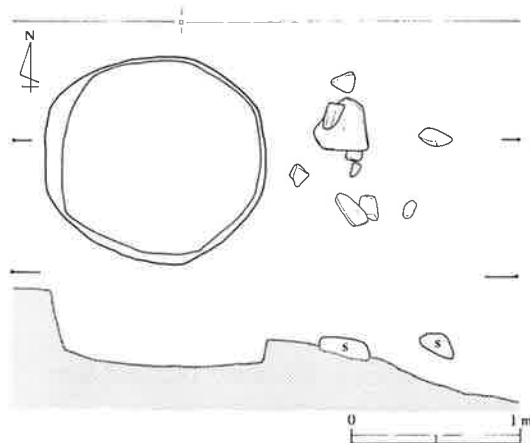
II a層；黒色土、炭化物を多少含む。遺物は少なく小破片が多い。貝層は全く認められない。
(以下の層も同じ)

II b層；茶褐色土、遺物が最も多い層で、特に下層面(IIc層直上)に張りつくような形で出土している。土壌の上面を埋めている。

II c層；褐色土、焼土の小ブロックを含んでいるが、遺物は少ない。土壌の底部及び西側の壁の一部を覆っているほか、土壌の東側の地山に続いており、礫はこの層の上面にある。

III 層；地山

〔遺物〕 土壌内の出土遺物からは、この遺構の性格が解明できるようなものは検出されていない。石器、石製品(石鏃、尖頭器、石斧、凹石、岩版片)が数点出土しているが、これについては別項で記述している。遺物の主体を占めるのは土器である。小破片が多く、全体を復原できるのは小型



の皿、鉢などごく少数である。

II a層出土の土器；晩期中葉の大洞C₁、C₂式土器が主体を占めている。図示した壺、浅鉢、深鉢の外に皿なども出土しているが、粗製の深鉢片が最も多い。精製の鉢あるいは浅鉢でも器面の内外に炭化物の付着する例が多い。

II b層出土の土器；II a層と同様、晩期中葉の土器が主体を占めるが、大洞C₁式の割合が高い。壺、浅鉢、皿、深鉢が多く、注口その他の特殊な器種は認められない。小形壺(22図-13)を除くと精製土器でも胎土に荒い粒子を含んでいる。

II c層出土の土器；晩期前半と後期後葉の土器が混りあっているが、数量的には晩期が多い。II c層内での両者の上下関係は確認できなかった。当遺跡では出土数の比較的小さい大洞B式期の土器が少量含まれている。22図19は正面に大形の突起を持ち脚の付く台付浅鉢に、同20は注口土器となろう。後期の土器はすべて深鉢である。

この土壌の層位毎の出土遺物は、上層が新しく下層になるにつれて古くなっているが、II c層中には晩期中葉の土器(22図24他)も含まれており、一部に層の動きが認められる。土壌がつけられた時期はII c層の遺物からして、後期後葉～晩期初頭の時間内と考えられる。性格については、墓壇、配石遺構などがあげられるが、それを証拠づける積極的な資料はなく、現段階では、不明と言わざるを得ない。
(小田野哲憲)



第22図 土壌出土土器

番号	グリッド・層位	器形・部位	文 様 の 特 徴 他	内面調整他	写真図版番号
1	J-13	II a 壺 肩	平行沈線、雲形文、充填縄文 (LR)	ミガキ	12-1
2	J-13	II a 深鉢	口：突起と刻目。工字文、縄文 (LR)、内面炭化物	ミガキ (ヨコ)	12-2
3	J-13	II a 深鉢	口：小波状、頸：平行沈線	ミガキ	12-3
4	J-14	II a 鉢	黒色無文、口縁部ヨコナデ	指圧痕	12-4
5	J-14	II a 深鉢	口：刺突、頸：平行沈線、縄文 (RL)	ミガキ (ヨコ)	12-5
6	J-14	II b 壺	口唇部の粘土紐次落、縄文 (LR)	ミガキとナデ	
7	J-14	II b 壺 胴	磨消縄文 (RL)、連続雲形文(?)	ミガキ (ヨコ)	12-6
8	J-14	II b 皿	口：刺突による小波状、胎土に石粒を多く含む。無文。	ミガキ (ヨコ)	
9	J-14	II b 皿	口：削出しによる突起。内外面丹塗。	ミガキ (タテ)	12-10
10	J-14	II b 鉢	頸部連続のA突起、縄文 (LR)	ミガキ (ヨコ)	12-7
11	J-14	II b 鉢	口：突起 (A突起) 頸部B突起剥落、胴部磨消縄文 (RL)	ミガキ (ヨコ)	12-8
12	J-14	II b 鉢	口：刻目、突起、工字文、内面炭化物	ミガキ (ヨコ)	12-11
13	J-14	II b 小形鉢	山形突起、連続する工字文、沈線のみに丹塗	ミガキ (ヨコ)	12-9
14	J-14	II b 深鉢	口：押圧による波状、平行沈線及び列点文	ミガキ (ヨコ)	12-12
15	J-14	II b 深鉢	口：刻目、頸：平行沈線、縄文 (LR)、内面炭化物	ミガキ (ヨコ)	12-13
16	J-14	II b 鉢	口：刻目、頸：貼付突起4個、縄文 (LR)、内面炭化物	ミガキ (ヨコ)	12-14
17	J-14	II b 深鉢	口：刻目、頸部ヨコナデ、縄文 (LR)	ミガキ (ヨコ)	12-15
18	J-14	II c 広口壺	無文、沈線、ヨコミガキ	ミガキ (ヨコ)	12-17
19	J-14	II c 注口(?)	口：突起、三叉文、菱形文、全面ミガキ	ミガキ (ヨコ)	12-16
20	J-14	II c 台付鉢(?)	口：突起、三叉文、浅い平行沈線	ミガキ (ヨコ)	12-18
21	J-14	II c 鉢	山形口縁、頸部に工字文、縄文 (RL)、内面炭化物	ミガキ (ヨコ)	12-19
22	J-14II b~II c	鉢 胴	21と同一個体か。胴部工字文、内面炭化物	ミガキ (ヨコ)	12-20
23	J-14II b~II c	深鉢	口：楕円形の押圧、沈線、ヘラミガキ、胎土に金雲母含	ミガキ (ヨコ)	12-21
24	J-14	II c 鉢	頸：B突起、胴部入組文(?)、縄文 (LR)	ミガキ (タテ・ヨコ)	12-22
25	J-14II b~II c	深鉢	口唇：縄文 (LR) 頸部ミガキ	ミガキ (ヨコ)	12-23
26	J-14	II c 深鉢	口：縄文 (LR) 頸部ミガキ	ミガキ (ヨコ)	12-24
27	J-14	II c 深鉢	羽状縄文 (LR・RL)、内側炭化物	ミガキ (ヨコ)	12-25

4. 焼土投げ捨て遺構

〔遺構の確認〕 I-2、I-3、J-2、J-3グリットにかけて検出。焼土の拡がりにはさらにH-2、H-3グリットに続いており、全体はさらに大きくなるが、規模は不明である。

〔平面形・規模〕 焼土ブロック（第23図網部分、径50cm前後、厚さ5～10cm）が分布する一帯は南北約300cm、東西250cmの不正楕円形の堅く踏み固められた貼り床状の遺構（図の一点破線、以下貼り床と略す）があり、焼土はその上に捨てられている。遺構の北側には貼り床と焼土をきっているより新しい時期のピットがある。中央及び両側にある4個の小ピットは、この遺構に伴うもので、深さは20cm前後である。貼り床の上面及びその周囲は赤い焼土だけではなく、炭化物・灰・骨・貝などを含む土が堆積している。

〔埋土〕 現地形は沢に向かってゆるく傾斜しており、埋土も西から東へと傾斜している。I、II、II下層は他のグリットと同じであるが、それ以外は異なっている。連続する層はあまりなく、最も遺物の多いII層（黄褐色で多くの炭化物を含む）とII下層（茶褐色で多くの炭化物を含む）の間に、粘土を多量に含むブロック、遺物を全く含まない褐色土のブロック、貝・魚骨片及び炭化物・灰を含むレンズ状の層（厚さ5cm、巾200cm）、炭化物が特に多い異色土、水平あるいはレンズ状の焼土層などが複雑に入りこんでいる。貼り床はII下層の下にあり、さらにその下層は地山となる。なお、II層とII下層は、間層の無い北側では同一層となっている。貝や骨片も僅かに含まれてはいるが、堅穴住居の埋土に見られるような層状ではなく、層として把握するほどのものではない。

これらの焼土層あるいは炭化物・灰層から出土する遺物は二次的な加熱を受けた痕跡はなく、

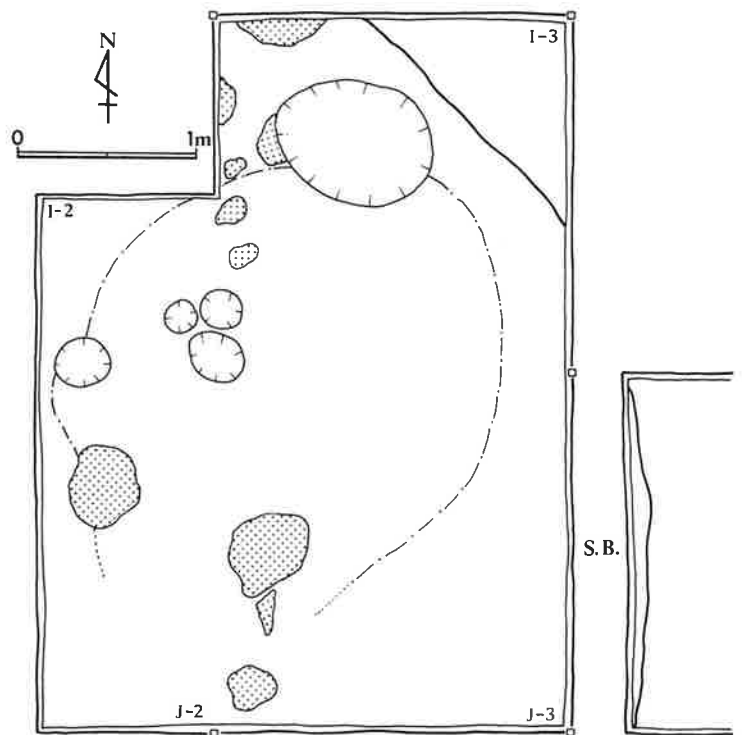
人為的にこの場所に廃棄されたことを示している。県内でのこのような遺構は千厩町南小梨蛇王遺跡（註1）で最初に注目され、その後北上市九年橋遺跡（註2）などで類例が発見されている。貼り床状の面と、これに伴う小ピットの関連については不明であるが、ピット自体を炉床とした痕跡はない。また炉石となるような礫も検出されていないし、貼り床そのものも熱は受けていない。焼土の生成場所と廃棄場所との有機的な関連については捉えることはできなかったが、貼り床状遺構と焼土ブロックが無関係とは考えられず、両者には何等かの関連があるものと推定される。

註1. 熊谷常正 1977「南小梨蛇王遺跡」

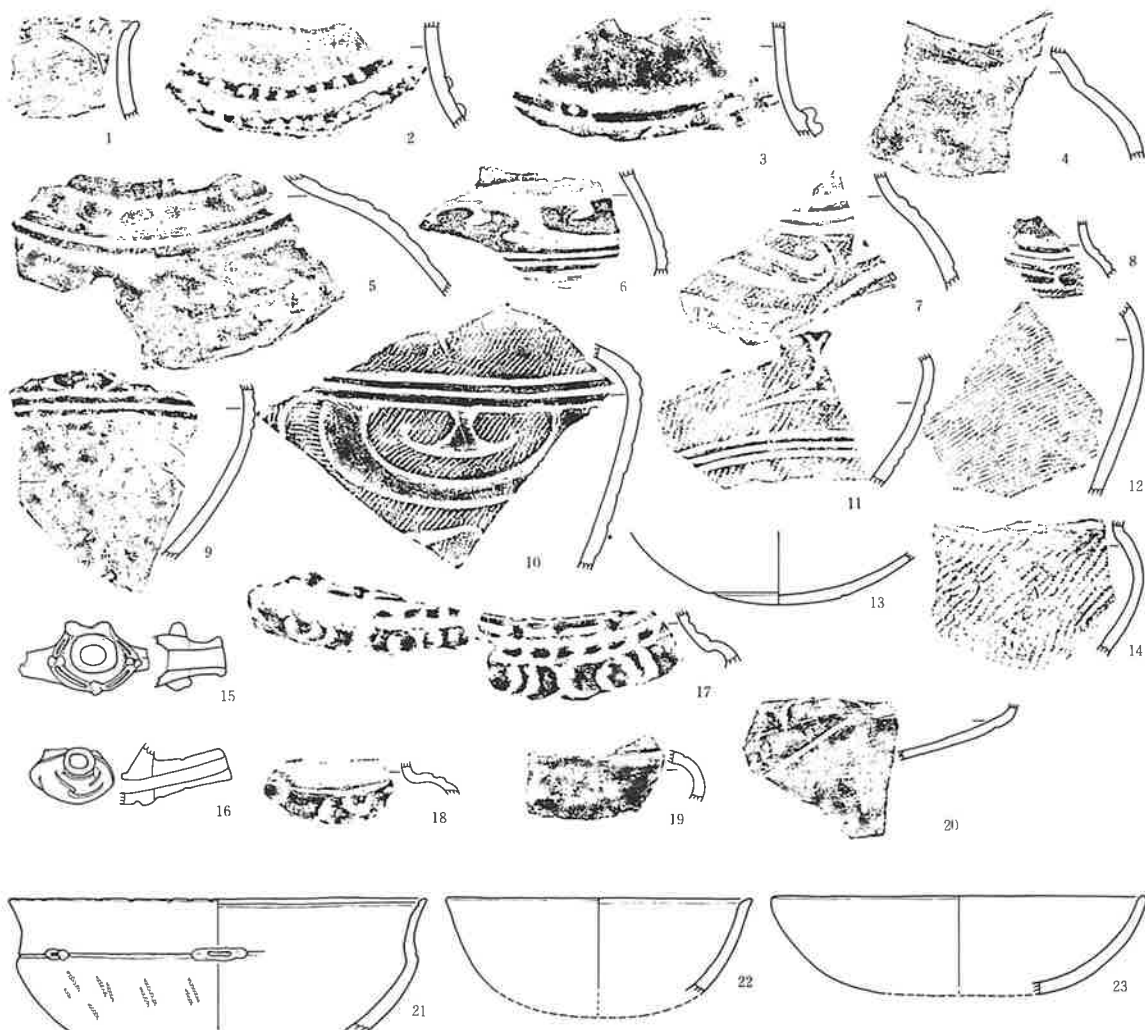
千厩町文化財調査報告1

註2. 藤村東男外 1984「九年橋遺跡第7次調査報告書」北上市文化財調査報告35

〔土器〕 遺構の上層から発見された遺物は、すべて縄文時代晩期、大洞B-C式・C₁式期のも

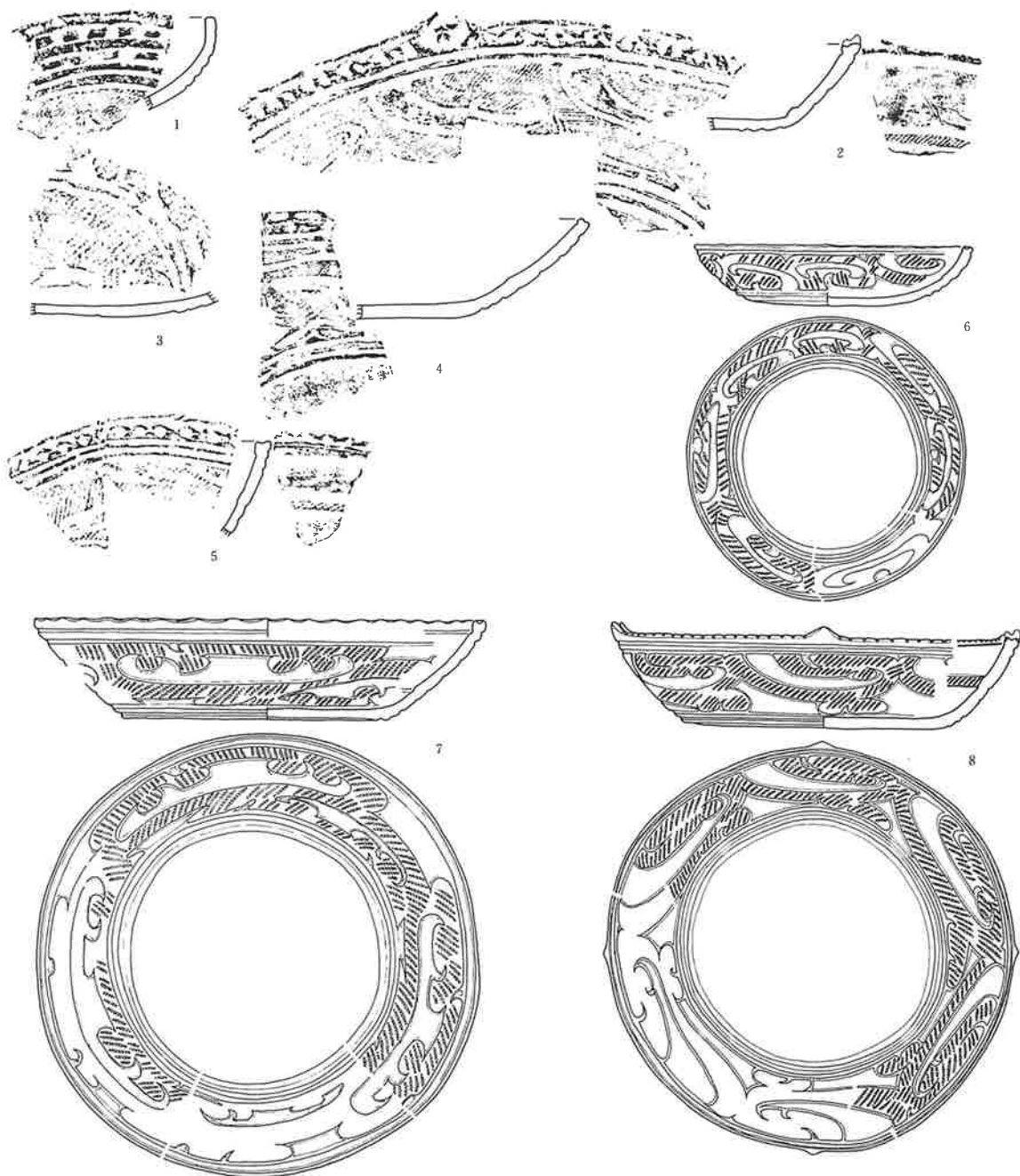


第23図 焼土投げ捨て遺構平面図



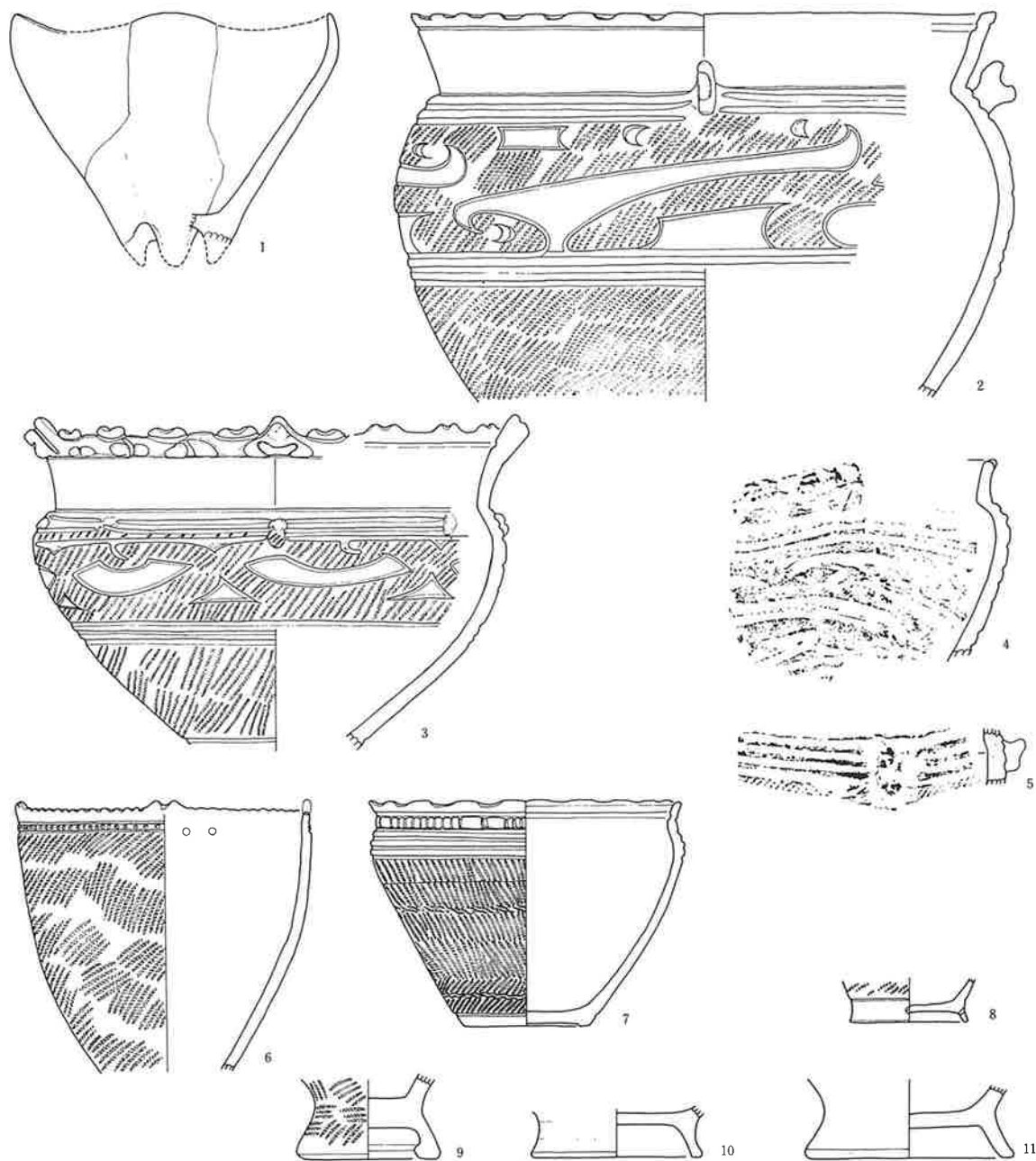
第24図 焼土投げ捨て遺構出土土器(1)

番号	グリッド・層位	器形・部位	文 様 の 特 徴 他	内面調整他	写真図版番号
1	J-3	II 壺	口：平縁無文、ミガキ	ミガキ (ヨコ)	14-1
2	I-3	II 壺	頸：B突起、外側全面、内側一部丹塗、ミガキ	ミガキ (ヨコ)	14-2
3	I-3	II 壺	頸：粘土紐貼付による突起文、ミガキ	ミガキ (ヨコ)	14-3
4	I-3	II 壺 頸・肩	無文、ヘラによる研磨	ナデ (ヨコ)	
5	J-3	II 壺	肩 C字文、平行沈線、入組三叉、全面丹塗、胎土金雲母含。	ナデ (ヨコ)	14-6
6	J-2	II 壺	胴 黒色研磨、全面丹塗の痕跡、雲形文(?)	ナデ (ヨコ)	
7	J-3	II 壺 頸・肩	雲形文、磨消縄文 (LR)、ミガキ	ナデ	14-5
8	I-3	II下 壺	頸・肩 平行沈線、磨消縄文 (LR)、外側全面内面頸部丹塗	指圧痕	
9	J-3	II 壺	胴 入組三叉文(?)ヘラミガキ、内外面に丹塗の痕跡	ナデ (ヨコ)	
10	I-3	壁 壺 肩・胴	磨消縄文 (LR) 外側丹塗の痕跡、内側肩まで丹塗	ミガキ (ヨコ)	14-4
11	I-3	II 壺	磨消縄文 (LR) 雲形文(?)	ミガキ (タテ)	
12	J-3	II 壺	胴 縄文 (LR) 胎土に金雲母含	ミガキ (ヨコ)	
13	J-3	II 壺	底 無文、ヘラミガキ、内外面とも丹塗	ミガキ (タテ)	
14	I-3	II下 壺	頸部無文、縄文 (LR)	ナデ (ヨコ)	
15	J-3	II 注口	注口 ミガキ、注口接合部	ナデ	14-7
16	K-4	I 注口	注口 注：入組状文、ミガキ	ナデ (ヨコ)	
17	J-3	II 注口 頸・肩	頸：結節状沈線、肩：「の」字文、黒色研磨	ナデ (ヨコ)	14-8
18	I-3	II 注口	肩 三叉文あるいは入組文、ヘラミガキ	ナデ (ヨコ)	14-11
19	J-3	II 注口	肩 沈線、黒色研磨	ナデ (ヨコ)	14-9
20	I-3	II 注口	底 入組文、黒色研磨、ヘラヨコミガキ	ナデ (ヨコ)	14-10
21	J-3	II 浅鉢	頸部に突起、体部ゆるい縄文 (RL)	ミガキ (ヨコ)	14-12
22	I-3	II 浅鉢	無文、ミガキ	ミガキ (ヨコ)	
23	J-3	II 浅鉢	無文、ミガキ	ミガキ (ヨコ)	



第25図 焼土投げ捨て遺構(2)

番号	グリッド・層位	器形・部位	文 様 の 特 徴 他	内面調整他	写真図版番号
1	J-3	II 皿	平行沈線間に雑な連珠文又は羊歯状文	ミガキ (ヨコ)	
2	J-3	II 皿	雲形文、充填縄文 (LR)、内側に原体 (LR) の突帯	ミガキ (ヨコ)	14-13
3	I-3	II 皿 底	磨消縄文 (LR)、雲形文 (?)	ミガキ (ヨコ)	
4	J-3	II 皿	雲形文 (LR)、底；ヘラミガキ	ミガキ (ヨコ)	
5	I-3	II 皿	口；押圧による波状、雲形文 (LR) 内面縄文のある突帯	ミガキ	
6	I-3	II下 皿	口唇部連続刺突文、雲形文 (LR)、外面丹塗の痕跡	ミガキ (ヨコ)	14-15 a・b
7	TP 3	皿	口唇部連続刺突文、雲形文 (LR)	ミガキ (ヨコ)	14-14 a・b
8	J-3	II 皿	雲形文、充填縄文 (LR)、内側縄文 (LR) のある突帯	ミガキ (ヨコ)	14-16 a・b



第26図 焼土投げ捨て遺構(3)

番号	グリッド・層位	器形・部位	文 様 の 特 徴 他	内面調整他	写真図版番号
1	J-3	II 脚付鉢	三脚付(?), 内外面ともヘラミガキ	ミガキ (タテ)	15-1
2	J-3	II下 (台付) 鉢	口縁削り出し、頸部B突起、上半部磨消 (LR)、炭化物	ミガキ (ヨコ)	15-2
3	I-3	II下 台付鉢	口: A、B突起一周、三叉文他、内外面炭化物	ミガキ (ヨコ)	15-4
4	J-3	II (台付) 鉢	口: B突起、胴: 三叉文、入組文、縄文 (LR) 内側炭化物	ミガキ (ヨコ)	
5	I-3	II 鉢 胴	B突起、列点文、磨消縄文 (LR) 内外炭化物	ミガキ	
6	J-3	II 鉢	口: 刻目、頸: 列点 (刺突) 文、縄文 (LR) 補修孔2	ナデ	15-3
7	J-3	II 鉢	口: 波状、頸: 刻目、B突起、二段にわたる綾絡文 (RL)	ミガキ (タテ・ヨコ)	15-5
8	TP5	台付鉢 脚	脚に一孔、沈線体部縄文 (LR)	底に指圧痕	15-6
9	J-3	II 台付鉢 脚	縄文 (LR)、脚の内側へら削りで調整	ナデ (ヨコ)	15-7
10	J-3	II 台付鉢 脚	無文、へらミガキ	ナデ (ヨコ)	15-8
11	J-3	II 台付鉢 脚	無文、へらミガキ	ミガキ (ヨコ)	15-9



第27図 焼土投げ捨て遺構(4)

番号	グリッド・層位	器形・部位	文 様 の 特 徴 他	内面調整他	写真図版番号
1	I-3	II 浅鉢	平行沈線磨消、縄文 (RL)、胎土に雲母。	ミガキ	16-20
2	I-3	II 浅鉢	口；三叉文+横の刺突文、縄文 (LR)、内外面丹塗。	ミガキ (ヨコ)	16-21
3	I-3	II 浅鉢	胴；雲形文、充填縄文 (LR)	ミガキ (タテ)	16-22
4	I-3	II 浅鉢	胴 充填縄文 (LR) の部分のみ丹塗、磨消部ミガキ	ミガキ (タテ)	16-23
5	J-3	II 浅鉢	胴；K字文 (雲形文)、縄文 (RL)	ミガキ (ヨコ)	16-24
6	I-3	II 浅鉢	底 ヘラミガキ、沈線。	ミガキ	16-25
7	I-3	II 浅鉢	ヘラミガキ (ヨコ)	ミガキ (ヨコ)	
8	J-3	II下 高坏	脚 舟形状の坏部となる。円と半月の透し4と5個、縄文 (LR)	ミガキ (裾部)	16-26
9	I-3	II 鉢	頸；平行沈線、肩に突起、磨消縄文 (LR)、内面炭化物	ミガキ (ヨコ)	16-27
10	I-3	II 鉢	口；突起、肩に羊歯状文、胴磨消縄文 (LR)	ミガキ (ヨコ)	16-28
11	J-3	II 鉢	肩；平行沈線間に連続刺突、縄文 (RL)、内面炭化物。	ミガキ (ヨコ)	16-29
12	I-3	II 小形鉢	口；山形突起、頸；タテの刻目、縄文 (RL)	ミガキ (タテ)	16-30
13	I-3	II 小形鉢	口；山形突起、頸；平行沈線、縄文 (LR)、内面丹塗	ミガキ (ヨコ)	16-31
14	I-3	II 深鉢	口；山形突起、削り出しによる2個1対の突起、内面炭化物	ミガキ (ヨコ)	16-32
15	I-3	II 深鉢	頸；平行沈線間に刻目、縄文 (LR)、内外面炭化物	ミガキ (タテ)	16-33
16	J-2	II 深鉢	口；刻目、全面縄文 (RL) 施文後に平行沈線、内面炭化物	ミガキ (ヨコ)	16-34
17	I-3	II 深鉢	口；刻目、縄文 (RL)、内外面炭化物	ミガキ (ヨコ)	16-35
18	I-3	II 深鉢	口；突起、頸部無文胴部燃糸文、外面炭化物	ミガキ (ヨコ)	16-36
19	J-2	II 深鉢	口；平縁、平行沈線、縄文 (RL)	ミガキ (ヨコ)	16-37
20	J-3	II 深鉢	口；平縁、平行沈線、縄文 (LR)、外面炭化物	ミガキ (ヨコ)	16-38
21	I-3	II 深鉢	口；平縁、縄文 (LR)	ミガキ	16-39

のである。土器はⅠ層、Ⅱ層、Ⅱ下層及び間層にある焼土、炭化物層などから検出されたが、B-C式とC₁式土器の出土状態に差異は認められなかった。量的にはC₁式がまさっている。

壺形土器(第24図1～14、写真図版14-1～6)全体量に占める割合は少ない。有文精製のものが多く、体部縄文のみの壺は2点のみである(12・14)。胴部まで有文の多くは胎土に金雲母を含み、赤彩されるものが多い。口頸部あるいは肩部無文の例(1・4)は大洞B-C式でも古い時期あるいは大洞B式に含まれる可能性がある。

注口土器(第24図15～20、写真図版14-7～11)注口部分2点、その他の部位4点のみで極めて少量の出土である。いずれも大洞B-C式に含まれ、C₁式にいたる例は無い。すべて丁寧に黒色研磨されており、赤色彩色は認められない。注口部の接合部分がそのまま剥落したもの(15)と、接合部以外が破損したもの(16)とがある。

浅鉢形土器(第24図21～23、第27図1～7、写真図版14-12、16-20～25)

無文及びそれに近い4点を図上復原したが、いずれも破片である。有文の例も破片が多く、文様全体を把握できないが、磨消(充填)縄文を主とする文様構成が多くを占めている。黒色研磨された例(第27図-6)は底部が丸く、埴形土器に近い。

高坏形土器(第27図-8、写真図版16-26)1例、脚部のみ出土。浅鉢とした資料の中に坏部が含まれている可能性もある。脚部と坏部の剥離面は楕円形をしており、坏部は舟形を呈していたものと推定される。脚部裾は大洞B-C式に多い円形と半月形の透し文様がめぐる。

皿形土器(第25図1～8、写真図版14-13～16)比較的全体を知り得る資料が多い。図示した以外にも出土しており、壺などよりは量が多い。羊歯状文を施文する1例(1)を除いて外は磨消あるいは充填縄文を施文している。底部はほとんど平底であるが1例やや丸みをおびるものがある(6)。この器種で特徴的なことは、器内面に幅5mm前後の縄文帯が一条めぐることである。帯は粘さ紐の貼り付けではなく、上と下に浅く沈線をひいて盛り上げている。同様の土器は大船渡市大洞

貝塚の大形皿(註1)の類例はあるが、当遺跡のやや北にある久慈市大芦遺跡(面代他 1985)や県北部の二戸市雨滝遺跡(芹沢 1960)、一戸町蒔前遺跡(高田他 1986)など、多量の皿形土器が出土している遺跡でも類例は知られていない。三陸海岸北部では、わずかに八戸市是川遺跡(保坂 1972)で1例報告されているのみである(註2)。是川例は(8)と同様、口縁部に4個の山形突起と小波状がめぐり、体部は充填縄文である(2)。も器形、文様とも近似しており、あるいはこの時期(大洞C₁式)の、この器形(4個の突起、小波状、口頸が直立し、底径が大きい)に特徴的な文様となっているかも知れない。

台(脚)付鉢形土器(第26図1～5、8～11、写真図版15-1・2・4・6～9)1は三脚付鉢は破片からの復元である。脚と脚との間隔が狭く四脚とするには無理があるので三脚として復原した。波状口縁の頂部と貼り付けの脚部は相応する。(2～5)は他の遺跡の類例から台付鉢とした。いずれも器面の内外に炭化物、煤が付着している。脚部(8～11)は必ずしも煮沸用に付属するものとは限らない。穿孔のあるもの(8)貼付け文のあるもの(写真図版14-10)など様々である。

鉢形土器(第26図6・7、第27図9～13、写真図版15-3・5、16-27～31)

体部に文様があり、頸部のくびれる例(第27図9～11)は炭化物が付着しており、台付となる可能性もある。その外の鉢は炭化物の付着はなく、丹彩の例もある。

深鉢形土器(第27図14～21、写真図版16-32～39)最も多量に出土しており、その代表的な器形、文様をもつものを集めた。地文のLR、RLの外に撚糸文が1点ある(18)。

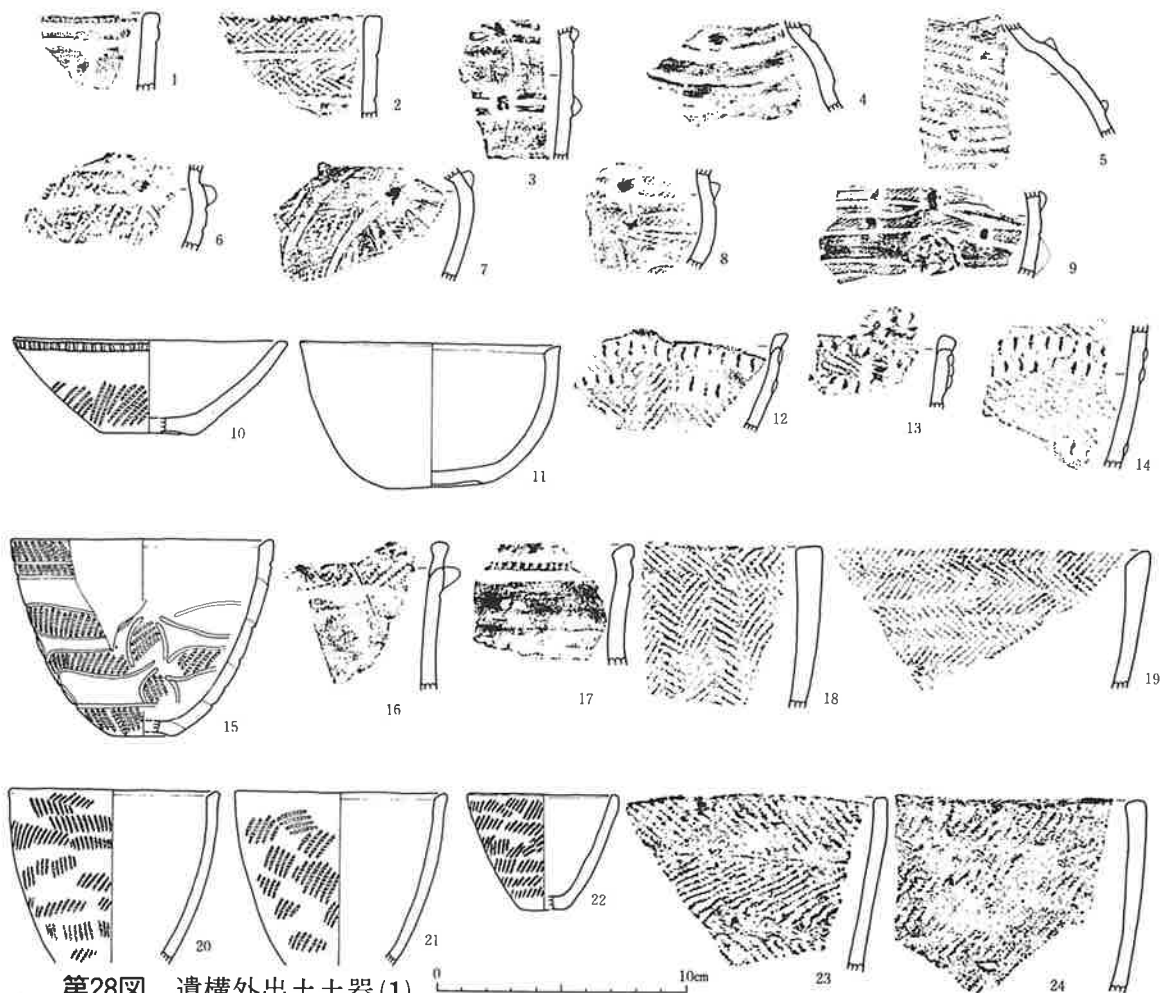
以上、出土土器の概略であるが器種的にはB-C式に特徴的な片口注口やピーカー状の鉢などの器形は見られない。縄文はLRがほとんどで、RLは少なく、撚糸文はさらに少ない。

(小田野哲憲)

註1. 執筆者の一人、熊谷学芸員の採集による。

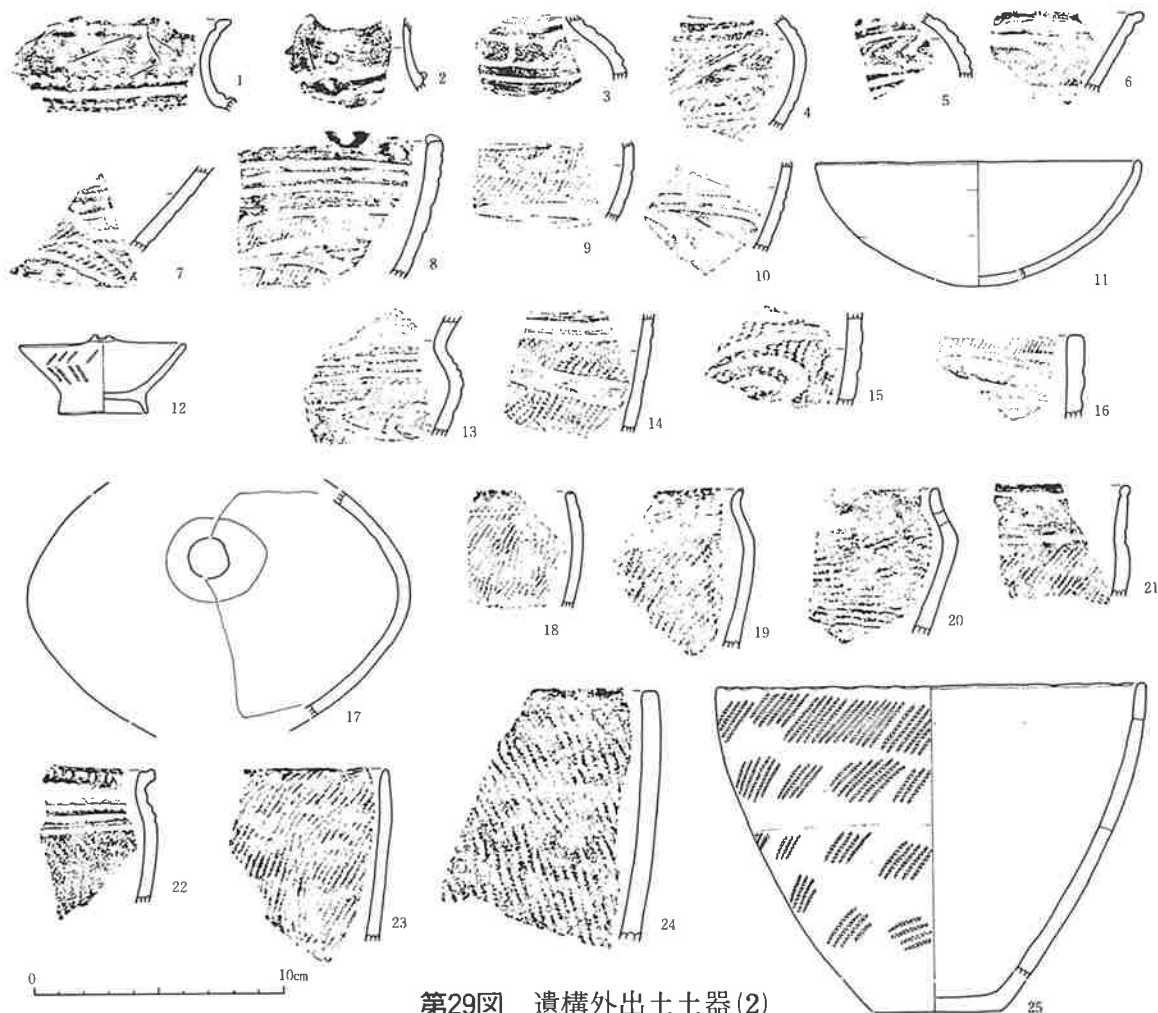
当館にて保管

註2. 図版は外形のみで内面はない。解説文中で触れている。



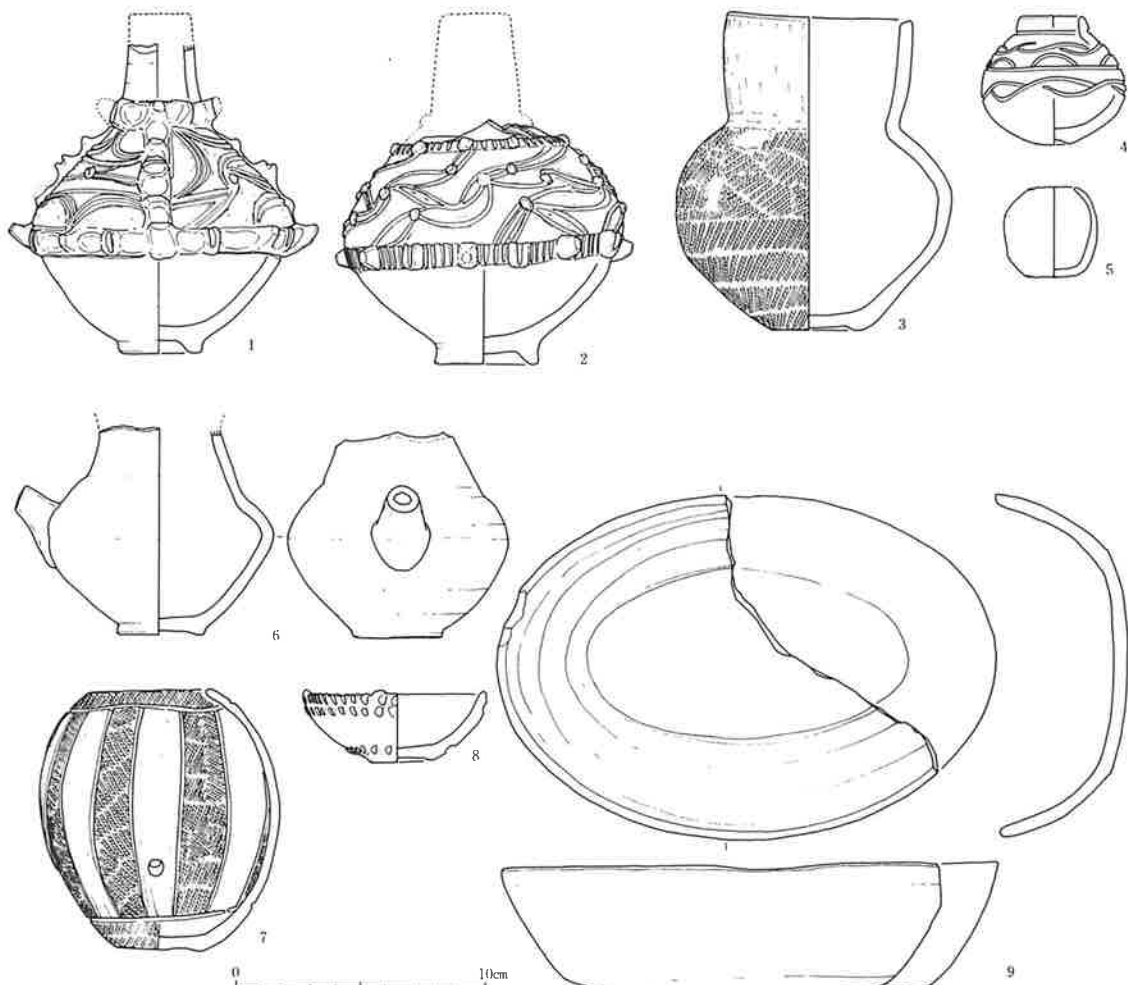
第28図 遺構外出土土器(1)

番号	グリッド・層位	器形・部位	文 様 の 特 徴 他	内面調整他	写真図版番号
1	J-8	I 壺	口：二本の隆帯に刻目、ヘラミガキ	ミガキ (ヨコ)	13-1
2	H-10	II 壺	羽状縄文 (LR・RL) 施文後に沈線施文	ミガキ (ヨコ)	13-2
3	J-8	II下 壺	頸 沈線、貼瘤、ヘラミガキ	ミガキ (タテ)	13-3
4	J-5	II 壺	肩 貼瘤、ヘラミガキ	ミガキ (ヨコ)	13-5
5	J-5	II 壺	貼瘤、縄文帯 (LR) による文様区分	ナデ (ヨコ)	13-4
6	H-10	II 壺	胴 格子目状沈線、貼瘤、縄文 (LR)	ミガキ (ヨコ)	13-6
7	K-8	カクラン土壺	胴 沈曲線による文様区画、縄文帯は羽状 (LR・RL)	ナデ (ヨコ)	13-7
8	H-10	II 壺	胴 沈曲線による様区画、縄文 (LR)	ミガキ (ヨコ)	13-8
9	K-8	カクラン土壺	胴 大小の貼瘤、縄文帯 (LR)	ミガキ (タテ)	13-9
10	T P 3	II 浅鉢	口：縦の刻目、まばらな縄文 (LR)	ミガキ (ヨコ)	13-10
11	H-10	II 浅鉢	無文、ヘラによる研磨、上げ底。	ミガキ (ヨコ)	3-11
12	J-5	IIカクラン	口：小突起、二段にわたる縦の刻目 (棒状となる)	ミガキ (ヨコ)	13-12
13	H-10	I 鉢	口：山形突起、貼付文 (刻目)、刺突文	ナデ (ヨコ)	13-13
14	J-5	IIカクラン	鉢 刻目による棒状のつくり出し、縄文 (RL)	ミガキ (タテ)	13-14
15	K-8	カクラン	鉢 沈線による文様区画、充填縄文 (LR・RL)	ミガキ (タテ)	13-15
16	H-10	II 深鉢	口：山形突起と貼瘤、頸部無文、縄文 (LR)	ミガキ (ヨコ)	13-16
17	K-8	カクラン	深鉢 口縁直下刻目、頸：ヘラミガキ	ミガキ (ヨコ)	13-17
18	J-10	II 深鉢	全面縦の羽状縄文 (LR・RL)	ミガキ (ヨコ)	13-18
19	K-8	カクラン土壺	深鉢 羽状縄文 (LR・RL)	ミガキ (ヨコ)	13-19
20	K-8	カクラン土壺	小形鉢 口縁付近羽状縄文 (LR・RL)	ミガキ (ヨコ)	13-20
21	K-8	カクラン土壺	小形鉢 縄文 (LR)	ミガキ (タテ)	13-21
22	K-8	カクラン土壺	小形鉢 縄文 (LR)	ミガキ (ヨコ)	13-22
23	J-5	IIカクラン	深鉢 結節羽状縄文	ミガキ (ヨコ)	
24	J-5	IIカクラン	深鉢 浅い縄文 (LR)	ミガキ (ヨコ)	



第29図 遺構外出土土器(2)

番号	グリッド・層位	器形・部位	文 様 の 特 徴 他	内面調整他	写真図版番号
1	K-4	II (広口) 壺	口：突起欠落、肩：二段の連続刺突文	ミガキ (ヨコ)	16-1
2	K-4	II 壺 頸	内外面丹塗、突帯にB突起、化粧土一部剥離	ナデ (ヨコ)	16-2
3	J-5	II 壺 肩	三叉文、C字文による磨消縄文 (LR)	ナデ	16-3
4	H-4	II 鉢 肩	刻目、三叉文、入組文による磨消縄文 (LR)、内面炭化物	ナデ (ヨコ)	16-4
5	H-4	II 壺 肩	沈線間に丹塗	ナデ	16-5
6	J-5	I 皿	磨消縄文 (LR)	ミガキ (ヨコ)	
7	J-5	II 皿 胴下	磨消縄文 (LR)	ミガキ (ヨコ)	
8	K-4	II 浅鉢	口縁突起、雲形文 (LR)、胎土に金雲母含	ミガキ (ヨコ)	16-6
9	K-4	II 浅鉢 胴	三叉文、入組文 (?) の磨消縄文 (LR)	ミガキ (ヨコ)	16-7
10	K-4	II 浅鉢 胴	雲形文、磨消縄文 (LR)	ミガキ (ヨコ)	16-8
11	J-5	I 浅鉢	無文、口縁ヨコ、胴部タテのヘラミガキ、胎土に金雲母含	ミガキ (ヨコ)	16-9
12	J-5	I 台付浅鉢	口縁小突起、体部羽状縄文 (LR・RL)	ナデ (ヨコ)	16-10
13	J-5	II 鉢 頸～肩	頸部無文、胴部磨消縄文 (LR)	ミガキ (ヨコ)	16-11
14	J-5	II 鉢 胴	磨消縄文 (LR)、内外面に炭化物	ミガキ (ヨコ)	16-12
15	J-5	II 鉢 胴	磨消縄文 (LR)	ミガキ (ヨコ)	16-13
16	J-5	II 浅鉢 (?)	磨消縄文 (LR) 入組文	ミガキ (ヨコ)	16-14
17	J-5	カクラン 注口	注口部剥落、無文研磨	ナデ (ヨコ)	
18	K-4	II 小形鉢	口唇部刺突文、縄文 (LR)、内面炭化物	ナデ (タテ)	16-15
19	J-6	II 小形鉢	口：刻目、縄文 (LR)	ミガキ (ヨコ)	
20	J-6	I 深鉢	頸部に穿孔 (補修孔か)、縄文 (LR)、外面炭化物	ミガキ (ヨコ)	16-16
21	H-4	II 鉢	平行沈線、縄文 (LR)	ミガキ (ヨコ)	16-17
22	J-5	II 鉢	口：刻目、頸：平行沈線、内外面炭化物	ミガキ (ヨコ)	16-18
23	J-6	II 深鉢	全面縄文 (LR)、内外面炭化物	ミガキ (タテ)	
24	K-4	II 深鉢	全面縄文 (RL)、内外面炭化物	ミガキ (ヨコ)	
25	K-4	I 深鉢	全面縄文 (LR)、内外面炭化物	ミガキ (ヨコ)	16-19



第30図 根井貝塚出土土器〔野田村教育委員会蔵〕

Ⅶ. 出土遺物

1. 土器（遺構外）

第28図、29図に遺構外出土の代表的な土器を示した。28図は後期の、29図は晩期の土器である。図下の表の出土グリットが示すように、後・晩期の出土地点が異なっている。

〔後期の土器〕 各グリットの表土、II層および一部の攪乱層からの出土であり、層毎の土器の差異は認められない。図示した土器は、ア・平行沈線により区画された文様帯に羽状縄文を施文する（1・2）。イ・縦あるいは斜めに文様帯を区画し（入組文）磨消あるいは充填縄文を施文する（7～9・15）。ウ・口縁部に刻目文をめぐらすもの（10）。エ・複数の段にわたって刻目文帯のあるも

の（12～14）。ただし、この刻目文は単純に刻みを入れるのではなく、刻みを入れた個所をやや深く抉り出すようにして溝状に盛り上げているのが特徴である。刻目文からの変化の一つであろう。オ・細く区画された文様帯（磨消または充填縄文）で弧状を描き、貼瘤がある。地文の縄文がなく、研磨されるものもある（3～5・9）。カ・口縁部に縄文帯があり、口縁突起をもつ深鉢（16・17）。キ・粗製の鉢及び深鉢（18～24）。深鉢の多くは、横位の羽状縄文であるが、唯一縦位に施文されている例がある（18）。磨消縄文を施文する精製土器の口縁部、あるいは胴部に縦の羽状縄文が付されるのは一般的であるが、粗製の深鉢では極めて珍しい例である。以上、壺・鉢・浅鉢・深鉢が主で、それぞれ精粗製がある。

後期後半の土器については、仙台湾周辺を中心に西ノ浜式、宮戸Ⅲ式や青森県を中心とする十腰内諸型式が知られているが、ここでは十腰内式の名称を用いる。図示した土器はいずれも十腰内Ⅳ式およびⅤ式に含まれるものである。十腰内遺跡の資料では特にⅣ式については内容が不十分のようであり、研究者によってはⅣ式とⅤ式の把握のしかたに相違がある。磯崎氏の分類に従えば、第28図のア・イ・ウは十腰内Ⅳ式に、エ・オ・カは十腰内Ⅴ式に相当する。ただし、十腰内遺跡の十腰内Ⅴ式には、無文化し研磨された壺や注口土器は存在しないようである。三陸町宮野貝塚出土の土器の中には、貼瘤が小形化あるいは消滅した縄文の無い壺、注口土器が多く出土している（小田野 1982）。当貝塚の二号住居址上層にも同様の資料が出土しており、28図では（3・4）がそれに相当する。十腰内諸型式については現在様々な検討が加えられているが、Ⅴ式については当貝塚の出土資料からすると、少なくとも新旧には細分できそうである。

この時期の資料については近年、東北縦貫自動車道の建設に伴い、九戸村、軽米町などの県北部で良好な資料が豊富に出土している。

〔晩期の土器〕 晩期の土器は主としてⅠ列のグリット周辺に集中している。土壌あるいは焼土投げ捨て遺構からの出土資料と大きく変わるところはない。量的にも遺構のあるグリットよりは少なく、かつ器種も乏しい。後期の土器に継続するような資料も少なく、晩期初頭に位置づけられるものは（第29図－16・17）ぐらいであり、他の資料は大洞B－C式、C₁式に相当するものがほとんどである。

なお、赤色塗彩されている土器のうち三点（第24図－5、第27図－2、第29図－2）について本館保存科学室の蛍光X線分析装置を用いて調査したところ、三点とも顔料は酸化第二鉄である、という結論を得た。（小田野哲憲）

第30図に示した土器は、野田村教育委員会所蔵に係るもので、この他同教委には石鏃・石斧等の石器類、骨筥・骨針等の骨角器類と動物遺存体が保管されている。これらの資料は発掘調査によるものではないが、出土地点はおそらく我々の調査

で検出した1号住居址の北西部分（第9図住居埋土断面上図のJ8区攪乱部）と推定される。層位関係・出土状態等は不詳である。

1は、無文の頸部を持ち吊り下げ状の一对の穿孔が施される壺、口縁部を欠く。頸部下位と胴部中央に貼瘤を持つ帯が巡り、同様な縦位の帯によって肩部が四分割される。その区画の中に沈線を添わせ隆線状にした入組文が描かれる。そのモチーフは2者あり、対応する位置にあるものが同じモチーフをとる（すなわちA・B・Ā・Ē）。

2は、頸部を欠くが1に類似した壺。しかし吊り下げ用の穿孔はなく、肩部の文様も連続して入組文が描かれる。その入組文の交叉部に付く貼瘤は、沈線施文後に行われる。

3は、頸部に縦位のケズリ、胴部にLRの斜縄文が施された壺。器表面の数カ所が剥落している。

4・5は一部欠損するがミニチュア～小形の土器。4は晩期初頭に属するものかも知れない。

6は注口土器。口縁部と裏面及び注口部先端を欠く。口縁はやや広がるものと思われる。

7は胴下半部に焼成前の穿孔を有する筒形土器。胴部が膨らみ、口縁が内弯し、棗状を呈する。上下を沈線で区切り、その間を帯状の磨消縄文で連結する。一部、原体の回転方向を変え、羽状縄文を表現している。前述の通り、1号住居埋土5層例（第14図1）と類似する。

8は口縁に二列、底部横に一列の刺突を有する小形の浅鉢。刺突文は第28図12～14にある。

9は、約3分の1を欠くが、上面観楕円形の浅鉢。むしろ皿と呼ぶべきか。駒板遺跡には、大洞B式の三叉文が施された同様な資料がある。しかし、9が時期的に一致するか否かは、不詳である。

なお、これらの資料は、野田村総合センター資料室において展示、公開されている。

（熊谷常正）

小田野哲憲 1982 『縄文時代・後期』「岩手の土器」岩手県立博物館

芹沢長介 1960 「石器時代の日本」築地書館

高田和徳他 1986 「時前」一戸町文化財調査報告17

保坂三郎 1972 「是川遺跡」中央公論美術出版

2. 石器

根井貝塚出土の石器・石製品には、石鏃、尖頭器、石錐、石匙、不定形石器、ピエス・エスキュー、石核、剥片、石斧類、敲石、磨石、円盤状石製品、石皿、軽石穿孔品類、石棒、石刀、装飾品、岩版等がある。ここでは、一応、A；剥片石器類とそれに関連する石器類、B；石斧類を中心とする一群、C；磨石・石皿類、それにD；軽石類を扱い、“第二の道具”的な石棒・装飾品等は、別に石製品として後述することとした。

A. 剥片石器類

本類には、石鏃、尖頭器、石匙、不定形石器、ピエス・エスキューの他、剥片類、石核等を含めた。

〔石 鏃〕(第31図、第32図28~31)

31点出土している。いずれも有茎鏃で、無茎鏃等は、出土していない。特別な出土状態を持つものはないが、1~5については晩期に、それ以外の資料は、出土区等から考えて後期末葉に属すると考えられる。

これらは身部の形態・茎部の作出等により、いくつかに分類できる。まず、身部の形態では、I；幅に比べ長さがあり二等辺三角形状を呈するもの、II；幅があり正三角形に近くなるものの二者に区分した。さらにそれらを、a；身部下端が張り出し茎部が長くなるもの、b；逆三角形の茎部を持つものにとに細分した。また、身部が左右非対称となる一群も、IIIとして分類した。

I a—14点 (1~4、6~15)

I b—7点 (5、16~20、30)

II a—3点 (21、22、31)

II b—3点 (23、24、28)

III —3点 (25~27) 分類不能—1点 (29)

完形品は18点を数える。欠損資料では茎部を欠くものが多い。完形品の長幅関係を2表に示した。計測点数が少なく顕著な関係は指摘できないが、長さは20~30mm、幅は10~15mmに集中する。なお、小形の21を除く重さの平均は約1gとなる。

石材は6種類を数える。特に頁岩とチャートが多用される。

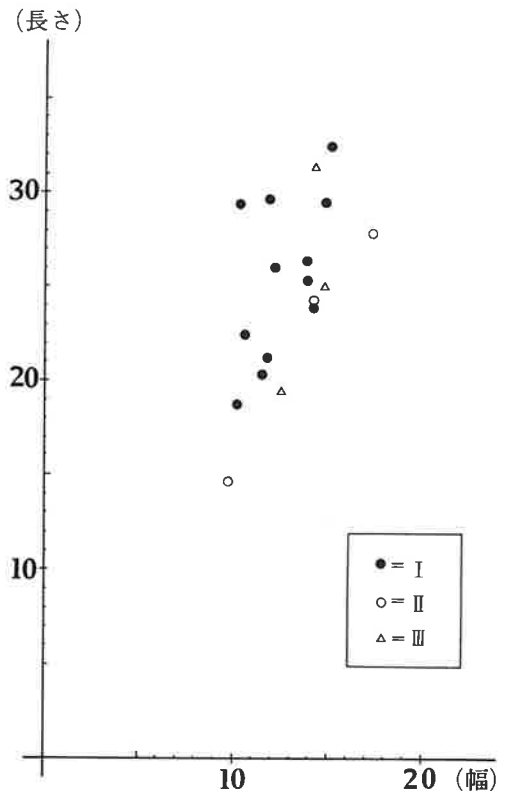
いずれも調整剥離が入念なため、素材剥片の形

態を特定できるものは少ない。主要剥離面の残る例は18点、そのうち基部方向に打面が設定されたもの7点(9・12・15・22・26・28・30)、先端部方向に有するもの1点(19)、左右の側縁方向にもつもの10点(7・10・16・20・23・24・25・27・29・31)となる。これらの素材は、後述するように、小礫を石核として利用したり打割して得られた剥片と考えられる。石鏃では、自然面を完全に除去するため、打面の残る資料はみられないが、表裏で打撃方向の異なるもの(22・24・27)や、横長の素材を利用する点等から充分うかがえよう。

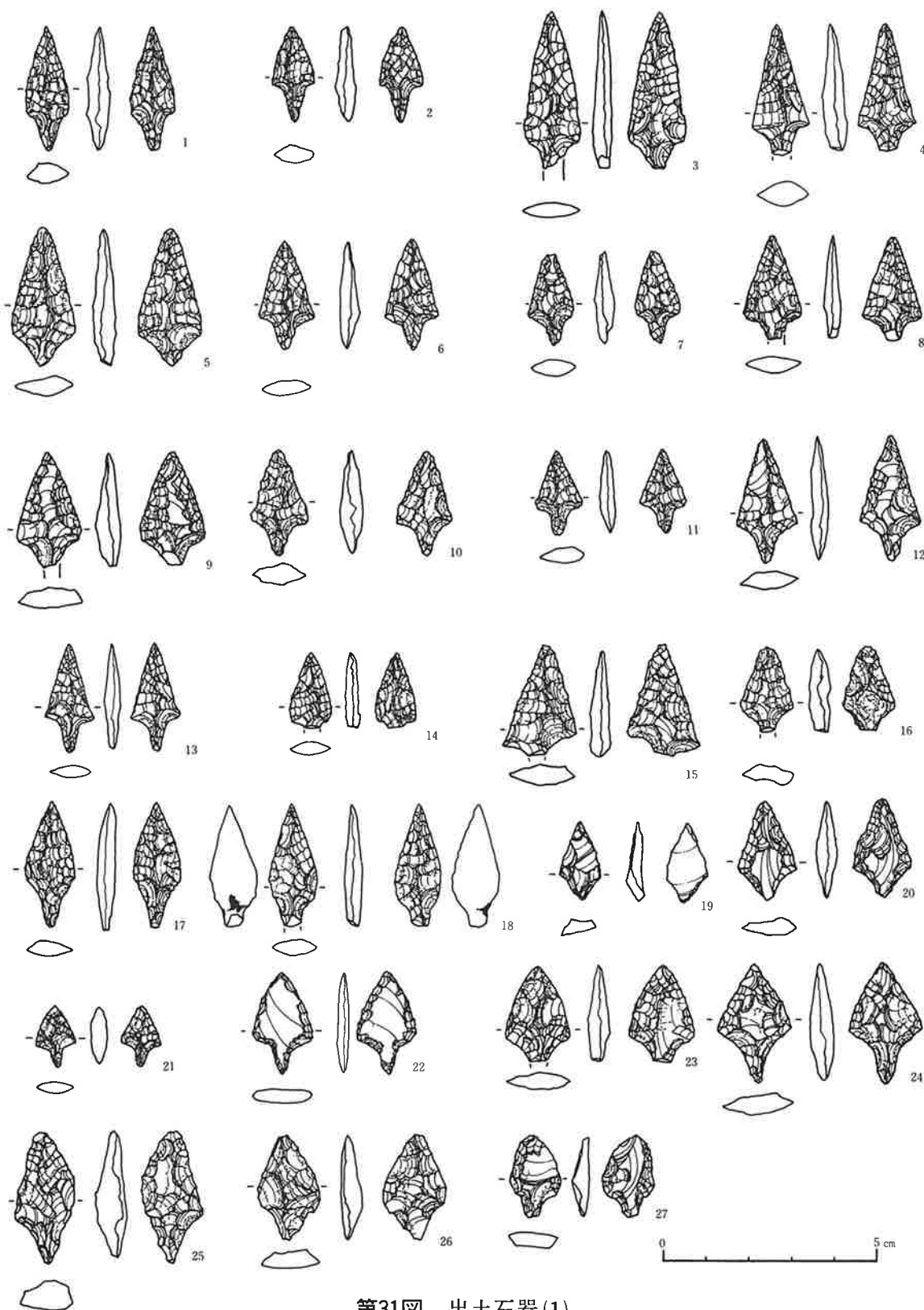
なお、基部にタール状の付着物が認められる例が3点ある(4・18・23)。

破損の状態は、有茎鏃のみから構成されるためか、茎部を欠くものが多く、身部途中や斜位に破損する例は少ない。

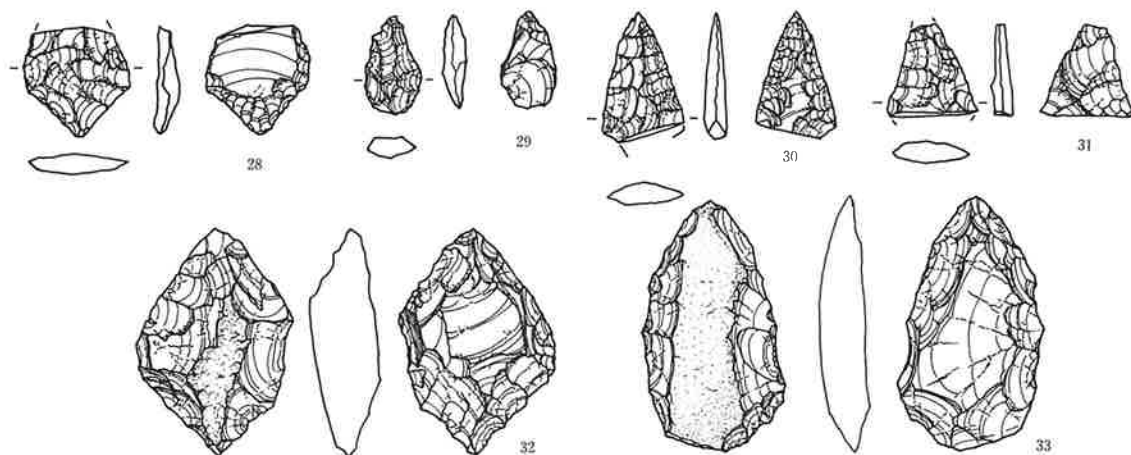
なお、29は、主要剥離面(裏面)下位にかかる剥離を破損あるいは二次的なものと考え、茎部はないものの有茎鏃と考えている。



第2表 石鏃長幅計測表(%)



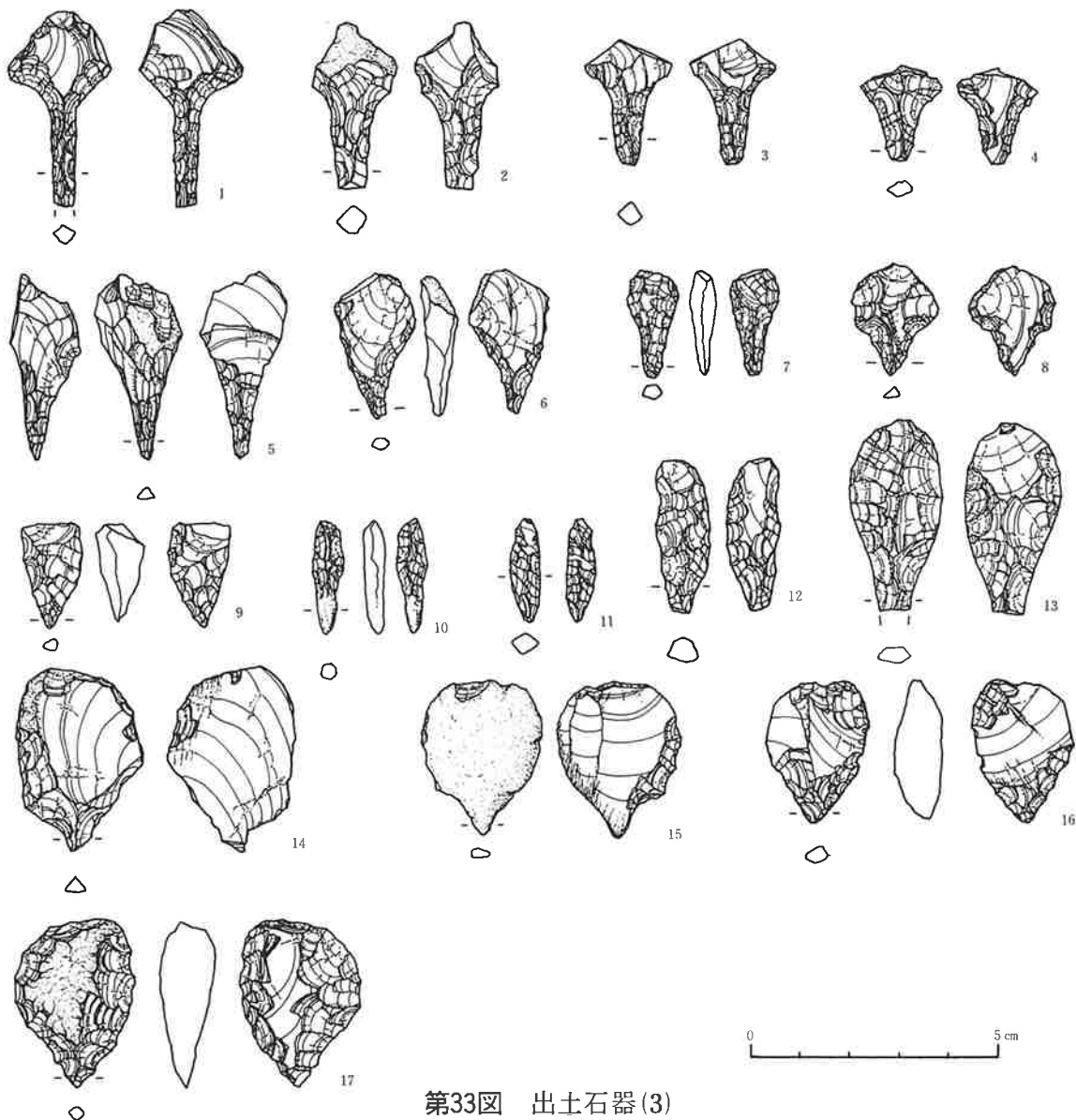
第31図 出土石器(1)



第32図 出土石器(2)



番号	グリッド・層位	時期	石材	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	備考	写真図版番号
1	J 3	II 晩期	珪質頁岩	29.1	10.4	5.7	1.0	完形	17-1
2	J 3	II 晩期	珪質頁岩	22.5	10.6	4.4	0.6	完形	17-2
3	J 3	II 晩期	珪質頁岩	37.6	13.8	4.7	1.8		17-3
4	J 3	II 晩期	硬質頁岩	30.7	13.9	4.8	1.3	基部両面にアスファルト付着	17-4
5	J 14	土壌 3	晩期 流紋岩	32.3	15.0	5.4	1.1	完形	17-5
6	J 9	1号住居埋土 2	後期 珪質頁岩	26.2	13.7	4.7	0.9	完形	17-6
7	T P. 2	II	チャート	21.3	11.8	4.8	0.7	完形	17-7
8	I 10	II	硬質頁岩	24.6	14.3	3.9	0.9		17-8
9	J 6	I	珪質頁岩	26.4	16.1	4.4	1.5		17-9
10	J 8	1号住居埋土 5	後期 珪質頁岩	25.2	14.0	5.8	1.2	完形	17-10
11	H 10		チャート	20.2	11.5	4.0	0.5	完形	17-11
12	K 9	I	黒色頁岩	29.5	14.8	4.2	1.1	完形	17-12
13	K 8	1号住居埋土 1	珪質頁岩	26.0	12.1	3.9	0.6	完形	17-13
14	I 10	II	珪質頁岩	17.7	10.2	3.5	0.5		17-14
15	K 9	1号住居埋土 3	後期 玉ズイ	26.3	18.2	5.8	1.6		17-15
16	K 9	I	安山岩質凝灰岩	20.3	12.8	4.8	0.9		17-16
17	J 5	2号住居埋土 1	珪質頁岩	29.6	11.9	4.1	1.0	完形	17-17
18	J 10	カクラン	チャート	28.8	11.2	4.4	1.1	基部両面にアスファルト付着	17-18
19	K 8	1号住居埋土 1	チャート	18.7	10.1	3.5	0.4	完形	17-19
20	J 8		チャート	24.0	14.1	5.0	1.2	完形	17-20
21	K 8	1号住居埋土 2	後期 玉ズイ	14.3	9.8	3.4	0.3	完形	17-21
22	J 9	1号住居埋土 3	後期 黒色頁岩	24.2	14.2	2.0	0.7	完形	17-22
23	J 9		チャート	22.9	15.7	4.8	1.2	基部にアスファルト付着	17-23
24	I 9		チャート	27.9	17.2	5.3	1.6	完形	17-24
25	J 5	I	珪質頁岩	31.1	14.2	7.3	2.3	完形	17-25
26	J 6	I	チャート	25.0	14.8	5.0	1.2	完形	17-26
27	H 10	II	硬質頁岩	19.6	12.6	4.1	0.8	完形	17-27
28	J 8	カクラン	珪質頁岩	20.8	20.0	3.9	1.5		17-28
29	I 10	I	珪質頁岩	18.7	11.0	4.5	0.8		17-29
30	J 5	カクラン	赤色チャート	24.0	15.4	4.0	1.2		17-30
31	J 9	カクラン	流紋岩	17.4	18.0	4.0	0.6		17-31
32	T P. 2	II	チャート	43.0	30.0	13.2	13.4	完形・自然面	17-32
33	J 13	土壌 3	晩期? 硬質頁岩	48.1	26.2	8.1	11.1	完形・自然面	17-33



第33図 出土石器(3)

番号	グリッド・層位	時期	石材	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	自然面	備考	分類	写真図版番号
1	I 10	II	珪質頁岩	40.4	21.7	6.6	3.2		先端部欠損	I a	17-34
2	J 8 1号住居埋土1		硬質頁岩	34.0	18.3	7.7	3.8	○	先端部欠損	I a	17-35
3	I 10	III	チャート	25.6	18.1	6.2	1.7		先端部使用痕	I a	17-36
4	K 9	I	珪質頁岩	18.9	17.0	6.0	1.4	○	先端部欠損	I a	17-37
5	J 3	II	流紋岩	38.2	16.1	14.5	5.5	○	身部断面三角形	I a	17-38
6	K 9		チャート	29.7	17.3	6.8	2.2	○(打面)	先端部磨耗痕	I a	17-39
7	K 9 1号住居埋土2	後期?	珪質頁岩	21.3	10.7	5.4	0.9		先端部欠損、打面は節理面	I a	17-40
8	I 10	I	硬質頁岩	22.2	18.0	5.0	1.5	○(打面)	先端に痕耗痕?	I a	17-41
9	T P. 2		チャート	21.2	12.7	9.8	2.0		頭部欠損?	I a	17-42
10	J 9 1号住居埋土2	後期?	硬質頁岩	23.0	6.8	4.6	0.6		身部全体に磨耗痕	I b	17-43
11	J 8 1号住居埋土2	後期?	玉ズイ	21.2	6.3	4.2	0.6		先端部に磨耗痕	I b	17-44
12	K 8	I	珪質頁岩	31.4	11.6	7.4	2.9		身部先端欠損	I b	17-45
13	J 8	II	珪質頁岩	38.6	18.4	10.5	6.1		身部先端欠損	I a ?	17-46
14	I 3	I	珪質頁岩	37.5	25.1	8.6	6.8	○		II	17-47
15	J 3	II 晩期?	チャート	31.6	24.7	4.7	3.8	○	片面自然面	II	17-48
16	T P. 2		珪質頁岩	30.0	21.5	9.7	4.4			II	17-49
17	I 9	II	チャート	33.4	25.4	11.0	8.8	○(打面)		II	17-50

〔尖頭器〕(第32図32・33)

2点出土している。両者共両面加工であるが、自然面が残る。特に33は、横長の剥片を素材とし、礫の自然面のカーブをそのまま生かしている。

〔石 錐〕(第33図)

棒状の身部を両面加工によって作り出したものや、剥片の一端を鋭利に調整してあるものを石錐とし、前者をIに、後者をIIに分類した。Iについてはさらに、幅広な頭部を持つもの(a)と、全体が柳葉形を呈するもの(b)とに区分した。ただし、IIに関しては、分類の基準が曖昧であり、不定形石器とした資料の中にも該当する例がある。両類合わせて17点を数えるが、自然面を持つ例がI類に4点、II類に4点ある。

使用痕については、I類では先端部が欠損している例を除いて、僅かであるが認められる。特に10は、剥離面が磨耗するほどに使い込まれている。それに比べII類には、ほとんどみられない。16は、先端部片面に自然面が残る、断面形態も扁平で、石錐とは断定できないかも知れない。

〔石 匙〕(第34・35図)

つまみ部を作り出した石器を扱った。18点出土している。基本的には従来通り縦型(I)と横型(II)に区分できる。それに律しきれない例(18)もあるが、一応横型に分類した。横型はプロポーションやつまみ位置、構成縁辺数等により細分もできるが、資料数も少ないので、大別段階に留めた。

刃部の調整をみると片面加工のもの、両面加工、それに無調整のものがある。特に横型の肩部に施される調整は両面加工であるのに対し、つまみ部に対応する縁辺は、主要剥離面からの片面加工に留まる例が多い。

素材の利用の点では、縦型・横型を問わず、つまみ部を打面と同方向に作り出すものが多い。一応同方向のものをA、対応する位置にあるものをB、さらに打面が左右どちらかにあるものをCと分類した。

自然面を有するものは2点、特に2は、自然面を打面として得られた剥片を素材とし、その自然面を肩部におくことで利用している例である。

〔不定形石器〕(第36・37図)

ここでは、いわゆる定形的な石器を除く剥片石器類を扱った。これらをまず、調整剥離の施されるもの〔I〕と、縁片に微細な剥離列がみられるもの〔II〕とに区分した。前者は、調整剥離のあり方によって、次のように分類した。

a ; 一縁辺にあるもの

b ; 二～三縁辺にあるもの

c ; 周縁にあるもの

このように分類すると、圧倒的にI b類が多い。形態的にはスクレーパー的な特徴を有する資料が多く、また前述のように縁辺を尖らせドリル状にしたものも見受けられる(6・9～11・16)。

これらの資料は、自然面を持つものが多く、それを打面とする例も少なくない(1・2・6・17・19)。

また、「折断調整石器」(阿子島 1979)に類似した資料として、折断面からの剥離を有する9・13をあげられるが、数的には非常に稀である。

石材として多用されるのは頁岩、チャートで、これは他の剥片石器と同様な傾向にある。しかし僅かながら、ホルンフェルス素材とする粗大な剥片が存在する(8・14)。これらは、頁岩・チャートのそれよりは、かなり大きな原石(石核)から剥離されたものであることがわかる。ホルンフェルスは、むしろ後述する石斧等により多く用いられる石材である。しかし、これらの剥片類は形こそ粗大であるが、剥離技術は、頁岩・チャート製のものと共通するものと考えられる。

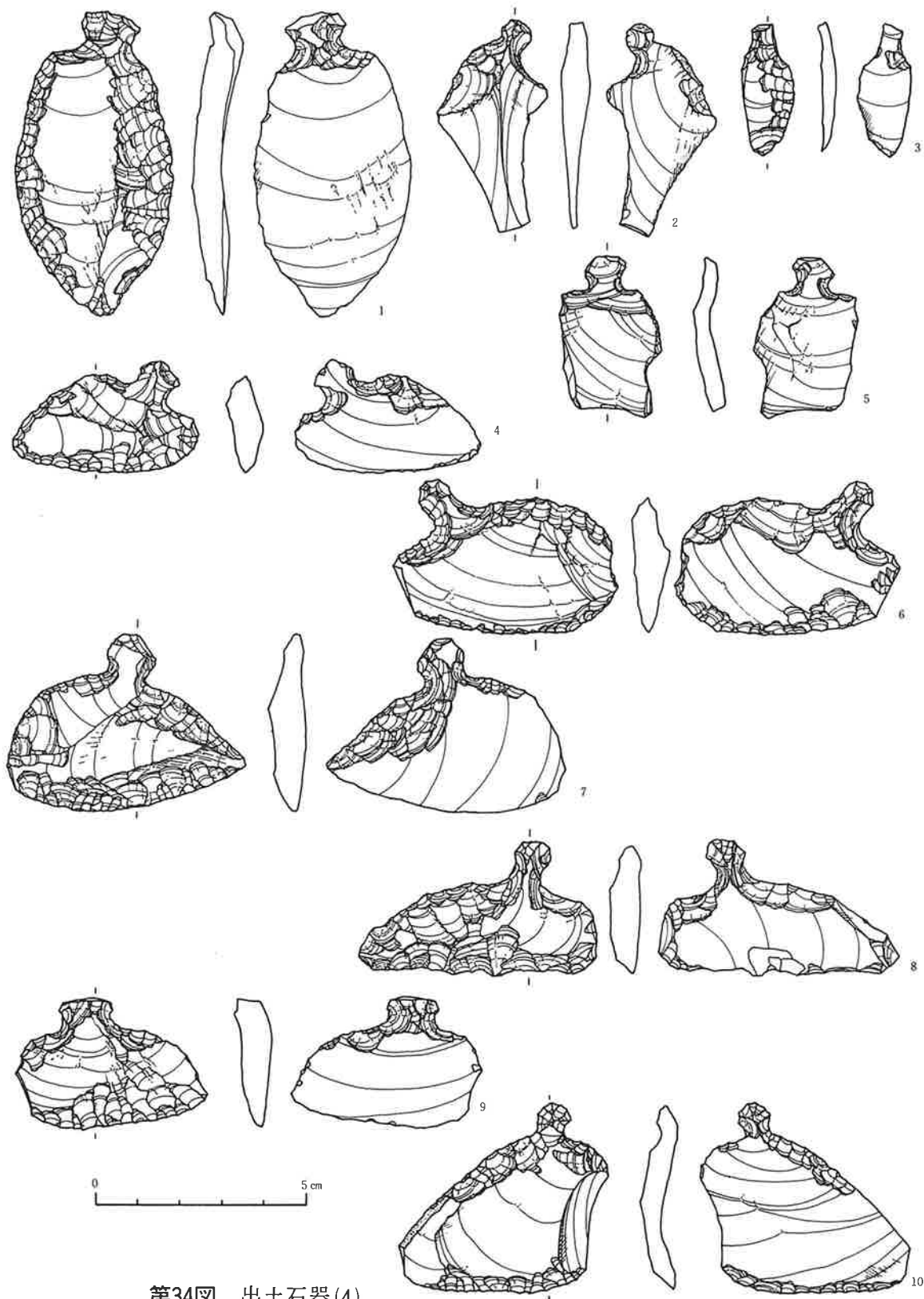
〔ピエス・エスキュー等〕(第38図1～11)

上下の相対する縁辺に階段状の剥離がみられる剥片及び礫片を扱う。自然面を残す例、また両極打撃特有の波打つリングが観察できる例が多い。

石材は珪質頁岩・チャートが主体を占める。

3、4、8は、側縁部に自然面を残す。これらも2・5～7と同様、小円礫から剥離されたもので、その点で、自然面を持たない1の方が特殊なあり方を示している。

9は、扁平で楕円形の円礫の長軸に打撃を加えたもの。その上下に細かな剥離が付く。10・11は球形に近い小円礫に一方から打撃を加えている。

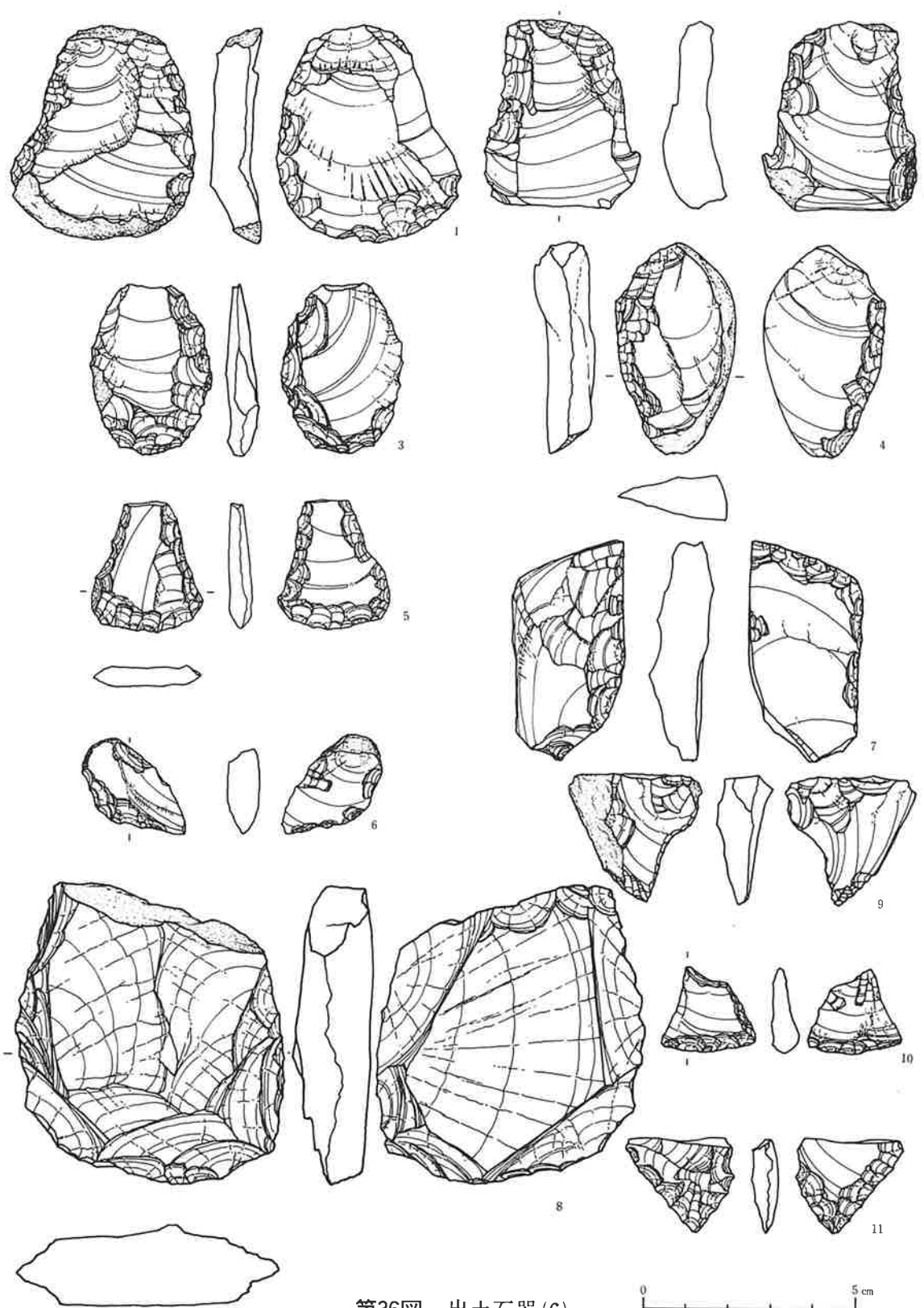


第34图 出土石器(4)

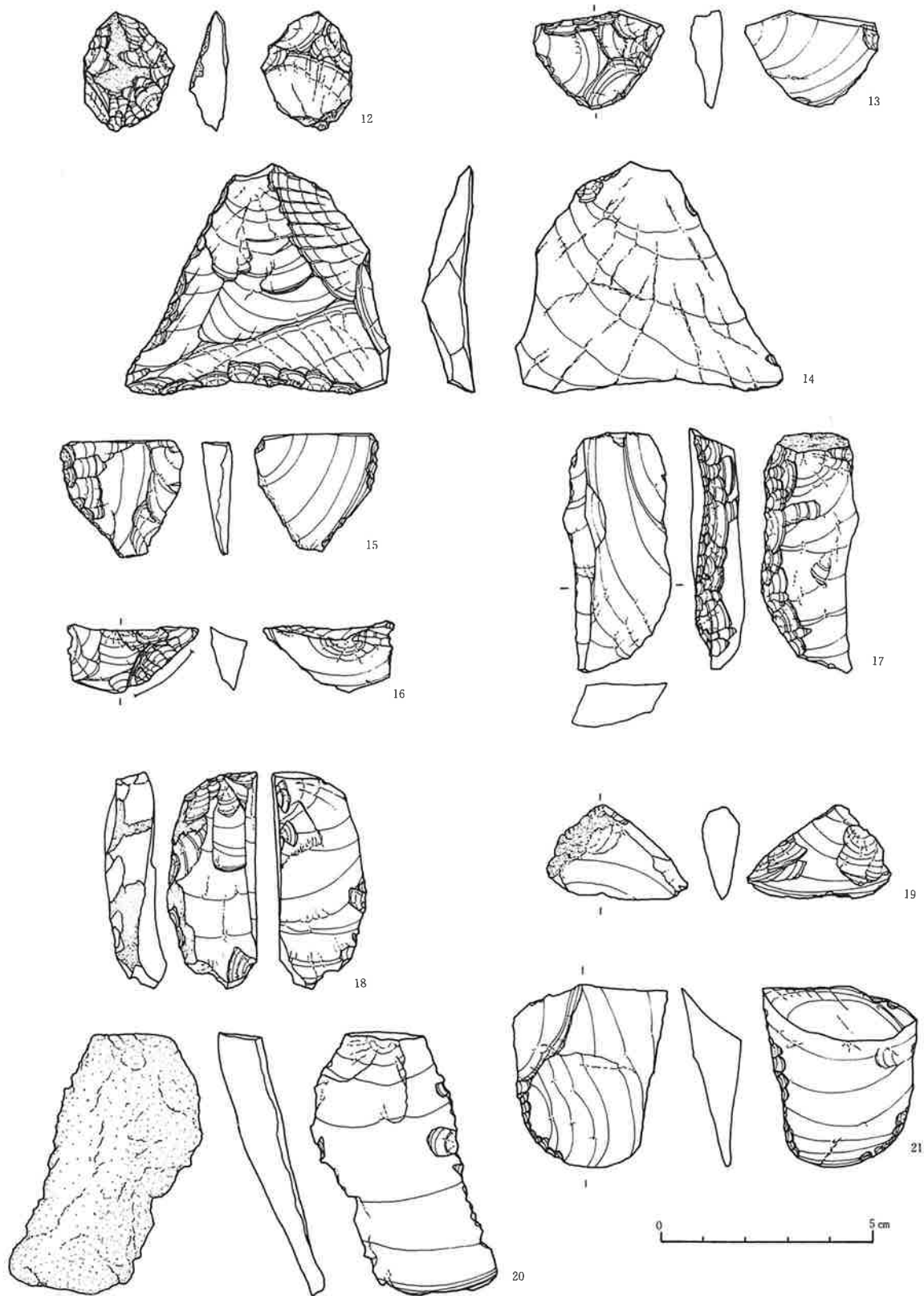


第35図 出土石器(5)

番号	グリット・層位	時期	石材	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	打面位置	備考	写真図版番号
1	J 6	I 下	硬質頁岩	72.1	37.4	8.9	19.8	A		17-51
2	K 8		珪質頁岩	49.0	22.0	7.0	5.5	B	打面自然面、先端部欠損	17-52
3	J 8	1号住居埋土 1	チャート	31.8	12.3	3.3	1.3	A		17-53
4	不 明		チャート	38.9	24.3	4.5	4.5	A		17-54
5	J 9		硬質頁岩	26.8	44.5	5.0	6.6	A		17-55
6	K 8	I	硬質頁岩	36.0	51.5	10.0	17.6	A		17-56
7	I 5	2号住居埋土 5 後期	硬質頁岩	31.0	56.7	8.5	16.0	C		17-57
8	J 10	II	硬質頁岩	31.4	57.4	9.3	12.4	C		17-58
9	J 8	1号住居埋土 1	玉ズイ	32.0	45.5	8.3	9.3	A		17-59
10	J 6	2号住居埋土 6 後期	珪質頁岩	45.7	53.3	6.0	10.4	A	一部自然面	17-60
11	J 8	1号住居埋土 1	チャート	24.4	26.5	5.8	2.2	A	打面節理面か	17-61
12	J 8	カクラン	チャート	29.0	31.1	7.5	5.1	C ?		17-62
13	J 6	2号住居埋土 1	硬質頁岩	21.0	31.2	5.5	2.6	A	打面にアスファルト付着	17-63
14	K 8	I	チャート	27.0	32.1	3.0	2.7	C		17-64
15	I 10	I	硬質頁岩	45.0	50.1	9.2	16.8	A	つまみ部に一部アスファルト付着	17-65
16	J 9	1号住居埋土 1	硬質頁岩	40.5	31.0	7.2	7.2	A		17-66
17	K 9		チャート	28.5	32.0	6.2	3.6	A		*17-67
18	K 8	I	珪質頁岩	25.1	19.5	5.6	2.7	B ?	分銅形	17-68



第36図 出土石器(6)



第37図 出土石器(7)

番号	グリット・層位	時 期	石 材	分類	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	自然面	備 考	写真図版号
1	J 8 1号住居埋土5	後期	珪質頁岩	I b	50.4	43.4	9.1	21.6	○		18-1
2	K 8	I	硬質頁岩	I b	44.5	36.3	12.3	18.8	○	一部アスファルト付着	18-2
3	K 8 1号住居埋土1		チャート	I b	39.5	29.2	7.7	8.5	○		18-3
4	J 5 カクラン		硬質頁岩	I a	50.2	28.5	11.9	18.3	○		18-4
5	不 明		硬質頁岩	I b	30.4	26.6	4.7	4.6		上部欠損	18-5
6	J 6	I	珪質頁岩	I b	20.5	25.8	8.1	3.7	○		18-6
7	J 9		珪質頁岩	I a	52.0	27.9	12.2	20.6		正面剥離は剥離以前	18-7
8	K 4	II	ホルンフェルス	I b	69.7	61.6	17.8	104.6	○		18-8
9	J 18 1号住居埋土3	後期	チャート	I b	30.0	31.4	10.8	7.1	○	石錐状加工	18-9
10	J 6 2号住居埋土2	後期?	チャート	I b	20.7	22.6	5.1	2.1		石錐状加工	18-10
11	H 10	I	珪質頁岩	I b	22.1	25.3	6.1	3.6			18-11
12	I 10	III	チャート	I c	27.5	21.4	8.7	4.9	○		18-12
13	J 10	I	チャート	I b	21.8	31.0	7.8	5.1			18-13
14	H 10	I	ホルンフェルス	I b	56.5	62.4	10.8	30.0			18-14
15	K 8 1号住居埋土1		硬質頁岩	I b	27.4	29.3	7.3	5.6			18-15
16	I 10	II	チャート	I a	18.0	31.5	10.4	3.3			18-16
17	H 10	I	珪質頁岩	I a	56.0	24.3	12.4	19.0	○		18-17
18	I 10	I	硬質頁岩	I a	50.4	21.3	11.3	13.2	○		18-18
19	K 9 1号住居埋土2	後期?	珪質頁岩	I a	21.5	33.7	7.9	4.9	○		18-19
20	K 8 1号住居埋土5	後期	珪質頁岩	II	62.1	34.8	10.5	24.3	○		18-20
21	J 8 1号住居埋土2	後期	玉ズイ	II	42.3	38.7	11.2	13.0			18-21

打撃された縁辺は、ほぼ直線状となり、小剥離もみられる。しかし、対応する縁辺（下位）には特段の加撃等の痕跡はみられない。

〔石 核〕(第39図1～4)

こぶし大等の円礫に、いくつかの剥離痕がみられるもの。これらは後述するように、単純に石核とは言い切れない点が多い。

一応、その打点が自然面にあるもの（A）と剥離面にあるもの（B）とに区分してみた。しかしAの剥離自体が、打面設定のためなのか、あるいは剥片取得のためなのか厳密に区別できなかった。

1は、上面を三方向から数度にわたって打撃しほぼ平坦な面を作り、そこを次に打面として剥離する。さらにその剥離面のうち側縁方向にある面を打面とし、数回剥離されている。2は、一回の打撃により上面に平坦な面を作る。しかし、その面は利用せず、側縁上方からの剥離が次に行われる。3も、1と同様の剥離工程を持つ。

4は、平坦な自然面を打面とし、次にその剥離によって生じた面を打面として、裏面を剥がし、次に、その裏面を加撃している。

これらを石核として扱った場合、得られる剥片は素材の大きさから推定しても5cm以下に留まるであろう。本貝塚では、不定形石器を主とし、自然面を持つ剥片が多く、これらの素材が、この

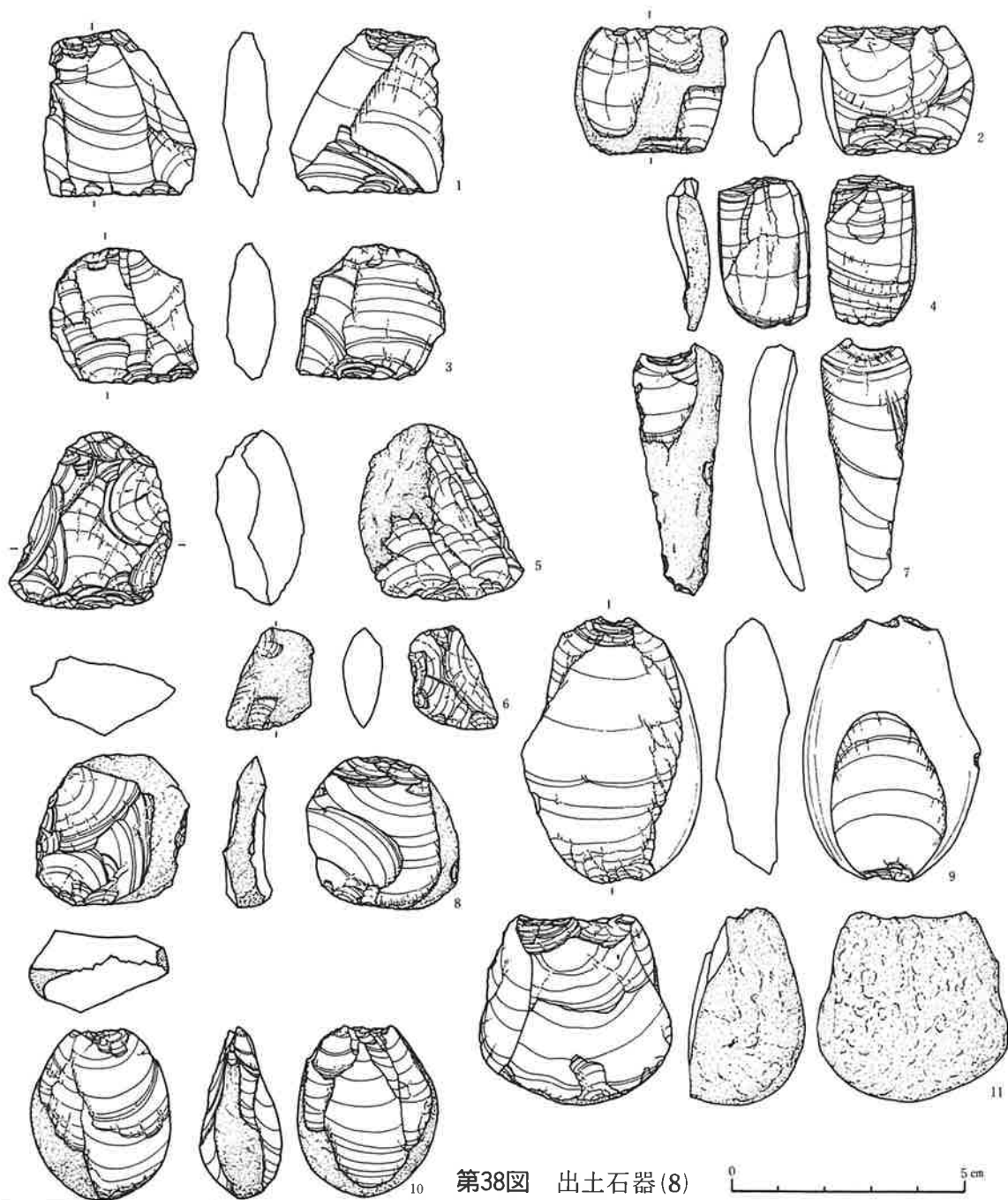
ような石核から生産された可能性は、充分考えられる。しかし、第38図10・11や第40図に示したような円礫を“打割”して作られる素材も、剥片石器の素材となり得よう。

従って、本貝塚の剥片石器の素材生産方法として、石核状に剥離を進めたものと、打割を主体とするものの二者が存在することを指摘しておく。

〔接合資料〕(第40図)

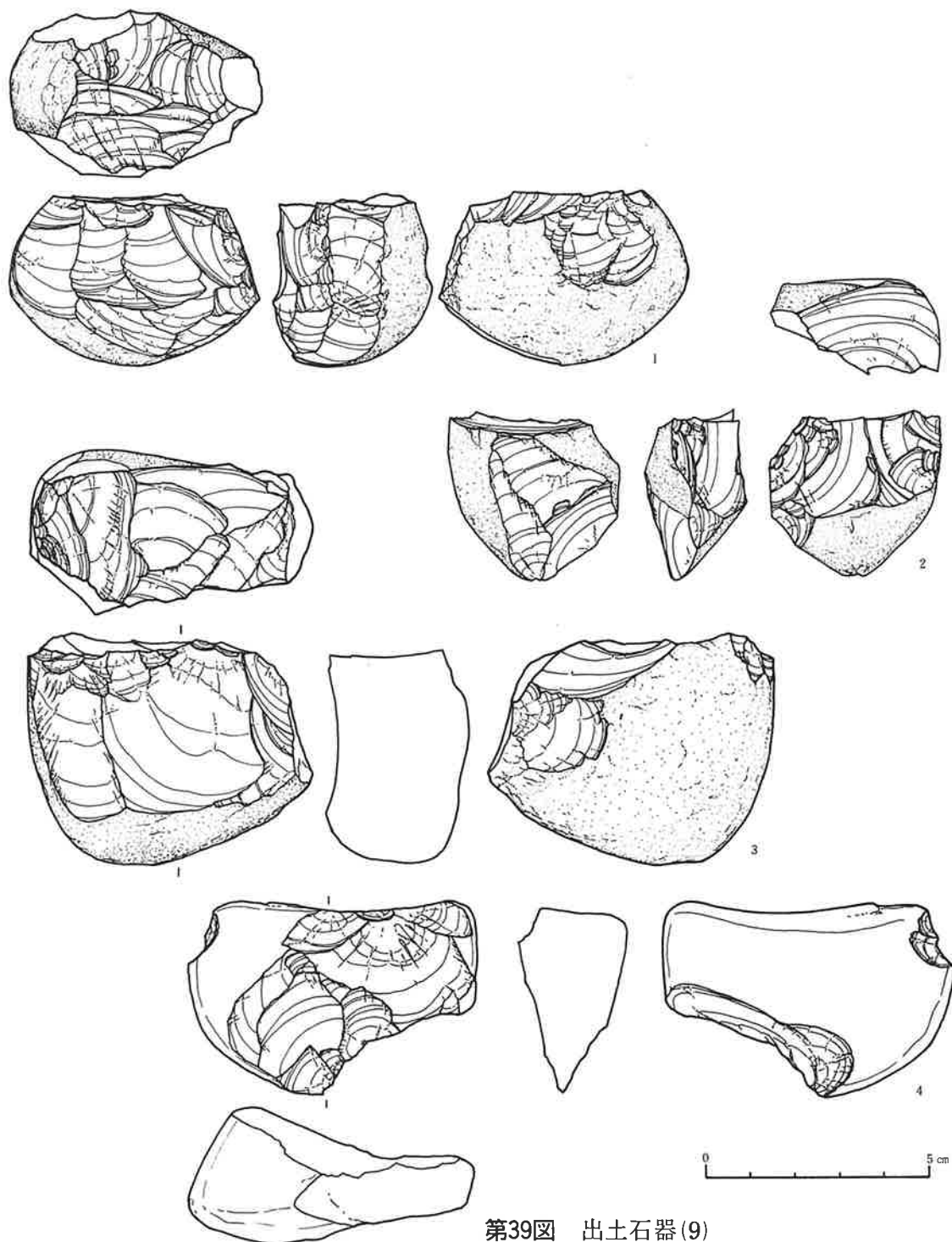
2片の剥片が接合する。bは自然面を打面とするが、aの正面の剥離は、上部の小さな剥離面を打面とする。この打面はbを剥離し、それによって作られたエッジを打撃したものである。bの三側縁には、主要剥離面にかかる小剥離がみられる。側縁のそれは対応して位置するが、それが使用によるか否かは明らかではない。

さて、第38図に示したような、小円礫を加工する資料は、最近岩手県北部の遺跡から報告されている。特に九戸郡軽米町内の縄文後期から弥生時代にかけての遺跡では、普遍的と言えるほど出土している。同町君成田IV遺跡（村上他 1983）では、十腰内Ⅰ式に先行する後期前葉の竪穴住居内のピットから、73点のチャートの小剥片が出土している。これらのほとんどには自然面がみられ、両極打法による楔形石器も10数点含まれるという。



第38図 出土石器(8)

番号	グリッド・層位	時 期	石 材	長さ(mm)	幅(mm)	長さ(mm)	重さ(g)	打 面	備 考	写真図版 番 号
1	K 9 1号住居埋土 6	後期	珪質頁岩	35.6	32.8	9.5	9.2	/	上下辺に小剥離列	18-22
2	K 9	I	珪質頁岩	27.2	32.9	10.7	12.0	/	片面に自然面、上下辺に小剥離列	18-23
3	J 3	II 晩期?		28.9	32.1	9.8	8.3	/	側縁に自然面、上下辺に小剥離列	18-24
4	J 9	I	珪質頁岩	32.5	19.7	7.9	4.7	/	側縁に自然面、上下辺に小剥離	18-25
5	J 5 2号住居埋土 6	後期	チャート	38.3	34.4	17.8	20.1	/	自然面	18-26
6	不 明		チャート	22.8	19.5	8.0	3.3	/	自然面	18-27
7	I 10	III	硬質頁岩	53.3	19.4	11.4	6.8	/	両側縁に小剥離(片面)	18-28
8	J 6 2号住居埋土 2	後期	硬質頁岩	31.7	32.7	8.5	10.3	A		18-29
9	J 5	I	硬質頁岩	56.6	38.6	16.2	43.0	A	両極打法	18-30
10	J 3	I	珪質頁岩	36.5	29.2	18.2	18.1	A?		18-31
11	J 8 1号住居埋土 5	後期	チャート	41.7	40.6	24.6	57.6	A	両極打法?	18-32



第39図 出土石器(9)

番号	グリッド・層位	時期	石材	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	打面	備考	写真図版番号
1	K 8 カクラン		珩質頁岩	37.3	55.9	36.8	98.0	B		18-33
2	J 8 1号住居埋土4	後期	硬質頁岩	36.3	40.4	19.9	28.7	A・B		18-34
3	J 6 2号住居埋土3	後期	チャート	50.5	61.0	35.6	160.4	A・B		18-35
4	J 5 カクラン		珩質頁岩	43.4	64.9	26.6	75.6	A・B		18-36

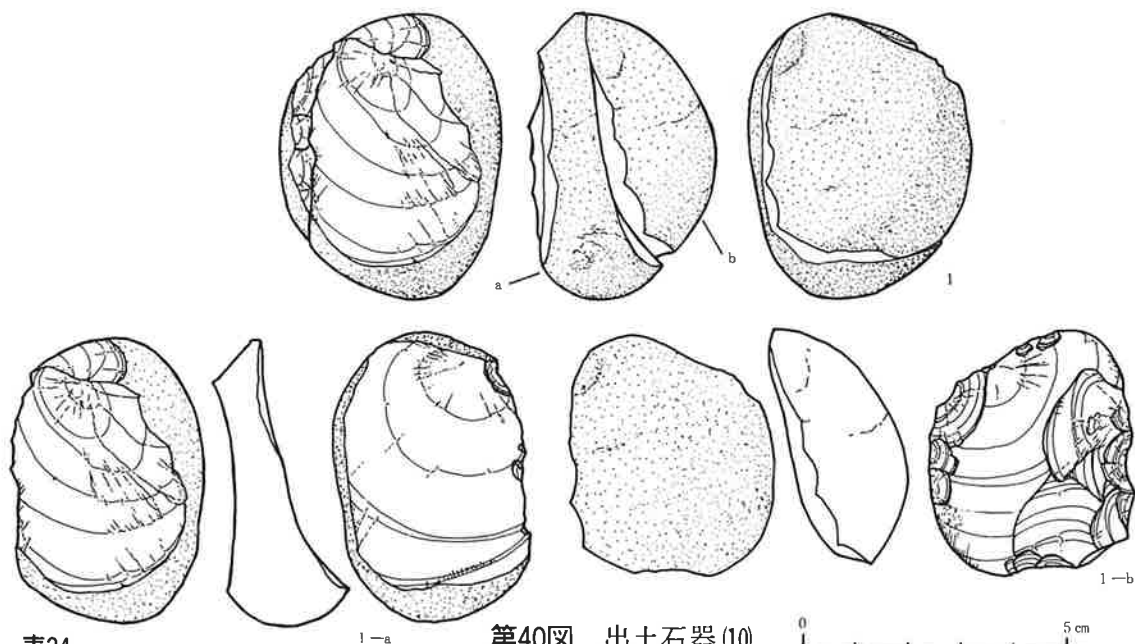


表24

第40図 出土石器(10)

番号	グリッド・層位	時期	石材	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	打面	備考	写真図版番号
1	J 6 I・2号住居埋土4	後期		54.3	42.1	33.8	82.1	A・B	2片接合	18-37 a・b

同様な例は、岡村らにより既に新潟県内の資料が指摘されており(岡村 1983)、大平洋岸ではいわき市大畑貝塚(馬目他 1975)にも存在する(註1)。

これらは石材産地と密接に関係するともいわれている(阿部 1983)。本貝塚から出土する円礫は、本地域周辺の玉川層下部を構成する礫岩やそこから供給された段丘礫層や海岸に包含・分布していたものと考えられる。内陸部の軽米町内の諸遺跡からは、いわゆる普通の剥片が主体を占めるのに対し、本遺跡では、小円礫を素材とするものが圧倒的に多い点、玉川層からの石材供給と密接な関係にあったことがうかがえよう。

軽米町内の遺跡では、これらの資料は楔形石器に主に利用され、他の石器の素材となることは稀なようである。馬場野II遺跡(工藤 1986)では全くなく、駒板遺跡(酒井他、1986)でも小型のエンドスクレーパーに加工された例が僅かにみられるだけという。その点においても本貝塚の剥片石器類は、特徴的といえよう。

B. 石斧類を中心とする一群

〔石斧類〕

石斧としては、磨製石斧・打製石斧それに未製品を思われるものの都合33点を含めた。

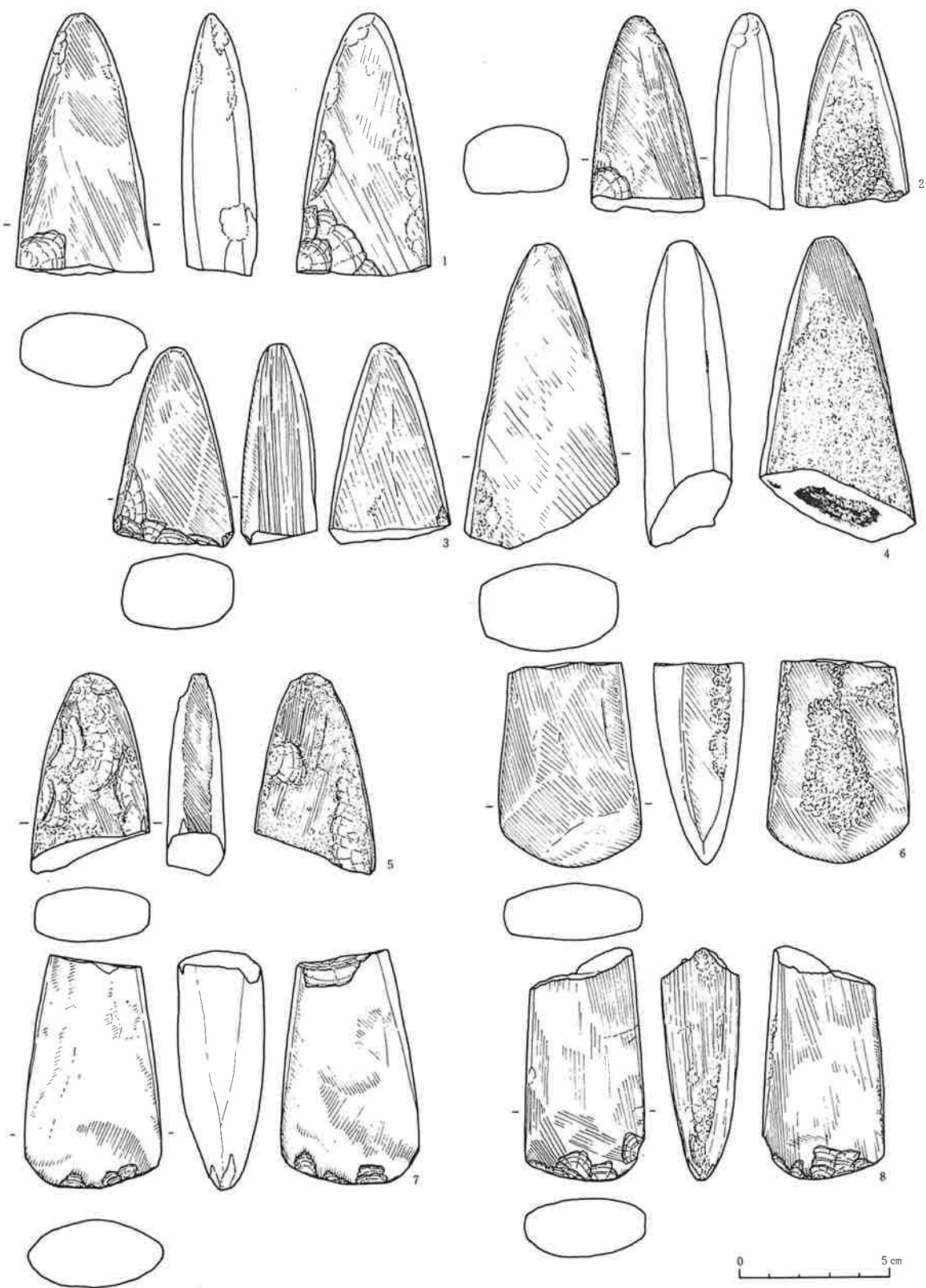
このうち磨製石斧とその未製品類が圧倒的に多い。また、打製石斧として分類した2点(29・30)及び未製品と考えられる扁平な礫に剝離を加えたもの(31~33)を除き、完形品は出土していない。

磨製石斧は、原石確定→成形剝離→敲打調整→研磨という工程を基本的に経るようである。従って、打製石斧状の27・28も、成形剝離の段階にあるものとみなした。

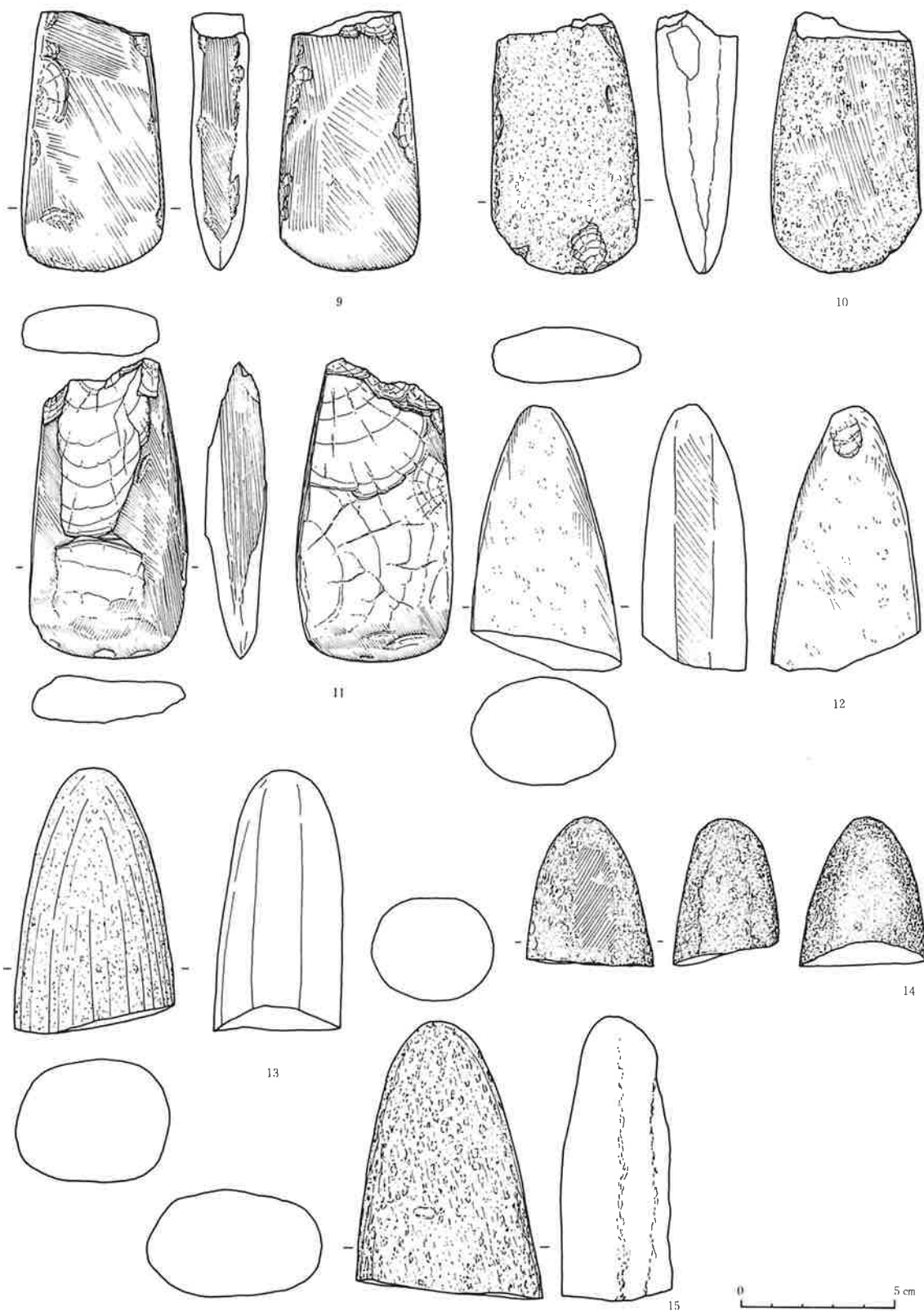
石斧の石材としては、安山岩・砂岩系の石が多用されるが、玢岩・ホルンフェルスもみられる。

素材となるのは、扁平な自然礫が選択されたのであろうが(29~30)、資料中には裏面全体に剝離が覆う例(24・27・28)等から、礫を打割して得られた粗大な剥片を素材として利用したことも考えられる。

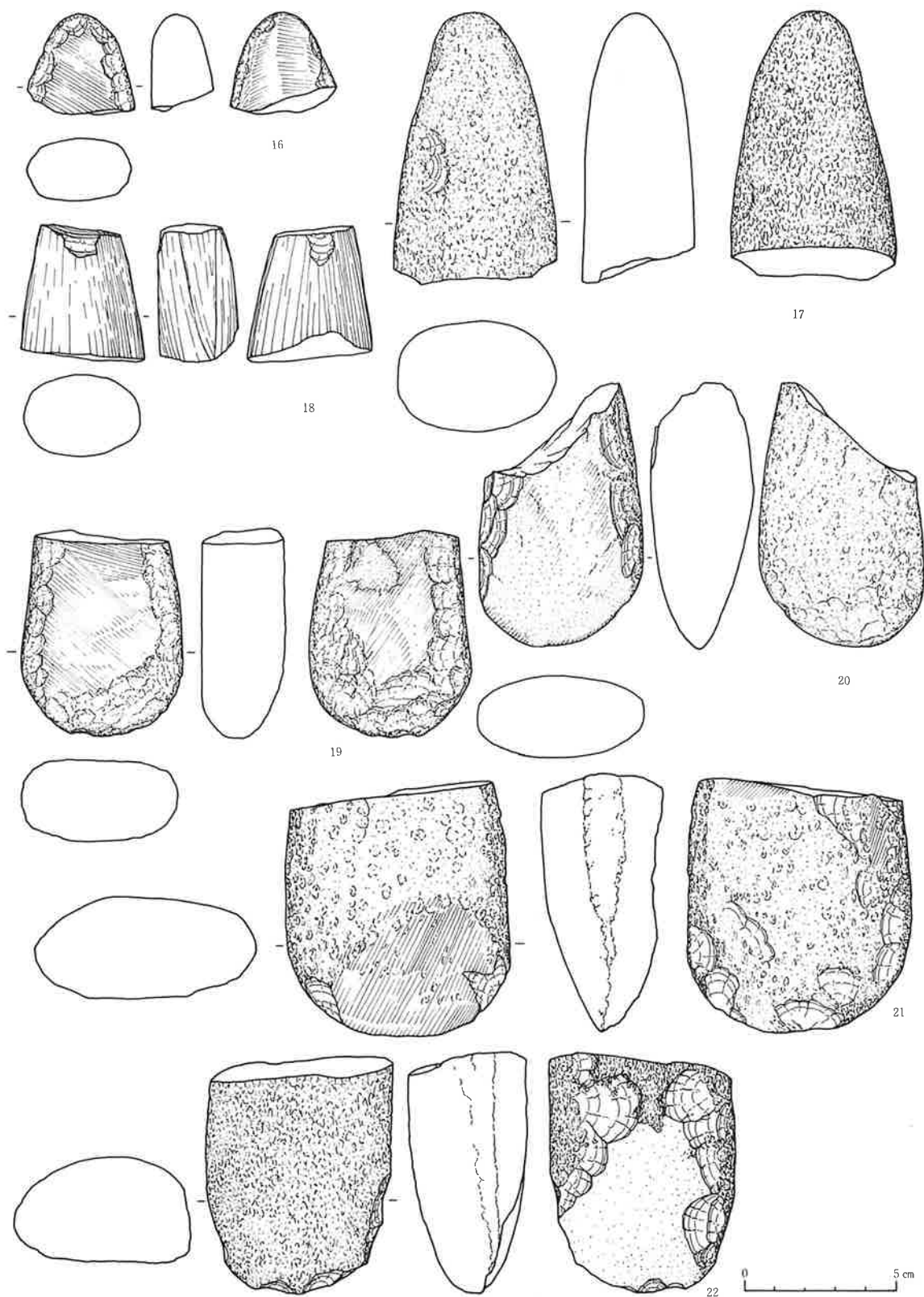
成形剝離は、当然この素材の形態により相違してくるものであろう。しかし、側縁部は両面にわたって剝離が行われ、幅の矯正を行っているのに対し、刃部の剝離は片面が多く、礫の自然面のカー



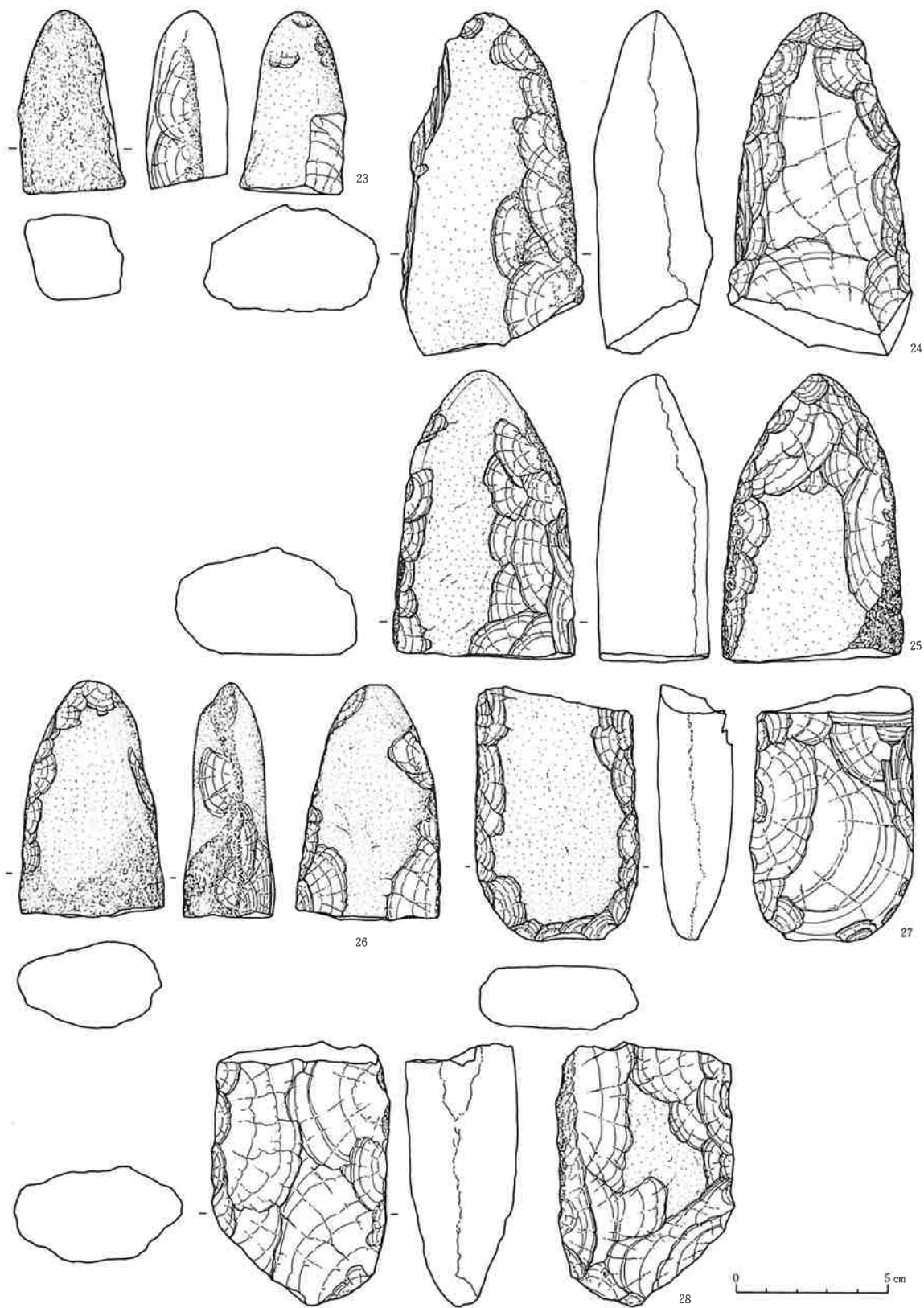
第41図 出土石器 (11)



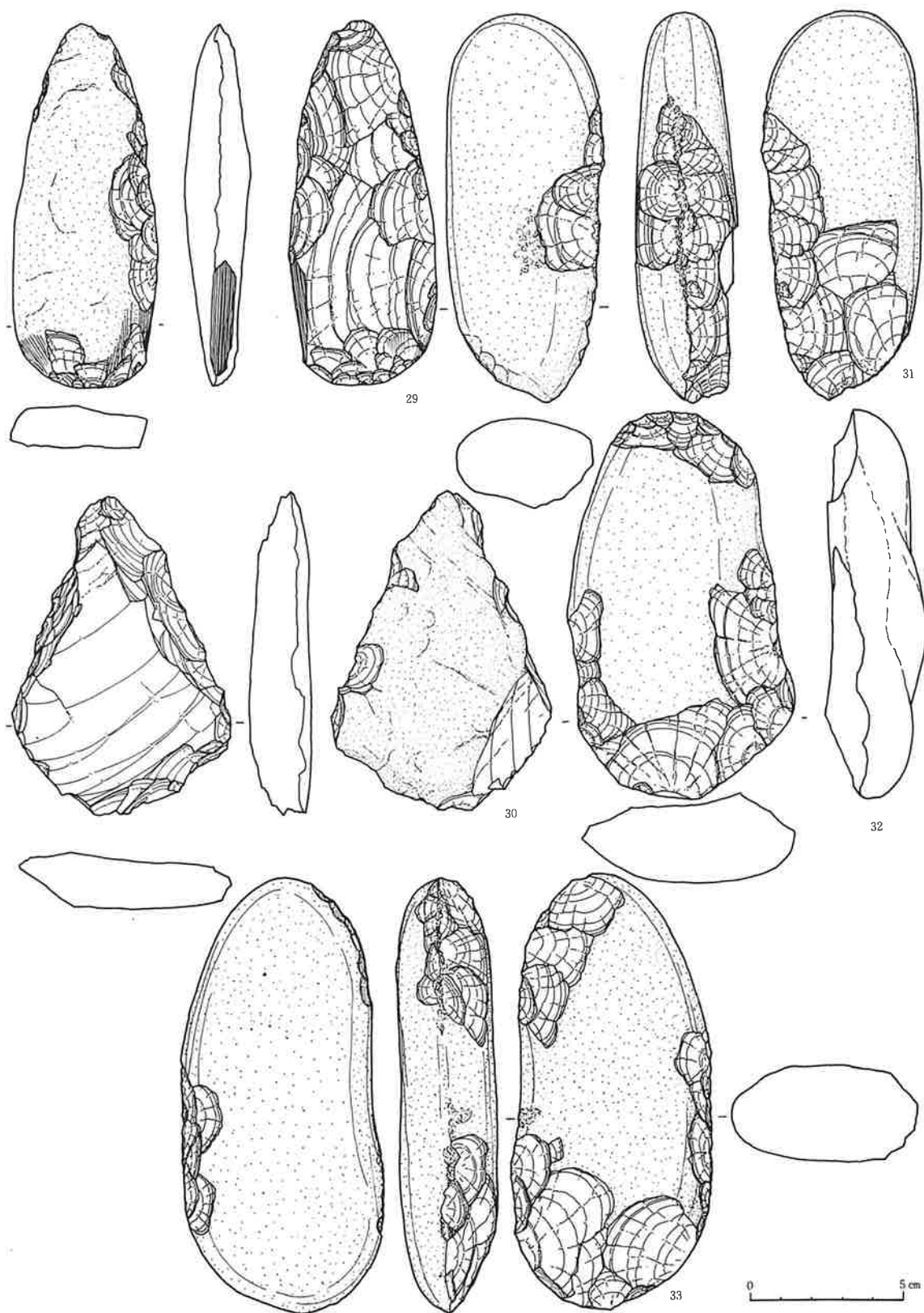
第42図 出土石器 (12)



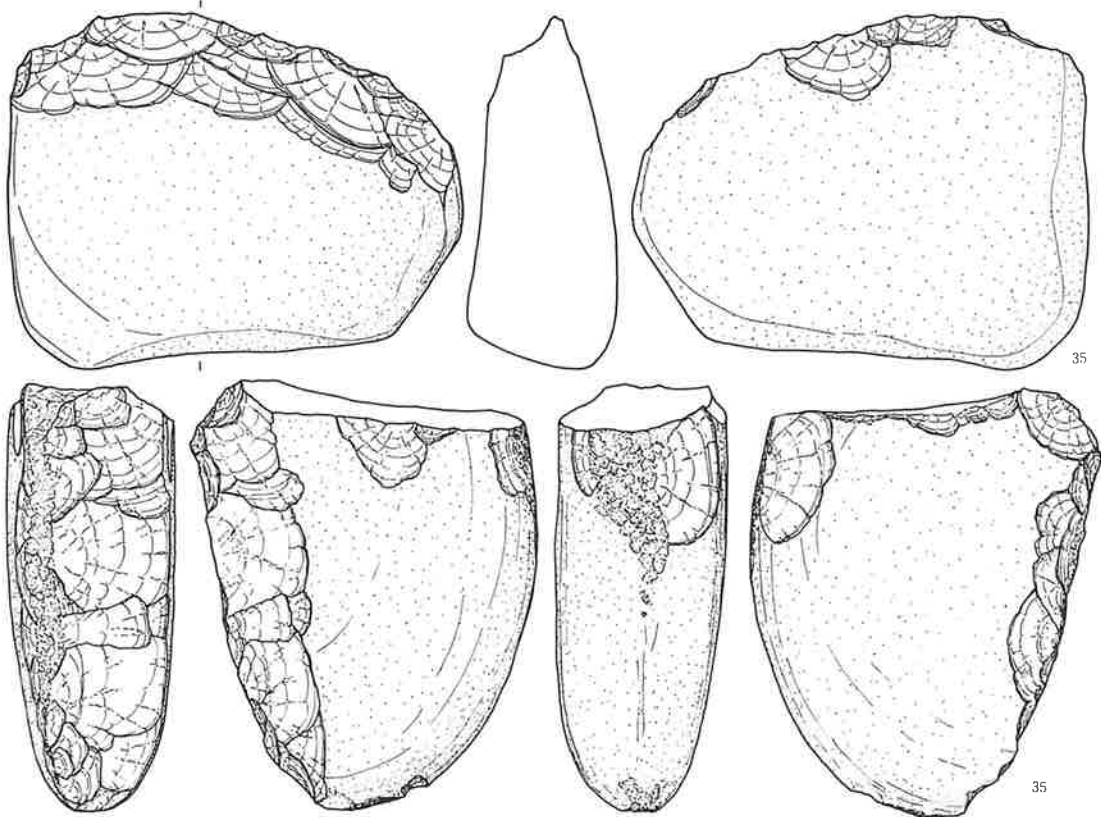
第43図 出土石器 (13)



第44図 出土石器(14)



第45図 出土石器(15)



第46図 出土石器(16)

番号	グリッド・層位	時期	石材	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	剥離	敲打	研磨	備考	写真図版番号
1	J 5 2号住居埋土 7	後期	安山岩	87.0	46.4	24.8	145.7	△	△	○	刃部欠損	19-1
2	J 5 2号住居埋土 6	後期	砂質凝灰岩	65.7	37.7	23.8	86.0	×	○	○	刃部欠損	19-2
3	I 14 土壌 4	晩期	安山岩	65.6	39.9	25.4	97.3	×	×	○	刃部欠損	19-3
4	不明		砂岩	103.1	49.1	30.1	201.0	×	○	○	刃部欠損、欠損面にタール状付着物	19-4
5	J 9 カクラン		砂質凝灰岩	67.8	40.0	19.5	69.5	○	○	○	刃部欠損	19-5
6	K 9 1号住居埋土 5	後期	玢岩	68.0	47.1	29.9	144.2	×	○	○	基部欠損	19-6
7	I 14 土壌 4	晩期	安山岩	76.8	44.9	27.2	154.4	×	×	○	基部欠損、刃部刃こぼれ状剥離	19-7
8	J 14 土壌 3	晩期	砂質凝灰岩	76.5	39.5	24.6	121.1	×	△	○	基部欠損、刃部刃こぼれ状剥離	19-8
9	H 10 I		砂質凝灰岩	84.5	45.4	18.6	133.3	△	×	○	基部欠損、刃部入念な研磨	19-9
10	J 8 1号住居側	後期	安山岩	82.7	48.5	26.8	163.8	△	○	×	基部欠損	19-10
11	J 8 II		粘板岩	97.3	51.0	17.3	122.0	○	×	○	基部欠損、剥片素材か	19-11
12	J 14 土壌 2	晩期	安山岩	84.3	51.8	42.2	280.2	×	○	×	刃部欠損、細かな敲打痕	19-12
13	H 10		安山岩	85.0	48.1	34.8	200.2	×	○	△	刃部欠損、側面にのみ研磨痕	19-13
14	J 5 カクラン		玢岩	49.9	41.1	33.9	89.2	×	○	○	基部のみ	19-14
15	K 8 カクラン		安山岩	93.9	60.0	34.5	284.4	×	○	×	刃部欠損	19-15
16	H 10		ホルンフェルス	33.3	36.2	21.8	33.3	○	○	○	基部のみ	19-16
17	I 3 II		安山岩	44.8	40.8	26.1	78.6	×	×	○	基部のみ	19-17
18	H 10		安山岩	90.2	54.0	36.1	245.3	△	○	×	刃部欠損	19-18
19	K 8 カクラン		安山岩	64.9	53.9	27.4	177.3	○	○	○	基部欠損	19-19
20	J 6 2号住居埋土 5	後期	玢岩	82.2	54.6	31.2	177.5	○	○	○	基部欠損、正面自然面	19-20
21	J 8 1号住居埋土 1	後期?	砂質凝灰岩	80.5	73.3	40.4	390.5	○	○	○	基部欠損、刃部片面のみ研磨	19-21
22	I 3 II		安山岩	76.5	60.4	38.5	290.6	○	○	×	自然を刃部を利用	19-22
23	J 8 1号住居側	後期	ホルンフェルス	62.4	38.5	27.5	85.3	○	○	×	刃部欠損	19-23
24	J 8 カクラン		砂質凝灰岩	110.7	60.7	34.8	331.0	○	○	×	刃部欠損、自然面を利用	19-24
25	H 10 II		安山岩	95.4	61.0	35.9	331.3	○	○	×	刃部欠損、自然面を利用	19-25
26	J 5 2号住居埋土 4	後期	安山岩	77.1	47.5	28.5	144.5	○	○	×	刃部欠損、自然面を利用	19-26
27	I 3 II	晩期?	砂質凝灰岩	82.8	54.4	24.9	168.8	○	×	×	基部欠損自然面を利用、剥片素材	19-27
28	T P 3 II		安山岩	86.0	59.6	35.3	259.9	○	△	×	基部・刃部側縁欠損、一部自然面	19-28
29	J 3 I		砂質凝灰岩	119.5	48.0	20.8	157.1	○	—	○	片面自然面	19-29
30	J 3 I		粘板岩	104.0	71.4	18.8	131.4	○	—	—	片面自然面	19-30
31	J 10		安山岩	127.1	51.0	31.9	345.6	○	△	—	未製品か	19-31
32	J 8 カクラン		安山岩	125.9	70.7	31.1	428.4	○	×	×	未製品か	19-32
33	J 9 1号住居埋土 2	後期	砂質凝灰岩	140.4	66.0	32.8	482.6	○	○	×	未製品か	19-33
34	J 10		安山岩	89.4	110.8	48.0	772.1	○	○	×		20-1
35	J 8 1号住居埋土 5	後期	安山岩	91.5	120.2	39.7	712.1	○	○	×		20-2

ブを利用し両刃状にしているもの(19・22)もある。

敲打も従って側縁部から始められるのであろう(25・26)。この敲打には粗いもの、緻密なもの等数段階あり、当然、粗い方が先行して行われる。おそらく、敲打終了の段階で、ある程度の成形は完了しており、研磨にはあまり労力を費すことはなかったのではなかろうか。

前述した通り、完形品が少なく、また完成品の割合も低い。剝離・敲打段階にある石斧の破損が何を意味するのであろうか。

形態的には、側縁が面取りされ比較的薄手のものと、礫断面をそのまま残すような厚手のものがあるが、これは工程上の差異もあり、一概に分類できない。

また、かつて宮古市大付遺跡(小田野・熊谷1979)で大量に出土した片面に自然面を残す片刃の打製石斧は、その後田老町小堀内遺跡・宮城県気仙沼市田柄貝塚等で、纏まって出土している。

本貝塚では、29が類似するが、形態や、刃部を自然面側にも剝離を施し両刃状に仕上げる点で相違することから、同種のものとは認め難い。

〔礫 器〕

2点出土している。34は片刃で、するどい刃部が作出される。これに対し、35は両側縁の剝離の上に敲打痕がみられ、刃部の形態を有していない。

C. 磨石・石皿類 (第47・48図)

〔敲石・磨石類〕

礫縁辺の一部に敲打痕あるいは打撃によって生じたと思われる剝離痕があるものを敲石とし、楕円形の自然礫を磨石とした。しかし磨石にも敲打痕・剝離痕がみられる。特に7は凹石状を呈し、両面中央部が敲打により凹んでいる。前述の剝片石器製作に関するものであろうか。

5・6の石材である花崗岩は、他の石器類には用いられない。玉川層等には、花崗岩の円礫も含まれており、これらの供給源はそこに求められよう。

〔円盤状石製品〕

1点のみの出土。北上川北上川流域では多出する遺物である。それらに比べ、やや粗大な印象を受ける。

〔石 皿〕

H10区III層のロームに倒立するように出土した。周縁に粗い剝離が連なり、楕円形に整形している。表裏面が使用され、中央部が薄い断面形となる。

D. 軽石穿孔品及び軽石類 (第49図)

これらは、長三角形に整形し、頭部に穿孔を有するもの(1~4)、一部に擦痕がついたり、穿孔されるもの(5・6)の他、楕円形のもの(7~10)に区分される。

軽石製品は、従来浮子的な用途が考えられてきた。九戸村田代遺跡(遠藤・高橋 1982)では、楕円形であるいは扁平な軽石の自然礫に穿孔した資料が出土している。しかし、1~4のように定形的に整形する例はないようである。

1は、第11図の土器、第61図6の石製垂飾品と共に、1号住居址床面から出土し、上下が接合したものである。石材が軽石のため、折断されたものか否かは判断つきかねた。このような出土状況から、残る2~4についても、単に浮子とは扱えず、装飾品(垂飾品)的な意味のあるものと考えたい。

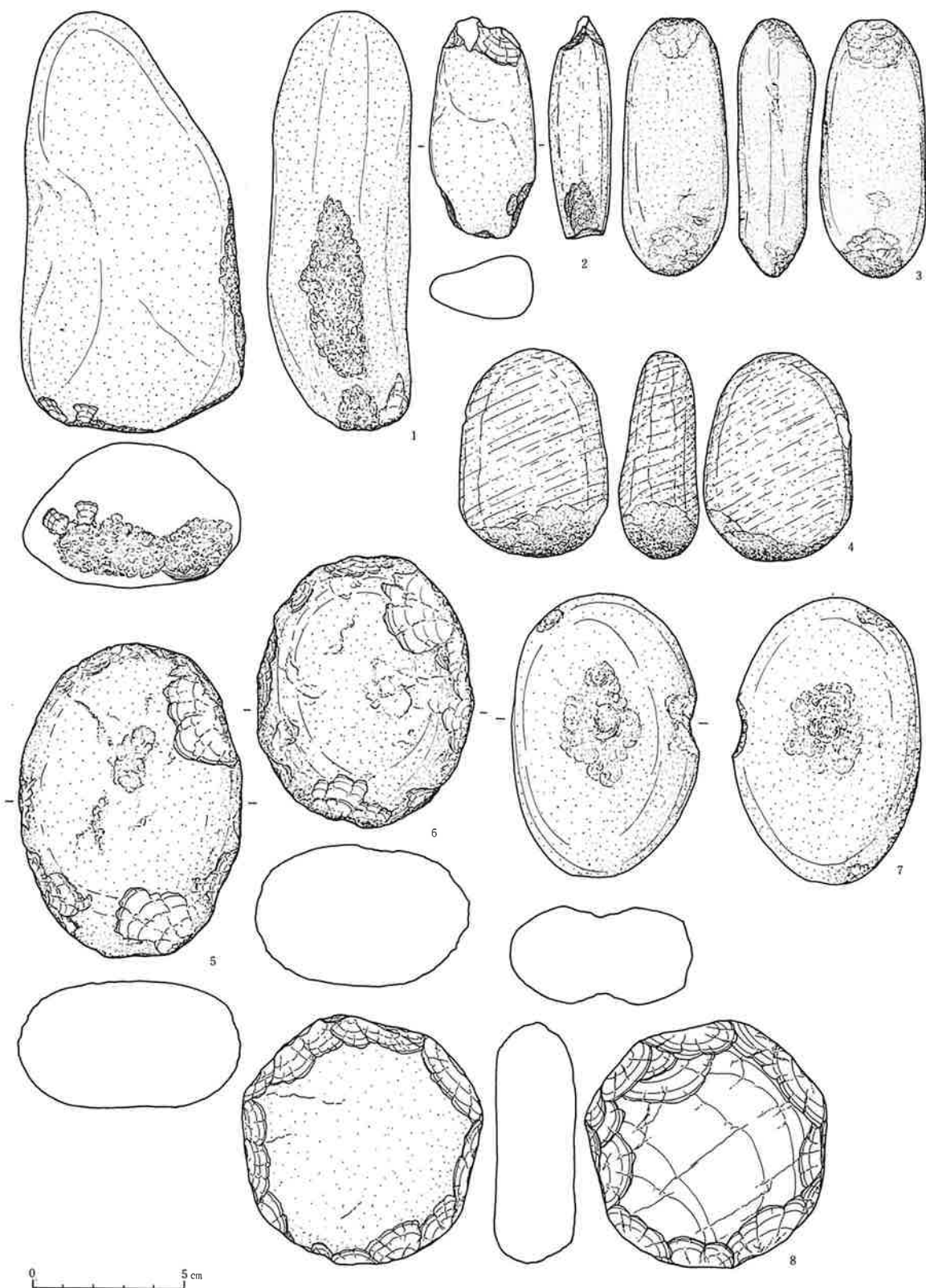
同様な資料は、岩手郡西根町上斗内III遺跡(大原・高橋 1979)、二戸郡安代町水神遺跡(高橋他 1986)の他、新潟県長岡市岩野原遺跡(新潟県史Iによる)等にみられる。上斗内例は長さ6.6cm、幅4.2cm、ややすづまりながら、全体的には三角形に整形され、上部に1ヵ所穿孔される。時期は後期末葉、本貝塚と大体同時期かやや新しい。

水神例は、長さ13.2cm、幅5.5cmで、三角形というよりは、長楕円形に整形され、やはり上部に穿孔される。縄文後期末葉の土坑からの出土で、副葬品の可能性がある。

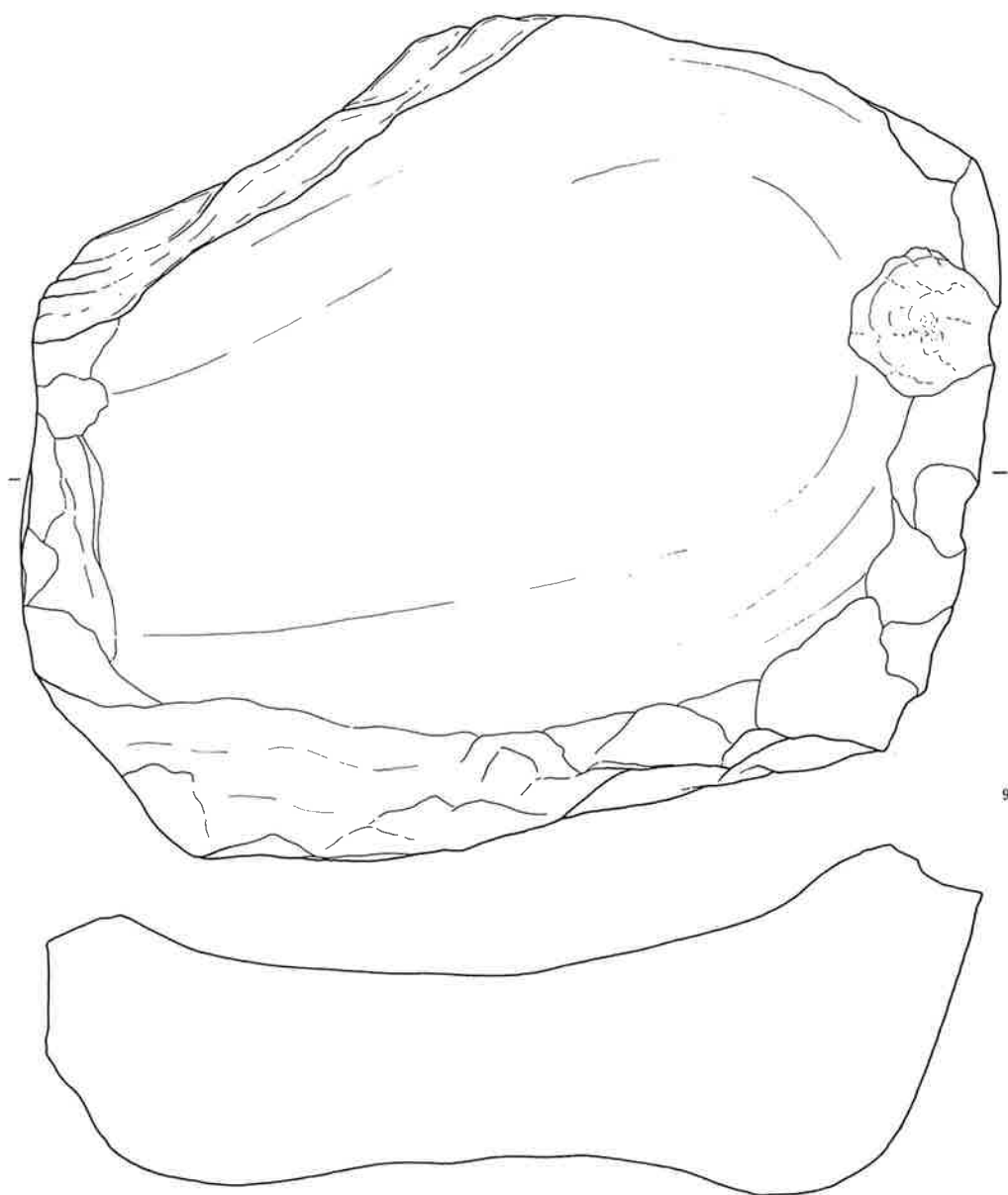
これらの資料は、本貝塚例を含め、時期的にも纏まっており、今後の集積に期待したい。

(熊谷常正)

(註1) 大畑貝塚F地点の出土資料。報告者の鈴木重美氏は旧石器の可能性を示唆されているが、周辺からは弥生式土器が出土しているという。石材は、ほとんどがチャートで占められている。



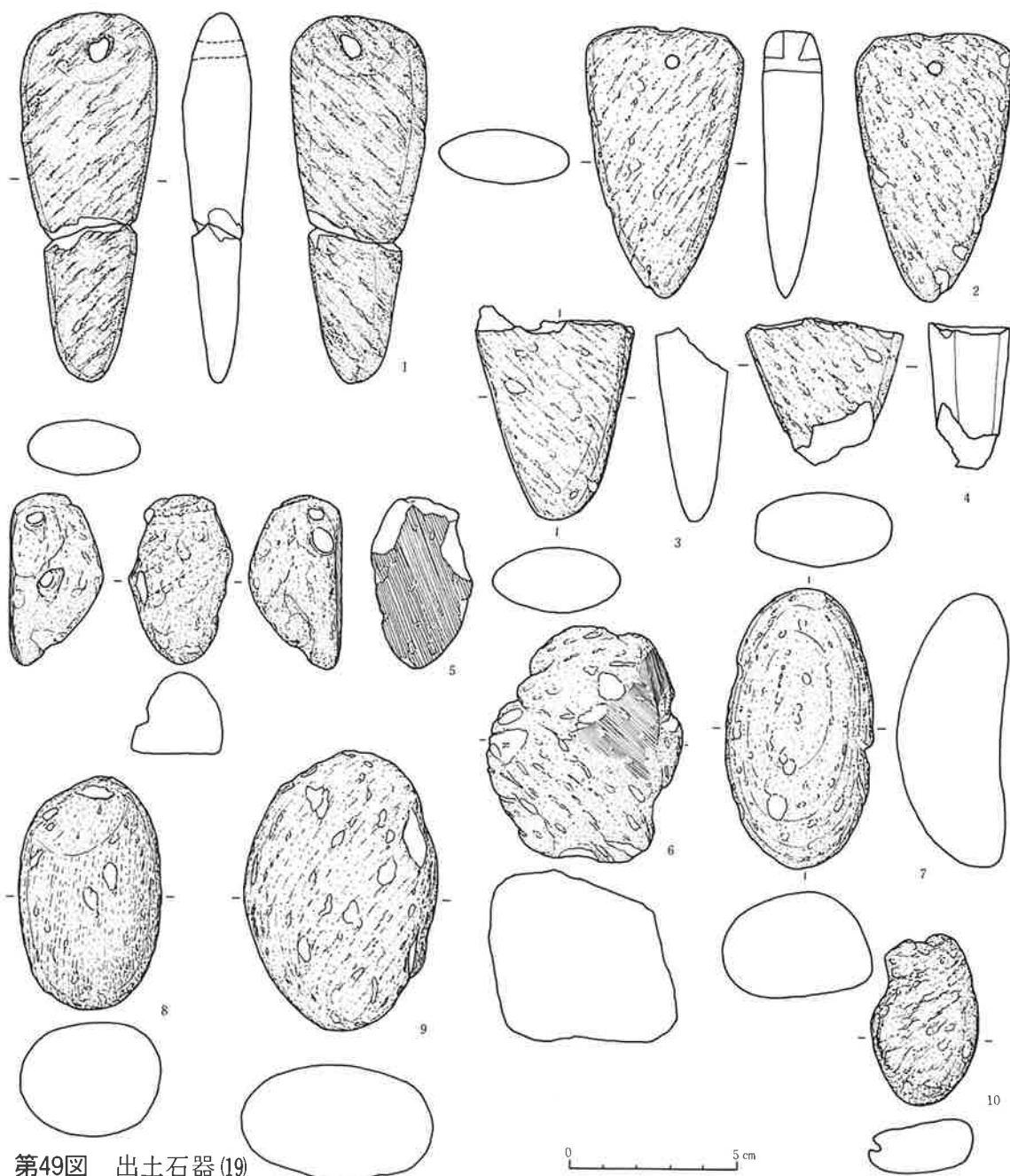
第47図 出土石器 (17)



第48図 出土石器(18)

0 5 cm

番号	グリッド・層位	時 期	石 材	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	備 考	写真図版 番 号
1	J 8 住居炉脇	後期		138.5	74.9	46.7	776.5		20-3
2	K 9	I		72.5	34.0	20.2	69.6		20-4
3	不 詳			85.1	34.8	24.5	126.0		20-5
4	I 9	II		67.4	50.8	26.4	98.7		20-6
5	I 14	I	花崗岩	103.5	72.5	41.8	490.3		20-7
6	I 3	II 晩期?	花崗岩	87.5	70.6	45.4	423.1		20-8
7	I 3	II		92.6	62.0	34.0	199.1	表裏両面が凹む	20-9
8	J 3	I		82.5	80.0	25.1	251.1		20-10
9	H10	II		285.0	223.1	87.5	4,987.0		20-11



第49図 出土石器(19)

番号	グリッド・層位	時 期	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	備 考	写真図版 番 号
1	K 8 住居床面	後期	110.1	41.5	19.0	13.3	穿孔、長三角形に整形、二片接合	26-20
2	K 9 住居埋土 2	後期	80.2	47.1	17.5	21.3	正面→裏面へ一方向の竊孔。上面にも穿孔。長三角形に整形	26-19
3	K 8 住居埋土 3	後期	64.8	47.6	19.6	13.4	上半部欠損	26-21
4	K 9 住居埋土 5	後期	43.1	46.7	24.0	11.3	上半部、先端部欠損	
5	不 詳	?	50.5	30.9	27.3	5.7	側面 2ヶ所穿孔。裏面を扁平に整形	
6	J 8 住居埋土 4	後期	70.6	54.3	50.7	48.2	一部擦痕	
7	J 8 住居埋土 6	後期	83.8	45.1	32.0	19.6		
8	J 8 住居埋土 3	後期	70.2	43.3	33.9	28.4		
9	J 8 住居埋土 2	後期	83.8	57.6	34.4	35.2		26-22
10	J 8 II	?	51.3	32.4	17.9	4.9	一部擦痕?	

3. 骨・角・牙器と貝製品

本貝塚から出土した骨角牙製品及び貝製品は109点で、この他、打割痕・剝離痕・擦切痕を持つ骨角類が多数出土している。これらは、ほとんどが1号住居址埋土から出土している。また、他の動物遺存体についても同様である。

1号住居址は、かなり攪乱を受けているが、埋土は比較的短期間に推積したと考えられる。遺物は、埋土の上位から比較的多く出土している。特別な出土状態を持つものはない。時期的には、ほとんどの資料が、縄文後期末葉に属すと思われる。

〔釣 針〕(第50図1～8)

未製品と思われるものを含め、8点出土している。8は鹿角を扁平に擦り上げ、上下を折断したもので、さらに片側側縁の半分も折りとられている。折断面は比較的粗い。

釣針は軸長からは、長さが2cm以下の小型のもの、3～5cmの中型のものがある。ただし、1のF値(後藤 1983)は0.78となり、2と共に、極小型と呼ぶべきものかも知れない。同程度の釣針は、下閉伊郡岩泉町岩谷洞穴からも出土している(岩手県立博物館 1984)。

1・2は、チモト部の外側に突起を作り出す。3も同様であるが、チモト先端が欠損するため、4のように2ヵ所の可能性もある。3の針先部外側には、僅かに削痕がみられる。おそらく外鏃を付けたものと思われる。外鏃を持つ例としては他に5がある。6・7は、彎曲部が幅広で、完成直前の段階に相当するものであろうか。

〔燕尾形銚頭〕(第50図9)

1点のみの出土。現在のところ、縄文時代のこの種の銚頭として、最北の例となろう。

頭部が長く、その断面が、背腹両縁に稜を持つような楕円形を呈する。尾部は二叉に分かれ、その外側両縁に、細かな刻みが付く。索縄痕あるいはアスファルトの付着等は見られない。

ソケット内部に海綿体組織があり、腹面索孔上部に僅かにそれが表われていることから、鹿角技の先端方向を素材としたものと思われる。

本資料に類似する例としては、田柄貝塚II b—

2類の諸資料の他、気仙沼市浦島貝塚、大船渡市細浦貝塚等で出土している。

〔鏃 先〕

「組み合せ式ヤス」あるいは「挟み込み式ヤス」と呼ばれるものの鏃先に相当すると思われるものを扱う。

これらは頭部が丸味を帯びるもの(10～12)と長く尖るもの(13)、それに両脇に挟りが入るもの(14)等に分かれる。

10は、11・12と比べ大形で、頭部の挟り込みが内彎する側にのみ施される。この種の資料の頭部は、軸部との結合上、外反する側あるいは両側縁が突出するよう設けられるのが普通である。10の胴部に付着するアスファルトの状態も、結合面である外反する側にむしろ多くみられる。そこには一部紐状の圧痕も観察できる。しかし、胴部結合部分は、面取りされ平坦面を作出しているため、一応、大形の鏃先として分類した。

13は、いわゆる「く」の字型鏃先といわれるもので、挟りや突起は持たない。本例と類似する資料が、刺突具に分類した中に逆棘として固定されている(第54図13)。

14は、鹿角を縦割した素材を用い、両縁に浅い挟りを入れるもの、側面形はやや彎曲する。

〔骨角牙鏃〕(第50図15～17)

石鏃と同様、矢の先端に装着したと考えられるものを扱う。

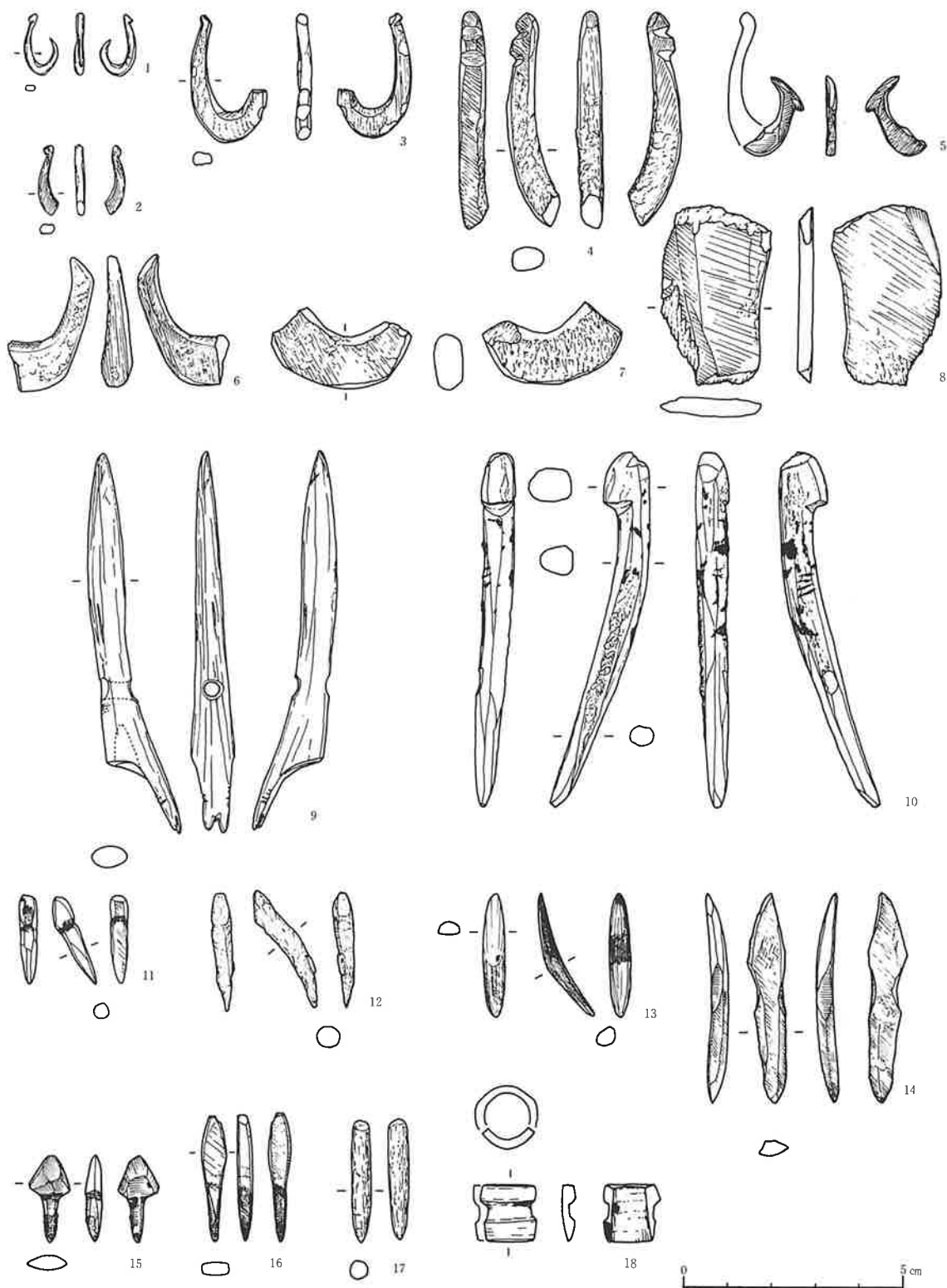
15は、三角形の身部に長い茎部が付く。茎部全面にアスファルトが付着している。素材はイノシシの下顎犬歯と思われる。身部は面取りされ、薄い擦痕状の調整研磨が全面にわたって施される。

16は、細身の楕円形の身部を持つ。やはり長めの茎部にアスファルトが付着する。先端部が僅かに欠損する。

17は、表面が風化し、調整・研磨の状態は把握できないが、形態的には「栓状鏃」に類するものである。

〔弭型角器〕(第50図18)

1点のみの出土。しかも約3分の2を欠く。残



第50図 出土骨・角・牙器(1)

番号	グリッド・層位	材	質	長さ(mm)	幅(mm)	重さ(g)	備	考	写真図版 番 号
1	K 8	埋土 2	鹿角	14.0	7.9	0.1	完形		21-1
2	K 8	埋土 2	鹿角	16.4	4.0	0.1	軸部のみ		21-2
3	J 8	埋土 1	鹿角	28.7	17.0	0.6	チモト部先端、針先端欠損、外縁か?		21-3
4	K 8	埋土 1	鹿角	49.1	11.0	2.0	軸部のみ		21-4
5	J 9	カクラン	鹿角	18.2	13.9	0.2	軸部を欠損、断面扁平		21-5
6	I 9	II	鹿角	30.4	19.9	1.6	軸部を欠損、僅かに鹿角表面を残す		21-6
7	J 8	埋土 6	鹿角	19.4	31.9	2.7	彎曲部のみ、未製品か、裏面全体に海綿体組織		21-7
8	K 8	埋土 5	鹿角	40.6	24.3	4.4	一部鹿角表面を残す。鈎針素材か		21-8
9	J 8	I	鹿角	87.0	9.2	5.1			21-9
10	J 8	埋土 1	鹿角	79.5	22.9	4.1	アスファルト付着、鹿角表面を残す		21-10
11	J 9	埋土 2	鹿角	21.0	10.0	0.3	アスファルト付着		21-11
12	J 8	埋土 5	鹿角?	25.5	13.9	0.5	表面剥落		21-12
13	K 9	埋土 1	鹿角?	28.8	13.0	0.5	アスファルト付着		21-13
14	J 8	埋土 1	鹿角	48.4	5.0	1.3			21-14
15	K 8	II	牙齦	19.6	9.3	0.4	基部にアスファルト付着		21-15
16	J 9	埋土 2	鹿角?	29.1	5.1	0.4	基部にアスファルト付着、先端部一部欠損		21-16
17	J 8	埋土 5	鹿角	27.8	4.7	0.6			21-17
18	J 9	埋土 3	鹿角	13.1	12.1	0.5	アスファルト付着		21-18

存部分から推定すると、最大外径は14～15mm、内径は9～10mm前後となる。弭型角器としては比較的小型の部類に属そう。内面の一部・破損面の一部に、アスファルトとは異なる暗茶褐色の付着物が僅かにみられる。

〔骨 筧〕(第51・52図)

鹿の中手骨あるいは中足骨を縦に分割し、一方を丸味をおびるように加工したもの。破損品を含め9点出土している。

素材としては、中足骨より中手骨を多用するようである。いずれも近位端を基部に用いている。

骨筧は、その素材の分割方法によってこれまで分類されてきた。金子・忍沢らによれば、次のように区分できるといふ(金子・忍沢 1986)。

- A. 横割型
 - ①前面利用
 - ②後面利用
- B. 縦割型
 - ①内側利用
 - ②外側利用
 - ③遠位端側を残す

Aは、素材を前後に二分割する例であり、Bは左右に二分割するものである。田柄貝塚では、この二類型に加え、前後・左右に四分割する例も指摘されている。ここでは、それを一応、Cと呼称しておく。

本貝塚出土の9点の骨筧のうち、近位端の関節面が残り、部位を確定できるのは1・3・5・7の5点に留まる。このうち、Aの横割型、すなわち前後に分割する例は見当らない。他の破片資料でも、断面等から見る限り、A類型は見当らない

ようである。5と6は、近位端関節面や断面の形状から、四分割された素材を利用したと思われる。他は、いずれも左右に分割したものを素材とする。

分割の方法は、後面の凹みに添って擦り切ることから始められる。擦り切りがある程度進み、骨質部が薄くなった時点で、クサビ状の工具によって、打割が行われる。この打割によって二分される訳だが、さらに前面方向、すなわちもう一方の側縁部も擦り切りが行われる。この擦り切りは、骨の内側から成されるものが多い。

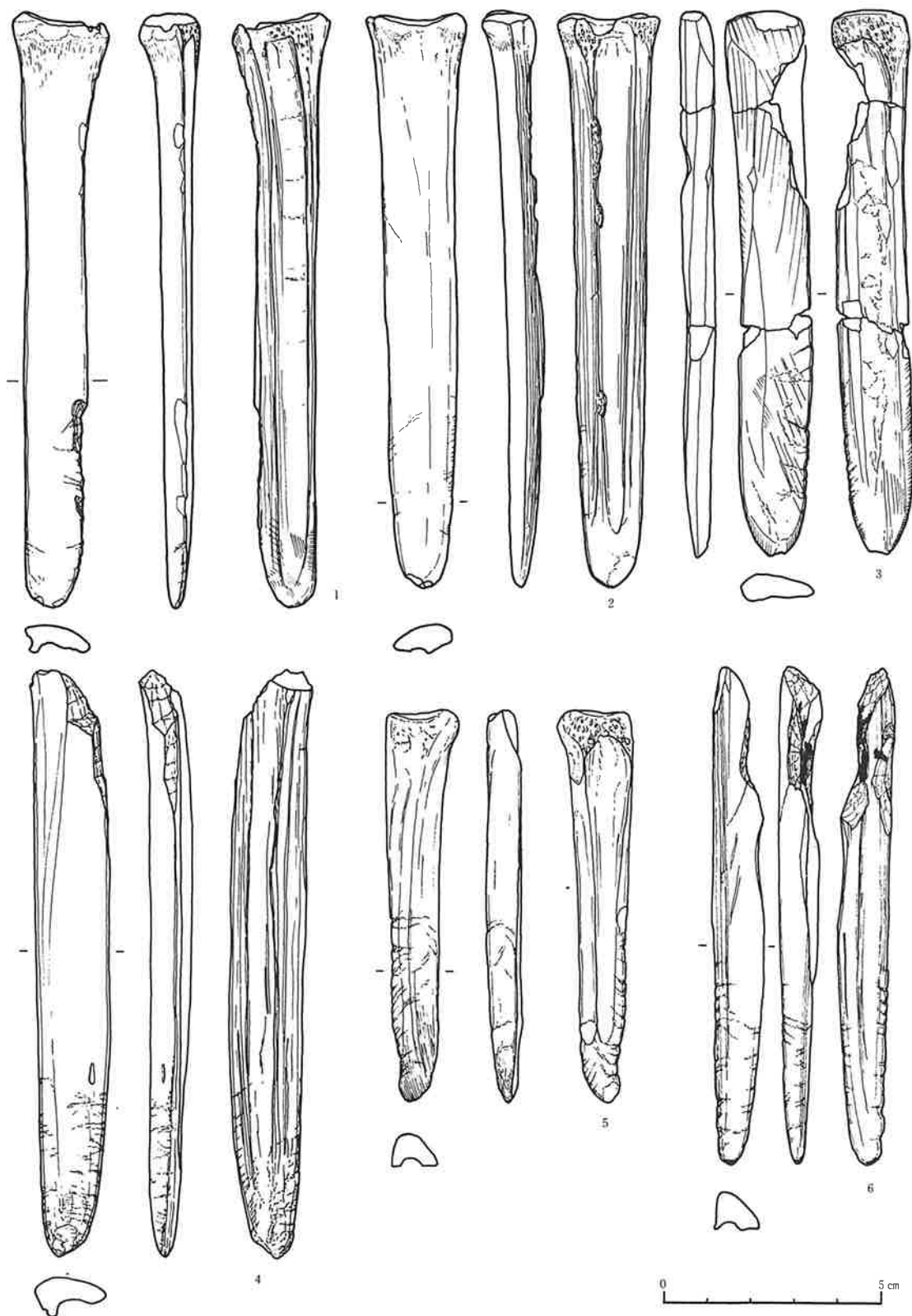
遠位端の関節面を、どの段階で除去するかは明らかではない。しかし、後述する加工痕ある骨片中、遠位端関節部を残す例はないことから、おそらく早い段階で除去されるものと考えられる。

このように整形された骨筧は、次に先端部を中心に丸味を帯びよう調整される。断面は、片縁が骨体後面の高まりの分、厚くなる。使用痕をみると、この厚い方よりは薄い方の側縁の使用痕の方が、基部方向に長く続いている。

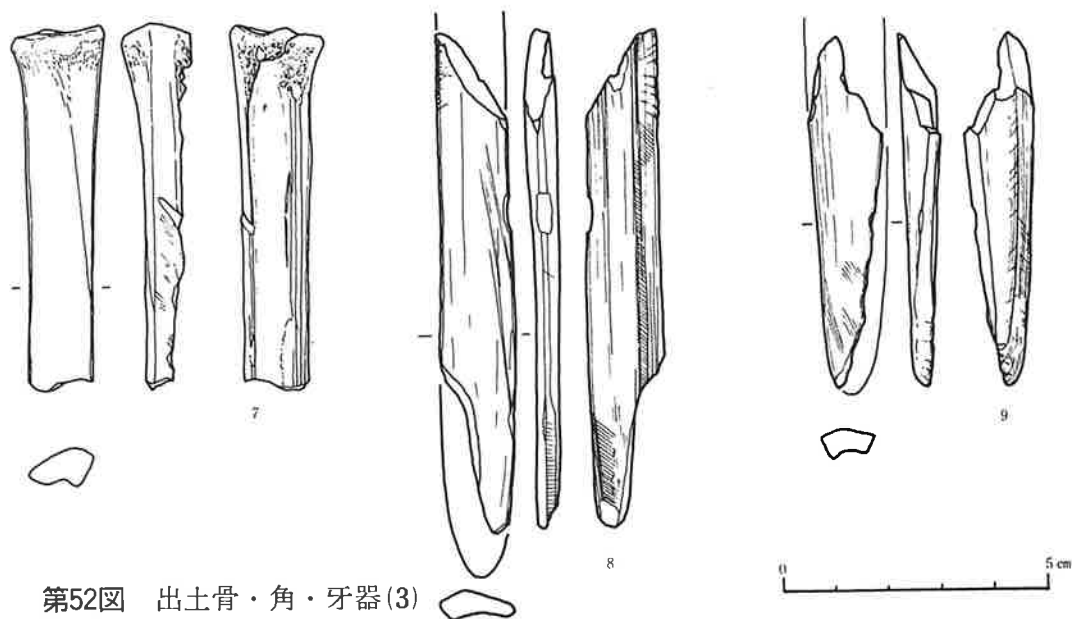
しかし、四分割したと思われ、断面形の異なる5・6に関してはこの限りではない。

使用痕は、線条痕が多いが、1の一側縁にみられる小剝離列も、使用痕とみなした。先端部を中心に使用されるこの骨筧は、使用と共に先端部の刃部の再生が行われ、次第に寸づまり、短くなっていくものと思われる。大船渡市立博物館所蔵に係る同市細浦上の山貝塚出土資料(及川千代松コレクション)には、中足骨全体を利用し、長さ23cmに達するものも見受けられる。

3は、三片が接合した資料であるが、近位端関節面まで面取りが成される特殊な例である。また



第51図 出土骨・角・牙器(2)



第52図 出土骨・角・牙器(3)

番号	グリッド・層位	材 質	長さ(mm)	幅(mm)	重さ(g)	備 考	写真図版番	
1	K 8	埋土 4	シカ右中手骨	136.3	22.8	16.5	外側利用遠位端方向側縁に刃コボレ状剥離	22-1
2	K 8	埋土 2	シカ左中手骨	131.4	23.7	21.1	外側利用、遠位端方向側縁に線条痕	22-2
3	T P. 2、J 8	埋土 3	シカ右中手骨？	124.8	18.6	8.0	三片接合。近位端関節面まで加工	22-3
4	K 9	埋土 1	シカ中足骨？	134.5	17.3	22.0	基部欠損。右か？線条痕あり	22-4
5	K 8	埋土 2	シカ左中手骨	89.7	17.1	8.3	四分割？線条痕あり	22-5
6	K 9	埋土 4	シカ中足骨？	114.1	12.0	10.5	四分割？線条痕あり。基部破損面にアスファルト付着	22-7
7	K 8	埋土 1	シカ左中手骨	68.9	17.8	5.9	前面利用？先端部欠損	22-6
8	J 8	カクラン	シカ中手中足骨	93.7	14.6	5.8	両端欠損	22-8
9	K 8	カクラン	シカ中手中足骨	66.8	13.8	4.5	先端部欠損後利用、基部欠損	22-9

6は、近位端基部に剝離痕があり、そこにアスファルトが僅かであるが付着している。

さて、前述したように本貝塚からは前後に分割するAタイプの骨篋は出土していない。仙台湾周辺の諸貝塚では、縄文後期後半から晩期前半期にはこのAタイプが大半を占めるようである。一方、三陸海岸地域では、田柄貝塚を例にとれば、Aタイプ8点、Bタイプ3点、Cタイプ4点、不明2点と、Bタイプが漸増する。

田柄貝塚から北東へ約30kmの地点にある気仙郡三陸町宮野貝塚(縄文中期末～晩期)では、詳細な所属時期は不詳であるがAタイプが多い。

宮野貝塚より、さらに北に約40km、下閉伊郡大槌町崎山弁天遺跡(草間・他 1974)では、縄文中期末葉(大木9・10式期)の貝層から、6点の骨篋が出土している。内1点に、中手(足)骨独特の縦位の溝が走るものがあり、前面を利用したものと思われる。他はBタイプによる分割が成され

たものである。

宮古市鉾ヶ崎館山貝塚出土資料を記載した中嶋吉兵衛著「先史遺物帖」(1915頃・未刊)には、2点の骨篋が図示されている。これらはそれぞれBタイプ・Cタイプを素材とするものらしい。時期は縄文前期から中期にかけてで、詳細は不明である。

このように見えてくると、仙台湾周辺ではAタイプが主体を占め、三陸海岸南部の気仙地方・本吉地方ではA・B相方存在し、本貝塚ではAタイプを欠きBタイプが主体を占めるという相違点が指摘できよう。ただしこれを安易に「地域差」と捉えることについては、北部沿岸地域での資料の絶対数の不足から差し控えておきたい。ただし、一応可能性のあることは示唆できよう。

なお、気仙地方の諸貝塚から出土する角篋(鹿角を打割・擦切って骨篋状にしたもの)は、出土していない。

〔刺突具類〕(第53～55図)

両端あるいは一端が尖り、骨角針状に整形されたもの、両端を欠損する資料でも骨角針状のものはここに含めた。都合52点を数える。素材・部位も多様である。

1はシカの右中手骨を四分割したものを素材とし、近位端方向を基部とする。分割は打割によって成され、関節部直下から横位・斜位の調整研磨が施される。刃部の調整は雑である。後面に骨瘤状の盛り上りがみられる。

2～4・10はイノシシ腓骨を素材とする。49・50は両端を欠くが、同様な素材であろう。いずれも遠位端を基部とする。4・10は遠位端がはずれる若い個体を素材とする。関節部に特段の加工は施されない。

5・6はシカの中手中足骨を素材とする。5は基部を扁平に加工し、その部分に海綿体組織がみられることから、おそらく近位端関節部に相当しよう。6の基部にも僅かに海綿体組織が観察できる。

8は、一端に切断のための傷が付けられている。9は錐状の細い身部を作り出す。頭部はあまり加工されない。

11・12は両端を尖らすもの。12の体部にはアスファルトが付着する。

13は、一端が尖る細身の骨針に、「く」の字状の鐵先がアスファルトで固定されたもの、鐵先の尾部は欠損する。アスファルトには斜位の凹凸がみられ、これは紐の縛りを表わすものと思われる。

軸部の骨針には、骨体内面と思われる縦位の溝が薄く走る。基部はやや丸味を帯びるが、おそらく再調整されたものと思われる。

14～17は基部を残すもの。16は断面が四角形で稜を残し、調整は粗い。17のような断面三角形を呈する資料は、あまり出土していない。

18～34は、逆に尖る先端部を残すもの。しかし中には21のように丸味を帯び、基部ともとれる例もある。20には間隔をあけ2カ所、25には1カ所アスファルトが付着している。22は骨瘤がみられる奇形骨を素材とする。

30は先端部側面がやや彎曲し、ヘラ状を呈する。33は鳥の管状骨を素材とする。先端部を斜めに削り落とす。34の上端断面も管状を呈するが、33に比

べ骨質が厚い。腓骨もしくは橈骨の可能性があろう。

35～52は両端を欠くもので、少片が多い。断面形は四角あるいは円形を呈するもの(35～46)と、扁平なもの(47～52)に区分できるが、後者は素材の断面をそのまま残しているものが多い。

35にはアスファルトが付着する。45は縦位の溝がみられるが、素材は確定できなかった。焼けている。49・50は、前述したようにイノシシの腓骨であろう。

51はシカ尺骨である。尺骨粗面部分の小片で、前面に僅かに擦痕がみられる。小田島コレクション中の本貝塚出土資料には、この尺骨製刺突具が2点含まれている(写真図版25)。

52は、エイの尾棘。両端を欠き、特に加工は見られないが、エイの遺存体はこれしかなく(サメ類の椎骨はある)、一応、利器として含めておいた。

これらの資料中、特別な出土状態を持つものはない。資料数も多く、また住居址埋土中からの出土資料にもかかわらず、接合した例は僅かに3点(14・15・29)に留まった。接合例は他の骨角牙器でも、骨篋の1点(第51図3)のみであり、全体的な比率は低い。

〔加工痕を残す素材〕(第56・57図)

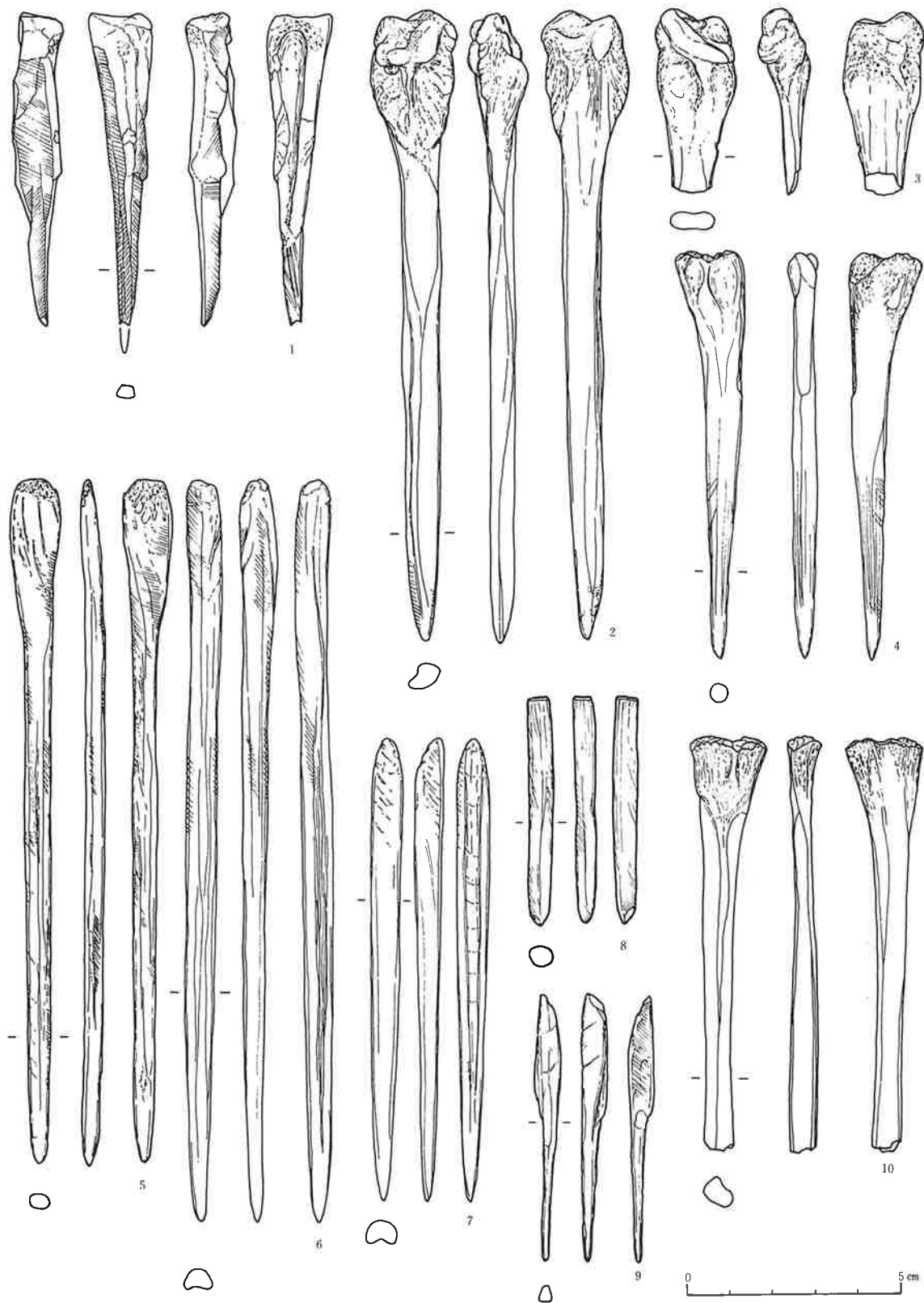
定形的な骨角牙器ではないものの、切断痕・擦切痕・打割痕等、加工の痕跡がみられる資料を掲げた。図示した以外にも、鹿角や中手・中足骨の多くに、さまざまな加工痕を見出すことができた。ここでは一応、鹿角と鹿の中手・中足骨に便宜的に区分してみたい。

○鹿角(第56図)

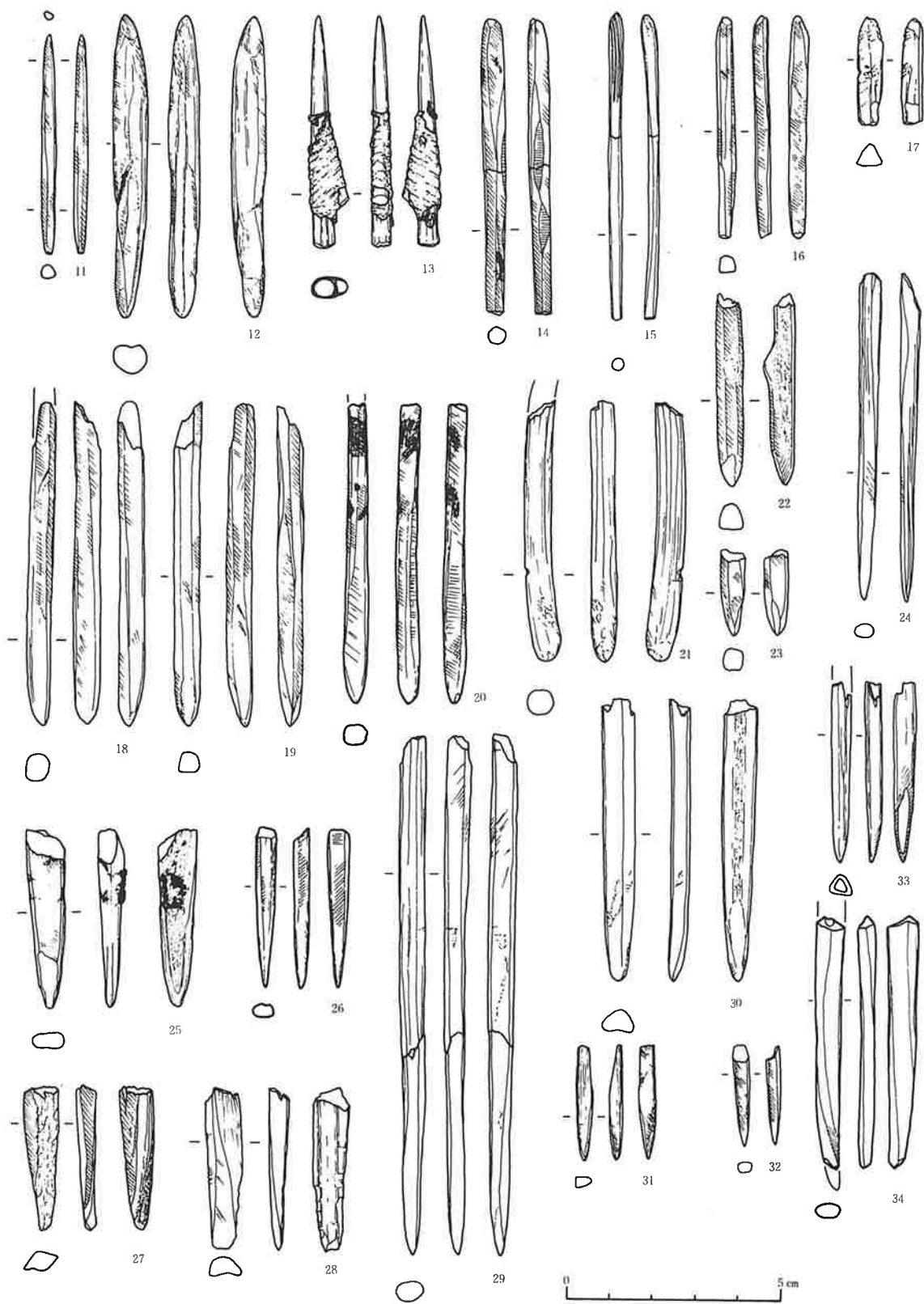
1は角座骨の残る左の角。第1枝の三叉部分で第1枝と角幹を切断している。切断方法は周縁を幾度にもわたって削り落とし、緻密質部分を除去し、海綿体部分が露出した状態で折り取っている。角座骨部分は、冠状縫合の一部が残り、あまり手は加えられていない。

2は、縦位に切断された角幹部で、枝の部分を1と同様に折り取っている。基幹方向の切断面は横位の切傷がみられることから、故意に切断したと思われる。これに対し、先端部にも切傷はみられるが、切断したものか判然としない。

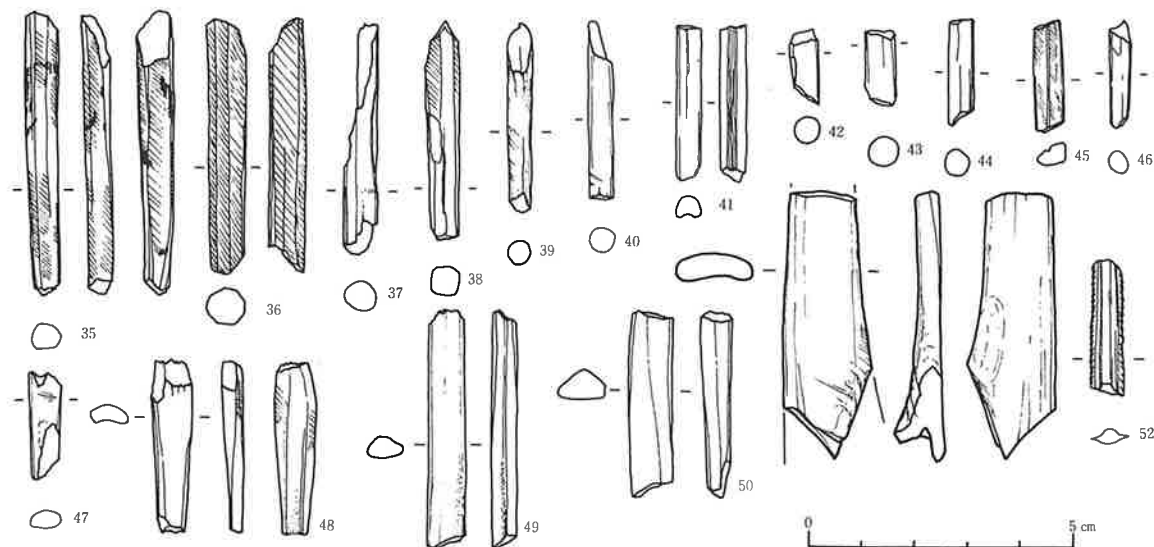
角幹部の擦り切りは、いわゆる「溝付け切断」



第53図 出土骨・角・牙器(4)

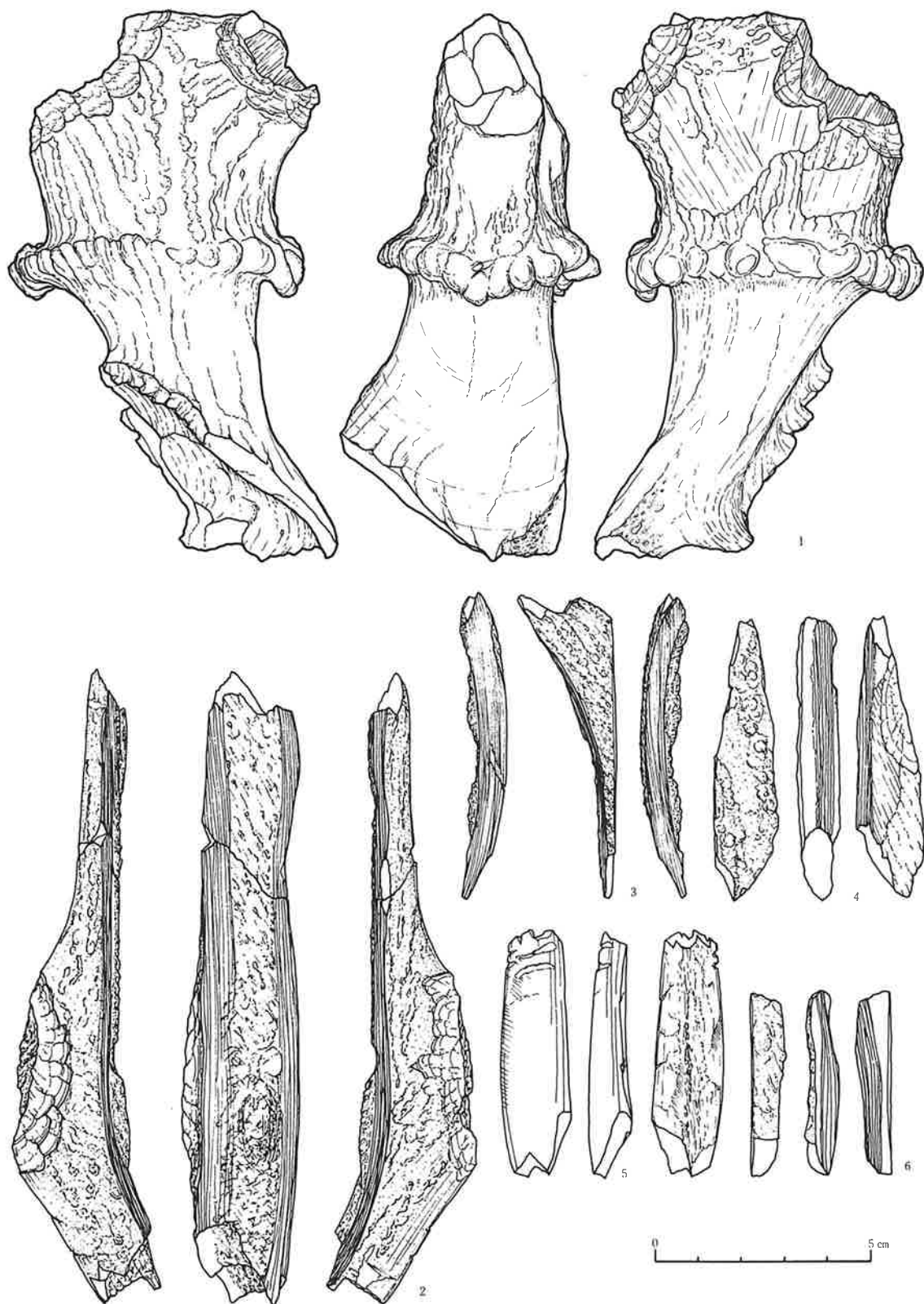


第54图 出土骨·角·牙器(5)

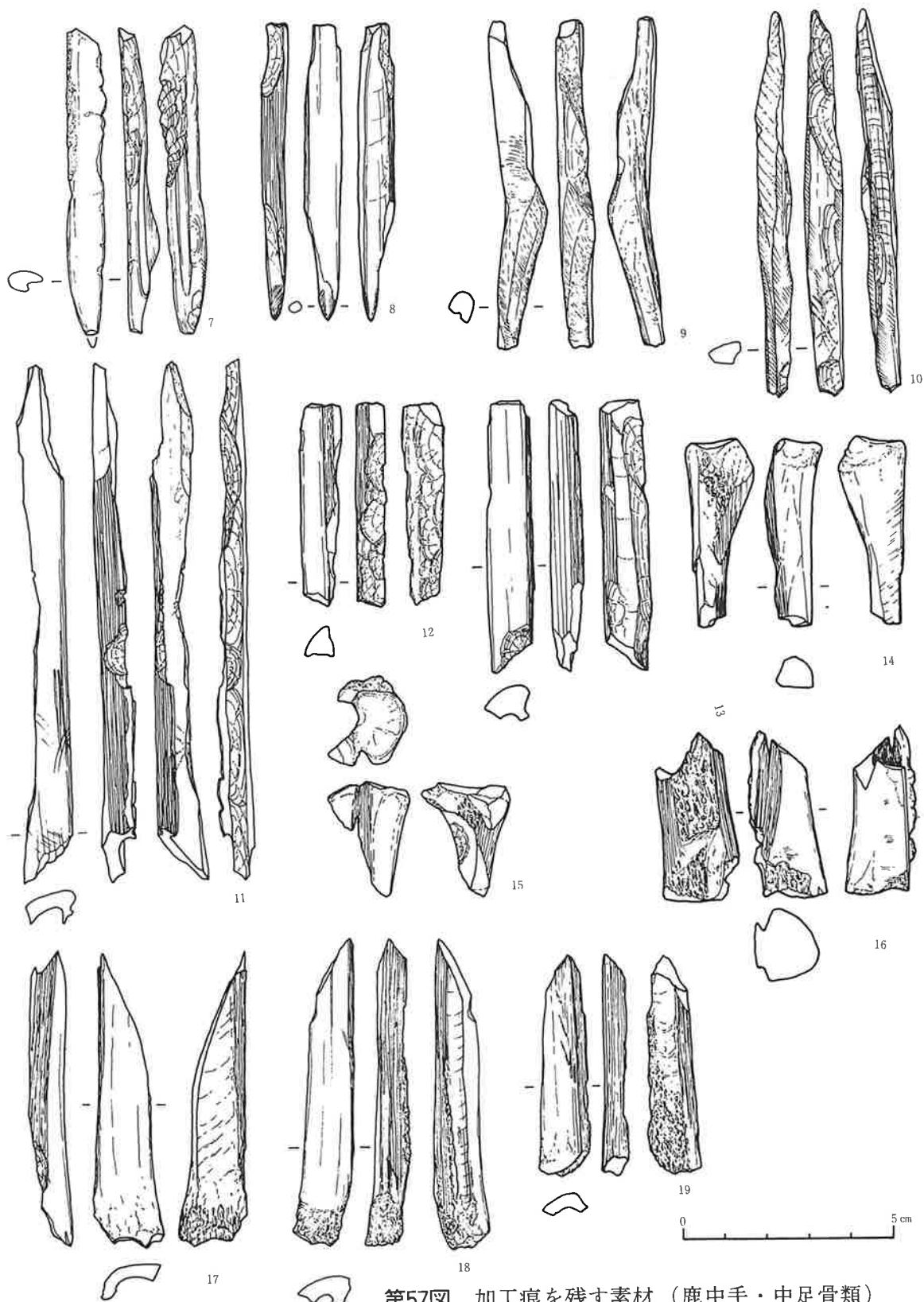


第55図 出土骨・角・牙器(6)

番号	グリッド・層位	材 質	長さ(mm)	幅(mm)	重さ(g)	備 考	写真図版 番 号	
1	J 8	埋土 1	シカ右中手骨	73.5	15.7	4.4	先端部欠損、奇形骨	22-10
2	K 9	埋土 5	イノシシ右肋骨	147.3	21.0	9.3	先端部研磨	22-11
3	J 8	埋土 1	イノシシ左肋骨	42.8	18.7	3.4	遠位端のみ、側縁部に加工痕	22-12
4	K 8	埋土 4	イノシシ右肋骨	94.9	16.4	4.5	先端部研磨。遠位端左側縁剥落	22-13
5	K 8	埋土 3	シカ中手中足骨	160.0	11.8	5.2	基部；近位端	22-18
6	K 8	埋土 3	シカ中手中足骨	174.3	7.7	8.3	全面研磨	22-19
7	J 8	埋土 1	骨	108.0	7.3	4.9	全面研磨。頭部に切断の痕跡	22-17
8	K 8	埋土 1	骨	53.2	5.8	1.7	上端に切断痕	22-15
9	K 8	埋土 1	骨	62.2	5.7	1.2	離状、先端部磨耗	22-16
10	T P. 2	II	イノシシ左肋骨	96.0	18.4	4.4	近位端方向欠損	22-14
11	J 8	埋土 1	鹿角？	51.0	4.2	0.6	全面に斜位の擦痕	23-1
12	J 8	I	骨(中手中足骨？)	70.6	7.0	4.6	体部にアスファルト付着	23-2
13	K 9	埋土 4	骨	54.9	9.6	1.4	縫をアスファルトで固定、基部を再加工。	23-3
14	J 8	II	骨	69.5	5.2	2.1	先端方向欠損、アスファルト付着(2カ所)	23-4
15	J 9	埋土 I・2	骨	72.0	3.0	0.8	先端方向欠損。二片接合。彎曲する	23-5
16	不 明		骨	51.7	4.0	0.7	先端方向欠損、断面方形。僅かにアスファルト付着	23-6
17	K 8	II	骨	25.2	5.5	0.5	基部(?)のみ。断面三角形。	23-7
18	K 8	埋土 1	骨	75.4	6.2	2.9		23-8
19	K 8	埋土 1	骨	75.5	6.0	3.0	先端部に骨体内面残存	
20	K 9	埋土 3	骨	69.6	4.9	2.5	基部方向欠損、アスファルト付着	23-9
21	K 8	埋土 6	鹿角	60.6	6.9	2.5	基部方向欠損、彎曲する	23-10
22	K 8	埋土 1	骨	45.2	6.9	1.9	基部方向欠損、奇形骨？	23-11
23	K 8	埋土 1	骨	20.1	5.7	0.6	先端部のみ	23-23
24	J 8	埋土 1	骨	76.6	4.9	1.6	基部方向欠損	23-12
25	J 8	II	鹿角	41.8	9.2	1.3	先端部(?)のみ、アスファルト付着	23-13
26	K 9	I	骨	37.6	4.8	0.7	先端部のみ。保存良好	23-14
27	K 8	埋土 5	骨	33.4	8.3	0.8	擦切痕残存	23-15
28	K 9	I	骨	37.9	8.2	1.1	擦切痕残存、先端部側縁剥離痕	23-16
29	K 8	埋土 I、3	骨	121.5	6.2	4.7	二片接合	23-17
30	J 8	埋土 1	鹿角	66.0	7.3	2.5	基部欠損、先端部彎曲	23-18
31	不 明		骨	26.7	3.9	0.3	先端部のみ、再利用か	23-20
32	K 8	II	骨	24.0	3.7	0.2	先端部のみ。断面四角形	23-21
33	K 8	I	鳥骨	42.7	5.1	1.1	基部方向欠損、先端部研磨、管状骨	23-19
34	J 8	埋土 5	骨	58.9	7.0	1.5	先端部、基部方向欠損、先端研磨、鳥管状骨か？	23-22
35	K 8	カクラン	骨	54.0	6.4	1.5	アスファルト付着	23-24
36	J 8	埋土 4	骨	48.2	7.0	3.0	アスファルト付着	23-25
37	J 9	II	骨	44.9	6.4	1.2	表面一部剥落	23-26
38	J 8	埋土 1	骨	41.1	6.9	1.4		23-27
39	T P. 1		骨	36.1	4.7	0.8		23-28
40	K 9	I	骨	34.3	4.7	0.7		23-29
41	J 9	埋土 2	骨	29.9	5.0	0.6	擦切痕残存	23-30
42	K 9	I	骨	14.3	5.3	0.2		23-31
43	J 9	埋土 2	骨	14.9	5.8	0.3		23-32
44	不 明		骨	20.9	5.0	0.5		23-33
45	K 9	I	骨	21.4	5.5	0.7	焼骨	23-34
46	不 明		骨	20.7	4.0	0.3		23-35
47	K 9	埋土 1	骨	20.6	5.8	0.4		23-36
48	T P. 2		骨	32.5	8.0	0.9		23-37
49	K 8	I	骨	43.9	6.9	1.7	イノシシ肋骨？	23-38
50	I 10	I	骨	34.7	8.1	1.8	イノシシ肋骨？	23-39
51	K 8	埋土 1	骨	50.1	16.7	3.8	シカ左尺骨	23-40
52	K 9	I	魚骨	25.9	6.4	0.3	エイの尾棘	23-41



第56図 加工痕を残す素材（鹿角）



第57図 加工痕を残す素材（鹿中手・中足骨類）

番号	グリッド・層位		材 質	長さ(mm)	幅(mm)	重さ(g)	備 考	写真図版 番 号
1	K 9	埋土 2	シカ角座骨・角座	127.5	69.0	176.5	左側、角幹、第一枝を切断。	23-42
2	K 8	埋土 1	鹿角	145.5	32.3	27.6	角幹；縦位擦切、枝分岐部切断、両端切断？	23-43
3	J 9	カクラン	鹿角	70.0	22.6	4.1	両側縁擦切痕	23-45
4	K 8	埋土 4	鹿角	65.0	15.6	6.2	一側縁、内側からの擦切	23-47
5	K 8	埋土 1	鹿角	57.0	15.8	6.4	枝先端部、裏面打割状、表面研磨、先端方向切痕	23-44
6	J 8	カクラン	鹿角	42.3	8.1	1.7	両側縁擦切痕（一方は内面から）	23-46
7	J 9	I	シカ中手・中足骨	72.7	9.3	3.3	奇形骨(?)一側縁に剝離列、先端部研磨	23-49
8	J 8	カクラン	シカ中手・中足骨	69.9	8.7	3.2	一側縁擦切痕、先端部研磨（難状）	23-50
9	J 8	II	シカ中手・中足骨	78.0	12.0	4.9	奇形骨、表面研磨後内面からの剝離、先端部研磨	23-52
10	K 8	カクラン	シカ中手・中足骨	89.2	9.6	4.7	右側縁擦切後剝離、左側縁剝離後研磨	23-53
11	K 8	埋土 5	シカ中手骨	123.4	12.0	6.7	後面擦切痕、側面内面からの剝離	23-54
12	J 9	I	シカ中手・中足骨	48.5	9.2	3.0	擦切後剝離	23-48
13	J 9	I	シカ中手・中足骨	63.9	12.0	4.8	後面(?)擦切痕、側面外面からの剝離	23-51
14	J 8	埋土 1	シカ左中手骨	44.6	16.9	3.8	近位端後面、擦切痕	23-55
15	K 8	埋土 1	シカ右中手骨	26.7	24.7	3.4	近位端前面、擦切痕	23-56
16	K 8	埋土 4	シカ左中足骨？	41.0	15.7	5.0	遠位端前面外側、前後に擦切痕	23-57
17	J 8	埋土 4	シカ中手・中足骨	70.4	17.0	4.9	遠位端、擦切痕	23-58
18	K 9	埋土 3	シカ中手・中足骨	72.8	14.0	5.1	遠位端、擦切痕	23-59
19	J 8	II	シカ中手・中足骨	51.9	12.0	2.0	遠位端、擦切痕	23-60

で、角幹のカーブに添い、枝の部分でゆるやかに彎曲する。海綿体部分にかかるところで擦り切りは止められ、割られている。海綿体部分の2カ所に、側面図でいえば左側からのクサビのようなものが打ち込まれた凹みを観察できる。

3・4・6も同じように「溝付け切断」が行われたもの。3は彎曲する方が角幹に添って擦り切られたものと思われ、直線的なものより先行して成されたと考えられる。4・6の擦切痕は内側から行われているもので、特に4は打割して得られたものに加工する特異な例である。

5は枝の先端部で、表面が研磨されるが、これは自然状態の可能性もある。両縁から打割されるもので、角幹部と枝部では切断方法の異なることが考えられる。

○鹿中手・中足骨類（第57図）

加工痕を持つ資料は、特に鹿の中手・中足骨が多い。他の大形骨、たとえば上腕骨・大腿骨・脛骨等は、骨髓食のため打割されることはあっても“加工”というグレードにはならないと考えた。

7～9は、先端部を尖らす。刺突具にも分類できるが、基部方向の研磨等がほとんど成されないため、骨針類と区別する意味で、ここに含めた。7と9は変形骨である。8は先端側縁が剝落した後、再加工している。

10は、剝離によって細く加工し、その後粗い研磨が全面になされる。骨針の未製品であろうか。

骨筧の頃に紹介したように、中手・中足は、前後の溝に添って擦り切られ、左右に分割される。

本資料にも、そのような例が看取できる。

11は、前面の溝に添って擦り切り、左右に分割した素材を、内側からの打割によって細い棒状に加工したもの。12・13は、擦切後、表から打割している例である。おそらく、次の段階が10のようになり、最終的に骨針状に研磨して行くのであろう。すなわち、骨針類の幅の決定は、この打割による剝離によって成され则认为られる。

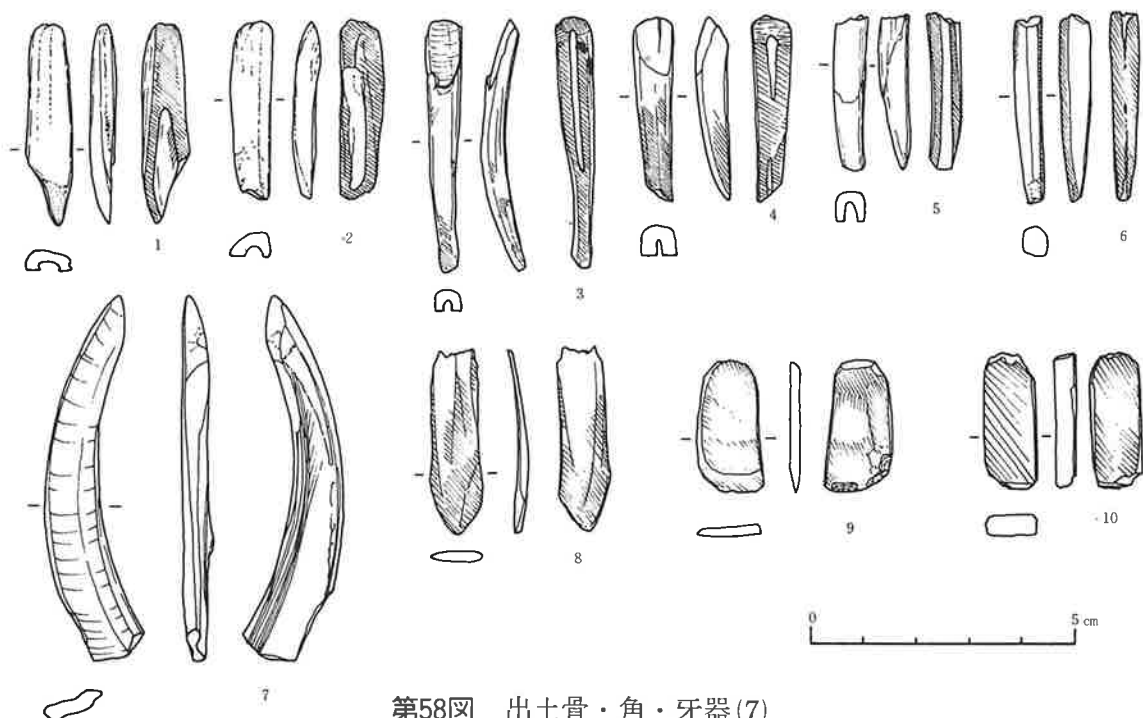
14・15は、近位端関節面を残す例。骨筧の打割法の分類でいえば、14はC類型、15はB類型となる。14は、まず左右に擦切り、その後打割により前後に分割している。しかし、これが一般的であったか否かは一概に結論付けられない。小田島コレクション中の中手骨資料には、前後に打割したものが1点含まれている。

16は、遠位端部分。やはり前後に擦切り、海綿体部分に達したところで割っている。17～19も遠位端方向の資料で、関節部上位に切傷が付けられている。おそらく、擦切以前に遠位端関節部を除去したのであろう。

このような資料から、骨角器等の製作に際しては擦切・打割・研磨がある程度システマ的に存在していたことがわかる。特に、打割が素材から製品へ移行する際に、重要な立場を有していたものと思われる。

〔加工痕のみられる歯牙製品等〕（第58図）

1～6は、イノシシの下顎切歯を素材とし、縦位に分割したもの。分割方法は明らかではないが打撃によると思われるもの(2)、研磨作業を進め



第58図 出土骨・角・牙器(7)

番号	グリッド・層位	材 質	長さ(mm)	幅(mm)	重さ(g)	備 考	写真図版 番 号
1	J 8 カクラン	イノシシ下顎切歯	38.3	8.8	1.7	左第一切歯、歯根部研磨	24-1
2	J 8 カクラン	イノシシ下顎切歯	33.9	8.2	1.5	右第二切歯	24-2
3	J 8 I	イノシシ下顎切歯	47.5	7.0	1.8	右第一切歯、歯根部研磨、エナメル質剥落、アスファルト付着	24-3
4	K 8 埋土 2	イノシシ下顎切歯	34.8	7.5	1.8	右第一切歯、歯根部研磨	24-4
5	J 8 埋土 5	イノシシ下顎切歯	29.8	6.6	1.5	上半部欠損	24-5
6	J 8 埋土 2	イノシシ下顎切歯?	35.8	6.0	1.6	上半部、歯根部先端欠損、管状骨か?	24-6
7	K 9 埋土 6	イノシシ下顎犬歯	69.2	19.1	3.4	擦切痕	24-7
8	不 明	イノシシ犬歯?	35.0	9.9	0.9	全面に擦痕	24-8
9	J 8 II	イノシシ下顎犬歯	24.6	12.7	1.1	エナメル質部、横断	24-9
10	J 9 カクラン	鹿角?	25.8	9.9	1.5	表面面に擦痕、下端に切断痕	24-10

半截状に仕上げたもの(3・4)等がある。左右に分けるものはない。

3は、エナメル質部分にアスファルトが付着する。この部分を装着し、歯根部を刃部と利用した可能性も高い。その歯根部は両面研磨されている。4も同様に、エナメル質部が途中で切断され、歯根部を尖らせる。6は、管状骨の可能性もある。

類例は、千葉県加曽利貝塚・境貝塚等に知られるだけであまり多くはない。歯冠部の切断整形から、小型の「ノミ」状製品と推定する考えもある(金子・忍沢 1986)。

7は、イノシシ下顎犬歯を縦に擦切ったもの。一側縁は内側から擦切られるので、一端擦切ったものを打割して、その後さらに擦切ったと思われる。先端部は僅かであるが、磨耗痕が認められる。鉋として利用されたものか。

〔装飾付骨針〕(第59図1)

頭部に装飾が付けられたもの。1点のみの出土。体部以下を欠く。頭部には一対の突出が付き、中央部も盛り上る。首の部分も膨らむ。全面にわたって朱彩される。

〔椎骨製耳飾〕(第59図2～6)

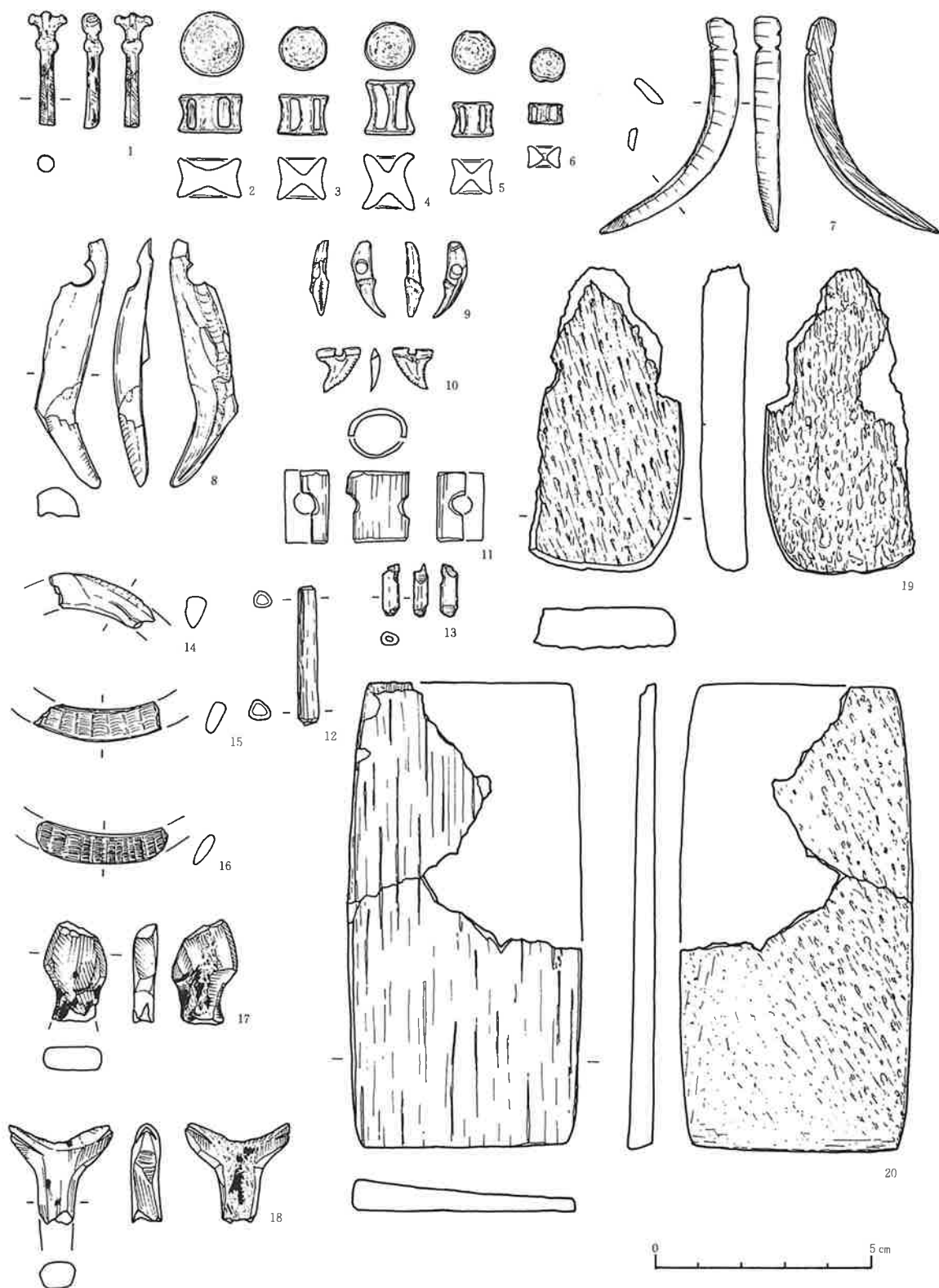
サメ類の椎骨の周縁を研磨したもの。穿孔される例はない。

〔歯牙製垂飾品〕(第59図7～10)

7は頭部に刻みを持ち、素材の彎曲をそのまま生かしている。8は縦に破損している。他例に比べ穿孔位置が末端方向にずれる。

〔管状骨製装飾品〕(第59図11～13)

11は中～大型鳥類の管状骨を切断し、一対の孔を穿ったもの。12～13も管状骨の上下を切断したもの、調整は粗い。



第59図 出土骨・角・牙製品

番号	グリッド・層位	材 質	長さ(mm)	幅(mm)	重さ(g)	備 考	写真図版 番 号
1	TP2	II 骨	26.7	9.0	0.5	頭部装飾、全面朱塗	24-1
2	J8	I 魚骨	8.5	14.3	0.5	サメ椎骨	24-2
3	K9	II 魚骨	9.6	11.0	0.4	サメ椎骨	24-3
4	K8	II 魚骨	12.6	11.4	0.4	サメ椎骨	24-4
5	K9	II 魚骨	8.2	9.6	0.3	サメ椎骨	24-5
6	K9	II 魚骨	4.4	7.9	0.1	サメ椎骨	24-6
7	K8	埋土1 イノシシ下顎右犬歯	56.7	8.0	1.5	頭部に刻み、先端研磨	24-7
8	K8	埋土3 クマ上顎右犬歯	57.8	11.6	3.5	内側面、歯根部に穿孔	24-8
9	K8	埋土2 テン下顎右犬歯	18.3	4.4	0.2	エナメル質部半欠、歯根部先端欠損	24-9
10	K8	埋土3 サメ歯	9.5	10.1	0.1	片面からの穿孔	24-10
11	K8	II 鳥骨	16.4	14.0	0.4	大型(ワシ・タカ類?)の管状骨、上下端切断、穿孔一対	24-11
12	K9	I 鳥骨	32.0	5.2	0.5	管状骨、上下端切断	24-12
13	J9	埋土2 鳥骨	12.3	3.9	0.1	管状骨、上下端切断	24-13
14	K9	I ベンケイガイ?	8.5	26.1	1.3	左殻殻頂部	24-14
15	J8	I アカガイ?	8.7	29.8	1.2	焼痕あり	24-15
16	J8	埋土1 ベンケイガイ?	9.5	30.5	0.6		24-16
17	K8	I 鹿角	23.6	14.6	1.7	アスファルト付着、上下端欠損	24-17
18	J9	埋土2 鹿角	22.8	24.1	1.7	アスファルト付着、頭部両端にスリット、下部欠損	24-18
19	K8	カクラン 鯨骨	70.0	35.0	11.0	肋骨、板状加工	24-19
20	K8	埋土3 鯨骨	107.6	54.3	11.2	下顎骨(吻部)板状加工下端に切断痕残存	24-20

〔貝 輪〕(第59図14～16)

いずれも破片資料であり、15は焼けている。14は殻頂部の破片。

〔不定形鹿角製品〕(第59図17・18)

特異な形態をとる鹿角製品2点を扱う。17は、扁平な菱形に整形し、一端は延びる。その首の部分にアスファルトが付くことから、装着して利用するものであろう。

18は、やや厚手の軸の頭部がふたつに分かれ、その突出部両端表裏に刻目が施される。内(裏)面の海綿体組織部分にアスファルトが付着する。

これらは、装飾品というよりは、利器の部分と考えられるが、全体の形状、用途等については不明である。

〔鯨骨製板状製品〕(第59図19・20)

19は一側縁及び上部を欠く。全面研磨されるが裏面は海綿体組織のため粗い段階に留まっている。正面右側縁は、何か鋭利なものにより、故意に傷付けられている印象を受ける。

20は、19に比べ加工も入念で、海綿体組織の凹凸もほとんどみられない。全体は長方形に整形され、下端にはその際の切断痕も観察できる。断面は一方がやや厚くなる。

板状の鯨骨製品は、三陸海岸南部の諸貝塚では

稀ではないが、このように薄手で、しかも全体の形状がわかる例は貴重である。(熊谷常正)

4. 土製品

〔土 偶〕(第60図1～4)

全て脚部だけの資料で、4点出土している。出土状態等で特殊なものはない。

〔土 玉〕(第60図5)

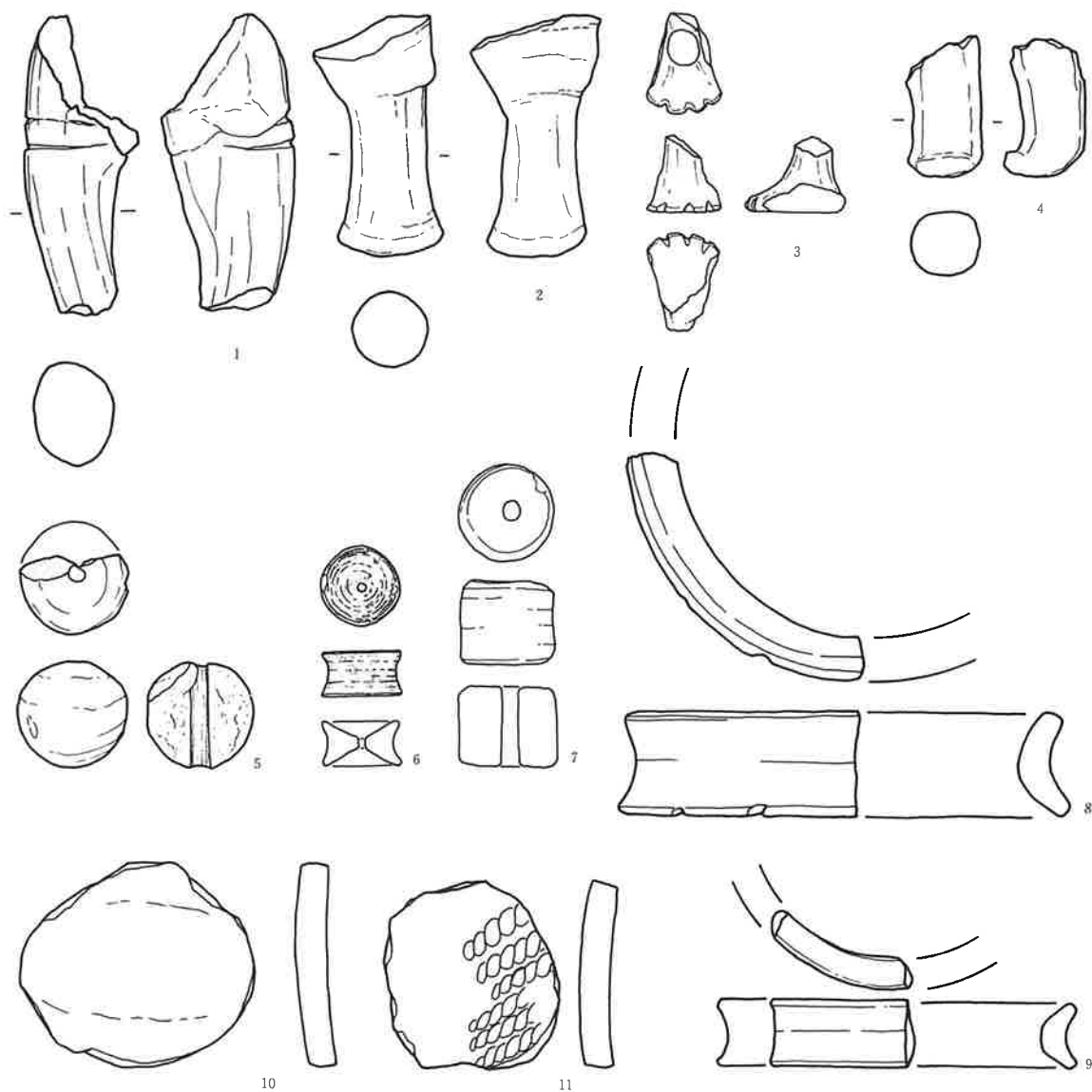
1点のみ出土。球形の粘土に焼成前に穿孔する。表面は磨かれ、光沢を帯びる。

〔土製耳飾〕(第60図6～9)

4点出土している。形態から、魚の椎骨状のもの(6)、円筒状のもの(7)環状のもの(8・9)に分類できる。6は全面朱彩される。8は約4分の1、9は8分の1しか残っていないが、外径は前者が9cm、後者が7cm程度と推定される。

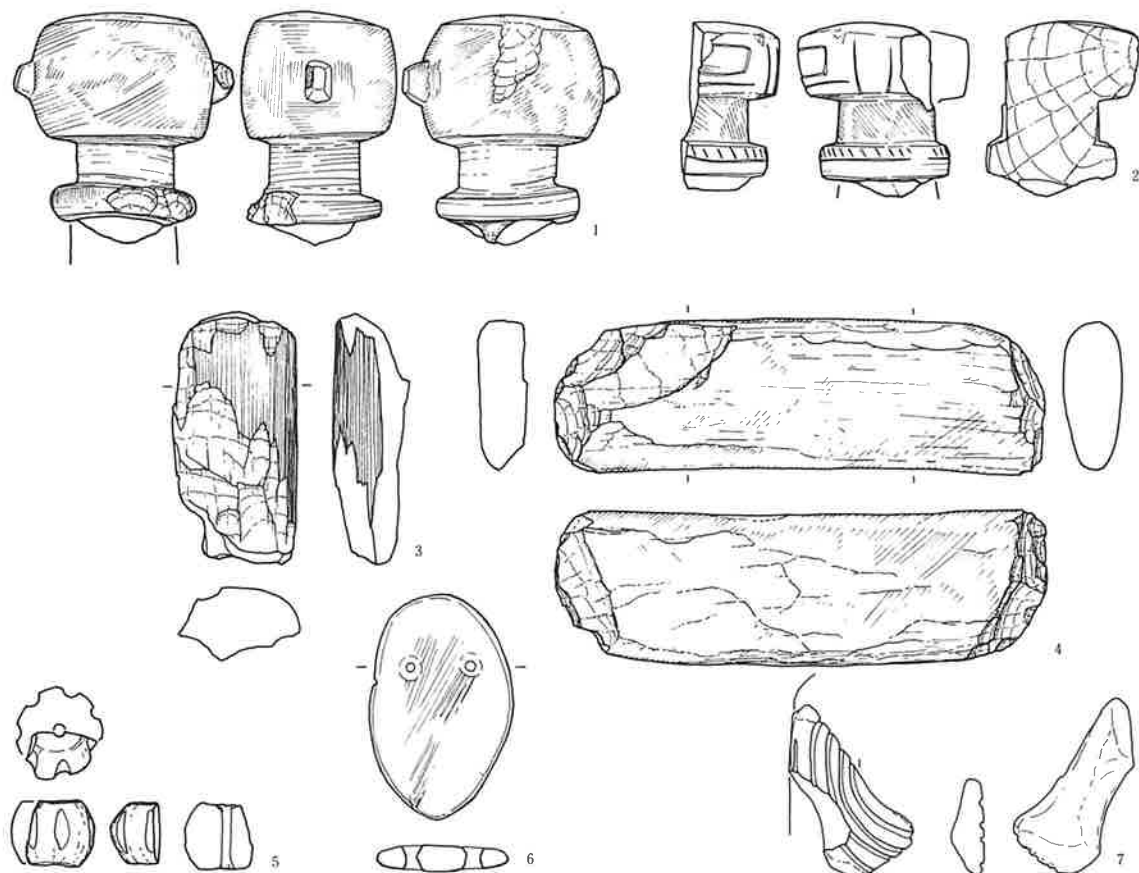
〔円盤状土製品〕(第60図10・11)

2点出土している。いずれも土器片の周縁を打ち欠き、円形に仕上げている。穿孔・研磨はされない。10は無文で、中央部がやや盛り上がることから底部の破片と思われる。



第60図 出土土製品

番号	グリッド・層位	時期	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	備考	写真図版番号
1	J 5 住居埋土 1	後期?	60.5	22.6	25.3	20.7	腰部〜脚部。足先欠損。右脚か? ケズリ (タテ)	26-1
2	J 5 住居埋土 1	後期?	47.2	23.4	22.5	19.4	脚部	26-2
3	K 9 住居埋土 5	後期	14.8	14.8	19.9	2.1	足部、刻目による指の表現。	26-3
4	J 9 住居埋土 3	後期	28.1	15.2	15.0	5.9	脚部	26-4
5	I 9 II		21.1	22.0	16.1	5.8	半欠、全面ミガキ	26-5
6	K 8 住居埋土 2	後期	8.6	15.8	15.7	1.6	全面赤色顔料塗布	26-6
7	J 6 住居埋土 5		15.5	19.3	19.3	7.0		26-7
8	J 8 住居埋土 1		20.5	60.1	9.7	11.7		26-8
9	K 8 住居埋土 2	後期	13.0	30.3	6.8	2.4		26-9
10	J 3 II		40.5	47.2	8.2	18.3	底部片か?、裏面ミガキ	26-10
11	J 5 住居埋土 1		37.8	33.9	6.7	10.0	LR、裏面ナデ	26-11



第61図 出土石製品 0 5 cm

番号	グリッド・層位	時期	石材	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	備考	写真図版番号
1	J 3	II下 後期?	粘板岩	61.6	58.4	40.8	159.3	全面に擦痕	26-12
2	K 8	住居埋土 2 後期?	粘板岩	46.7	40.0	24.4	50.5		26-13
3	I 3	I 晚期	粘板岩	67.9	33.0	18.2	46.8	表面焼痕あり	26-18
4	J 3	II下 晚期?	粘板岩	129.0	40.1	15.6	136.9		26-14
5	J 5	住居埋土 1 後期?	シルト岩	17.1	18.6	12.6	3.2	表面赤色顔料塗布	26-15
6	K 8	住居床面 後期	礫岩	58.7	38.3	6.8	21.4	両面からの穿孔	26-16
7	J 13	土壇 3 層 晚期	シルト岩	45.0	32.9	13.4	4.5	風化著しい。	26-17

5. 石製品類

〔石 棒〕(第61図 1～3)

頭部 2 点、体部 1 点の破片が出土している。

1 の頭部には一対の突出が付く。和賀郡東和町石鳩岡遺跡出土の人面付石棒に類似する。石鳩岡例では、その突出部が鼻にあたり、両隣に目と思われる菱形状文が配される。

2 のような例は、九戸郡軽米町大日向遺跡(田鎖・高橋他 1985)、二戸郡一戸町小井田IV遺跡(渡辺・栃沢 1983) 等から出土している。

〔石 刀〕(第61図 4)

内反りの刃部を持つ胴部破片。全面に薄い擦痕がみられる。両端は、粘板岩特有の階段状剥離に覆われ、欠損している。

〔石製垂飾品〕(第61図 5・6)

5 は表面が朱彩される。6 は 1 号住居址床面から、第11図の土器、第49図の軽石穿孔品と共に出土した。扁平な自然礫で、表裏面に薄く擦痕がみられる。やや上部に一対の穿孔が両面から行われている。

〔岩 版〕(第61図 7)

小破片で、しかも片面を欠くためモチーフは把握できない。数条単位の渦巻文をとると思われる。

6. 自然遺物

根井貝塚からは各種の動物遺存体のほか、植物遺存体も僅かであるが出土している。さらに後述するように、調査区南端の土壤に含まれる花粉の分析も行った。

これらの遺存体は、発掘時に現地で取りあげたものもあるが、微細な資料については、館へ持ち返った1号住居址埋土を水洗選別することによって得られたものである。骨角器類と同様、動物遺存体はこの1号住居址埋土中を主体に出土している。時期的には、縄文後期末葉に相当する。

しかし、この住居の埋土は大半が攪乱を受けており、その攪乱部からも多量の資料が得られている。従って、ここでは出土遺存体を、種別に分類し、層位の確実な資料はその都度註記することとした。

さて、出土遺存体は破碎しているものが多く、原形態を留める例は少ない。さらに館蔵の骨格標本の不備そして担当者の同定能力の不足も加わるため、同定できなかった資料の多いことをお許しいただきたい。

なお、動物遺存体の同定・分析に関しては、早稲田大学金子浩昌氏、東北歴史資料館岡村道雄氏、国立歴史民俗博物館西本豊弘氏、陸前高田市立博物館佐藤正彦氏、宮城県教育委員会菅原弘樹氏を始め多くの方々から指導をいただいた。

〔植物遺存体〕

クルミ *Juglans sp.*

炭化種子が2号住居埋土7層、1号住居埋土3層から1点ずつ出土している。前者は炉に近接する地点の出土である。

〔動物遺存体〕

I. 軟体動物 MOLLUSCA

i ; 腹足綱 GASTROPODA

1. クロアワビ *Nordotis discus* (REEVE)

2 [K・8埋土3]

いずれも破片で、背側縁の孔列部分のみ。

2. ユキノカサ *Acmaea (Niveotectura) pallida* (GOULD)

2 [J9埋土2・3]

いずれも殻頂を欠く。

3. クボガイ *Chlorostoma argyrostoma lischkei* (TAPPARONE CANEFRI)

稀少

4. コシダカガンガラ *Omphalius rusticus* (GMELIN)

稀少

5. タマキビ *Littorina brevicula* (PHILIPPI)

多出

6. クロタマキビ *Neritrema sikana kurila* (MIDDENDORFF)

多出

7. アラレタマキビ *Nodillittorina granularis* (GRAY)

3

8. チヂミボラ *Nucella heyseana* (DUNKER)

多出

9. エゾチヂミボラ *Nucella freycineti* (DESHAYES)

15

10. レイシ *Thais bronni* (DUNKER)

稀少

11. イボニシ *Thais clavigera* (KÜSTER)

稀少

12. ヒメエゾボラ *Neptunea (Barbitonia) arthritica* (BERNARDI)

5

ii : 掘足綱 SCAPHOPODA

1. ヤカドツノガイ *Dentalium (Paradentalium) octangulatum* DONOVAN

1

ii ; 二枚貝綱 BIVALVIA

1. アカガイ *Scapharca brughtonii* (SCHRENCK)

1 [J8・I]

貝輪に加工したもの

2. ペンケイガイ *Glycymeris (Veleutacea) albolineata* (LISCHKE)

2 [K9I・J8埋土1]

貝輪に加工したもの

3. イガイ *Mytilus coruscus* GOULD

発掘時には比較的目についた。しかし、殻頂部を残存する例は僅かに7点に留まった。

4. ムラサキインコ *Septifer (Mytilisepta) Virgatus* (WIEGMANN)

イガイと同様、殻頂部は少なく、5 点に留まる。

5. ホタテガイ *Patinopecten (Mizuhopecten)*
yessoensis (JAY)

2. [K 8 埋土 3・攪乱層]

耳部を有する破片が 1 点ある。

6. マガキ *Crassostrea gigas* (THUNBERG)
稀少

7. ウチムラサキ *Saxidomus purpuratus*
(SOWERBY)

2 [K 8 埋土 2・J 8 埋土 3]

8. オニアサリ *protothaca jedoensis*
(LISCHKE)

1

9. アサリ *Tapes(Awygdala) philippinarum*
(A.ADAMS et REEVE)

4

発掘時には、全く目に付かなかった。

根井貝塚出土の貝類は、以上の巻貝 12 種、二枚貝 9 種である。他に陸産貝のキセルモドキ *Mirus reiniana* (KOBELT) が 2 点、微細なパツラマイ *Discus pauper* (GOULD) が 27 点出土している。しかし、これらは越冬時の混入によるものと考えた。

多出した貝類は、タマキビ・チヂミボラ等の巻貝で、二枚貝は破損しているものが多く、発掘時に比較的目的立ったイガイ・ムラサキインコなども殻頂部の個体数把握になると激減した。

巻貝については殻軸の残る資料について個体数を算出し、約 700 を数えたが、そのうち同定できたのは半数以下である。多出した下表の四種に関しては、本来ならば殻高を計測すべきであろうが殻頂を欠損するものが多いため、殻径の数値による分類を行った。

[計測した貝類の殻径分布表] (単位=mm)

	6~8	8~10	10~12	12~14	14~16	計測不能	個体数
タマキビ	9	17	34	24	1	8	93
クロタマキビ	11	20	17	15	3	11	77

	7~12	12~17	17~22	22~27	27~	計測不能	個体数
チヂミボラ	13	46	26	3	1	30	119
エゾチヂミボラ	1	2	6	2	0	—	11

出土貝類の定量的構成・分析は前述のような状況にあるため充分把握できなかった。貝層自体が“貝塚”と呼べるに値しないほど貧弱であったことが主要因であろうが、一応岩礁性の貝類を主体としていることはうかがえる。

しかし、食用に資するような貝が少なく、種類も限られている。特に、タマキビ・クロタマキビ等は、食用にするため目的的に採集したとは考えにくい。おそらく、根井貝塚人にとって貝の捕食は主要なものでなかったと考えられる。

II. 節足動物 ARTHROPODA

i. 蔓脚亜綱 CIRRIPIEDIA

1. フジツボ科の一種 *Balanidae gen. et sp. indet.*

散見。破片のみ。2 種に区分できる。

III. 脊椎動物 VERTEBRATA

i. 軟骨魚綱 CHONDRICHTHYES

1. ネズミザメ科 *Lamnii formes*

歯 1 [K 8 埋土 3]・椎骨 21

科以下の同定はできなかった。椎骨の中には耳節として周縁が研磨されたもの 4 点を含む。大形のものはない。

2. トビエイ科 *Myliobatidae gen. et sp. indet.*

尾棘 1 [K 9 I]

第 55 図 52 に示した。両端を欠損する。

ii. 硬骨魚綱 OSTEICHTHYES

1. ニシン科 (マイワシ) *Clupeidae gen. et sp. indet.*

椎骨 2

非常に少ない。

2. サケ科 *Salmonidae gen. et sp. indet.*

椎骨 11 [K 8 埋土 3 他]

横径の最小のものは 6.2mm、最大は 12.6mm で、平均は 8.3mm 前後になる。

3. ウグイ *Tribolodon hakonensis* (GÜNTHER)

咽頭骨 (R) 1

4. マグロ *Thunnus thynnus* (LINNÉ)

椎骨 1

横径 42.0×長 36.8

僅かに椎骨 1 点の出土に留まった。比較的大形

の標本である。マグロは三陸海岸の貝塚から出土する魚骨の中で最も特徴的なものといわれている。事実、気仙地方の諸貝塚はもとより、宮古市鯨ヶ崎館山貝塚からも多数出土している。その点で本貝塚の特徴の一断面と考えることもできよう。

5. カツオ *Katsuwonus pelamis* (LINNÉ)

主鰓蓋骨 (R) 1、鎖骨 (R) 2・(L) 1、
歯骨 (L) 1、方骨 (R) 1、椎骨32

比較的多出した。椎骨に比べ頭骨類の保存状態はあまり良くない。椎骨は大体同じ大きさで、二個連らなって出土したものもある。

6. マサバ *Scomber japonicus* HOUTTUYN

角骨 (R) 1、椎骨2

7. ブリ *Seriola quinqueradiata* TEMMINCK
et SCHLEGEL

前上顎骨 (L) 1、歯骨 (L) 4、方骨 (R)
1・(L) 1、椎骨3

頭骨は比較的小形のものが多い。椎骨はそれに比べ大形で、計測可能な1点は横径19.2mmを計る。

8. スズキ *Lateolabrax japonicus* (CUVIER et
VALENCIENNES)

前鰓蓋骨 (R) 2・(L) 1、前上顎骨 (R)
2・(L) 3、主上顎骨 (L) 1、椎骨8

9. マダイ *Pagrus major* (TEMMINCK et
SCHLEGEL)

前頭骨2 [K9埋土3・5]、上後頭骨3、副蝶
形骨1、前鰓蓋骨 (L) 1 [J8埋土5]、主鰓
蓋骨 (R) 3・(L) 1 [K9埋土2・3他]、
前上顎骨 (R) 10・(L) 7 [K8・9、J8・
9埋土2~5]、主上顎骨 (R) 5・(L) 6 [K
8埋土2・3他]、口蓋骨 (R) 2・(L) 2、
歯骨 (R) 7・(L) 11 [K8・9、J8・9
埋土2~5]、角骨 (R) 5・(L) 5、方骨 (R)
3・(L) 1、舌顎骨 (L) 1、後側頭骨 (R)
1・(L) 4、上擬鎖骨 (R) 1・(L) 1、
肩甲骨 (L) 2、椎骨32

本貝塚で多出した類のひとつである。頭骨部から推定できる個体数 (10個体程度) に比べ、椎骨の出土量は非常に少ない。小田島コレクション中にも、前頭骨・前上顎骨・歯骨の資料が含まれて

おり、本貝塚を特徴付ける魚種といえよう。なおこの他にも骨瘤が4点出土している。

貝塚出土のマダイに関しては、前上顎骨・歯骨等を基に体長推定が行われている。その結果、ある程度以上の大形の個体しかみられない傾向にあるという (赤沢 1983)。

本貝塚出土の前上顎骨・歯骨標本は破損例が多く数量的にも貧弱であるが、それでも大形の個体の多いことがうかがえる。

[マダイ前上顎骨長計測値] (単位=mm)

R: 55.0、48.1、51.6、48.0、41.2、(46.6)、
(26.5)、(28.8)、(26.9)、(30.4)

L: 57.2、45.2、43.0、(46.6)、(36.4)、(35.2)
(12.0) ()内の数値は破損資料

10. カワハギ科の一種 *Monacanthidae* gen. et
sp. indet.

背鰭棘2

11. カサゴ類 *Scorpaenidae* sp. indet.

鋤骨1、前鰓蓋骨 (R) 7・(L) 1、主鰓蓋
骨 (R) 4・(L) 3、主上顎骨 (L) 1、歯
骨 (R) 2・(L) 2、角骨 (R) 1・(L) 1、
舌顎骨 (R) 2・(L) 1、椎骨20

マダイ・アイナメ類と共に多出した。比較的大形の個体が多い。

12. アイナメの一種 *Hexagrammidae* gen. et sp.
indet.

副蝶形骨1、前顎骨 (R) 5・(L) 1、主上
顎骨 (R) 2・(L) 3、歯骨 (R) 1・(L)
1、角骨 (L) 1、方骨 (L) 1、舌顎骨 (R)
1、角舌骨 (L) 2、椎骨68。

マダイに次いで多出した。むしろ椎骨ではマダイより目についた。前上顎骨長は、破損しているものの、大体20mm程度に揃うと思われる。

13. カレイ科 *Pleuronectidae* gen. et sp. indet.
椎骨3

根井貝塚出土の魚類は、以上の15種を数える。この他にも種の同定ができなかったものとして、いくつかの頭骨と多数の椎骨があることを記しておく。なお、大部分の棘と鱗は同定の対象から除外している。

貝層の貧弱な割には、魚骨に恵まれたと思われ

る。特にマグロを欠き、マダイが顕著な点が特徴的である。マダイは現在この地方では、ほとんど水揚げされない。稀に津軽海流(対島海流の分流)の南下に伴って捕獲されるという。従って、計画的に捕獲するにはかなりの困難があると思われる。しかし、根井貝塚人が頭骨・椎骨の不均衡、大形魚に限定されること等から、目的的に捕えた可能性が十分に考えられよう。

一方、根魚の代表種ともいべきアイナメ類の存在に比べ、他貝塚で多量に出土するイワシ・サバ類の少ない点が注目される。サケ科は椎骨のみの出土であるが、北に玉川、南に安家川を有する本貝塚の位置からして、捕獲環境は充分であったろう。

iii. 爬虫綱 PEPTILIA

1. ヘビ目の一種 *Ophidia fam. indet.*

椎骨 1 [K 8 埋土 2]、120 [1 号住居床面出土土器内]

土器内部から出土した骨は椎骨と肋骨で、頭骨類は欠いている。椎骨は 2~4 個連結した状態で出土している。土器の容量からして個体をそのまま入れたとは考え難い。おそらく、輪切りにし、さらに肉を剥ぎ落してから入れたと思われる。

iv. 鳥綱 AVES

1. キジ *Phasianus (colchicus) versicolor* VIEILLOT

上腕骨 (L) 1、中手骨 (R) 3・(L) 2、肩甲骨 (R) 7・(L) 4、大腿骨 (R) 1、脛骨 (R) 1・(L) 1、中足骨 (L) 1、鳥口骨 (R) 6・(L) 5、肋骨 (近位端 R) 1

2. ガン・カモ科 *Anatidae gen. et sp. indet.*

肩甲骨 (R) 1、鳥口骨 (R) 1

3. ガン・ヒシクイ類 *Anser sp. indet.*

上腕骨 (R) 1 [K 8 埋土 4]

4. ワシ・タカ類? *Accipitridae sp. indet.*

上腕骨? 1 [K 8 II]

両端を切断し、一対の穿孔を施した製品 (第59 図11)。ややいびつな断面形を呈する。

鳥類の遺存体中、最も多かったのはキジで、他は稀であった。ガン・ヒシクイ類の上腕骨は近位端方向の破片で、関節面は欠く。前面外側からの加撃により、縦位の溝があげられている。これと加工品である 4 を除いて、鳥骨は比較的原形態を残す例が多い。焼骨が 3 点みられた。

v. 哺乳綱 MAMMALIA

1. ノウサギ *Lepus brachyurus* TEMMINCK et SCHLEGEL

肩甲骨 (R) 2 [K 8 埋土 4・J 8 攪乱]、上腕骨 (R) 1 [J 10 II] (遠位端滑車部分・焼骨)・

(L) 2 [K 8 埋土 1・不明] (遠位端滑車部分・近位端を欠く)、尺骨 (R) 1 [J 8 攪乱] (近位端方向・焼骨)・(L) 1 [J 9 I] (近位端方向)、脛骨 (R) 1 [J 10 II] (遠位端方向・切断痕?・焼痕)、第 2 中足骨 (R) 1 [不明]

(近位端のみ・焼骨)、第 3 中足骨 (R) 1 [J 8 攪乱]、第 4 中足骨 (R) 1 [J 8 埋土 3]、中足骨 2 [J 8 埋土 3] (遠位端のみ・焼骨)

第 3・4 中足骨 2 点を除いて、破片の資料ばかりである。頭骨・椎骨・大腿骨等の中軸をなす骨は少ない。中足骨類が J 8 埋土 3 層を中心に出土しており、大きさ等からも同一個体の可能性がある。資料数の少ない割には、焼骨もしくは焼痕を持つ例が 6 点あり、他の遺存体と比較しても多い傾向にある。

2. リス科 *Sciuridae sp. indet.*

遊離歯 (下顎 I) 1 [J 8 I]

3. ムササビ *Petaurista leucogenys* (TEMMINCK)

下顎骨 (L) 1 [K 8 埋土 2]、上腕骨 (R) 2 [K 8 埋土 2・不明] (近位端方向・遠位端方向)、尺骨 (R) 2 [J 9 埋土 2・攪乱] (両端を欠く・近位端方向)、寛骨 (R) 1 [J 8 埋土 4] (恥骨部分を欠く)、大腿骨 (L) 1 [T・

P・2〕(遠位端方向を欠く)、脛骨(L)1〔K8攪乱〕(遠位端方向を欠く)

比較的目に付いた類であろう。個体数の確定はできないが、大型のものと中型以下の二者が存在するようである。

下顎骨は保存が良く、M₃まで萌出している。遊離歯はない。この下顎骨と寛骨を除けば、四枝骨ばかりで、椎骨の出土は少ない。

4. ネズミ科 *Muridae sp. indet.*

下顎骨(R)1〔J8攪乱〕

1点のみの出土。切歯が残るのみで、他の歯は遊離している。ネズミの習性上、自然混入の可能性もある。

5. ツキノワグマ *Selenarctos thibetanus* (G. CUVIER)

下顎犬歯1〔K8埋土1〕(穿孔垂飾品)、基節骨1〔K9埋土3〕

穿孔し、垂飾品として利用した例(第59図7)を除けば、基節骨が1点出土しているのみで、非常に少ない。クマの基節骨や末節骨は、垂飾品として利用されることがあるが、本資料には特段の加工はみられない。根井貝塚の周辺、特に西側の山中には現在でもクマが出没するが、出土資料の少ないことから、根井貝塚人が直接捕獲したと考えるより、加工のため移入したものとする方が妥当であろう。

6. タヌキ *Nyctereutes procyonoides* GRAY

尺骨(R)1〔J8攪乱〕(近位端を欠く)、第3中足骨(L)1〔不明〕(遠位端方向を欠く)、下顎犬歯(R)1〔K8I〕

7. キツネ *Vulpes vulpes* (LINNÉ)

側頭骨(R)1〔K9埋土3〕、下顎骨(L)1体外側部分・歯は全て遊離、上腕骨(R)1〔J9I〕(近位端を欠く)・(L)1〔J8埋土2〕(完形、寛骨(L)1〔K8攪乱〕(周縁の一部を欠く)、脛骨(R)1〔J8埋土2〕(近位端のみ)、腓骨(?)1〔J10II〕(両端を欠く)、椎骨1〔不明〕(最後位の胸椎か?)、上顎犬歯

〔R〕1〔J9II〕、第1大臼歯1

中小型の哺乳類では、最も多く出土している。完形の左上腕骨は、骨長110.8mm、遠位端幅18.2mmを計る。骨体内側に数条の傷がみられるが、あまり鋭いものではない。犬歯も特に加工痕は認められない。

8. オオカミ *Canis lupus hodophilax* TEMMINICK

第5中手骨(L)1〔K8埋土〕(完形)

骨長65.7mm、近位端幅12.5mmを計る。彎曲の度合は比較的弱い。特に加工はみられない。

9. テン *Martes melampus* (WGNER)

上腕骨(L)1〔J8埋土1〕(遠位端方向)、大腿骨(L)1〔J8埋土1〕(近位端方向)、椎骨2(頸椎1・胸椎1)・下顎犬歯(R)1〔K8埋土2〕

上腕骨と大腿骨はいずれも破片であるが、大きさ、色調等が類似するため、同一体の可能性がある。下顎犬歯は穿孔品(第59図9)である。

10. イノシシ *Sus scrofa* LINNÉ

シカと共に最も多く出土した。四肢骨を始め大形の骨は、ほとんど打割られ破片として出土する。そのため部位の決定は関節部など特徴的な部分が残る資料についてのみしかできなかった。従って、下記に示した数は、全体の一部を表わすことを諒解いただきたい。なお、加工品は除外した。

頭蓋骨(小片が多く部位不明・外耳道部・乳様突起・頬骨・上顎部等がある。上顎部については後述)。下顎骨(下顎体部分は後述・その他に下顎頭部分(R)1・(L)3、下顎角部分(L)2等がある)、上腕骨(R)3〔J9埋土2・K8埋土2・K8攪乱〕(遠位方向)・(L)1〔J9I〕(近位端関節面)、橈骨(L)2〔8攪乱・T・P・3〕(遠位端部分)・(R)〔K8攪乱〕(両端を欠く。幼体?)、肩甲骨(R)3〔I9II・J8埋土5・K8攪乱〕・(L)2〔K8攪乱・J8攪乱〕、腓骨(L)2〔J8埋土1・T・P・3〕(遠位端部分)、脛骨(R)1〔J8攪

乱] (近位端を欠く)、距骨 (L) 1 [K 8 攪乱]・
(R) 1 [不明]、踵骨 (L) 1 [K 9 埋土 4]、
第 2 中手骨 (R) 1 [J 8 埋土 1]

この他、椎骨・肋骨が破片の状態でも多数出土している。大形資料中、上腕骨や肩甲骨には数カ所の切傷痕が観察できる。

上顎・下顎部分は下記のような出土状況である。

【上顎骨】 1 点

・ L [P₄~M₃] (M₃ は萌出完了直後)

【下顎骨】 7 点

・ R [m₃・m₄]・L [M₃]・L [P₄~M₂]]・L [M₁・M₂]・L [—] (骨体のみ、M₃ 萌出直前か)・R [吻部] (I₁ 萌出直前)・L [吻部] (骨体のみ)

この他にも下顎犬歯 3 点、下顎切歯 9 点、上顎切歯 2 点等の他遊離歯が多数出土している。第 3 後臼歯の最大のものは長さ 42.8mm を計る。

全体を通じ、幼獣から成獣までいろいろな大きさの個体がみられるが、下顎骨数から 5 頭以上存在したと考えられる。

11. シカ *Cervus nippon* TEMMINCK

イノシシと同様な状況にある。加工品は除外してある。

頭蓋骨 (イノシシと同様であるが、後頭骨の保存の良い資料が 1 点ある)、下顎骨 (後述)、上腕骨 (R) 1 [J 8 攪乱] (遠位端方向、滑車部分を削る)・(L) 1 [K 8 埋土 1] (遠位端、焼骨)、橈骨 (R) 1) 1 (遠位端関節部)、尺骨 (R) 2 [K 8 埋土 4・不明] (近位端方向)・

(L) 1 [K 8 埋土 2] (鉤状突起部分)、寛骨 (R) 1 [J 9 攪乱] (腸骨部分)、脛骨 (R) 1 [K 9] (近位端方向)・(L) 3 [J 8 埋土 1、K 8 埋土 2、J 9 埋土 4] (いずれも遠位端部)、足根骨 (R) 2・(L) 1、中足骨 (R) 1 [J 8 攪乱] (後述)、距骨 (R) 2・(L) 1

この他にも椎骨・肋骨・基節骨・末節骨が多数あり、さらに鹿角の薄片も出土している。鹿角はほとんどの例に、擦切痕・切断痕・打撃痕がみられる。しかし、落角と思われるのは少ない。

骨角牙器の項でも触れたようにシカの中手・中

足骨は、加工されるものが多く、そのため完全な形で出土することは稀である。上記の右中足骨は遠位端方向を欠くが、現存長で 152.3mm を計り、この種の骨としては稀少な存在である。しかし、両側縁と前面の溝の部分には打撃痕がみられ、特に内側縁が顕著である。また後面近位端関節部に僅かに擦痕も観察できる。従って、骨器の素材として利用されようとしたものが、何らかの理由で中止・廃棄されたと考えられる。他に遠位端の関節部のみが 10 数点出土している。これも骨器製作過程の産物と捉えられよう。

上顎・下顎は下記の通りである。

【上顎】 2 点

・ R [M₁~M₃]・R [M₁~M₃]

【下顎骨】 4 点

・ R [P₂~M₂] (先端部切断後研磨?)・L [P₃~M₃]・L [M₃] (下顎枝部分)・L (関節突起部分のみ)

イノシシと比べ、幼・成の幅はあまりないようである。個体数もイノシシより若干少ないようであるが、一概には把握できない。下顎骨も保存状態はあまり良好ではなく、計測値を示せる例は少ない。しかし、現生標本の骨格と比較し、大形の傾向が強いようである。

12. クジラ類 *Cetacea* fam. indet.

肋骨・下顎骨 (?) それに部位不明の破片が出土している。このうち前二者は加工品 (第 59 図 19・20) である。

以上、本貝塚出土の動植物遺存体を記載した。植物遺存体 1 種、軟体動物 22 種、節足動物 1 種、魚類 15 種、爬虫類 1 種、鳥類 4 種、哺乳類 12 種となる。この他にも例えば、海棲哺乳類のアシカ・オットセイ、そしてカモシカやサルなど、他の貝塚の出土状況からして、存在しても不思議ない動物等がある訳だが、残念ながら現時点では見られない。

加工品としてのみ存在あるいは極めて断片的な資料を除けば、この数はさらに減少することを考え合わせると、以外と単純な構成になるのではなかろうか。
(熊谷常正)

7. 花粉分析

岡田 緑

(1). 試料について

花粉分析の試料は、岩手県立博物館による昭和58年度の根井貝塚発掘調査において採取したものである。

土質・土色・混入物などにより、地表面から火山灰層までを6層に分層し、上層よりⅠ層、Ⅱa層、Ⅱb層、Ⅱc層、Ⅱd層、Ⅲ層と呼称した。各層には土器片、貝片、骨片、炭化物が含まれているが、層によってその含有の比率に違いがみられる。特にⅡc層は土器片や炭化物を他層よりも多く含む。

試料採取はⅠ層からⅡd層までの黒色土層を5cm間隔で約10×15×5cmのブロック状に採取した。試料の採取にあたっては新鮮な断面を出し、上下層との攪乱や混入がないように注意し、ビニール袋に採取した。

(2). 分析方法

今回の実験を行う前に100gの試料を用いて分析を行ったが、その結果検出された花粉が非常に少なく、データとして不十分であったため、今回は400gの試料を分析に用いた。

分析の手順は以下の通りである。

- ① 試料400gをピーカーに移し、10%KOHを試料が浸るくらいまで入れ、室温で一昼夜放置し、泥化を促す。
- ② 試料中の粗粒物質を1mmメッシュで除去し、これに水を加えて自然沈殿させる。1日2回の割合で、上澄み液を捨てる作業を上澄み液が透明になるまで行う。(ここで除去された粗粒物質は乾燥後、保存した。)
- ③ 上澄み液が透明になったらそのまま24時間放置し、その後上澄み液をほとんど捨てる。残った試料は30秒放置の比重選別を数回行い、砂レキを除去する。
- ④ 遠心分離機で1,500rpmで5分間遠心水洗を行う。(以下、水洗はこの要領で行う)
- ⑤ 遠心水洗後、75%ZnCl₂溶液(酢酸酸性に傾けたもの)により重液分離を行う。(800～1,000rpm30分、2,500rpm15分)

⑥ 分離が終わったら上澄み液をピペットで取り、水洗を行う。水洗は上澄み液に浮遊物がなくなるまで繰り返す。

⑦ 酢酸置換

⑧ アセトリシス処理(無水酢酸：硫酸＝9：1)湯せん1分間。

⑨ 酢酸置換

⑩ 遠心水洗、3回

⑪ グリセリンゼリーによる封入。

⑫ カバーガラスの周囲を透明マニキュアでシールする。

⑬ 検鏡・同定

同定は400倍で行った。同定する花粉数は200個以上読み取り、各種類の出現頻度を算出することで、試料中の花粉組成をほぼ正確に推定することができる(中村、1976)。今回の分析では花粉含有量が少ないことが予想されたため、検出された全ての花粉・孢子について同定を行った。結果は①種類別ダイアグラム(200個体以上検出されたものについては、木本花粉＋草本花粉＋シダ類孢子を基数としたパーセンテージで棒グラフで示し、200個体に満たなかったものは検出された種類を点で示した。)[グラフー1]②試料ごとの木本花粉：草本花粉：シダ類孢子的割合[グラフー2]③100個体の粒子中の花粉：シダ類孢子：菌類孢子的割合(100個体検出されなかったものについては除外した。)[グラフー3]で示した。

(3). 分析結果

花粉分析の結果、以下の22種類の木本花粉と17種類の草本花粉、3種類のシダ類孢子、菌類孢子が検出された。

・木本花粉(Arboreal pollen 以下APとする)
Picea (トウヒ属)、*Larix* (カラマツ属)、*Pinus* (マツ属)、*Cupressaceae* (ヒノキ科)、*Cryptomeria* (スギ属)、*Pterocarya* (サワグルミ属)、*Salix* (ヤナギ属)、*Alnus* (ハシバミ属)、*Betula* (カバノキ属)、*Corylus* (ハシバミ属)、*Castanea* (クリ属)、*Fagus* (ブナ属)、*Quercus*

(ナラ属)、*Ulmus*—*Zelkova* (ニレーケヤキ属)、*Celtis* (エノキ属)、*Acer* (カエデ属)、*Aleurites* (アブラギリ属)、*Ilex* (モチノキ属)、*Tilia* (シナノキ属)、*Araliaceae* (ウコギ科)、*Ericaceae* (ツツジ科)、*Oleaceae* (モクセイ科)

・草本花粉 (Non arboreal pollen 以下 NAP とする)

Sagittaria (オモダカ属)、*Ottelia* (ミズオオバコ属)、*Graminea* (イネ科)、*Urticaceae* (イラクサ科)、*Cyperaceae* (カヤツリグサ科)、*Liliaceae* (ユリ科)、*Polygonum* (タデ属)、*Persicarya* (サナエタデ節)、*Fagopyrum* (ソバ属)、*Chenopodiaceae* (アカザ科)、*Caryophyllaceae* (ナデシコ科)、*Thalictrum* (カラマツソウ属)、*Haloragaceae* (アリノトウグサ科)、*Umbelliferae* (セリ科)、*Valerianaceae* (オミナエシ科)、*Artemisia* (ヨモギ属)、*Compositae* (キク科)

・シダ類孢子 (Fern spore 以下 FS とする)

Polypodiaceae (ウラボシ科)、*Pteridium* (ワラビ属)、*Osmunda* (ゼンマイ属)

全体的な傾向としては菌類孢子の占める割合が花粉やシダ類孢子に対して著しく多かった。一概に花粉・シダ類孢子と菌類孢子の数を比較することはあまり好ましいことではないが、多い試料では菌類孢子は花粉+シダ類孢子的の9倍近くも検出され、少ないところでも2.5倍ほど検出されている。AP+NAP+FSが200個体以上検出されたのはI層とII層(サンプルNo.1~8)のみであった。下層になるにしたがい検出花粉数が少なくなる傾向にある。

以下主要な植物の消長について種類ごとに記す。

針葉樹の *Picea*・*Larix*・*Cupressaceae* はII a層以上で低率ながらほぼ連続して出現してくるが、表土付近では検出されない。*Pinus* は本花粉全体の中で最も高率を占める。I層・II a層で非常に高率で、20%前後と安定している。II b層以下ではII d層で連続して検出された。*Cryptomeria* はII c層から出現し、次第に増加している。*Salix*

はII a層で安定して出現するが、それ以外ではほとんど検出されない。*Alnus* はほぼ全層序から検出されており、上層になるにしたがい増加傾向を示し、表土付近では約20%と非常に高率で検出された。

Castanea は *Pinus*・*Alnus* に続いて高率で出現してくる。II a層にピークをもち、II b層以下でも連続的に出現している。*Betula*・*Corylus* は低率ながら全層を通じて出現している。*Fagus*・*Quercus*・*Ilex* も低率ではあるがII a層以上で連続してくる。

草本花粉では *Graminea*・*Chenopodiaceae*・*Caryophyllaceae*・*Artemisia* が全体的に優勢である。*Graminea* はII a層以上では25%前後と最も高率、また安定して出現し、それ以下の層準でも連続して検出された。*Chenopodiaceae* も7%前後で安定している。*Caryophyllaceae* は上層になるにしたがい増加傾向を示している。*Artemisia* はI層とII a層の境付近にピークをもつ。*Persicarya* はII a層以上で、また *Fagopyrum* は、II d層からII a層にかけてほぼ連続して検出された。

シダ類孢子では *Polypodiaceae* が優勢で、I層とII a層の境付近にピークをもち、全層序を通じて検出された。*Pteridium* はII c層上部より連続して出現し、*Polypodiaceae* と似たような傾向を示す。*Osmunda* も低率ながらII a層以上で安定して出現した。

標高 (m)	深度 (cm)	層位	土 色	土 質	観 察	試料 番号
223.034						
	-10	I	黒褐色 7YR2/2	砂質シルト ないし粘土	耕作等による攪乱層。 植物繊維・種子多し。 貝片・チップ。 径5~10mm程度の円礫 を含む炭化物が若干混 入する	1 2 3 4
	-20				径5~10mm程度の円礫 を含む。	5
	-30	II a	黒褐色 10YR2/2	砂質シルト ないし粘土	貝片・炭化物を少量含 む。 土器片を少量含む。	6 7 8
	-40				土器片を多く含む。 細い炭化物・骨片・貝 片・チップを含む。	9
	-50	II b	黒褐色 5YR2/1	砂質シルト ないし粘土		10
	-60				炭化物を多く含む。 ブロック状の火山灰を まばらに含む。 土器片を多く含む。	11 12 13 14
	-70	II c	黒褐色 10YR2/3	砂質シルト ないし粘土		15
	-80				ブロック状の火山灰を まばらに含む。 土器片・貝片・炭化物 チップを含む	16 17 18
	-90	II d	黒褐色 10YR2/2	砂質シルト ないし粘土		
		III		火山灰層		

試料採取地点の土質

(4). 考察

花粉・孢子類の全体的な出現傾向を見てみると、菌類孢子が非常に多いということが特徴的である。Ⅲ層以下では検出花粉が激減するが、菌類孢子の割合に大きな変化はみられない。菌類孢子が多産し、花粉が少ないという例は、青森県亀ヶ岡遺跡(新戸部 1981)(山野井・佐藤 1984)や山形県砂川A遺跡(山野井 1984)などからも報告されている。花粉の検出量が少ないということは、もともと供給された花粉の量が少なかったか、一度堆積した後に環境の影響で消失したということが考えられる。花粉の性質で、化学的には強いが、乾燥した地面や空気にさらされた状態の場所に落下した花粉は、土壤微生物によって徐々に分解されたり、直射日光と酸素による光化学的な自己酸化分解もおこるらしいことが知られている(中村、1967)。供給された花粉の量が少ないということは一時的な植生の破壊が考えられ、堆積した後で消失したということについては空気にさらされた状態であったことが考えられる。

試料採取地点は竪穴住居が構築された面から沢へいたる傾斜地である。試料中には、竪穴住居の埋土から出土した土器と同じ型式の土器片や貝・骨片が含まれており、土器の型式が判明するものからはほぼ1～2型式に包括される。堆積物の分級度はⅠ層～Ⅱd層まで同様に低い。これらのことよりこの堆積物はおそらく比較的短期間のうちに竪穴住居が構築された周辺からの流れ込みと、沢の氾濫によりもたらされた土砂の堆積物であろうと思われる。

安田喜憲は東北地方における後氷期の気候変化について報告しているが、それによると(安田 1973a、1973b、1974) BP3000年前後から気候が変化し、縄文時代晩期から古墳時代の終末頃までは *Fagus*—*Cryptomeria*—*Quercus*—*Alnus* が優勢する冷涼、湿潤な気候になり、それ以降から現在までは人類の森林伐採、農耕活動による植生破壊によって、二次林としての *Pinus* が増加し、*Pinus*—*Cryptomeria*—*Fagus*—*Quercus* の植生に変化したとしている。山中三男は(YAMANAKA、1971)岩手県岩手郡西根町平館の海拔230mの地点では、

地表下—120 cmを境として① *Pinus*—*Fagus*—*Quercus* stage (0～120 cm) ② *Pinus*—*Cryptomeria*—*Quercus*—(*Alnus*) Stage (—120～—400 cm)に区分されるという。安田の縄文時代晩期から古墳時代の植生傾向を示す *Fagus*—*Cryptomeria*—*Quercus*—*Alnus* は山中の② *Pinus*—*Cryptomeria*—*Quercus*—(*Alnus*) に対比されるが、両者の報告からは *Fagus*・*Quercus* の優勢、*Cryptomeria* の増加が特徴としてあげられる。本遺跡のサンプルも土器片よりこの stage の初期に対比されるが、分析の結果ではⅡ層～Ⅰ層までは *Pinus* が優勢であるものの、*Quercus*・*Fagus* は低率であり、Ⅲ層以下においても *Pinus* はほぼ連続して出現するのに対して、*Quercus*・*Fagus* はほとんど検出されない状態である。*Pinus* は二次林のアカマツとみられ、肥沃な向陽適潤地に二次林を作る陽性の *Betula* (シラカンバと思われる) が連続的に出現してくることや、*Graminea* や *Artemisia*・*Chenopodiaceae*・*Caryophyllaceae* などの草本植物の花粉が高率で出現してくることなどから、この地域周辺は遺跡形成時、またはそれ以前から自然災害もしくは人為的な植生の破壊があった可能性が考えられる。

また特徴的な事として *Castanea* の多産があげられる。クリやトチノキの花粉の多産については青森県亀ヶ岡遺跡(新戸部 1973)(山野井・佐藤 1984)、山形県砂川A遺跡(山野井 1984)、富山県小泉遺跡(安田 1983)などから報告されており、日本海側の縄文時代前期後半以降の二次林を反映する花粉組成として認められつつある。本遺跡では *Aesculus* は検出されなかったものの、*Castanea* に関しては類似した事例としてあげることができよう。

また *Fagopyrum* の検出も特徴的である。現在、遺跡から検出されたソバ花粉のうち最も古い年代のものは福井県浜島遺跡の縄文時代後期前半のものである(註)。浜島遺跡のソバ属の花粉が出現する層準は周辺でアカマツ二次林が拡大し始める層準と一致するという(那須・山内 1980)。那須は『縄文時代以降のソバは栽培植物として渡来した

ものだと考えている。幾つかの理由のうち最大のものとして、日本ではソバ畑のまわりで一時的に半野性状態になった例はあるが、自生のソバはどこにも知られていないことがあげられる。』(那須、1981)としている。ソバ属は現在、日本で広く栽培されている *Fagopyrum esculentum* (普通ソバ) と、日本や中国で薬用として栽培されている *F. cymosum* (シャクチリソバ)、東アジア大陸で栽培されている *F. tataricum* (ダツタンソバ) に大別される。本遺跡のサンプルから検出されたソバ属花粉は、上記のいずれの種類になるのか断定はできない。ソバ属花粉が検出される層準は試料に含まれる土器片の総重量が高い層準とも一致しており、なんらかの関係が考えられる。(グラフー4) 以上のことから遺跡周辺の植生を考えると、木本類では沢周辺の低湿地に *Alnus* や *Salix* などが繁り、周囲の林には *Pinus*、*Cryptomeria*、*Castanea* などが多く、*Corylus*、*Ilex*、*Quercus*、*Betula* などがその林間に繁っていたようである。大木花粉の割合が高くないことから、森林密度はそれ程高い状態ではなかったようである。林床や沢沿いのやや湿った土地には *Graminea* や *Umbelliferae*、*Pteridium*、*Osmunda* が生え、遺構が構築された周辺には *Caryophyllaceae* や *Artemisia*、*Chenopodiaceae*、*Polygonum*、*Persicaria*、*Thalictrum* などが生え、荒れ地に近い草地が広がっていたと思われる。

註 日本で発見された最古のソバ属花粉化石は長野県野尻湖の旧石器包含層からのものが知られている。(TUKADA 1972)

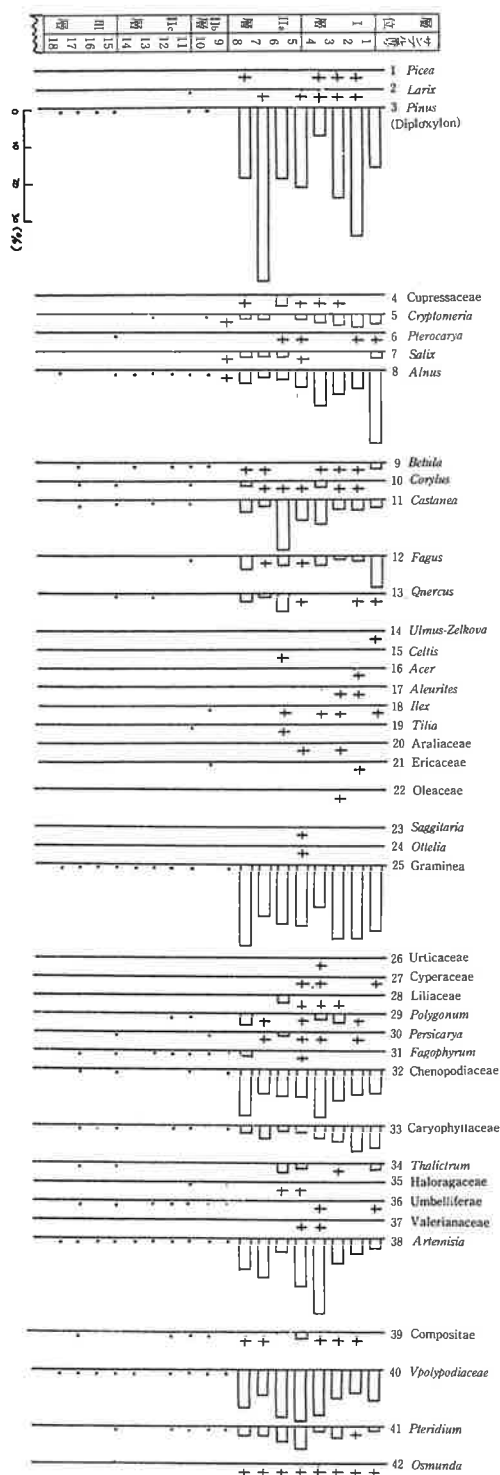
(1986、10、28)

引用参考文献

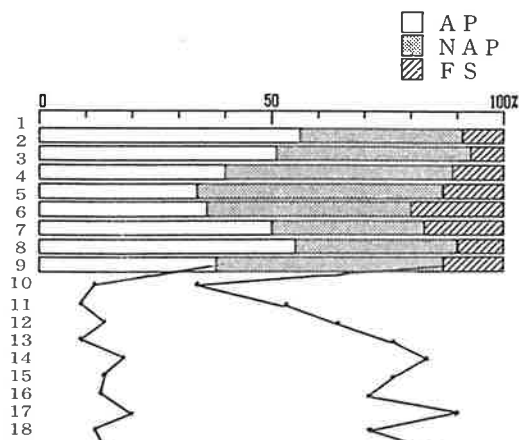
- 塚田松雄 1981：「過去一万二千年——日本の植生変遷史II 新しい花粉帯」『日本生態学会誌』第31巻2号
- 塚田松雄 1972：「The history of Lake Nojiri, Japan」『Conu. Acad. Art, Sci.,』44
- 中村 純 1967：『花粉分析』古今書院
- 那須孝悌 1981：「縄文人は栽培ソバを食べた？」『科学朝日』第41巻第6号
- 那須孝悌・飯田祥子 1975：『青森県石亀遺跡第2・3次発掘調査概報』平安博物館
- 那須孝悌・山内 文 1980：「縄文後期・晩期低湿性遺跡における古植生の復元—福井県浜島遺跡、青森県亀ヶ岡遺跡の調査例—」『考古学・美術史の自然科学的研究』日本学術振興会
- 新戸部隆 1981：「花粉分析について」『亀ヶ岡遺跡発掘調査報告書』青森県教育委員会
- 安田喜憲 1973a：「東北地方における後水期の気候変化」『地理学評論』第46巻第2号
- 安田喜憲 1973b：「宮城県多賀城址の泥炭の花粉学的研究」『第四紀研究』第12巻第2号
- 安田喜憲 1974：「日本列島における晩水期以降の植生変遷と人類の居住」『第四紀研究』第13巻第3号
- 安田喜憲 1982：「花粉分析からみた富山湾沿岸の縄文前期の遺跡」『大門町文化財報告書5集「小泉遺跡」』
- 山田悟郎 1979：「花粉分析よりみた江別太遺跡の環境」『江別太遺跡』北海道先史学協会
- 山田悟郎 1980：「花粉分析」『九年橋遺跡第6次調査報告書』北上市教育委員
- 山田悟郎 1981：「元江別遺跡群の花粉分析」『江別市文化財調査報告書XIII元江別遺跡群』北海道先史学協会
- 山田悟郎 1986：「北海道における先史時代の植物性食料について」『北海道考古学』第22号
- YAMANAKA, M 1971：「Pollen analytical studies of moor in the lowland in Iwate Prefecture.」『Ecol. Rev.』
- 山野井徹 1984：「砂川A遺跡中央1区における花粉分析」『砂川A遺跡発掘調査報告書』山形県朝日村教育委員会
- 山野井徹・佐藤牧子 1984：「亀ヶ岡遺跡の花粉分析—沢根B—2区を中心として」『亀ヶ岡石器時代遺跡』青森県立郷土館

花粉分析 結果

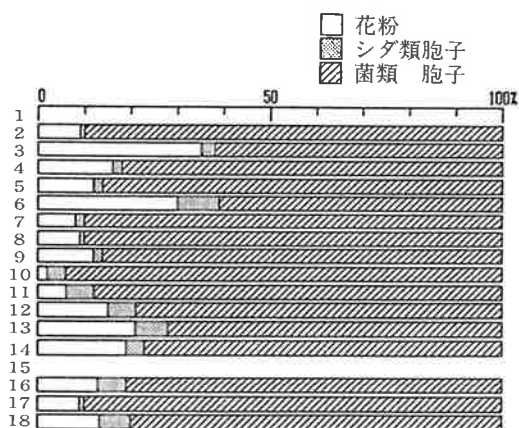
サンプル・ナンバ 種・属名	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18
1 <i>Picea</i>	—	5	2	2	—	—	—	2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
2 <i>Larix</i>	—	5	2	2	2	—	1	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—
3 <i>Pinus</i> (Diploxyton)	108	362	141	34	145	60	170	45	1	2	7	—	—	—	4	2	1	1
4 Cupressaceae	—	—	2	2	2	5	—	2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
5 <i>Cryptomeria</i>	18	35	17	10	11	—	5	3	1	1	—	—	2	—	—	—	—	—
6 <i>Pterocarya</i>	6	6	—	—	1	2	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—
7 <i>Salix</i>	12	—	—	—	4	5	5	4	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—
8 <i>Alnus</i>	133	54	37	44	31	8	7	8	5	2	4	4	7	3	1	—	—	1
9 <i>Betula</i>	12	5	1	2	—	—	1	2	—	1	1	1	—	—	—	—	1	—
10 <i>Corylus</i>	—	10	4	8	1	2	1	3	—	—	1	—	—	—	1	—	1	—
11 <i>Castanea</i>	15	30	15	30	37	43	7	8	—	—	1	—	1	—	1	—	1	—
12 <i>Fagus</i>	57	15	6	12	3	8	3	8	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—
13 <i>Quercus</i>	6	4	—	—	6	15	4	5	—	—	—	—	3	—	1	—	—	—
14 <i>Ulmus-Zelkova</i>	2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
15 <i>Celtis</i>	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
16 <i>Acer</i>	—	4	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
17 <i>Aleurites</i>	—	2	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
18 <i>Ilex</i>	6	—	2	4	—	2	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—
19 <i>Tilia</i>	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—
20 Araliaceae	—	—	2	—	3	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
21 Ericaceae	—	1	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—
22 Oleaceae	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
AP TOTAL	375	538	233	150	246	152	204	90	8	8	17	5	12	3	9	2	4	2
23 <i>Sagittaria</i>	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
24 <i>Ottelia</i>	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
25 Graminea	117	261	143	54	110	48	50	51	5	—	8	7	10	7	3	2	4	7
26 Urticaceae	—	—	—	2	—	—	—	—	1	—	—	—	1	—	—	—	—	—
27 Cyperaceae	3	—	—	2	4	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
28 Liliaceae	—	—	2	2	1	6	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
29 <i>Polygonum</i>	—	1	15	8	3	—	1	7	—	—	1	1	—	—	—	—	—	—
30 <i>Persicarya</i>	—	3	6	2	2	—	3	—	—	3	—	—	—	—	2	—	—	—
31 <i>Fagophyrum</i>	—	—	—	—	3	—	—	4	—	5	3	1	1	—	3	—	1	—
32 Chenopodiaceae	42	68	46	56	49	22	22	29	1	2	7	5	7	—	4	—	4	—
33 Caryophyllaceae	39	69	24	14	13	5	13	5	1	—	12	2	—	—	7	—	1	—
34 <i>Thalictrum</i>	12	—	5	—	11	8	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	1	—
35 Haloragaceae	—	—	—	—	1	2	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—
36 Umbelliferae	3	—	—	2	—	—	—	—	—	—	11	9	6	—	1	—	1	—
37 Valerianaceae	—	—	—	4	2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
38 <i>Artemisia</i>	18	41	39	88	86	10	37	19	7	30	17	12	19	6	19	5	7	3
39 Compositae	—	5	4	3	12	—	3	2	—	1	2	1	—	—	—	—	1	—
NAP TOTAL	234	448	284	236	299	101	129	117	15	41	62	38	44	13	40	7	20	10
40 <i>Vpollypodaceae</i>	65	43	53	92	38	25	24	40	43	34	2	15	5	18	1	10	2	—
41 <i>Pteridium</i>	7	6	17	5	40	12	9	6	5	1	11	2	7	—	2	—	—	—
42 <i>Osmunda</i>	2	1	2	1	4	2	1	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—
FS TOTAL	63	72	62	59	136	52	35	30	46	44	45	14	12	5	20	1	10	2
AP+NAP+FS	672	1058	579	445	681	305	368	237	69	93	124	57	68	21	69	10	34	14



グラフー1 根井貝塚 花粉ダイアグラム



グラフー2 AP:NAP:FS



グラフー3 花粉:シダ類胞子:菌類胞子

凡 例

1. トウヒ属 2. カラマツ属 3. マツ属 (二葉松類)
4. ヒノキ科 5. スギ属 6. サワグルミ属 7. ヤナギ属 8. ハンノキ属 9. カバノキ属 10. ハシバミ属
11. クリ属 12. ブナ属 13. ナラ属 14. ニレーケヤキ属 15. エノキ属 16. カエデ属 17. アブラギリ属
18. モチノキ属 19. シナノキ属 20. ウコギ科 21. ツツジ科 22. モクセイ科 23. オモダカ属 24. ミズオオバコ属 25. イネ科 26. イラクサ科 27. カヤツリグサ科 28. ユリ科 29. タデ属 30. サナエタデ節 31. ソバ属 32. アカザ科 33. ナデシコ科 34. カラマツソウ属 35. アリノトウグサ科 36. セリ科 37. オミナエシ科 38. ヨモギ属 39. キク科 40. ウラボシ科 41. ワラビ属 42. ゼンマイ属

(※番号は、「花粉ダイアグラム」とも一致する)

VIII. 考 察

本章では、根井貝塚出土資料のうち、第1号住居址南側床面出土資料(第11図)を中心に、当該時期における、注口土器・壺形土器の二者に関して検討してみた。

岩手県における縄文時代後期後半の土器研究、特に型式学的編年研究は、遺跡の充実とは逆行して、大きく立ち遅れている。かつて草間俊一氏は、盛岡市川目遺跡出土資料中、縄文後期に属する土器を、発掘地点及び層序により、A・Bに区分した(草間 1958)。Bは更に一類・二類に細分し、前者は加曽利B式に、後者は安行式に併行するものと捉えた(註1)。この時点では、仙台湾地方の編年に相対していた訳である。

しかし、仙台湾地方では、その後、後藤勝彦氏らの精力的な研究により、細分・型式設定が進められたのに対し、岩手では草間氏の編年を検討・細分しようとする動きは受け継がれなかった。

昭和35年に刊行された岩手県史(小岩 1960)では、仙台湾地方の概括的な編年を使用し、以降これらの型式名が安易に用いられて行くようになった。

一方、東北地方北部では、磯崎正彦氏による青森県十腰内遺跡出土資料の編年案が提唱され、その後の編年研究の基礎となっていく(磯崎 1968)。しかし、磯崎氏自身も述べているように、後期末葉の第IV・V群土器は、量的にも少なく、その詳細は不明な点が多かった。

当時岩手県において精力的な活動を展開していた鈴木孝志氏は、この点を意識し、磯崎氏らと共に昭和39年(1964)年5月、九戸郡軽米町長倉(明神下)遺跡を発掘する。この発掘では、磯崎氏も触れているように(註2)、十腰内第IV・V群に相当する資料を多数得ることができた。だが、この資料は、鈴木氏の逝去により、公表されないまま現在に至っている(註3)。

近年、岩手県北部や青森県を中心に、この十腰内第IV・V群の充実が著しい。膨大な資料を前に、磯崎氏の分類だけでは、対応しきれない状況となっているのも事実である。かといって、磯崎

氏の業績を否定・無視して編年研究を進めることを是とする訳では決してない。むしろ、磯崎編年をどのように再編成して行くかが問題となろう。

最近発表された岡田康博氏の論文は、その点で高く評価されるものである(岡田 1986)。

岡田氏は、当該時期の土器群において、注口土器が他の器形に先行して貼瘤が施されることに着目し、青森県三戸郡南郷村馬場瀬(1)遺跡第III群土器(北林 1981)に代表される資料を十腰内第IV群に相当させた。また、後続の第V群を三段階に細分している。

この岡田氏の見解に従えば、これまで十腰内第IV群と併行関係にあるといわれてきた仙台湾地方の西ノ浜式は、貼瘤が深鉢形土器にも施されることから、IV群より後出の編年位置が与えられることになる。これに関しては、東北地方北部では貼瘤は減少する傾向にあるとして、地域的相違の中で把握する考えも出されている(阿部・手塚・他 1986)。確かに、器形の比較、羽状縄文の在り方等をとってみても、仙台湾と東北地方北部では、相違していることは否定できない。

そこで、岡田氏が着目した注口土器の様相を探り、第IV群土器の中でどのように位置付けられるのかみてみたい。

注口土器が、他の器形より先行して瘤が付けられるものであることは、既に安孫子昭二氏が指摘していたところである(安孫子 1981)。安孫子氏は、その出現期を“加曽利B式でも新しい段階”とし、秋田県男鹿市船越前野遺跡例を示されている。これは、球形の体部の四方に瘤が付き、そのひとつが注口部となっている。次の段階、すなわち安孫子氏の瘤付第I段階(註4)になると、「口縁に突起が発達するようになり、文様も複雑化し、貼瘤も多くなる」という。安孫子氏が、この論文でとりあげた注口土器は、いずれも縄文が施されない例であるが、縄文が区画文内に充填されるものも、瘤のあり方は、ほとんど共通すると述べられている。

さて、安孫子氏の“加曽利B式でも新しい段階”という表現は、おそらく加曽利BIII式を意味するのではなかろうか。しかし、東北地方の当該時期

土器群の、いわば第一人者ともいふべき安孫子氏が、このような慎重な表現をした理由は、どこにあるだろうか。ひとつは、加曽利BⅢ式に併行する土器群の様相が、東北地方北部では明確に把握できない点があげられよう。

船越前野遺跡例に類似する資料は、岩手県内では少ないものの、盛岡市料内遺跡(工藤他 1982)等に散見できる。しかし、瘤は付けられない。また、十腰内第Ⅲ群に併行する資料として、盛岡市川目遺跡(註5)の他、近年の発掘資料としては、岩手郡岩手町川口Ⅱ遺跡(高橋(与)・玉川 1985)第Ⅳ群4類中の例がある。だが、両例とも瘤はなく、器形も底部が筒状に突出する点等も船越前野例とは異なる。

船越前野例の頸部と体部との境には、刻目が付く。この刻目は、十腰内第Ⅲ群の口縁外側等に多用され、同群の顕著な特徴となっている(例えば十腰内遺跡報告P L 74の127、128、131、132、135)。さらに十腰内第Ⅲ群と同Ⅳ群との区別は、羽状縄文の施文原体の相違によっても成されるが、船越前野例には前述のように縄文は施されず、その点で根拠は弱いものかも知れない。しかし、口縁が反りながら広がり、平縁で、体部の入組文も大振りで、馬場瀬遺跡の十腰内第Ⅳ群の注口土器より古いものと見なさざるを得ない。

それでは、岩手県内出土の諸資料中、瘤付注口土器の初見はどこになるであろう。筆者は現在のところ、それを軽米町馬場野Ⅱ遺跡(工藤・中川・田村 1986)第Ⅶ群土器中に求めたい。同遺跡第Ⅶ群土器は、縄文後期初頭から末葉に至る土器を包括するもので、精製・無文土器を含め21類に細分されている。ただし、この細分には、同意しかねる点があるので、類別は用いない(註6)。

まず、L V 08住居址床面出土資料があげられる。これは、帯状の区画帯に羽状縄文が施された鉢(報文図版125の55)と、横位レンズ状(三単位?)の区画文を胴部に持ち、無文の口縁部が広がる深鉢(同127の91)、高台付小形鉢(同125の58)それに、この小形鉢に似た器形の注口土器(同125の57)から成る。注口土器は四方に瘤が付きその一個が注口部となっている。

また、L VI—04住居址埋土下層出土資料は、時的にはややまとまりを欠くものの、貴重な出土例であろう。特に入れ子になって出土したという2点の注口土器(同129の110・113)は見逃せない。110は、底が比較的広い壺形状の器形を持つ。胴部には、割付が狂うものの四単位の大振りの入組文が施され、区画内に充填羽状縄文が施される。原体は二本使用しているという。一方、113は、頸部がくびれ、さらに底部が突出する器形をとる。口縁部には四単位の突起が付き、その突起間に一個ずつ小突起が配される。この口縁部と、頸部と胴部の境には二段の刻目が巡らされる。胴部には、やはり大振りの入組文が付くが、110と同様注口部分で割付が狂っている。施文原体はR L一本で、やや乱れながらも、充填羽状縄文が施される。瘤の状態も、四単位で同様である。

この113は、器形的には前述の川口Ⅱ遺跡の注口土器に似る。また刻目の存在、施文原体の特徴等から、十腰内第Ⅲ群の伝統が伺えよう。しかし、口縁部の突起や胴部のモチーフ等、第Ⅳ群的な要素も持ち合わせている。

岡田氏は、前述の論文で、青森県金木町神明町遺跡6号住居址出土資料を、十腰内第Ⅳ群の中でも、同第Ⅲ群と“時間的關係は極めて近い”と評価している。神明町例に似る注口土器は、馬場野Ⅱでも見られ(報文図版131の141)、前述の110・113の注口土器も、この段階もしくは直前段階に関係してくるのではなかろうか。

さて、岡田氏が十腰内第Ⅳ群の良好な遺跡として掲げた馬場瀬(1)遺跡は、軽米町長倉遺跡からは僅かに7km、馬場野Ⅱや君成田・大日向等からでも北へ12~13kmを計るのみで、近接する遺跡である。その第Ⅲ群の注口土器には、入組文を持つものと、無文のものの二者がある。両者共に、瘤が四方に付き、そのひとつが注口部となる。この瘤の中には注口部の反対側、相対する位置に付けられるものに環状の、つまり横方向から穿孔される例があることに気付く。これが把手を表現したものであるならば、瘤の発生を考える上で興味深いが、残念ながら他の遺跡には直接比較できる例は見当らない。

ところで、馬場瀬第Ⅲ群土器には、磯崎氏の十腰内第Ⅳ群や神明町遺跡6号住居址例に見られる刻目を持つ例は少ない。馬場野Ⅱ遺跡113例等の存在からして、馬場瀬第Ⅲ群の注口土器群は、瘤を持つ例の最古の段階には相当しないのではなかろうか。だが、逆にこのような資料から、注口土器が他の器形に先行して瘤が付されることが確認できる。従って馬場瀬Ⅲ群は、磯崎氏の十腰内第Ⅳ群より新しい段階に相当するが、一応第Ⅳ群の中に含め、広義の第Ⅳ群と理解しておきたい。この広義の第Ⅳ群は、貼付注口土器の成立期を含むことから、当然加曽利BⅢ式や宝ヶ峯式等とも関係してこよう。だが、岩手県内で良好な一括資料は現時点では提示できない。

岡田氏によれば、次の十腰内第Ⅴ群は、大きく三段階の変遷が追えるという。そして、その第Ⅰ期に、青森県下北郡大畑町水木沢遺跡出土資料や八戸市丹後谷地遺跡第46号住居址出土資料を充て、第Ⅱ期には青森市螢沢遺跡各住居址出土資料が相当すると述べている。この第Ⅴ群Ⅰ・Ⅱ期資料を、安孫子氏の瘤付土器様式の変遷(安孫子 1969)に対応させると、第Ⅱ段階に相当するという。ところで、安孫子氏の第Ⅱ段階には、そのAⅡ型式を代表するものとして、軽米町長倉遺跡出土の深鉢形土器が掲載されている(註7)。この土器は、Ⅱ文様帯は無文で、Ⅱa文様帯には弧線連結文が描かれる。ⅡaとⅡ文様帯の境とⅠ文様帯には、刺突列が巡る。貼瘤は、弧線の連結部、横位弧線部に配される。この第Ⅱ段階は、十腰内第Ⅴ群に位置付けられる(安孫子1980)。そして第Ⅱ段階の深鉢形土器Ⅱa文様は、ほとんどが弧線連結文で表現されるという(安孫子 1981)。

ところが、岡田氏が十腰内第Ⅴ群第Ⅰ・Ⅱ期として掲げた資料には、この弧線連結文は見当らない。しかも、Ⅱ文様を欠くAⅡ型式すら存在が希薄である。むしろ“入組帯状文”を主要な文様とするAⅠ型式の深鉢が主体を占めるようである。

これを地域差あるいは時間差、どちらの立場で理解すれば良いのか、その糸口となる資料は不足している。ただし、東北地方北部の弧線連結文の成立を、入組帯状文からの系譜で捉えるならば、

安孫子氏の第Ⅱ段階、すなわち十腰内第Ⅴ群より少なくとも、水木沢例は古く位置付けられることになる。また、水木沢と螢沢を比較すれば、貼瘤の多寡、壺・注口を始め深鉢形土器の無文化等から螢沢が後出的であることは疑えない。従って、岡田氏の馬場瀬→水木沢→螢沢という変遷は、原則として首肯できよう。

ここで改めて、磯崎氏の十腰内第Ⅳ・Ⅴ群と岡田氏の変遷案を比較すると、十腰内第Ⅳ群には、馬場瀬に先行する資料も含み、同Ⅴ群として図示された2点の壺の実測図はどちらかといえば螢沢例に近いと思われる。水木沢例はその点で再検討を要する土器群となろう。

以上、粗略ながら、十腰内第Ⅳ・Ⅴ群の様相を概観してきた。これを踏まえて、本貝塚第1号住居床面出土資料をみてみたい。

既に第1号住居址出土遺物の項で触れたように1・2に類似する資料は、軽米町大日向遺跡(田鎖・岩淵 1986)の1Ⅰ-2住居埋土から出土している(報文59図342)。この埋土からは、詳細な層位関係は捉えられないが、沈線によるレンズ状の弧線が描かれた高台付小形鉢(同330)、深鉢(331・333・337)、注口土器(338・349)等も出土している。その他にも、晩期に入る資料(335・340?)もあるため、一括資料とはならないが、後期の資料だけ見れば、比較的纏っているのではなかろうか。333は、胴上半がくびれやや広がる器形をとる。入組帯状文が胴下半部まで展開し、Ⅱa文様・Ⅱ文様の区画は成されない。貼瘤は口縁の突起(二個一対)に対応して、口縁部と胴部に四個施される。貼瘤・入組帯状文の在り方は、331も同様である。337は瘤を多用し、弧状連結文を有する点等から後出的なものであろう。

333に類似する資料はHⅠ-8住居床面からも出土している(報文第33図166)。この住居床面からは他に、鉢(同162)・高台付小形鉢(同163)・無文の小形鉢(同164)等が出土している。164は、根井貝塚の第11図7に類似する。

一方、第11図5の壺形土器は、類例が馬場野Ⅱ遺跡MV-01住居埋土から出土している(報文図版132-145)。この住居は、十腰内第Ⅲ群期に比定

できる。埋土からは、同第Ⅲ群からⅤ群に相当する土器が出土し、主体を占めるのは二種の原体により羽状縄文を施す資料、すなわち第Ⅳ群である。

従って、極めて貧弱な根拠であるが、第11図1・2・7には、貼瘤を持つ深鉢・鉢が伴うことが考えられる。そして、この伴出するであろう深鉢は文様帯の分化も不明瞭で、貼瘤も多用されないものと思われる。よって、岡田氏の変遷観に従って、本資料を、十腰内第Ⅴ群の古い段階に比定しておきたい。5の壺の存在も、それを支持し、第Ⅳ群の伝統を残したものと見なすべきなのだろうか。注口土器が他の器形に先がけて貼が付けられたように、その注口土器と密接な関係にある壺形土器が、深鉢形土器とは異なる展開・動きを示す可能性は充分うかがえる。

3・4の吊り下げ状の壺は、既に述べたように岩手県北部の諸遺跡を中心に分布するものらしい。特に4は、故意に頸部を壊したものと思われるが、馬場野Ⅱ遺跡では無頸壺に吊り下げの穿孔を持つ例があり(報文図版134—189)、今後の検討を進める上で貴重な例となろう。

また、根井貝塚2号住居址埋土出土資料中、第17図25の指頭によるとと思われる突き起しの例は、馬場野例(報文第141—279・280)と合わせ、北海道南部の三ッ谷式との関係も考えられる。三ッ谷式に先行する堂林式に関しては、岡田氏は第Ⅴ群第Ⅰ期との併行関係を指摘している(岡田他1984)。本貝塚2号住居址埋土5・6層出土資料は第1号住居床面とほぼ同時期か後出のものと考えて、その上層からの出土であり、極めて断片的ながら、矛盾しない層位関係にある。

東北地方北半の縄文後期後半の土器群は、改めて考えてみると意外と不明な点が多い。特に他地域との併行関係では、各研究者によって微妙なズレが生じている。また、東北北半部においても、器形・器種の構成に相違があるようでもある。ここでは、仙台湾地方との対比をすることは出来なかったが、十腰内第Ⅳ群と西ノ浜式(新地Ⅰ式)とは併行しないという岡田氏の指摘は、筆者も同意できる。さらに、馬場瀬Ⅲ群を含む広義の十腰内第Ⅳ群は、貼瘤付注口土器の存在と相俟って、

加曾利BⅢ式や宝ヶ峯式の新しい段階と関係してくると思われ、同時に西ノ浜式以降の編年に対応して、十腰内第Ⅴ群の細分を一括資料により、進めねばならないであろう。(熊谷常正)

註1. 盛岡市史及びその後公表された草間氏作成の編年表では、川目BⅠ式・同BⅡ式として編年されている。

註2. 磯崎氏は十腰内遺跡報文(P. 384)で、「……特に第Ⅳ・Ⅴ群に相当する良い材料が発見されている。その整理が進めば、第Ⅳ・Ⅴ群土器の欠を補って余りあるだけの資料を提供することができよう」と述べている。

註3. この資料は現在、岩手県博が軽米町から寄託を受け、整理を進めている。整理・復原した資料の一部は、軽米町立歴史民俗資料館において展示・公開されている。

註4. この第Ⅰ段階は、十腰内第Ⅳ群に相当するという(安孫子 1980)。

註5. 盛岡市史(草間 1958)、第二図版の5の注口土器。広がる口縁、突出する底部を持ち、胴部には山形状の区画文がある。羽状縄文をとるが、施文原体は不明である。

註6. 馬場野Ⅱの報告において、第Ⅶ群Ⅰ類を後期初頭と位置付けるのは問題がある。これについては、熊谷(1986)「門前式の検討」岩手県博研究報告4 P. 39~61を参照されたい。また、十腰内第Ⅲ群・Ⅳ群に相当する資料が、どのような根拠で分類されたのか明らかではない。

註7. 軽米町在住の工藤康夫氏所蔵資料。現在岩手県博に展示している。

参考文献 (五十音順)

- 赤沢 威 1983 『採集狩猟民の考古学—その生態学的アプローチ』 海鳴社 (MONAD BOOKS 20)
- 阿子島香 1979 「切断調整石器」 『聖山』 P 149~153 東北大学文学部考古学研究会 (考古学資料別冊2)
- 安孫子昭二 1969 「東北地方における縄文後期後半の土器様式」 石器時代9 P 87~104 石器時代研究会
- 1980 「コブ付土器様式から亀ヶ岡土器様式への変遷過程」 考古風土記5 P 36~55 (青森) 鈴木克彦
- 1981 「瘤付土器」 『縄文文化の研究』4 縄文土器II P 143~156 雄山閣
- 阿部 恵・手塚 均・他 1986 『田柄貝塚』I~III 宮城県教育委員会 (宮城県文化財調査報告第111集)
- 磯崎正彦 1968 「十腰内縄文式遺跡調査予報」 『岩木山』 P 316~388、584~608 岩木山刊行会
- 岩手県立博物館 1984 『縄文の風景—大地と呪術』 岩手県立博物館 (埼玉・岩手文化交流図録)
- Elisabeth Schmid 1972 『Atlas of Animal Bones』 Elsevier Publishing Company.
- 遠藤勝博・高橋義介 1982 『田代遺跡発掘調査報告書』 岩手県埋文センター (同報告41集)
- 及川 洵 1985 『田野畑村史』1 P 1~187 (岩手) 田野畑村
- 岡田 要・他 1974 『新日本動物図鑑』[中]・[下] 北隆館
- 岡田康博・他 1984 『尻高(2)・(3)・(4)遺跡発掘調査報告書』 青森県教育委員会 (同県文化財報告89集)
- 1986 「十腰内第III群・第IV群・第V群土器の再検討」 弘前大学考古学研究3 P 37~53
- 岡村道雄 1983 「ピエス・エスキュー、楔形石器」 『縄文文化の研究』7 P 106~116 雄山閣
- ・他 1984 『里浜貝塚IV』 東北歴史資料館 (同館資料集13)
- 小田野哲憲・熊谷常正 1979 『宮古市大付遺跡発掘調査報告書』 宮古市教育委員会
- 加藤嘉太郎 1970 『家畜比較解剖図説』(上) 養賢堂
- 金子浩昌・忍沢成視 1986 『骨角器の研究 縄文篇I』 慶友社 (考古民俗叢書22)
- 北林八州清 1981 『馬場瀬(1)遺跡』 青森県教育委員会 (同県文化財報告70集)
- 草間俊一 1958 『盛岡市史1—1』(先史期) 盛岡市役所
- ・金子浩昌 1971 『貝鳥貝塚』 岩手県文化財愛護協会
- ・他 1974 『崎山弁天遺跡』 (岩手) 大槌町教育委員会
- 工藤利幸・他 1982 『盛岡市萩内遺跡』 岩手県埋文センター (同報告32集)
- ・他 1986 『馬場野II遺跡発掘調査報告書』 岩手県埋文センター (同報告99集)
- 小岩末治 1960 「後期縄文式文化と石造遺構」 『岩手県史』1 P 118~142 岩手県
- 後藤 明 1983 「釣針」 『縄文文化の研究』7 道具と技術 P 198~209 雄山閣
- 酒井宗孝・他 1986 『駒板遺跡発掘調査報告書』 岩手県埋文センター (同報告98集)
- 高橋与右エ門・玉川英喜 1985 『川口II遺跡発掘調査報告書』 岩手県埋文センター (同報告84集)
- ・他 『上斗内III・IV・V遺跡』 岩手県埋文センター (同報告71集)
- 田鎖寿夫・岩渕 久 『大日向II遺跡発掘調査報告書』 岩手県埋文センター (同報告100集)
- 馬目順一・他 1975 『大畑貝塚調査報告』 いわき市教育委員会
- 村上達夫・他 1983 『君成田遺跡発掘調査報告書』 岩手県埋文センター (同報告62集)
- 吉田義昭 1960 「岩手県貝塚文化瑣記1」 奥羽史談23 P 12~16 (岩手) 奥羽史談会

IX. まとめ

岩手県立博物館が実施してきた根井貝塚の発掘調査は、三次にわたるものの、通算日数は20日に満たず、また発掘面積は約40m²にしか過ぎない。

このような小規模な調査にもかかわらず、竪穴住居址2棟、土壙1基、焼土投げ捨て遺構1カ所を検出し、同時に多量の遺物を得ることができた。調査区の周辺には、他にも遺構が分布していると思われるが、貝層を伴う遺構の存在は確認できていない。

第1号住居址埋土内に形成された貝層は、貝層と呼ぶには貧弱なものである。周辺に貝層が存在するとしても、おそらくこのような状態のものであり、しかも遺構や斜面の凹みに形成される小規模な貝層に留るであろう。

出土遺物中土器は、縄文後期末葉と晩期前半に属するものが主体を占めた。前者は、1号、2号住居址に、後者は土壙・焼土投げ捨て遺構に関係する。これらの土器は、前者は、十腰内第V群中心とし、後者は大洞C₁式期が多い。しかし、両者を結ぶ後期最終末から晩期初頭にかけての資料は断片的にしか出土しなかった。

特に注目されるのは、1号住居址床面出土の7点の一括資料である。深鉢形土器を欠き、また岩手県北部に分布する吊り下げ壺、それに胴部穿孔の筒状鉢形土器等から構成される。そのため他の遺跡の一括資料と直接の比較は困難であるが、十腰内第V群の古い段階に位置付けられよう。

この1号住居は、この床面出土資料や炉の構造等から“特殊”なものと当初考えた。しかし、その特殊性を、2棟しか検出していない本貝塚の中で位置付けるのは無理であろう。また、当該期の竪穴住居の床面からは、壁面に沿うように土器、それも特異な器種が出土することがあり、“廃棄のパターン”の中での評価が優先されるのではなかろうか。

石器類については、石斧の出土が非常に多く、未製品が目につく点が興味深い。また剥片石器には、周辺の玉川層及びそこから供給されたチャート類の円礫を素材とするものが特徴的であった。

これらの石器群は、軽米町周辺の縄文後期から弥生時代にかけての石器群と共通するものがある。特に本貝塚では、小円礫を素材とするこの剥片類が優位を占める点を、供給地に隣接する理由で評価した。また、1号住居跡床面出土資料を始めとする軽石穿孔品は、この時期に広く分布し、しかもかなり定形的なものと思われ、今後の集成・検討が望まれる。

次に骨角器に関しては、気仙地方の諸貝塚群のそれと比較しても遜色のない資料が得られたと思う。燕尾形離頭銚頭は、1点のみであるが分布を知る上で貴重であり、同時にその寡少性が気仙地方と比較し、特徴となるであろう。また、骨篋もその素材の打割方法等において、仙台湾地方や南部三陸海岸と相違することがわかった。

同様な地域的相違は、動物遺存体においても指摘できる。貝類は岩礁性の貝類を主体とする点で貝塚の立地を物語っている。哺乳類では、イノシシとシカが多く、単純な構成である。魚類は、マグロの少ない点があげられるが、それ以上にイワシやサバ等、地先魚が顕著でないことが特筆できる。また、マダイの頭骨類と椎骨類の比率の差もマダイの性格、特に食料以外の利用を考えざるを得ない。なお、骨角器として扱わなかったが、棘の中には、骨針に用いられたと思われる資料も少なくなかった。これらは今後、微細な観察が要求されるであろう。

冒頭にも述べたように、本貝塚の調査は小規模な調査であった。発掘面積が数千・数万平方メートルに及ぶ大調査に比べれば、同じ発掘とはいえながら、提供できる情報は当然限定される。集落論等にはそれが顕著に反映しよう。だが、小規模調査にも、その機能するところがあると信じたい。それを当館の調査で充分に発揮し得たとは思えないが、従来不詳な点が多かった地域にとって基本的な情報は提供できたのではなかろうか。

最後に、調査区の地主である岩山憲政氏には、終始一貫して絶大な御支援・御協力を賜った、文末であるが記して感謝申し上げたい。

(熊谷常正)

SUMMARY

NEI shell-mound is located at Tamagawa, Noda Village, Kunohe District, Iwate Prefecture. About sixty shell-mounds have been found in Iwate. Most of them are situated in southern Sanriku coastal area, south of Miyako City. On the other hand, shell-mounds in northern Sanriku coastal area, which are small in number, had not been fully surveyed. Then the excavation and survey of Nei, one of a few shell-mounds in northern Sanriku coastal area, was conducted by the Iwate Prefectural Museum. The purpose of this survey was to compare Nei with shell-mounds in other regions and show the difference between them.

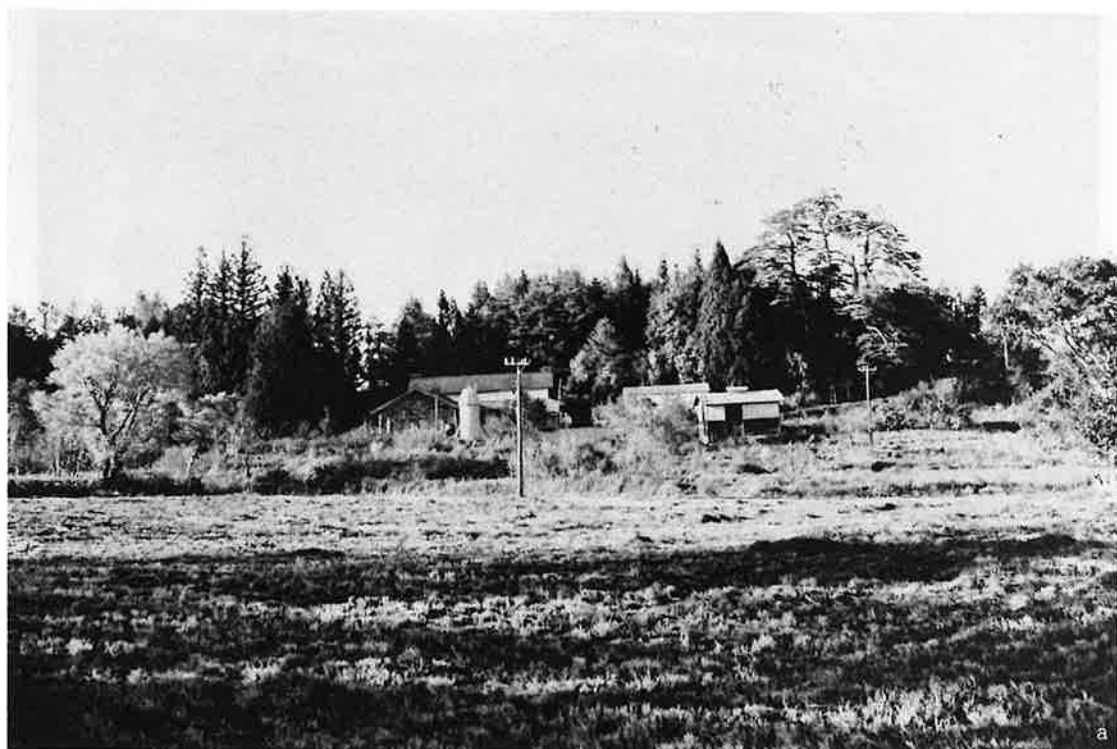
Nei shell-mound is located in a high position of a marine terrace which has retained the level ground of the mound since the shell-mound was formed. The frontal part of this hill is a steep slope and most of the present coastline forms a steeper sea cliff. The location of Nei shell-mound is remarkable in that it is about three kilometers from here to the Pacific coast in a straight line, compared with other shell-mounds in Sanriku coastal area. The site is located at the corner of the level ground overhanging from east to west like a tongue, 225-230 meters above sea level. A little stream flows in the middle of the site and on the north is the shell-mound. The site has an area of about 15,000 square meters. The remains found here differed from place to place. While the remains in a little low place on the east belong to the Late Jomon Period, those in a somewhat high place on the west belong to the Final Jomon Period. The remains of the Late Jomon Period were found in shell-layers, but there was no trace of shell-layer formation of the Final Jomon Period. Though heaps of shells were scattered, shells which were thrown away into the remains of pit dwellings could be observed stratigraphically. Shell-layers consisting of only shells were few. The greater part of them contained a lot of ash, burned earth and carbide, mingled with broken shells, bones of fishes and animals.

Two round pit-dwellings, circular pits whose utilization were unknown and piles of burned earth were discovered. Pit-dwelling No. 1 had a hearth of special structure and on the floor were placed more than seven complete earthen vessels and accessories of various kinds. Some of these vessels were filled with red clay or vertebrae of snakes, probably, they were used for "ritual" associated with the abandonment of dwellings. Since the remains found in piles of burned earth were not given secondary heating, they seem to have been brought here from different places and discarded with other objects.

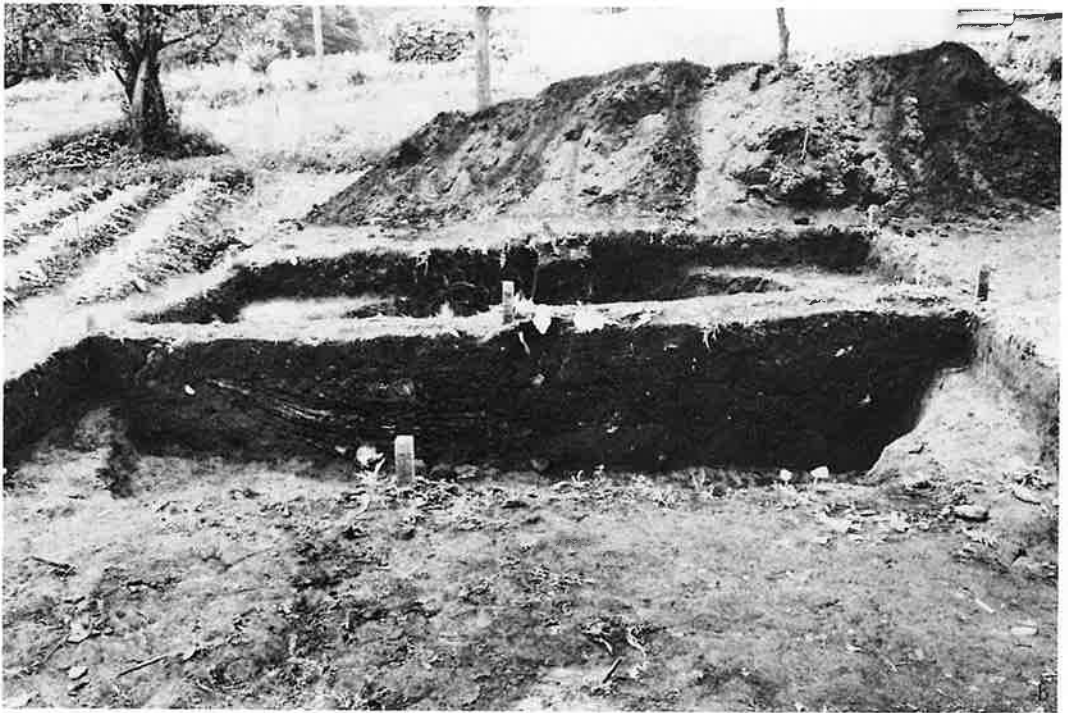
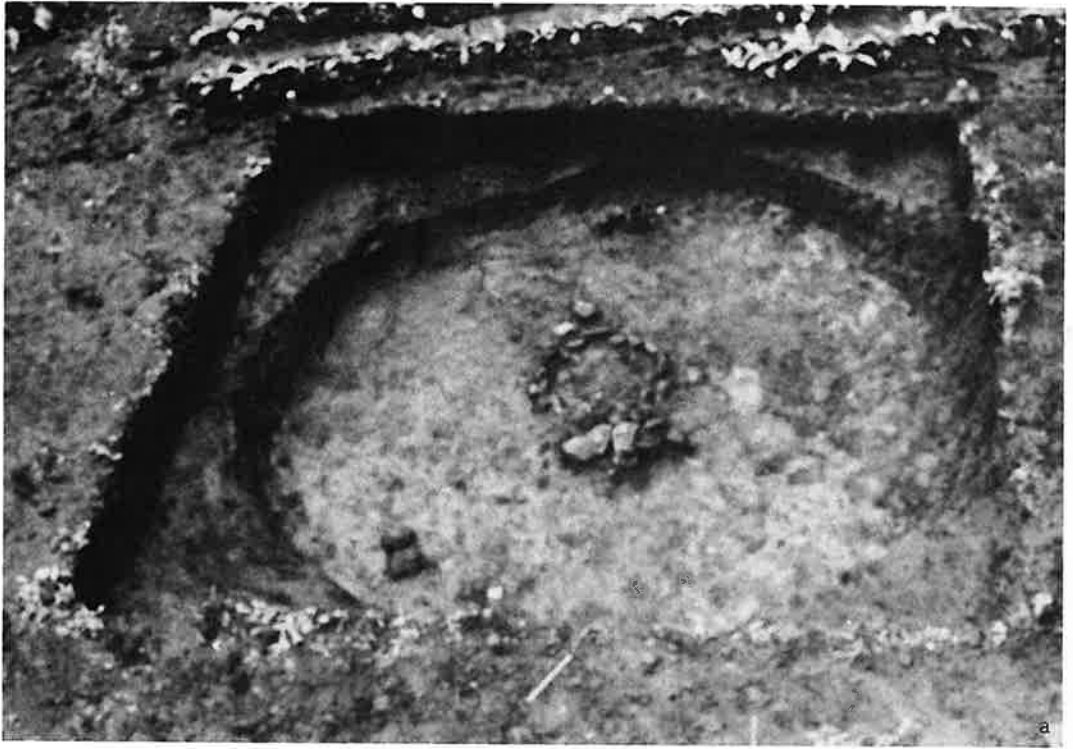
A great number of implements which were characteristic of shell-mounds in Iwate were discovered. They were fishing hooks, detachable harpoon-heads, gaffs, bone-spatulas, bone-needles, accessories, which were made of antler, metacarpus and metatarsus, wild boar's tusk, etc. Natural remains included many mammals (*Cervus nippon*, *Sus scrota*, *Canis lupus*, *Nyctereutes procyonoides*, *Martes melampus*), fishes (*Pagrus major*, *Lateolabrax japonicus*, *Haxagrammos otakii*, *Seriola quinqueradiata*, *Salmonidae*), shells in a rocky area (*Mytilus coruscus*, *Septifer virgatus*, *Thais clarigera*, *Nucella heyseana*, *Littorina breracula*), birds (*Phasianus versicolor*, *Anatidae.sp.*), and walnut shells.

Notwithstanding a small-scale survey, the remains obtained from Nei and the result of our survey should be basic materials which characterize shell-mounds in northern Sanriku coastal area, in addition, they should provide valuable data, comparing shell-mounds in northern Sanriku coastal area with ones in southern Sanriku coastal area.

写 真 图 版



写真図版1 遺跡遠景(a)・近景(b)



写真図版 2 1号住居址平面(a)・埋土断面(b)



写真図版3 1号住居址埋土断面(a)・炉跡(b)・遺物出土状況(c~e)



写真図版 4 2号住居址(a~d)・土壌(f)・焼土投げ捨て遺構(e)



写真図版 5 骨・角・牙製品出土状況 (a~h)



写真図版6 遺物出土状況 (a~h)



1 a

1 b



2



3



4



5



6

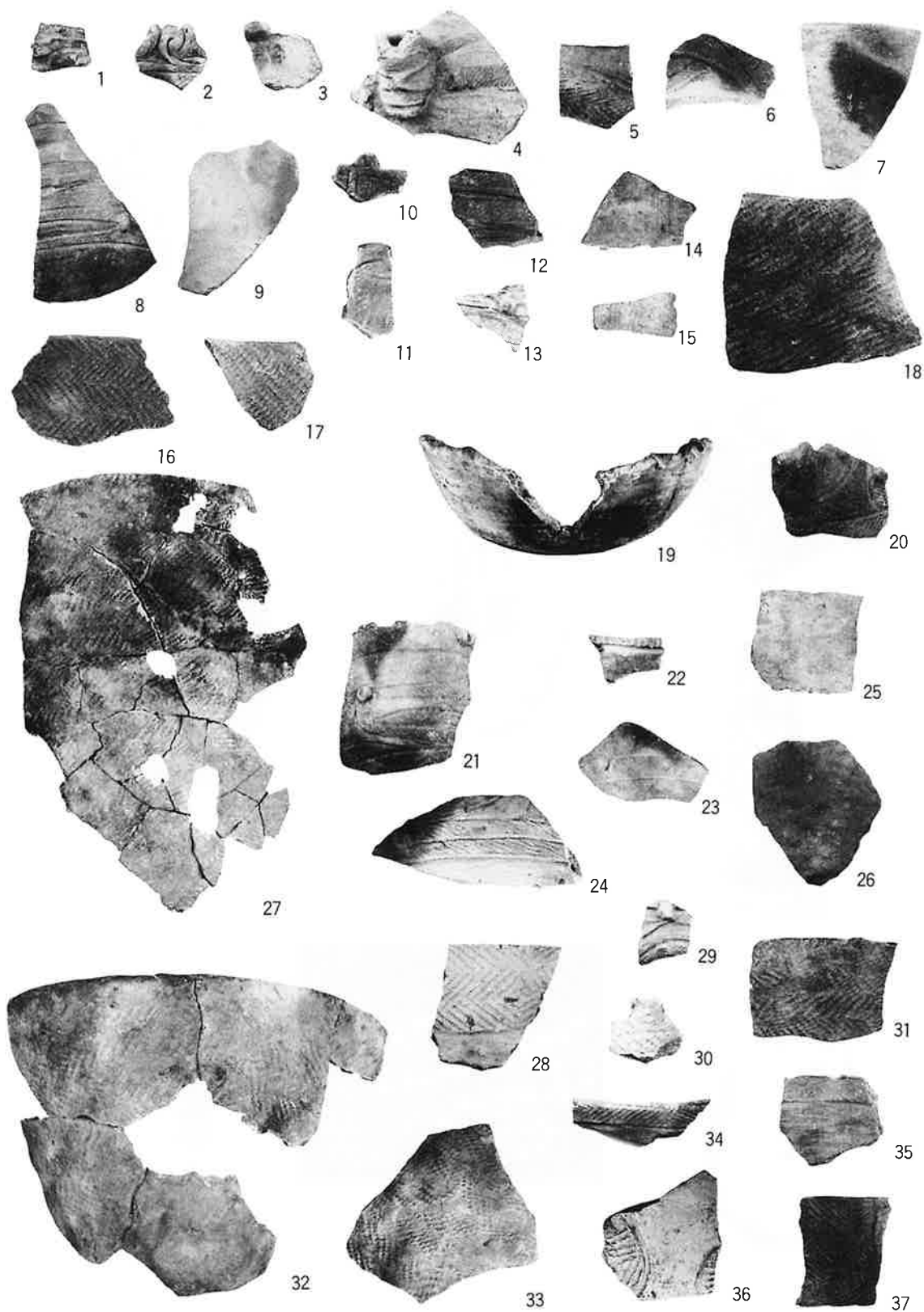


6・7の土器に埋納されていた
ヘビ目の推骨

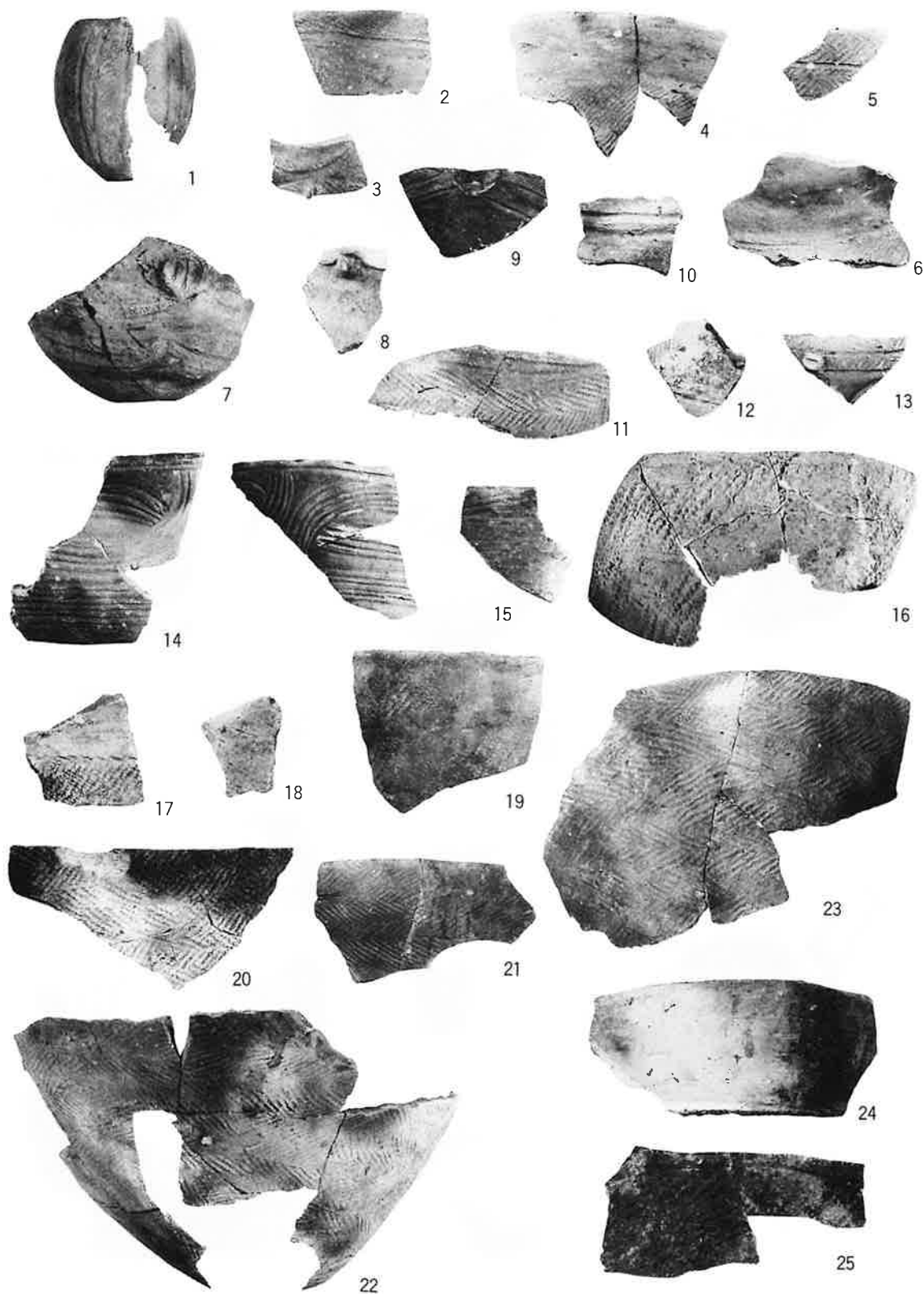


7

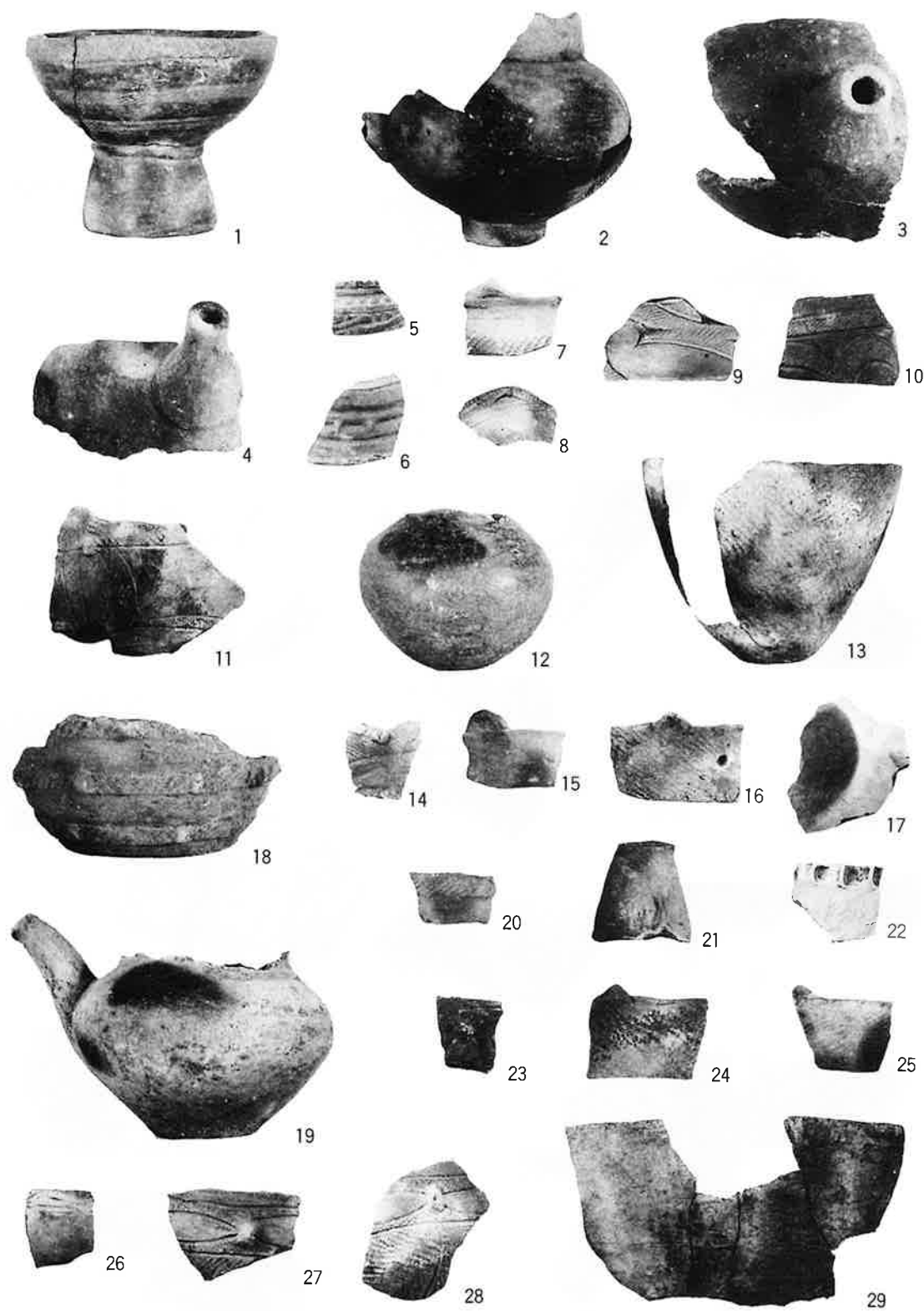
写真図版7 1号住居址出土土器(1)



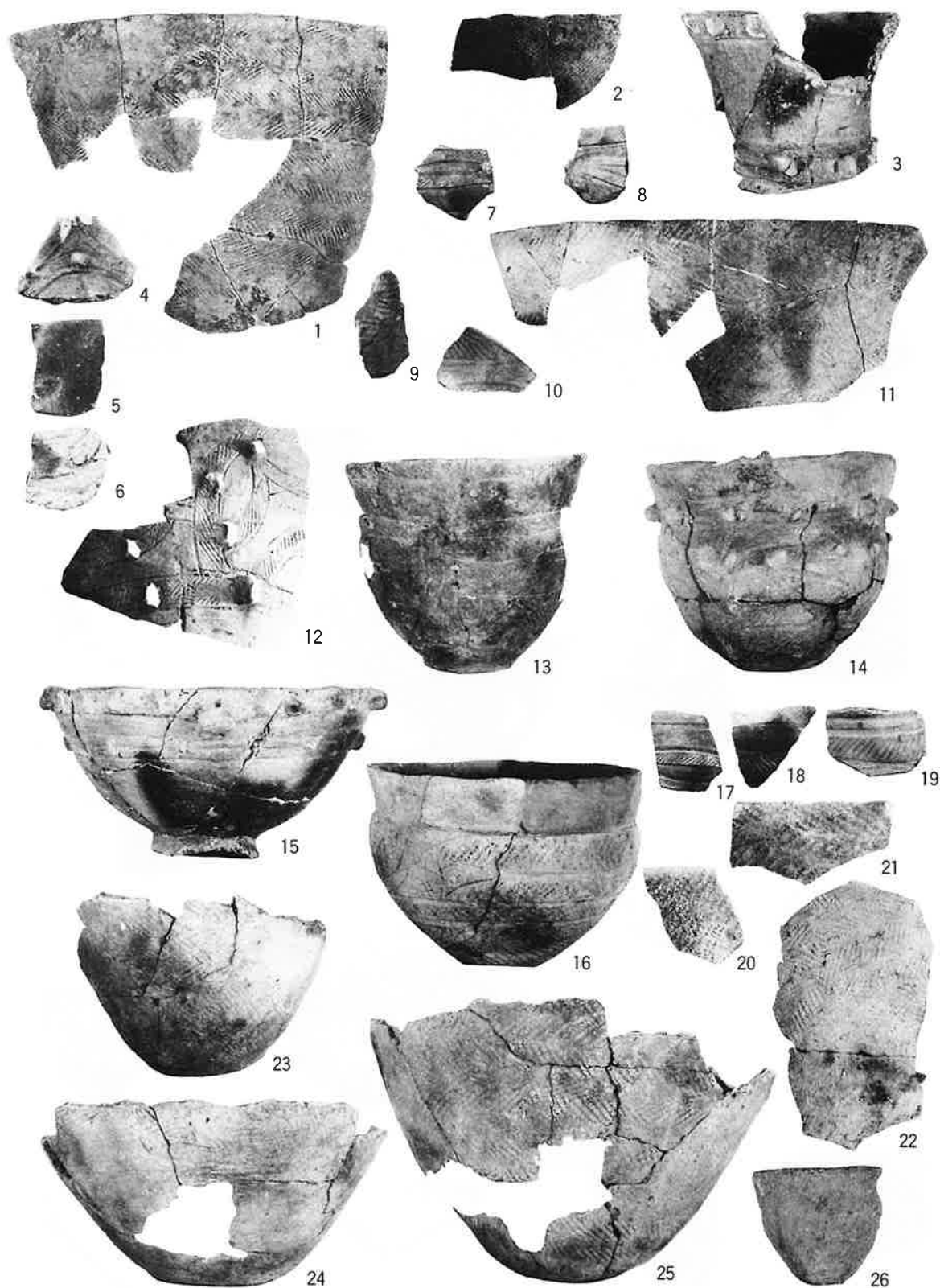
写真図版 8 1号住居址出土土器(2)



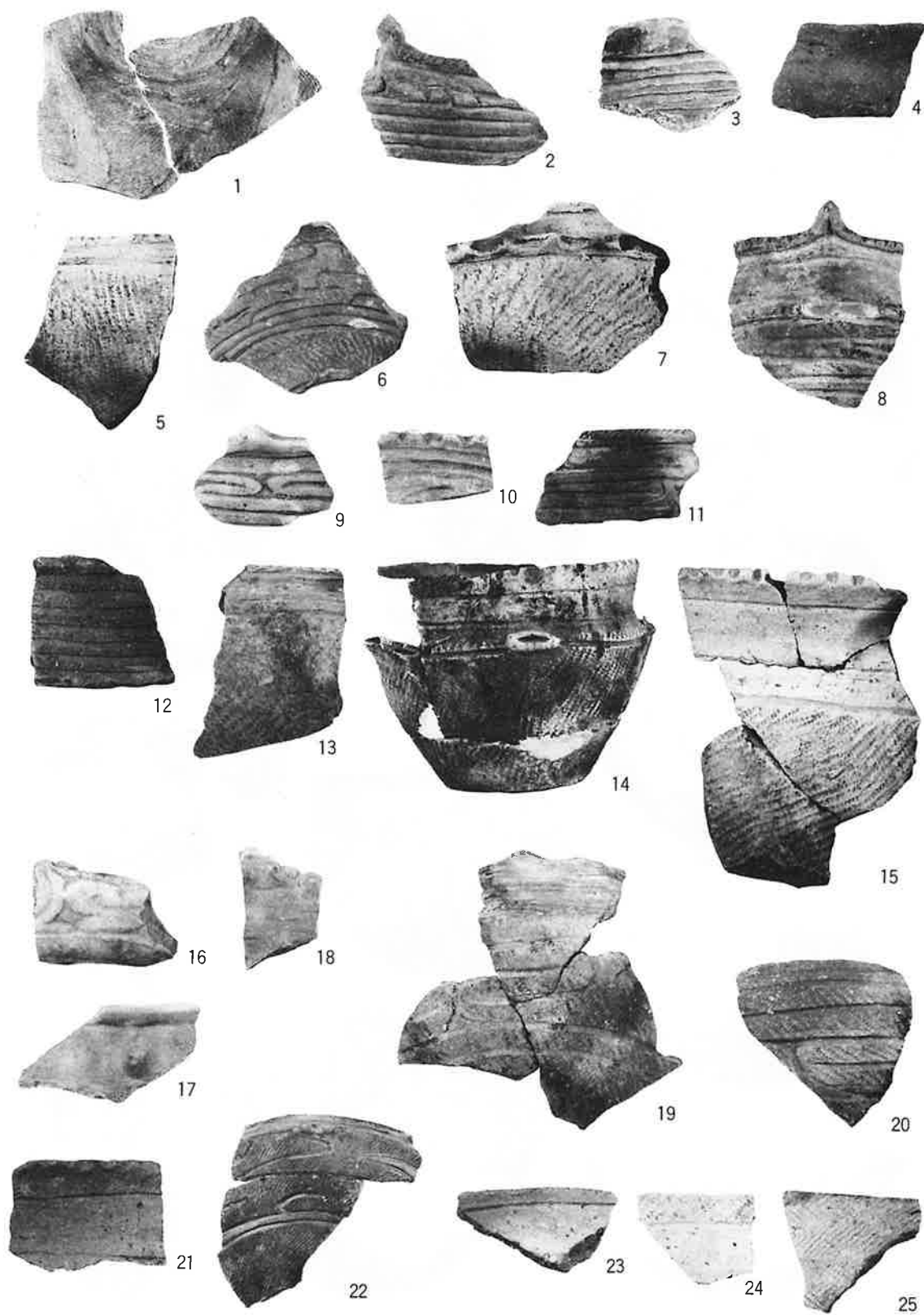
写真図版 9 1号住居址出土土器(3)



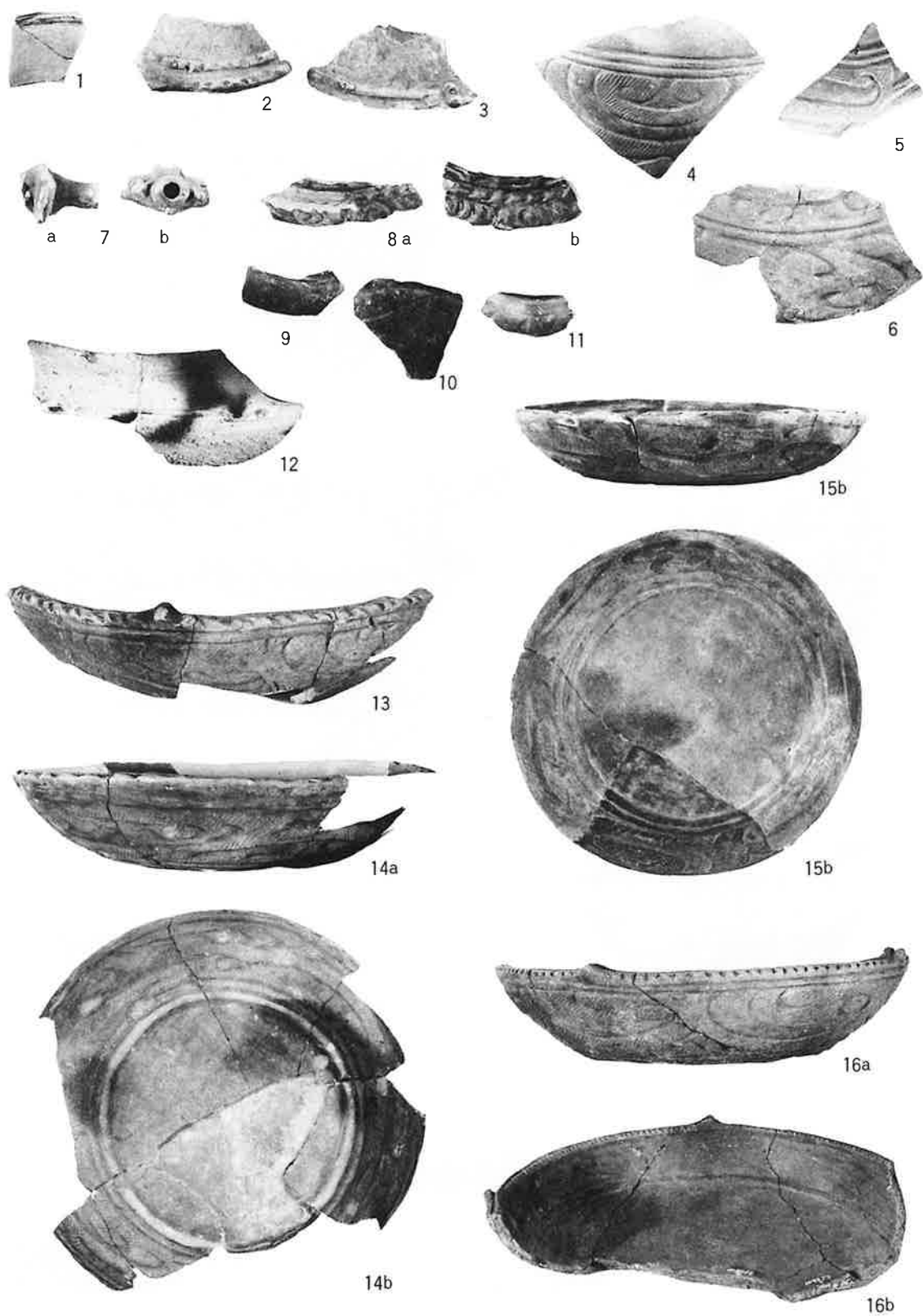
写真図版10 2号住居址出土土器(1)



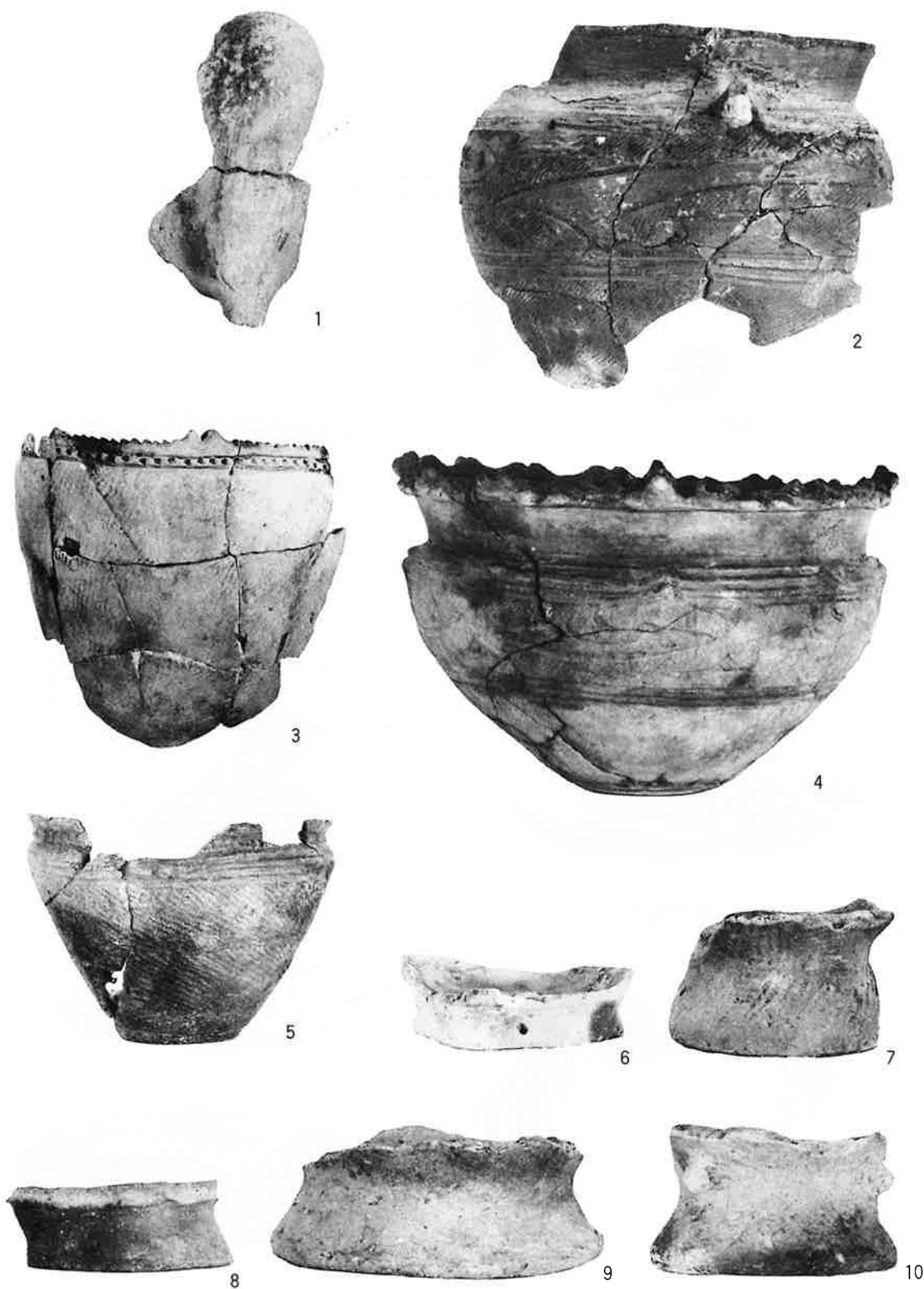
写真図版11 2号住居址出土土器(2)



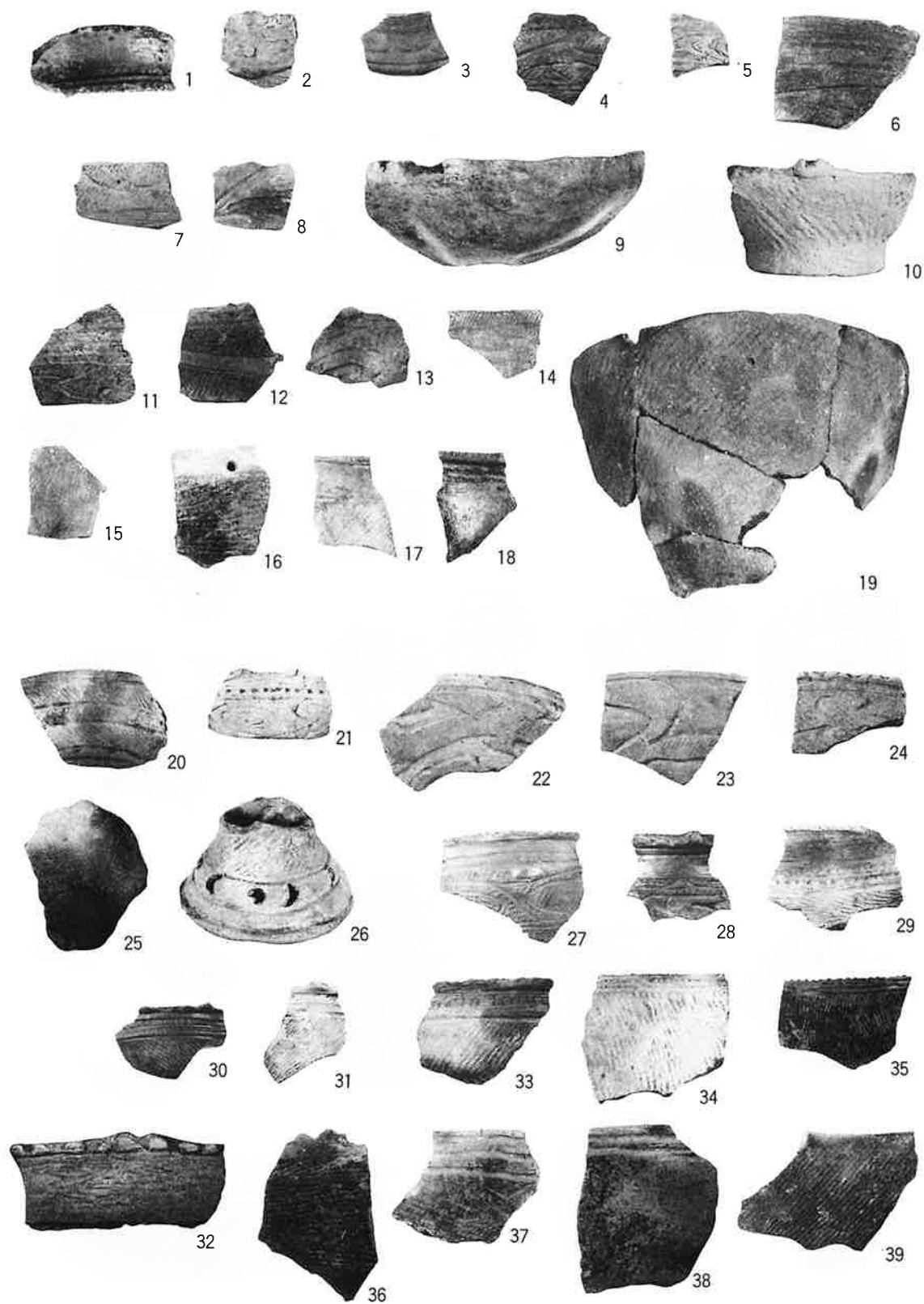
写真図版12 土壇出土土器



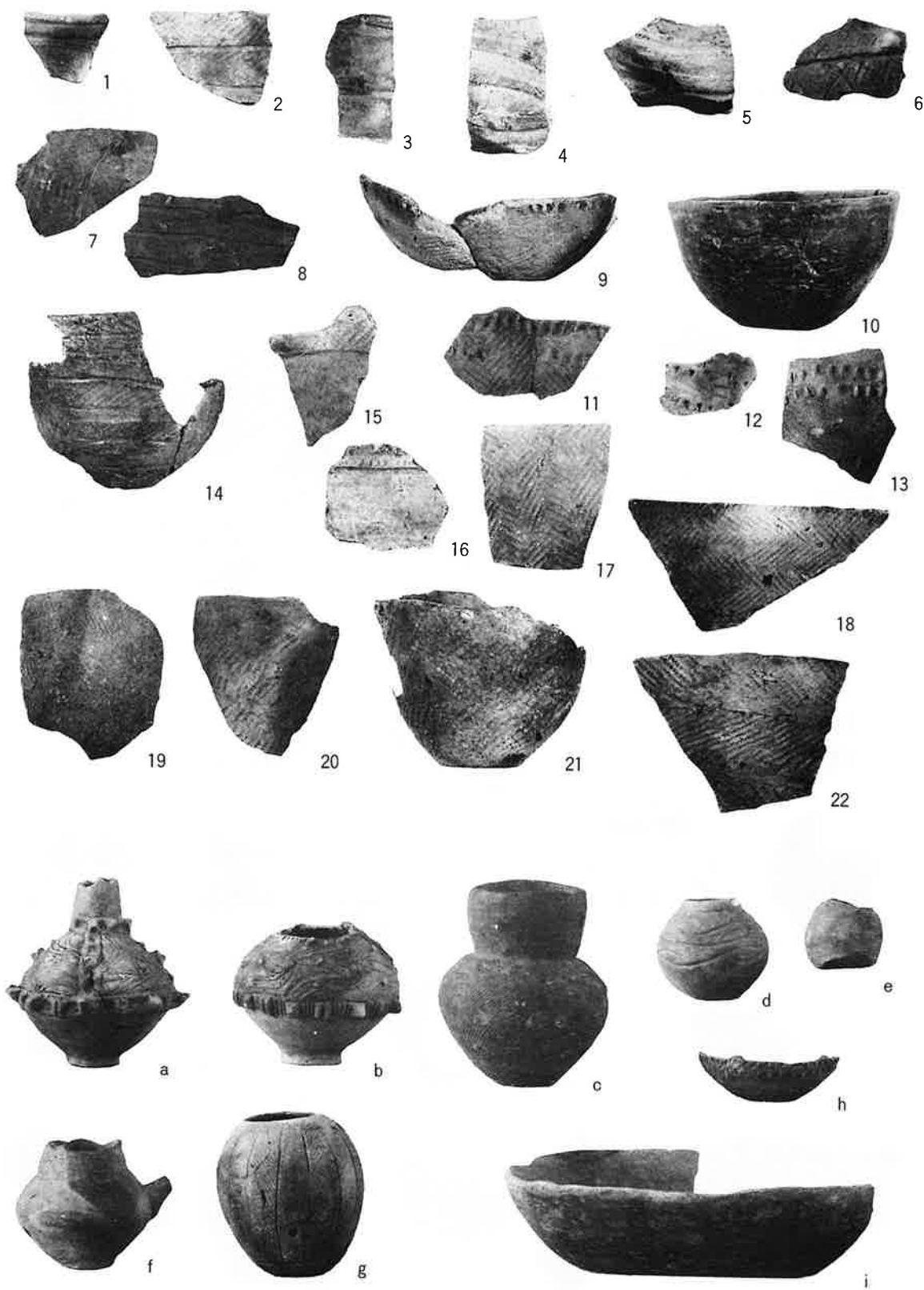
写真図版13 焼土投げ捨て遺構出土土器(1)



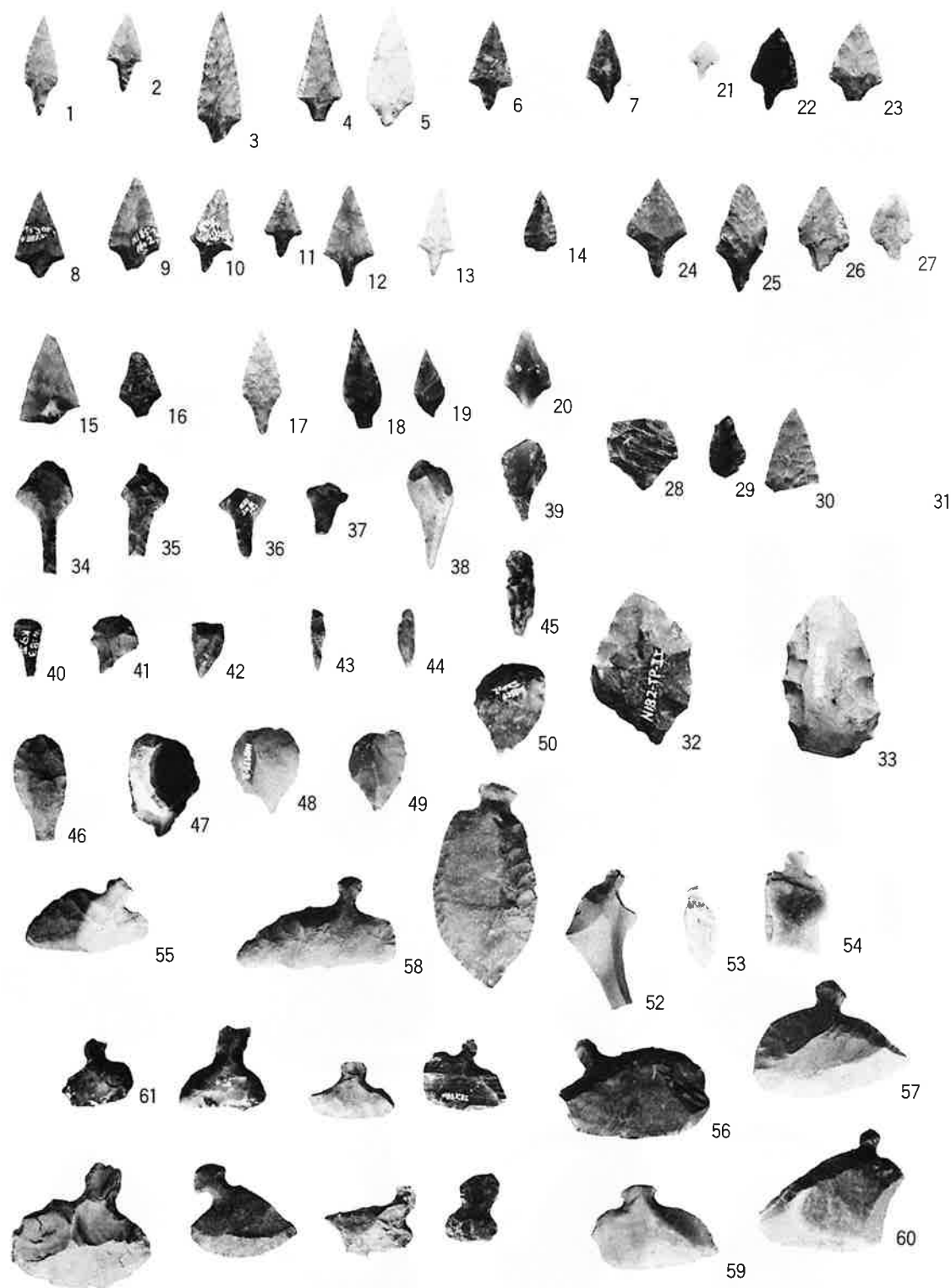
写真図版14 焼土投げ捨て遺構出土土器(2)



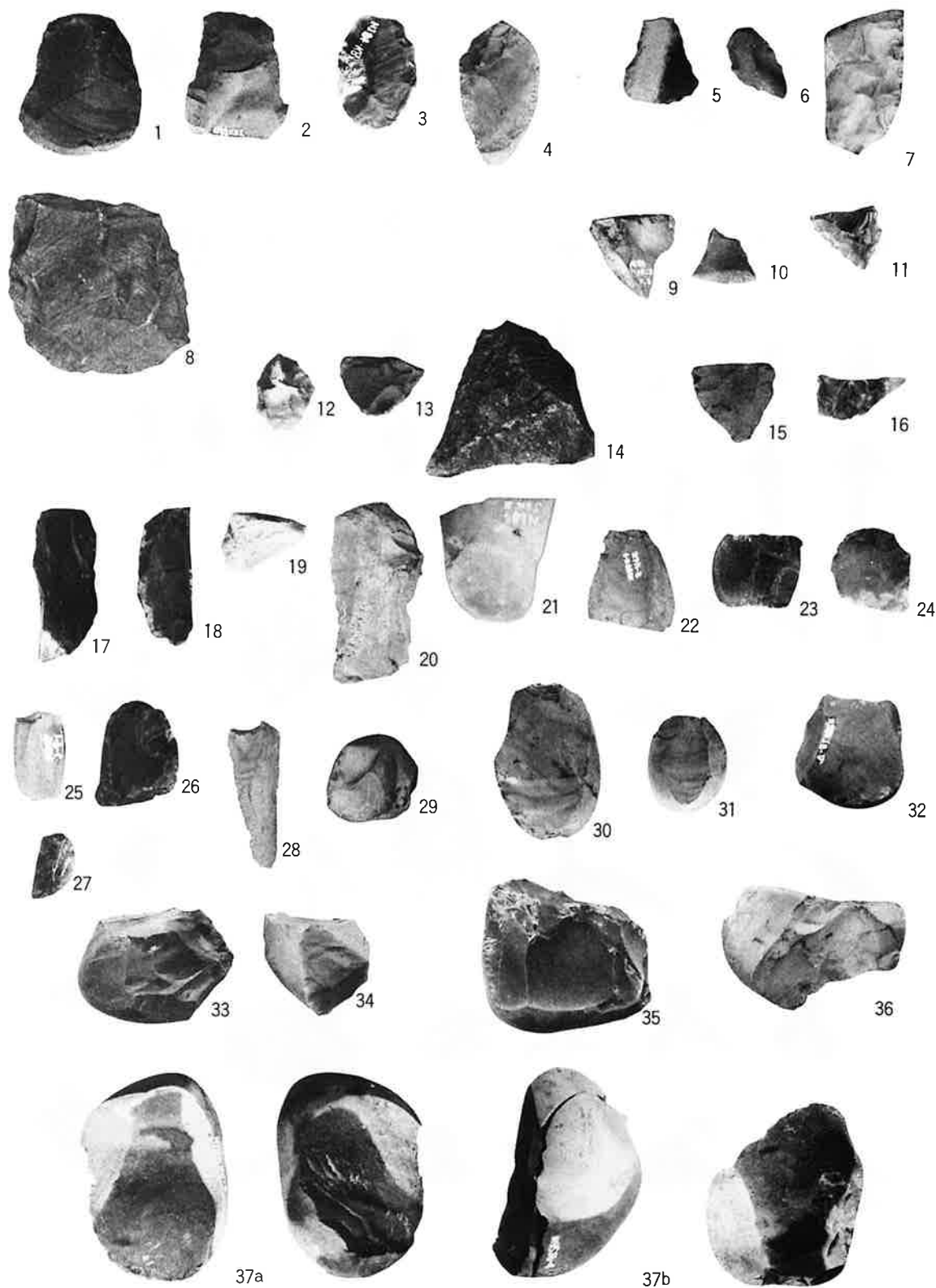
写真図版15 遺構外出土土器(1)



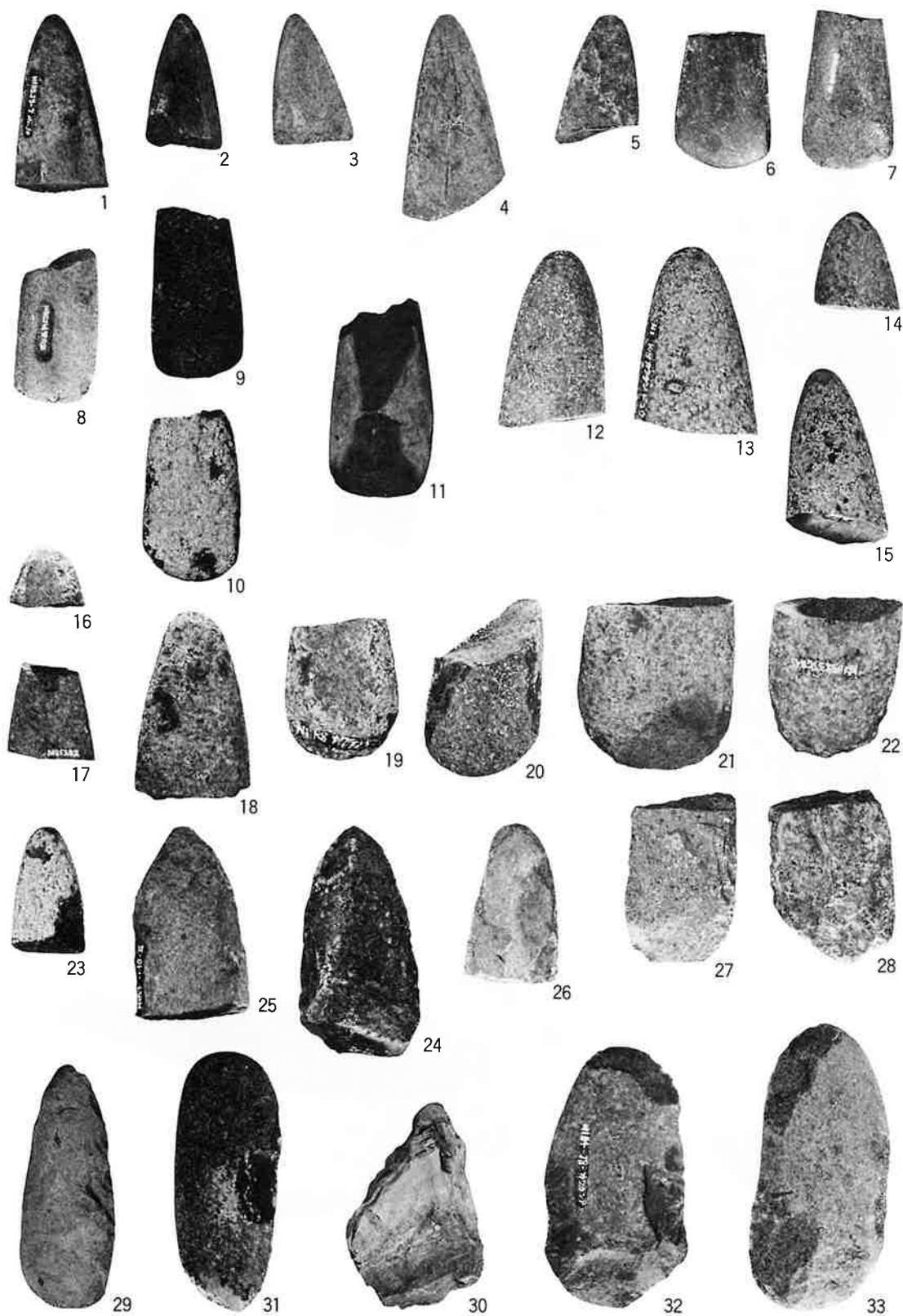
写真図版16 遺構外出土土器(2)・根井貝塚出土土器〔野田村教育委員会蔵〕(a~i)



写真図版17 出土石器(1)



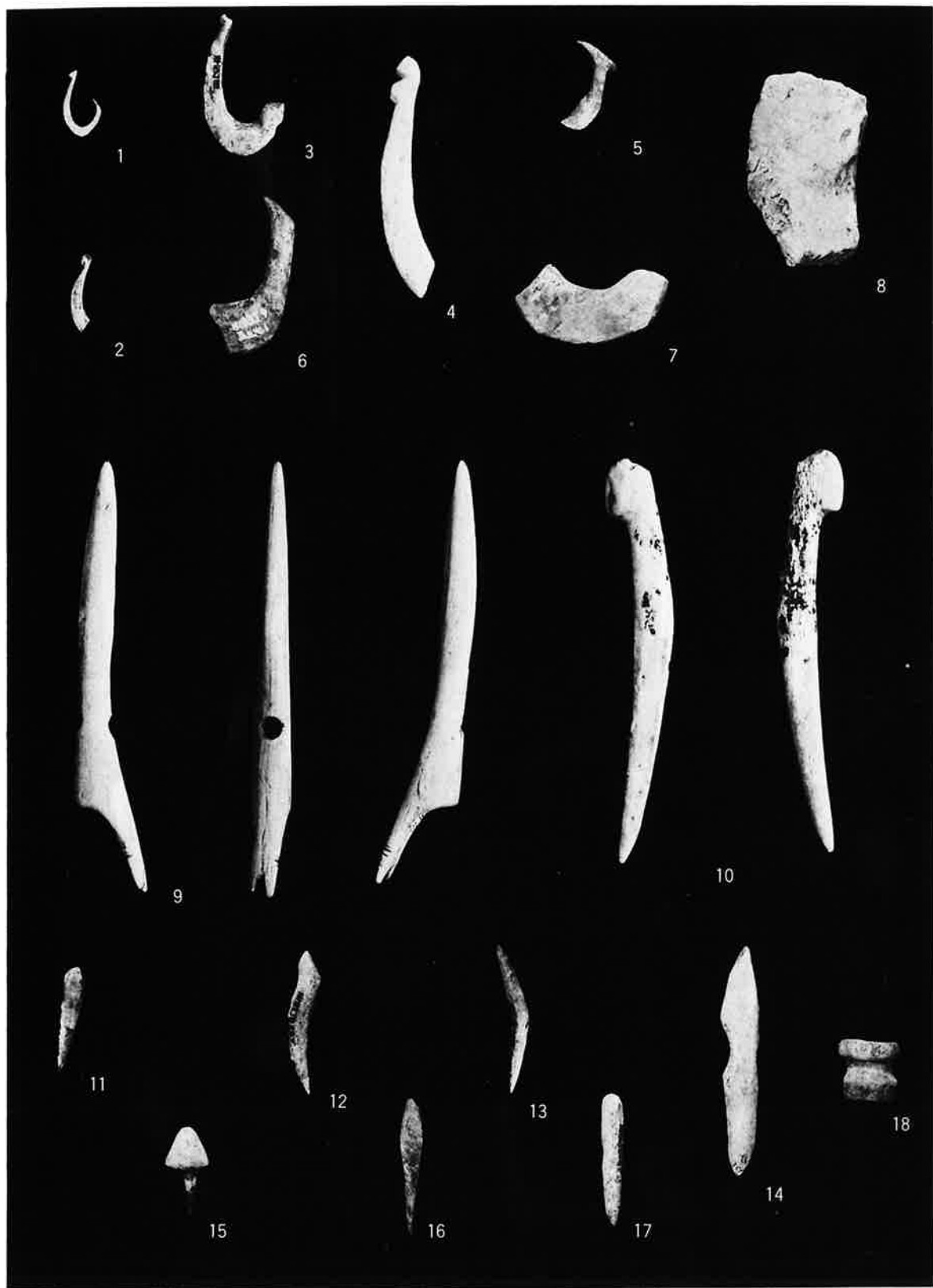
写真図版18 出土石器(2)



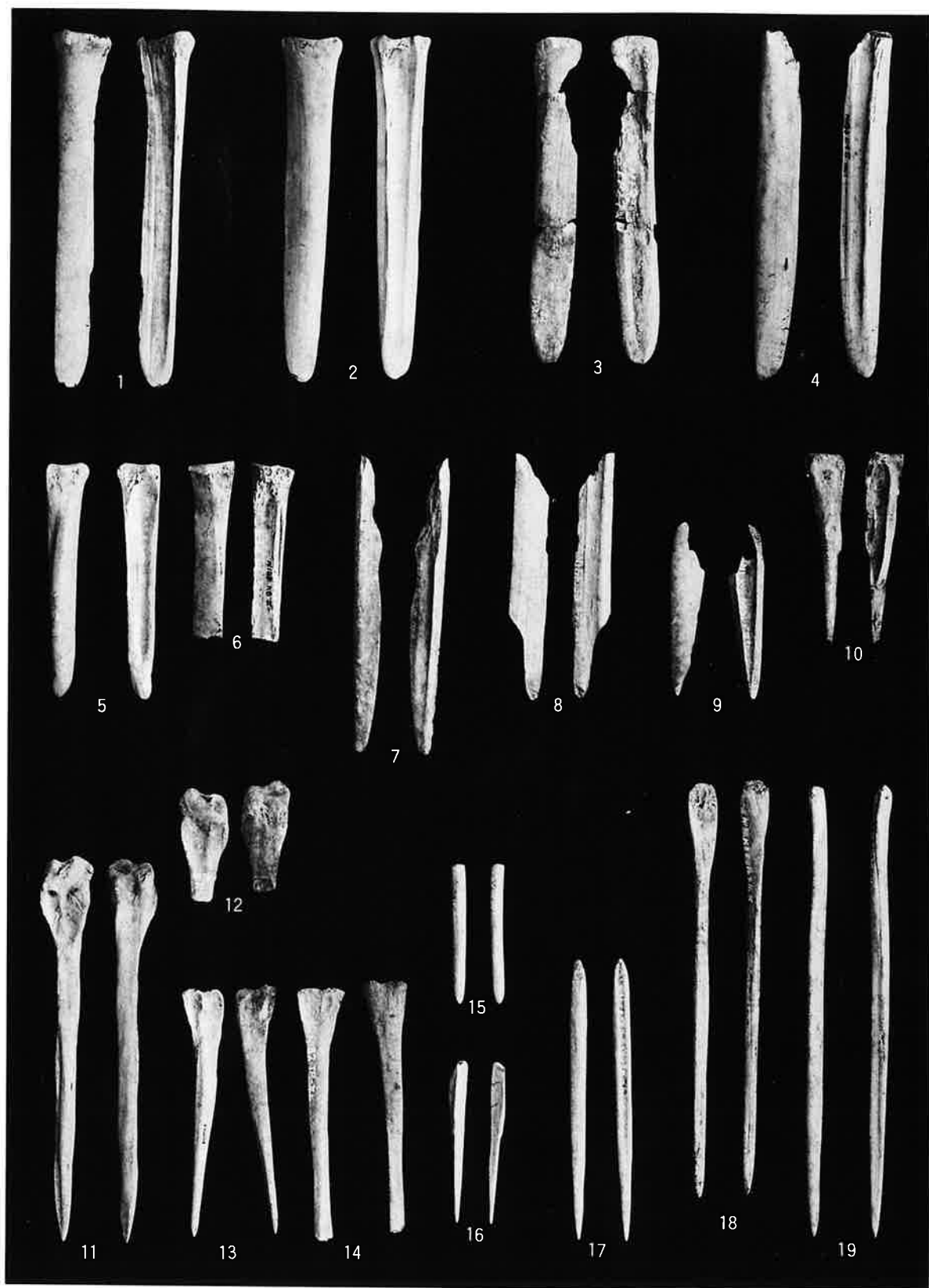
写真図版19 出土石器(3)



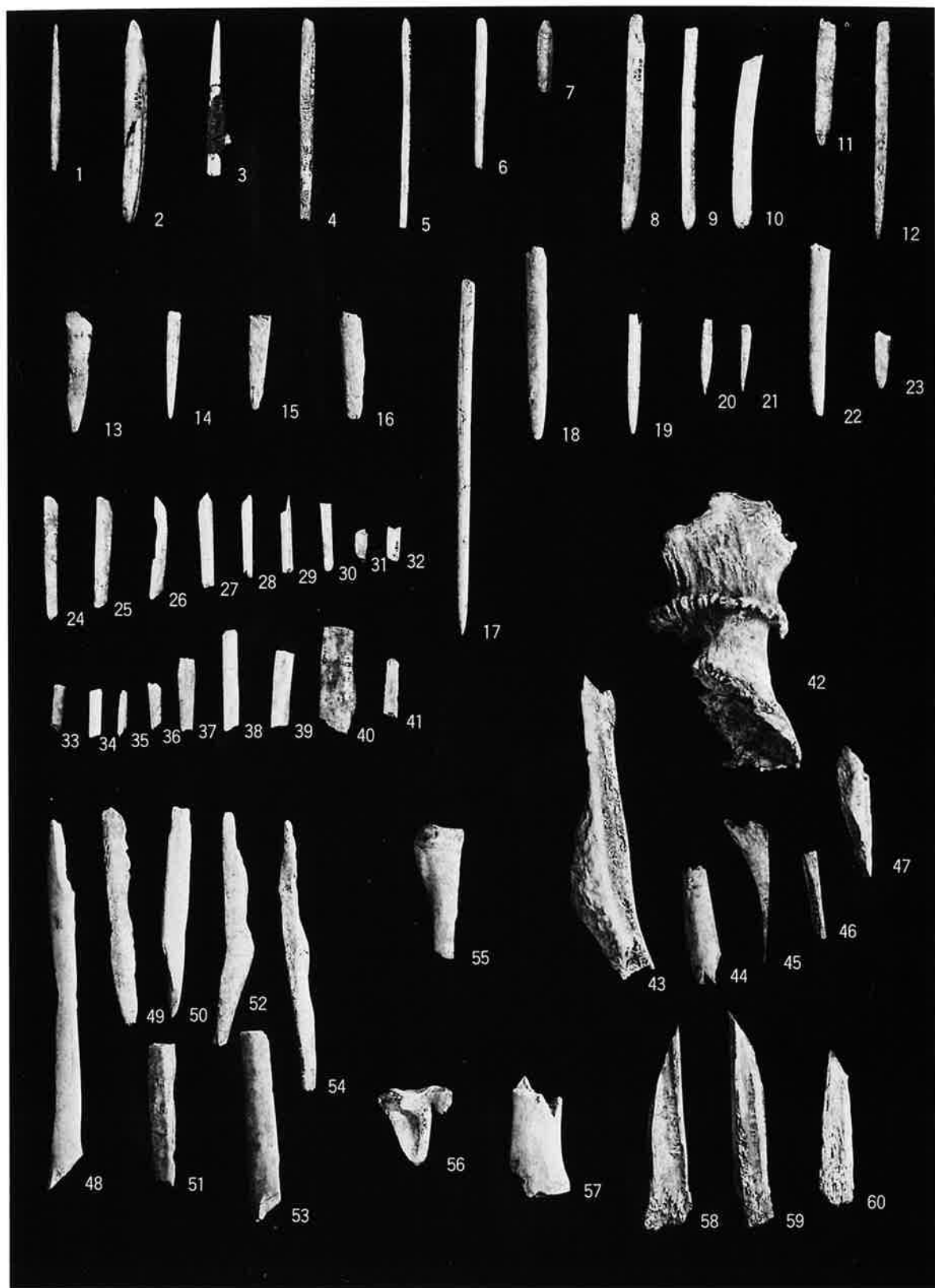
写真図版20 出土石器(4)



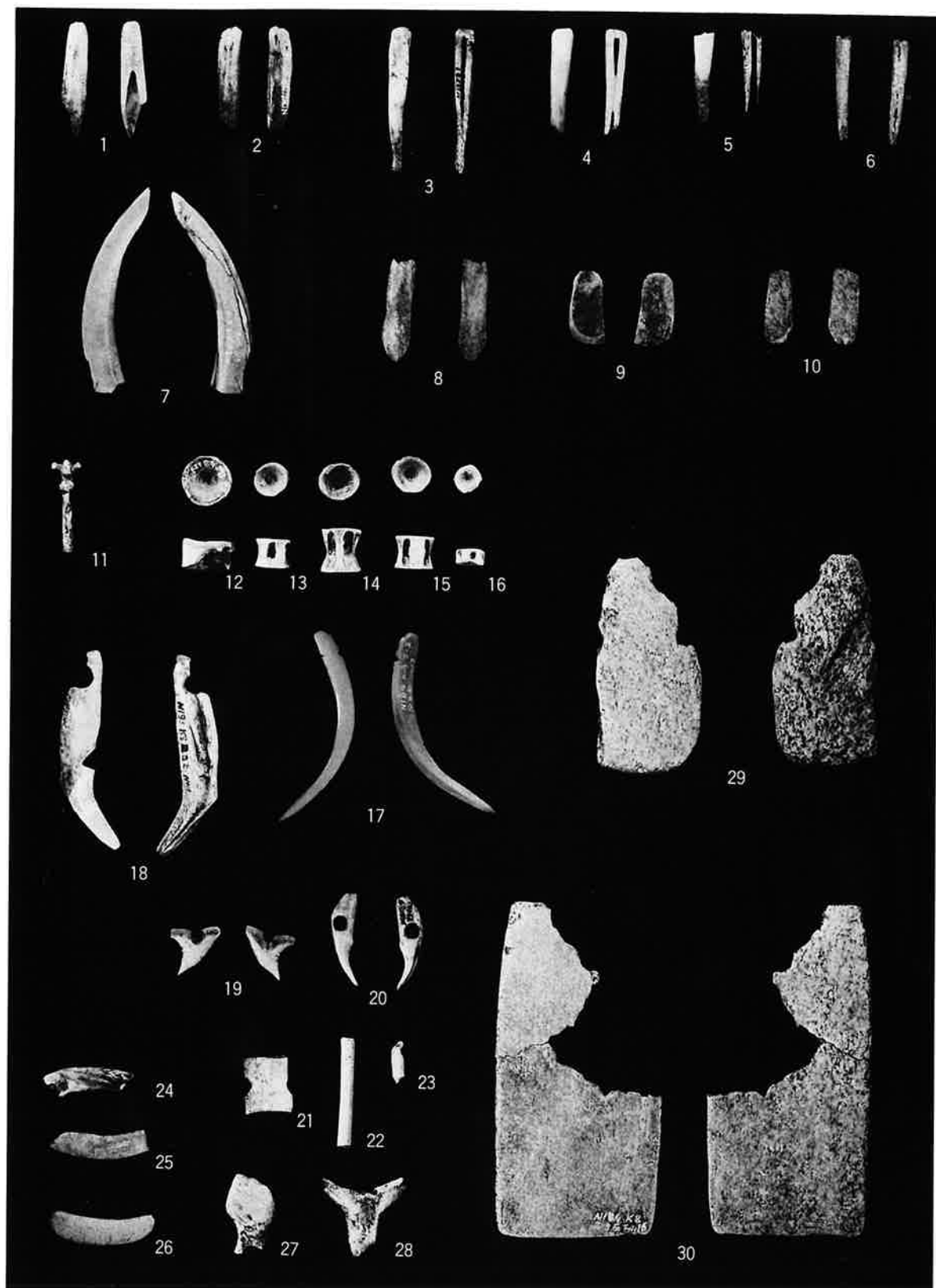
写真図版21 出土骨・角・牙器(1)



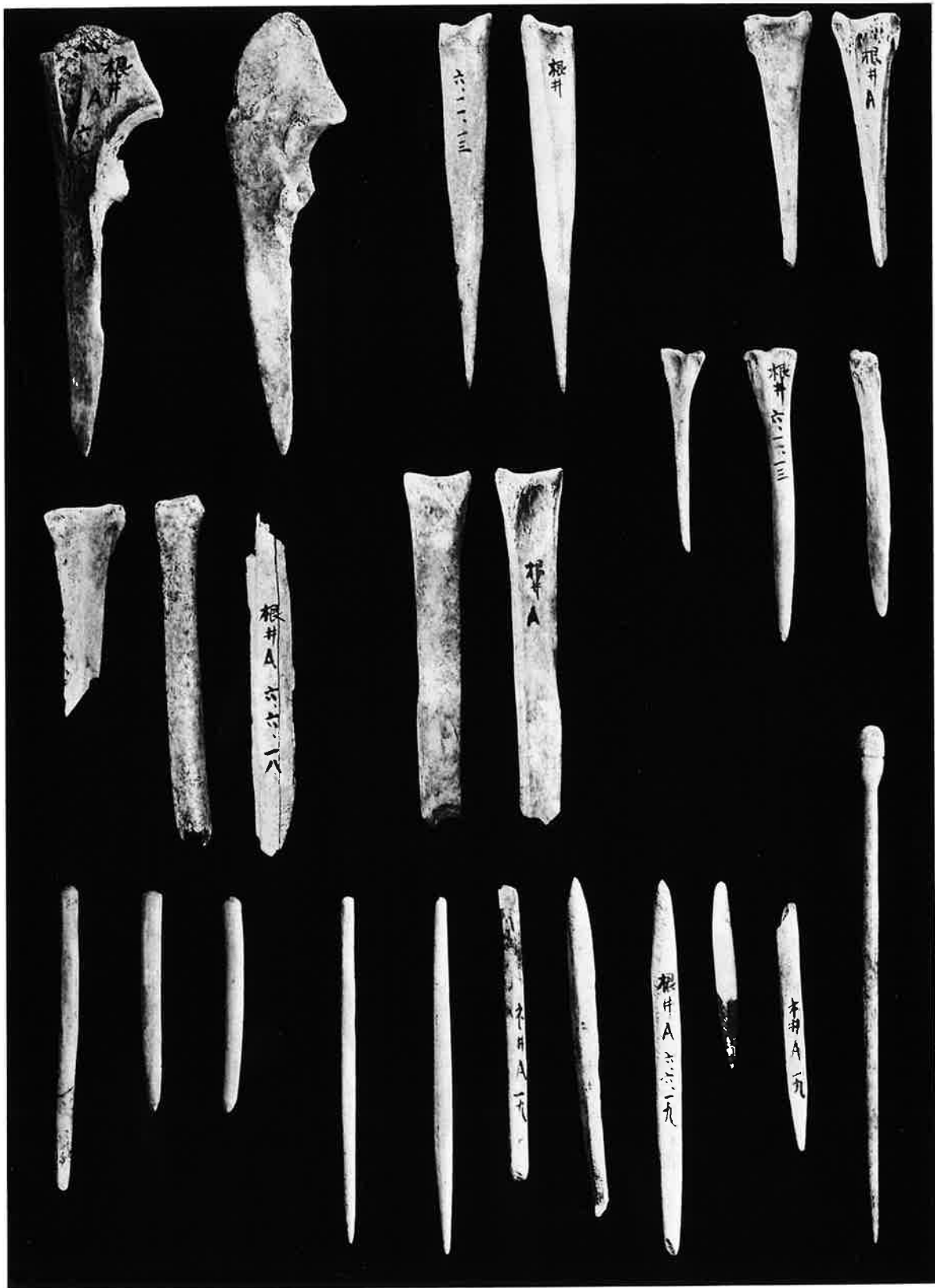
写真図版22 出土骨・角・牙器(2)



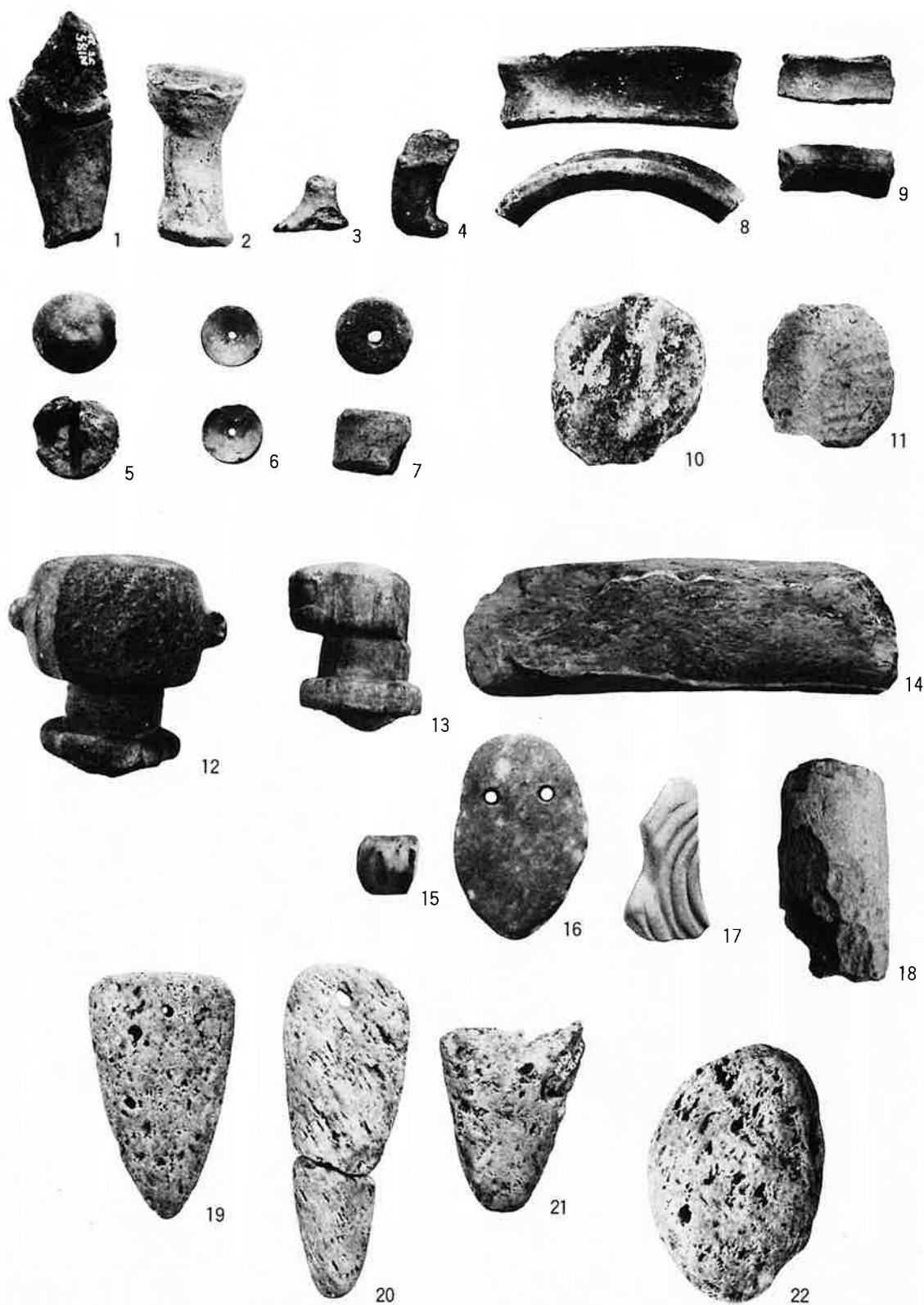
写真図版23 出土骨・角・牙器(3)・加工痕を残す素材



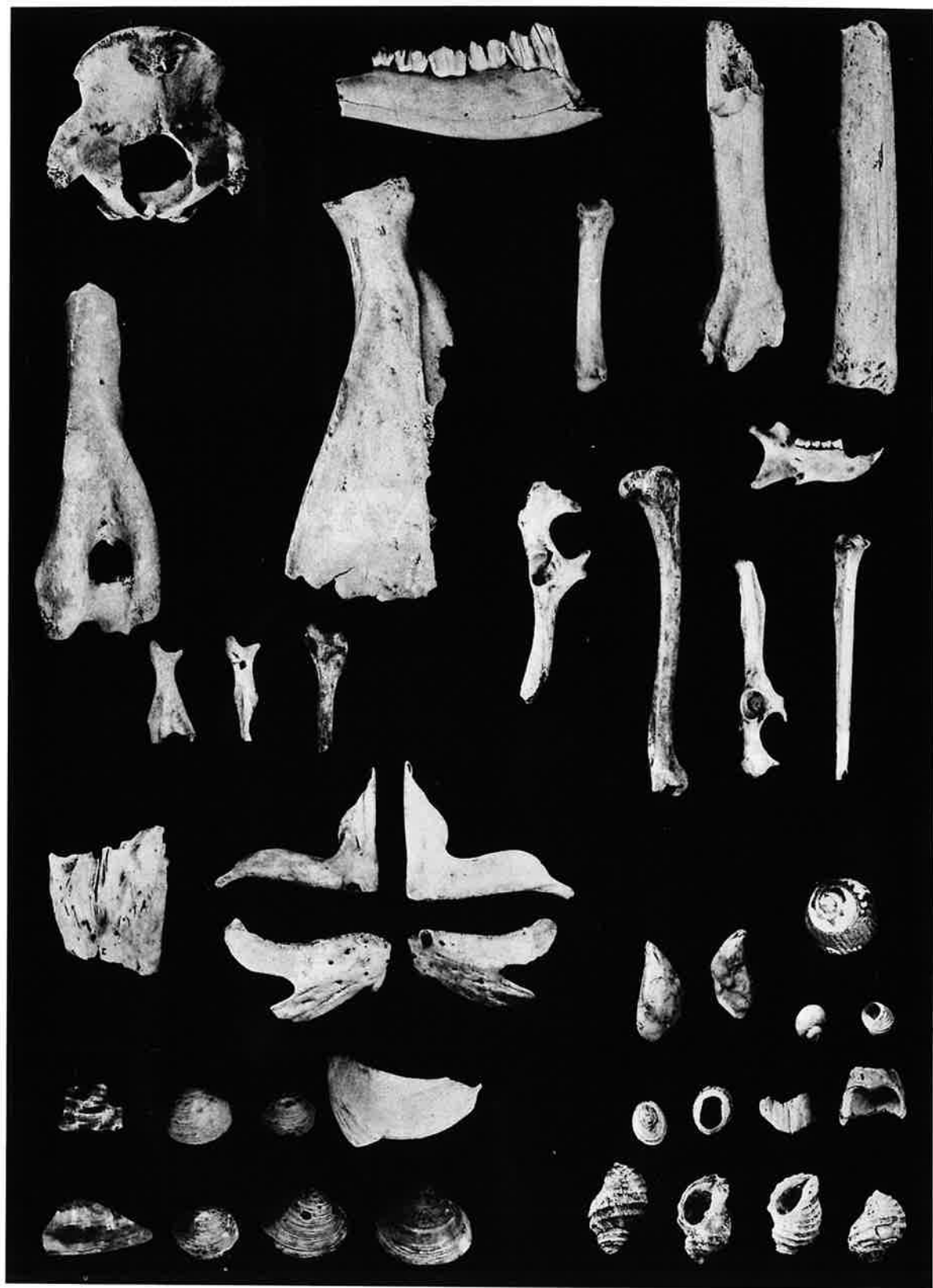
写真図版24 出土骨・角・牙器(4)



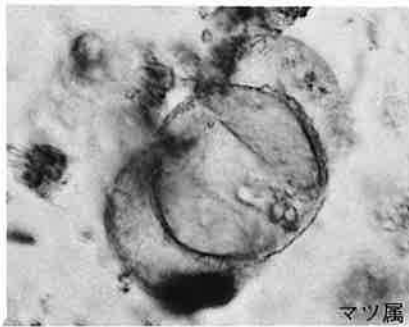
写真図版25 根井貝塚出土骨角器〔小田島禄郎コレクション〕



写真図版26 出土土製品・石製品



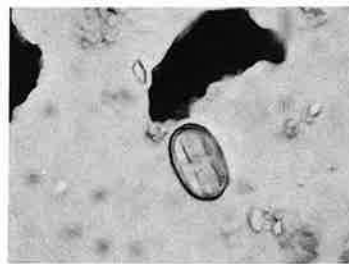
写真図版27 出土動物遺存体



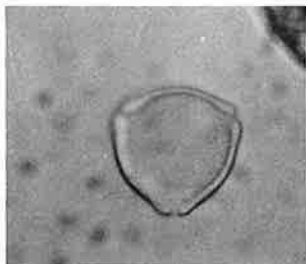
マツ属



サワグルミ属



クリ属



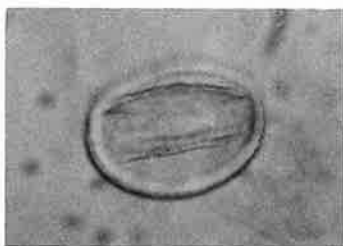
ハシバミ属



ハンノキ属



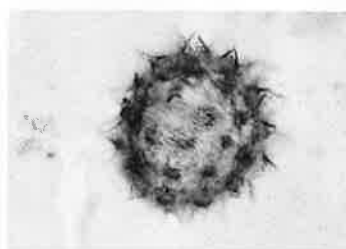
フナ属



ナラ属



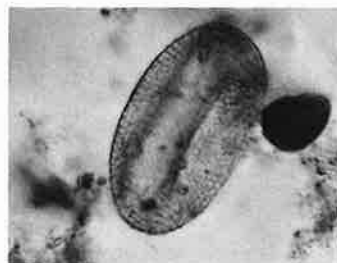
スギ属



キク属



ヨモギ属



ソバ属



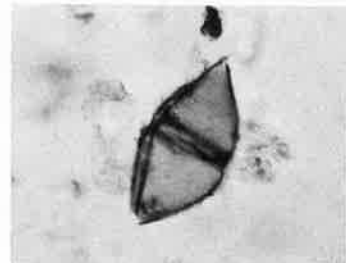
プラントオパール



ワラビ属



ゼンマイ属



0 菌属 50μ

写真図版28 花粉・胞子化石

岩手県立博物館調査研究報告書第3冊

根井貝塚発掘調査報告書

(岩手県野田村)

印刷 1987年3月25日

発行 1987年3月31日

編集 岩手県立博物館

〒020-01 盛岡市上田字松屋敷34番地

TEL (0196) 61-2631

発行 (財)岩手県文化振興事業団

〒020 盛岡市内丸13番1号

TEL (0196) 24-1171

印刷 株式会社 杜陵印刷
